

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 4 —

中 卷

福岡県築上郡築城町所在
安武・深田遺跡 安武・土井の内遺跡

1991

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

— 4 —

中 卷

福岡県築上郡築城町所在
安武・深田遺跡 安武・土井の内遺跡

例 言

1. 本書は福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて実施した、一般国道10号線椎田バイパスに伴う発掘調査の4冊目の報告書である。
2. 本書に掲載した遺跡は築城町に所在する第3地点、第5地点、第6—A地点（安武・土井の内遺跡）、第6—B地点（安武・深田遺跡）の4ヶ所である。
3. 遺構の写真撮影・実測図作成は調査担当者が行なった。
4. 出土遺物の整理は、九州歴史資料館および文化課甘木事務所で岩瀬正信氏の指導のもとに行ない、報告した原資料については、甘木事務所にて保管している。
5. 出土遺物の写真撮影は調査担当者のほか、九州歴史資料館石丸洋氏・林崎新二・内本浩子両氏の助力を得、実測は若松三枝子・鬼木つや子・佐藤みゆき・渡辺輝子・高瀬照美さんの協力を受けている。
6. 挿図浄書については、甘木事務所の塩足里美さん、九州歴史資料館製図室で豊福弥生・江上佳子・蘭牟田秀子・関久江さんの助力を得た。
7. 安武・深田遺跡出土の鉄器については、新日本製鉄所・大澤正己氏に依頼し、分析結果について玉稿をいただいた。
8. 安武・深田遺跡出土の木製品については、琉球大学助教授の林弘也氏に依頼し、玉稿をいただいた。
9. 安武・深田遺跡出土の木簡及び墨書土器については、九州歴史資料館の倉住靖彦氏に依頼し玉稿をいただいた。
10. 出土した鉄器についての処理は、九州歴史資料館・横田義章氏にお願いした。
11. 本書の執筆は、I～III—1・3・4・6、IV—1・3、V、VIを木下修、III—2～6、IV—2・4・5を水ノ江和同、III—4を飛野博文、III—5の墨書土器・木簡を倉住靖彦、VII—1を大澤正己、VII—2を林弘也が行ない、文末に責任の所在を明らかにした。
12. 本書の編集は木下、水ノ江が分担した。

本文目次

〔上巻〕

I	はじめに	1
1.	調査の経過	1
II	位置と環境	10
1.	築城町・椎田町周辺の地理的環境	10
2.	築城町・椎田町周辺の歴史的環境	14
III	安武・深田遺跡	19
1.	調査の概要	19
(1)	遺跡の立地	19
(2)	地区割り	20
(3)	遺構の概要	20
(4)	層序	21
(5)	谷地区流入口	22
2.	縄文時代の遺物	25
3.	弥生時代の遺構と遺物	26
(1)	竪穴住居跡	28
(2)	土壙	54
(3)	貯蔵穴	56
(4)	甕棺墓	58
(5)	土壙墓	59
(6)	柱穴群	61
(7)	包含層出土の遺物	63
(8)	谷地区出土の遺物	68

4. 古墳時代以降の遺構と遺物	73
(1) 竪穴住居跡	73

〔中巻〕

(2) 掘立柱建物跡	173
(3) 土 壙	191
(4) 落ち込み	212
(5) 溝	216
(6) 道路状遺構	233
(7) 土 壙 墓	233
(8) 柱 穴	234
(9) 杭 列	236
5. 包含層および谷地区出土の遺物	239
(1) 土 器	239
(2) 石 器	254
(3) 鉄 器	261
(4) 木 簡	261
(5) 木 器	263
6. おわりに	276
(1) 弥生時代の土器について	276
(2) 弥生時代の竪穴住居跡について	280
(3) 出土遺物について	282
(4) 古墳時代以降の竪穴住居跡について	285
(5) 掘立柱建物跡について	289
(6) その他の古墳時代以降の遺構について	290
(7) 古墳時代以降の出土遺物について	291
(8) 古墳時代以降の安武・深田遺跡	292

IV 安武・土井の内遺跡	293
1. 調査の概要	293
2. 縄文時代の遺構と遺物	294
(1) 陥し穴	296
(2) P33	309
3. 弥生時代の遺構と遺物	311
(1) 竪穴住居跡	311
4. 古墳時代以降の遺構と遺物	314
(1) 竪穴住居跡	314
(2) 掘立柱建物跡	338
(3) 土 壙	342
(4) 溝	345
(5) その他の遺構と遺物	348
5. おわりに	349
(1) 縄文時代について	349
(2) 弥生・古墳時代について	351
V 第5地点の調査	353
1. 調査の概要	353
2. 遺構と遺物	353
VI 第3地点の調査	357
1. 調査の概要	357
2. 遺構と遺物	360
3. おわりに	361
VII 自然科学系の調査	363
1. 安武・深田遺跡出土弥生・古墳期の鉄片・鉄製品の金属学的調査	363
2. 安武・深田遺跡出土木製遺物の樹種	373

挿 図 目 次 (中巻)

〔安武・深田遺跡〕

第 193 図	古墳時代掘立柱建物跡・土壙等配置図 (1/1,600)	173
第 194 図	1～4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	174
第 195 図	5・6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	176
第 196 図	7・8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	177
第 197 図	9・11・12号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	178
第 198 図	10号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	179
第 199 図	13・14号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	180
第 200 図	15・16号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	181
第 201 図	14号掘立柱建物跡 P 2 土層図 (1/20)	182
第 202 図	17号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	182
第 203 図	18号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	183
第 204 図	掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)	183
第 205 図	19・22号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	184
第 206 図	20・21号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	185
第 207 図	23・24・26号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	187
第 208 図	25号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	188
第 209 図	27・28号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	189
第 210 図	29～31号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	190
第 211 図	32号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	191
第 212 図	1・3・4号土壙実測図 (1/30)	192
第 213 図	3～5号土壙出土土器実測図 (1/3)	193
第 214 図	5号土壙実測図 (1/30)	194
第 215 図	9号土壙実測図 (1/60)	195
第 216 図	9号土壙出土土器実測図 (1/3, 35は1/4)	196
第 217 図	9号土壙出土木器実測図 (1/4)	197
第 218 図	11・14号土壙実測図 (1/30, 1/60)	198
第 219 図	11号土壙出土土器実測図 1 (1/3)	199
第 220 図	11号土壙出土土器実測図 2 (1/4)	200

第 221 図	11号土壙出土木器実測図 (1/4)	201
第 222 図	11・12号土壙出土木器実測図 (1/8)	202
第 223 図	12・13号土壙出土土器実測図 (1/3)	204
第 224 図	15・16・18号土壙実測図 (1/30)	205
第 225 図	17号土壙実測図 (1/60, 1/30)	206
第 226 図	18・19・21・22号土壙出土土器・石器実測図 (1/3)	207
第 227 図	19・20・22・24号土壙実測図 (1/30)	208
第 228 図	21・25号土壙実測図 (1/60)	209
第 229 図	23号土壙実測図 (1/30)	210
第 230 図	23号土壙出土土器実測図 (1/3, 90は1/4)	211
第 231 図	1号落ち込み実測図 (1/80)	213
第 232 図	1・2号落ち込み出土土器・石器実測図 (1/3, 17は1/4)	214
第 233 図	2号落ち込み実測図 (1/60)	215
第 234 図	1・3～6号溝土層図 (1/30)	217
第 235 図	1・4～6号溝出土土器実測図 (1/3)	218
第 236 図	2・3号溝出土土器・石器実測図 (1/3, 26は1/4)	219
第 237 図	6号溝出土鉄器実測図 (1/2)	220
第 238 図	11・14・16・19・23号溝土層図 (1/30)	221
第 239 図	11号溝出土土器実測図 (1/3)	221
第 240 図	14・15号溝出土土器実測図 (1/3)	222
第 241 図	16～25号溝出土土器実測図 (1/3)	224
第 242 図	26・28号溝土層図 (1/30)	226
第 243 図	26号溝出土土器実測図 1 (1/3)	228
第 244 図	26号溝出土土器実測図 2 (1/3, 90は1/6)	229
第 245 図	26号溝出土鉄器実測図 (1/2)	229
第 246 図	26号溝出土土器実測図 3 (1/4)	230
第 247 図	28号溝出土土器・石器実測図 (1/3)	231
第 248 図	道路状遺構実測図 (1/80)	233
第 249 図	4号土壙墓実測図 (1/30)	234
第 250 図	柱穴出土土器・石器実測図 (1/3)	235
第 251 図	1号杭列実測図 (1/20)	236
第 252 図	1号杭列出土木器実測図 (1/8)	237
第 253 図	2号杭列実測図 (1/30)	238

第 254 図	1号杭列断面	238
第 255 図	3号杭列実測図 (1/30)	238
第 256 図	谷地区出土土器実測図 1 (1/3)	240
第 257 図	谷地区出土土器実測図 2 (1/3)	241
第 258 図	谷地区出土土器実測図 3 (1/4)	242
第 259 図	谷地区出土土器実測図 4 (1/3)	243
第 260 図	谷地区出土土器実測図 5 (1/3)	244
第 261 図	谷地区出土土器実測図 6 (1/3)	246
第 262 図	谷地区出土土器実測図 7 (1/3)	247
第 263 図	谷地区出土土器実測図 8 (1/4)	248
第 264 図	谷地区出土土器実測図 9 (1/4)	250
第 265 図	墨書土器実測図 (1/3)	251
第 266 図	谷地区出土製塩土器実測図 (1/3)	252
第 267 図	谷地区出土製塩土器拓影 (1/3)	252
第 268 図	谷地区出土埴輪実測図 (1/3)	253
第 269 図	谷地区出土瓦実測図 (1/3)	253
第 270 図	谷地区出土陶磁器実測図 (1/3)	253
第 271 図	包含層出土石器実測図 1 (1/3, 5は1/2)	254
第 272 図	包含層出土石器実測図 2 (1/3, 13・14は1/2)	255
第 273 図	包含層出土石器実測図 3 (1/2)	256
第 274 図	谷地区出土石器実測図 1 (1/3)	257
第 275 図	谷地区出土石器実測図 2 (1/3, 40~42は1/2)	258
第 276 図	谷地区出土石器実測図 3 (1/3)	259
第 277 図	谷地区出土鉄器実測図 (1/2)	260
第 278 図	木簡実測図 (1/3)	262
第 279 図	谷地区槌の子群出土状況実測図 (1/20)	264
第 280 図	谷地区槌の子群付近出土土器実測図 (1/3, 4は1/4)	264
第 281 図	谷地区槌の子群付近出土木器実測図 (1/4)	265
第 282 図	谷地区出土木器実測図 1 (1/2)	266
第 283 図	谷地区出土木器実測図 2 (1/20)	266
第 284 図	谷地区出土木器実測図 3 (1/4)	267
第 285 図	谷地区出土木器実測図 4 (1/4)	268
第 286 図	谷地区出土木器実測図 5 (1/6)	270

第 287 図	谷地区出土木器実測図 6 (1/6)	271
第 288 図	谷地区出土木器実測図 7 (1/6)	272
第 289 図	谷地区出土木器実測図 8 (1/4)	273
第 290 図	谷地区出土木器実測図 9 (1/4)	274
第 291 図	谷地区出土木器実測図10 (1/10)	275
第 292 図	谷地区出土木器実測図11 (1/4)	276
第 293 図	弥生時代竪穴住居跡 (1/320)	281
第 294 図	荊田町法正寺・木ノ坪遺跡出土凹線文土器 (1/4)	282
第 295 図	古墳時代以降の遺構変遷図 (1/1,600)	285

〔安武・土井の内遺跡〕

第 1 図	安武・土井の内遺跡調査風景	293
第 2 図	安武・土井の内遺跡地形図 (1/2,000)	294
第 3 図	縄文時代遺構配置図 (1/600)	295
第 4 図	6・7号土壙実測図 (1/30)	297
第 5 図	8・9号土壙実測図 (1/30)	298
第 6 図	10～12号土壙実測図 (1/30)	299
第 7 図	14・15号土壙実測図 (1/30)	301
第 8 図	16～18号土壙実測図 (1/30)	302
第 9 図	20～22号土壙実測図 (1/30)	304
第 10 図	23・24号土壙実測図 (1/30)	305
第 11 図	25～27号土壙実測図 (1/30)	306
第 12 図	28・29号土壙実測図 (1/30)	307
第 13 図	30号土壙実測図 (1/30)	308
第 14 図	P33実測図 (1/20)	309
第 15 図	P33打製石斧出土状況 (北から)	310
第 16 図	P33出土石器実測図 (1/3)	310
第 17 図	3号竪穴住居跡実測図 (1/60)	311
第 18 図	3号竪穴住居跡出土砥石実測図 (1/3)	312
第 19 図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	312
第 20 図	弥生・古墳時代遺構配置図 (1/600)	313
第 21 図	1・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	315

第 22 図	1号竖穴住居跡カマド実測図 (1/20).....	316
第 23 図	1号竖穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	317
第 24 図	1号竖穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)	318
第 25 図	1号竖穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3)	319
第 26 図	1号竖穴住居跡出土土器実測図 4 (1/4)	320
第 27 図	2号竖穴住居跡実測図 (1/60).....	321
第 28 図	2・4号竖穴住居跡カマド実測図 (1/20).....	322
第 29 図	2・4号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	323
第 30 図	5号竖穴住居跡実測図 (1/60).....	324
第 31 図	5号竖穴住居跡出土土器実測図 1 (1/4)	325
第 32 図	5号竖穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3)	326
第 33 図	6号竖穴住居跡出土砥石実測図 (1/3)	326
第 34 図	6・7号竖穴住居跡実測図 (1/60).....	327
第 35 図	6・7号竖穴住居跡カマド実測図 (1/20).....	328
第 36 図	6号竖穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	329
第 37 図	6号竖穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)	330
第 38 図	6号竖穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3)	331
第 39 図	8・9号竖穴住居跡実測図 (1/60).....	332
第 40 図	8・10号竖穴住居跡カマド実測図 (1/20).....	333
第 41 図	7～9号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	334
第 42 図	10号竖穴住居跡実測図 (1/60).....	335
第 43 図	10号竖穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	336
第 44 図	10号竖穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3; 122は1/4)	337
第 45 図	1・2・4号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	339
第 46 図	3号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	340
第 47 図	5・6号掘立柱建物跡実測図 (1/60).....	341
第 48 図	2・6号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)	342
第 49 図	1・3号土壙実測図 (1/30).....	343
第 50 図	1号土壙出土土器実測図 (1/3, 1は1/4).....	344
第 51 図	2・3号土壙出土土器実測図 (1/3)	344
第 52 図	2号土壙実測図 (1/30).....	345
第 53 図	4・5号土壙実測図 (1/20).....	346
第 54 図	1号溝土層図 (1/20).....	347

第 55 図	2号溝土層図 (1/20)	347
第 56 図	1・2号溝出土土器実測図 (1/3)	347
第 57 図	柱穴 (1～6)・包含層出土土器実測図 (1/3)	348

〔第 5 地点〕

第 1 図	遺跡付近地形図 (1/2,000)	354
第 2 図	遺構全体図 (1/300)	355
第 3 図	双子池から遺跡をのぞむ	356
第 4 図	調査区東側全景	356
第 5 図	調査区西側全景	356

〔第 3 地点〕

第 1 図	遺跡付近地形図 (1/2,000)	357
第 2 図	遺構配置図 (1/500)	358
第 3 図	1～4号土壌実測図 (1/30)	359
第 4 図	4号土壌と調査区北半全景	362
第 5 図	調査区南半全景	362

付 図 目 次

〔安武・深田遺跡〕

付 図	安武・深田遺跡遺構配置図 (1/400)
-----	----------------------

〔安武・土井の内遺跡〕

付 図	安武・土井の内遺跡遺構配置図 (1/300)
-----	------------------------

表 目 次

〔安武・深田遺跡〕

表 1	10号線椎田バイパス関係遺跡一覧表	3
表 2	周辺遺跡一覧表	14
表 3	弥生時代竪穴住居跡一覧表	281
表 4	古墳時代以降竪穴住居跡一覧表	286
表 5	掘立柱建物跡一覧表	289

〔安武・土井の内遺跡〕

表 1	古墳時代竪穴住居跡一覧表	352
表 2	掘立柱建物跡一覧表	352

〔自然科学系の調査 VII-1〕

表 1	供試材の履歴と調査項目	364
表 2	安武・深田遺跡出土鉄片 (FK-25) のねずみ鑄鉄部のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果	366
表 3	安武・深田遺跡出土鉄片 (FK25-2) 鉄素地のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果	367
表 4	安武・深田遺跡出土刀子片 (FK27) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果	368
表 5	安武・深田遺跡出土鉄鏃中 (FK30) 非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果	369

〔自然科学系の調査 VII-2〕

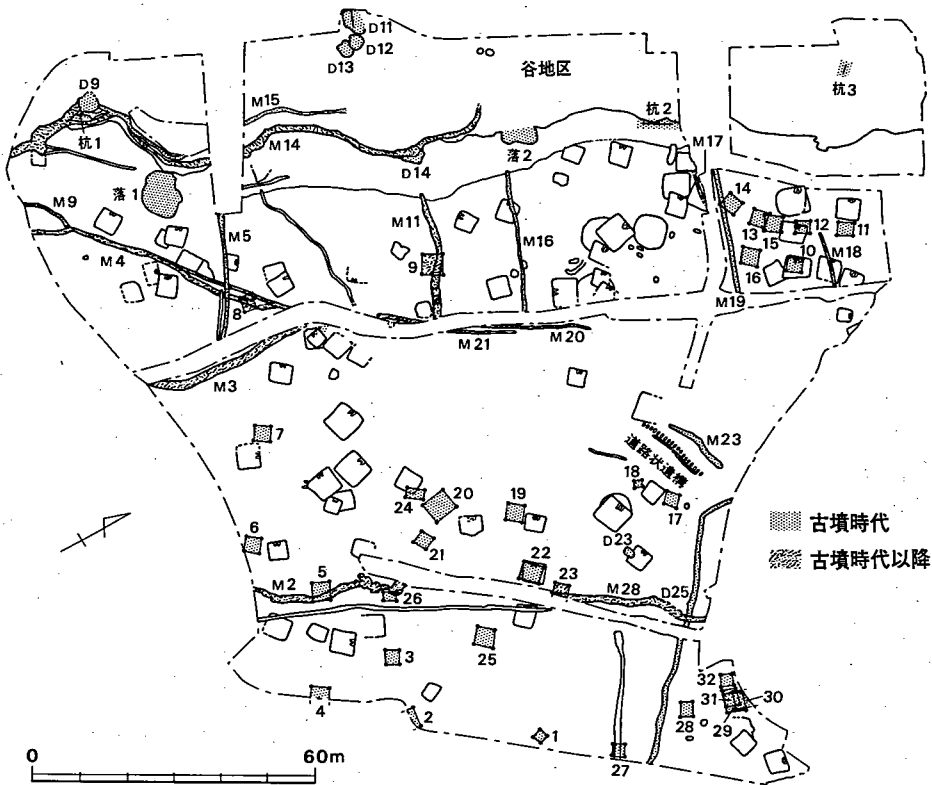
表 1	出土木製遺物	374
表 2	同 定 表	374

4. 古墳時代以降の遺構と遺物

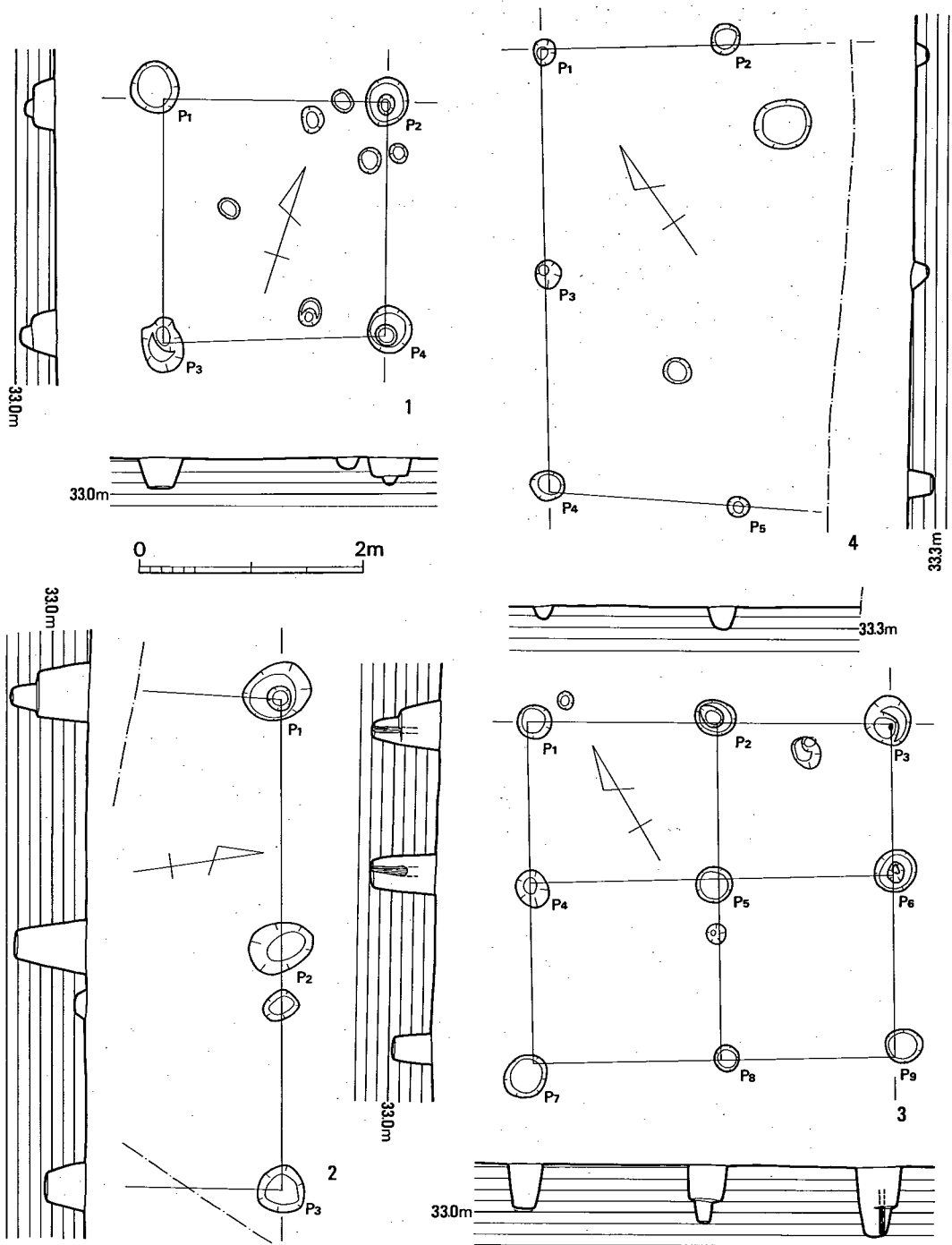
(2) 掘立柱建物跡 (第193図)

本遺跡では調査区のほぼ全面に亘って、32棟の掘立柱建物跡が検出された。調査区北部では10～16号の、調査区東端部では29～32号の掘立柱建物跡が集中するが、他は散在といった状況である。出土遺物は極めて少なく、また竪穴住居跡等の時期の明確な遺構との切り合いも少ないことから、多くの場合その所属時期の決定が難しい。その中でも、遺物から時期が限定できるものはすべて古墳時代に属する。間数は2×2間の総柱建物であるが、それ以外に1×1間、1×2間、2×3間の建物もある。方位については10～16号の一群と、29～32号の一群の中である程度同じ方向に纏まるが、他の建物については必ずしもそういった規則性を見いだすことができない。

1号掘立柱建物跡 (第194図)



第 193 図 古墳時代掘立柱建物跡・土坑等配置図 (1/1,600)



第 194 图 1~4 号掘立柱建物迹实测图 (1/60)

1号掘立柱建物跡は調査区東端中央で30号溝の南西11mに位置する1×1間の建物である。梁行2.0×桁行2.35mと規模は小さく、あるいは竪穴住居の主柱穴かもしれない。柱穴は径40cm、深さ25～30cmを測り比較的浅い。遺物は20点ほどの小さな土師器片ばかりで、須恵器は含まれない。

2号掘立柱建物跡（図版36、第194図）

2号掘立柱建物跡は調査区東端のやや南寄りにあり、1号住居跡の南3m、3号掘立柱建物跡の東9mにある。大半は調査区外にあり、確認できたのは並んだ3つの柱穴だけで、本来は一辺4.45mで2×2間の建物であったと考えられる。柱穴の規模は、径40～55cm、深さ35～65cmを測る。遺物は出土していない。

3号掘立柱建物跡（図版85、第194図）

3号掘立柱建物跡は調査区南東部の中でも東寄りに位置し、2号掘立柱建物跡の西9m、2号住居跡の北6mの距離にある。2×2間の総柱建物で、梁行3.2×桁行3.45mの規模を有する。柱穴は径30～40cm、深さ40～65cmを測るが、この中でもP3とP6からはそれぞれ長さ28cm、径6cmと長さ34cm、径10cmの柱根が立てられたままの状態で見出された。遺物は20点程度で土師器がその大半を占めるが、回転ヘラケズリの施された須恵器片もある。古墳時代に属する建物であろう。

4号掘立柱建物跡（図版36、第194図）

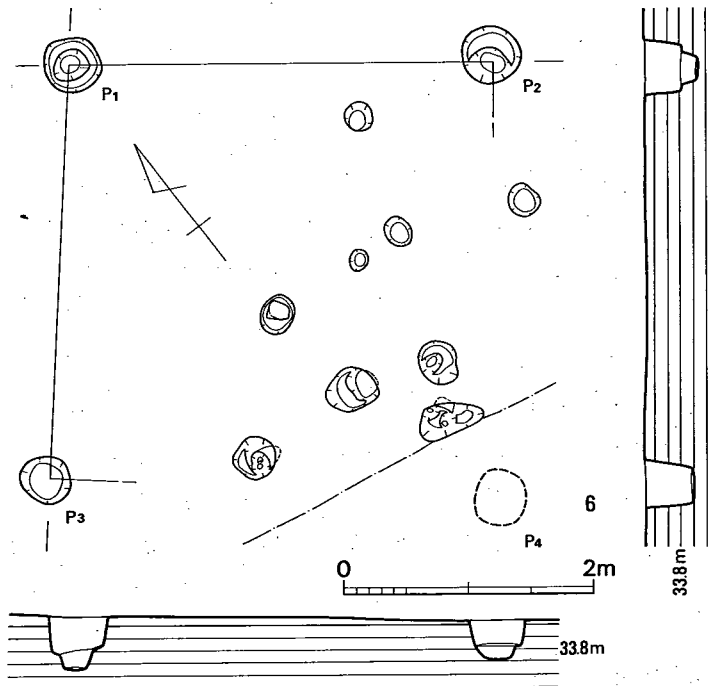
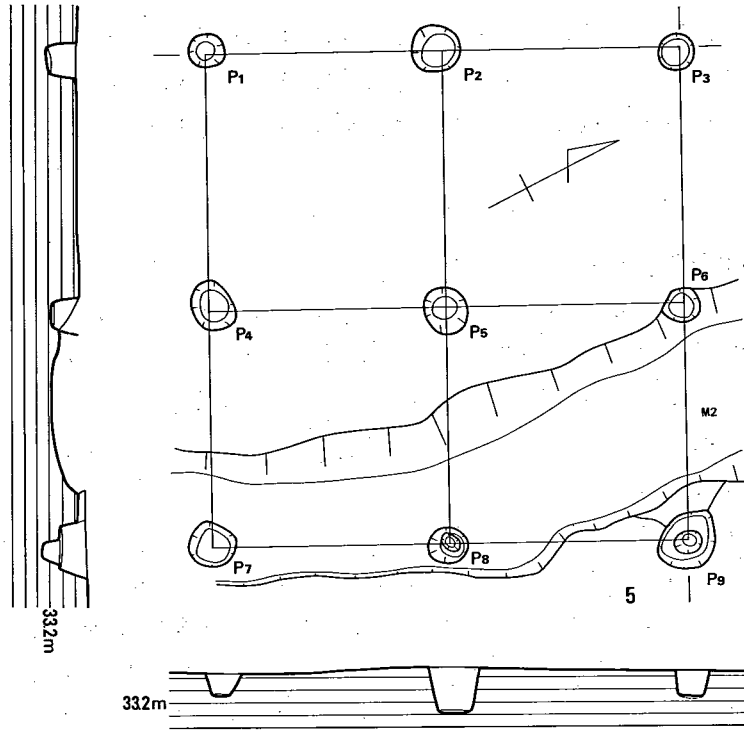
4号掘立柱建物跡は調査区南東端で、2・3号住居跡の東10mに位置する。その南東側は調査区外へ延びており全容を把握することはできないが、2×2間以上の建物であると考えられる。検出できたのは径18～25cm、深さ12～22cmの5つの柱穴で、北西辺は3.9mを測る。遺物は出土していない。

5号掘立柱建物跡（第195図）

5号掘立柱建物跡は調査区南東部のほぼ中央で、2・3号住居跡の西6m、5号住居跡の北東7mに位置し、中世の2号溝に切られる。2×2間の総柱建物で、梁行3.85×桁行4.0mの規模を有し、柱穴は30～50cm、深さ20～35cmを測る。遺物としては、土師器片が1点だけ出土した。

6号掘立柱建物跡（第195図）

6号掘立柱建物跡は調査区南東部の中でもやや南西寄りに位置し、5号住居跡の南2mの距



第 195 图 5·6 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

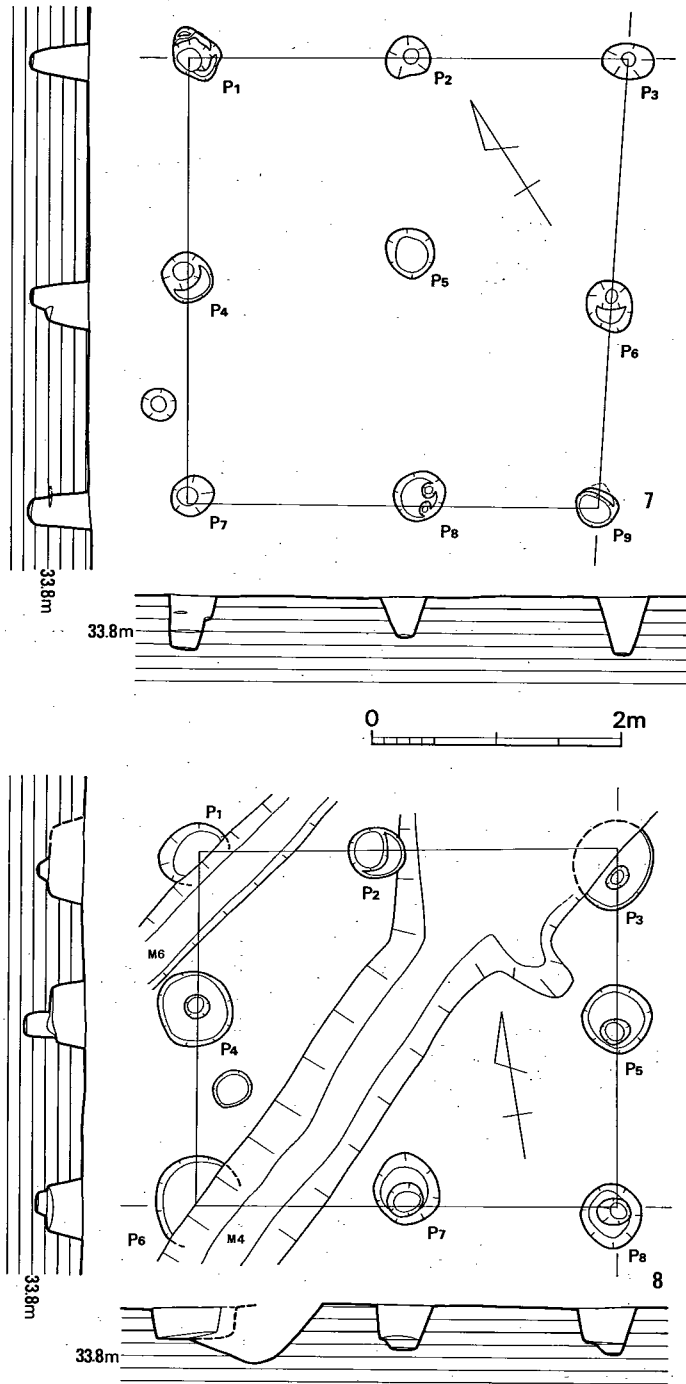
離にある。検出された柱穴は3つで他は調査区外へ延びており、その全容は把握できない。径43~47cm、深さ30~42cmを測る柱穴間の距離は、北東3.4m、北西3.4mで、あるいは竪穴住居の支柱穴である可能性もある。出土遺物は、3点の土師器片と1点の須恵器片だけである。

7号掘立柱建物跡 (図版85, 第196図)

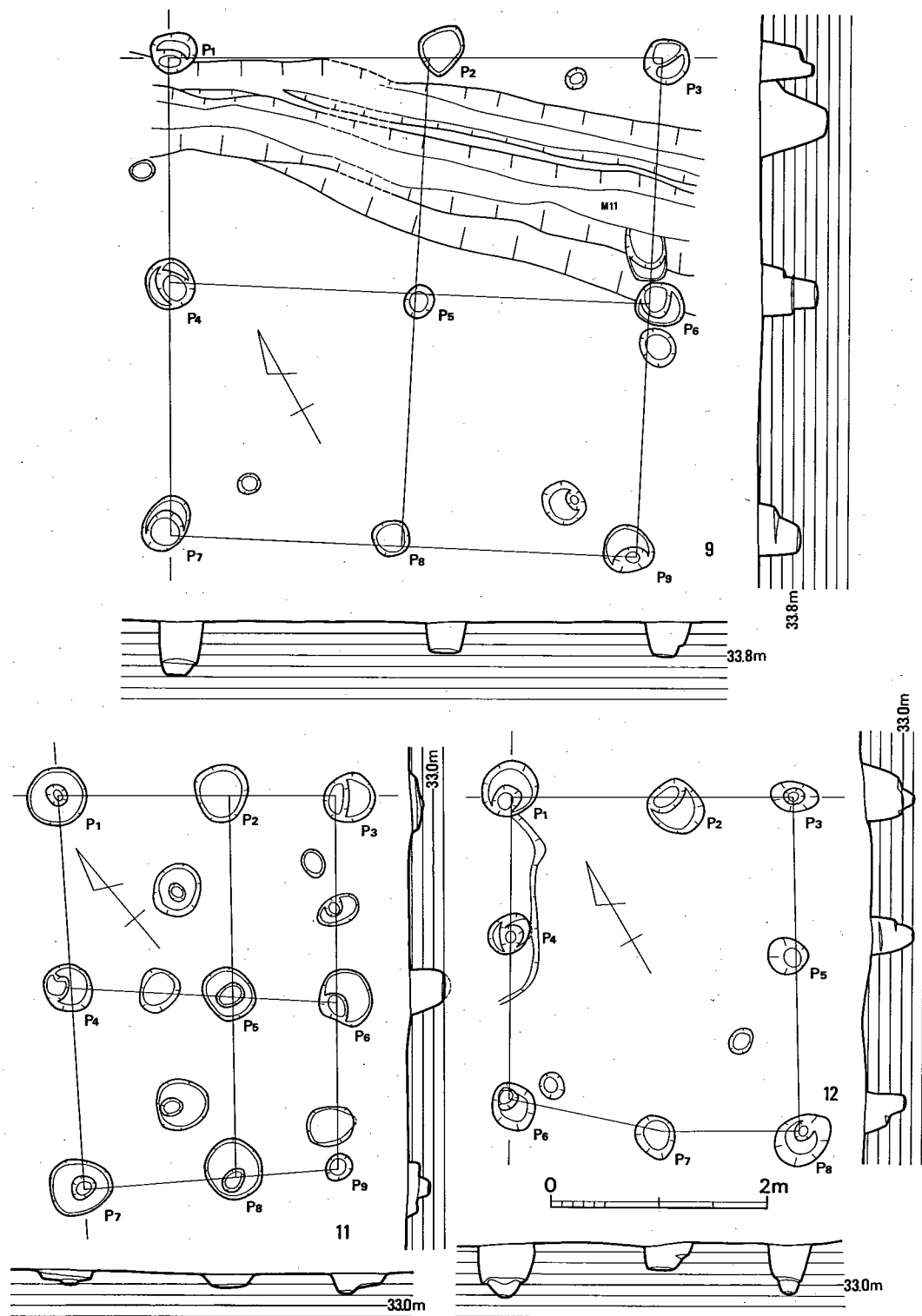
7号掘立柱建物跡は調査区南部中央に位置し、6号住居跡の北西0.5m、14号住居跡の南東9mの距離にある。2×2間の総柱建物で、梁行3.35×桁行3.6mの規模を測る。柱穴は径30~40cm、深さ30~50cmと深く、中心の柱穴は中央から北東側へ20cmほどズレる。遺物には土師器の他、赤焼き須恵器の坏身口縁部付近の小破片が含まれる。本建物は、古墳時代に属するものであろう。

8号掘立柱建物跡 (第196図)

8号掘立柱建物跡は調査区南西部住居群の中にあり、29号住居跡の南5m、26号住居



第196図 7・8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第 197 图 9·11·12号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

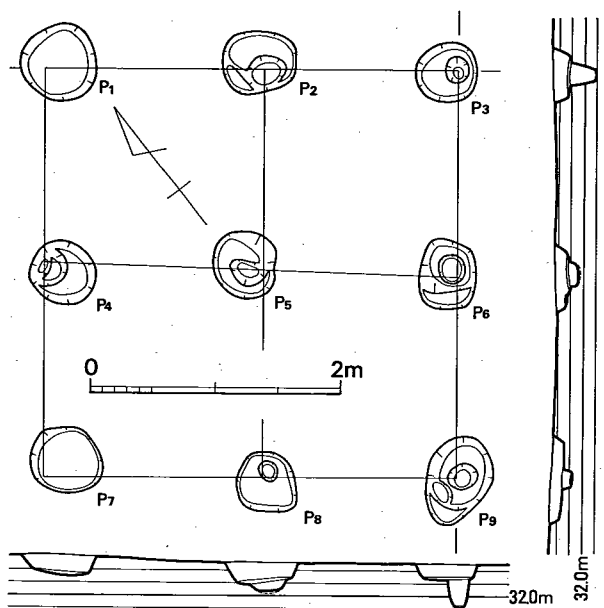
跡の東6mに位置し、奈良時代の4号溝と6号溝に切られる。2×2間の建物であるがその中央部は4号溝に切られており、総柱建物になる可能性もある。梁行2.75×桁行3.4mの規模を有するが、西辺は東辺より30cm短く、平面プランは台形を呈する。柱穴はいずれも2段掘りで、径45～70cm、深さ35～50cmを測り比較的大きい。遺物には土師器片14点と回転ヘラケズリが施された須恵器片が1点含まれる。

9号掘立柱建物跡 (第197図)

9号掘立柱建物跡は調査区中央のやや西寄りで35号住居跡の西6m、33号住居跡の北東2mに位置し、古墳時代の11号溝を切る。2×2間の総柱建物で、梁行4.3×桁行4.6mの規模を有する。柱穴は径28～52cm、深さ29～51cmを測り、大きさには差がある。出土遺物は小破片の土師器数点である。

10号掘立柱建物跡 (図版86・87, 第198図)

10号掘立柱建物跡は調査区北部住居群の東寄りにあり、古墳時代の53号住居跡とちょうど重なるような位置関係でそれに切られる。2×2間の総柱建物で、梁行3.25×桁行3.30mの規模を持つ。柱穴の多くは2段掘りで径は60～90cmと大きい、53号住居跡に切られているため深さは20～40cmと浅い。なお、2段目の径は15～20cmと小さい。小土師器片が5点出土した。



11号掘立柱建物跡 (図版88, 第197

図)

第198図 10号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

11号掘立柱建物跡は調査区北部住居群の中でも北端にあり、59号住居跡の南東壁に接するような位置関係にある。2×2間の総柱建物であるが、梁行2.35×桁行3.60mで平面プランとしては長方形になる。特に、南東側の3つの柱穴は中央の柱穴との距離が短く、本遺跡の建物の中では特異な存在である。削平されているのか、柱穴は径25～50cm、深さ15～30cmと浅い。遺物は比較的多く、土師器のほか須恵器も数点含まれる。本建物は、古墳時代に属するものであ

ろう。

須恵器（第204図8）8はP4からの出土で、天井部に回転ヘラケズリが施される坏蓋である。

12号掘立柱建物跡（図版88, 第197図）

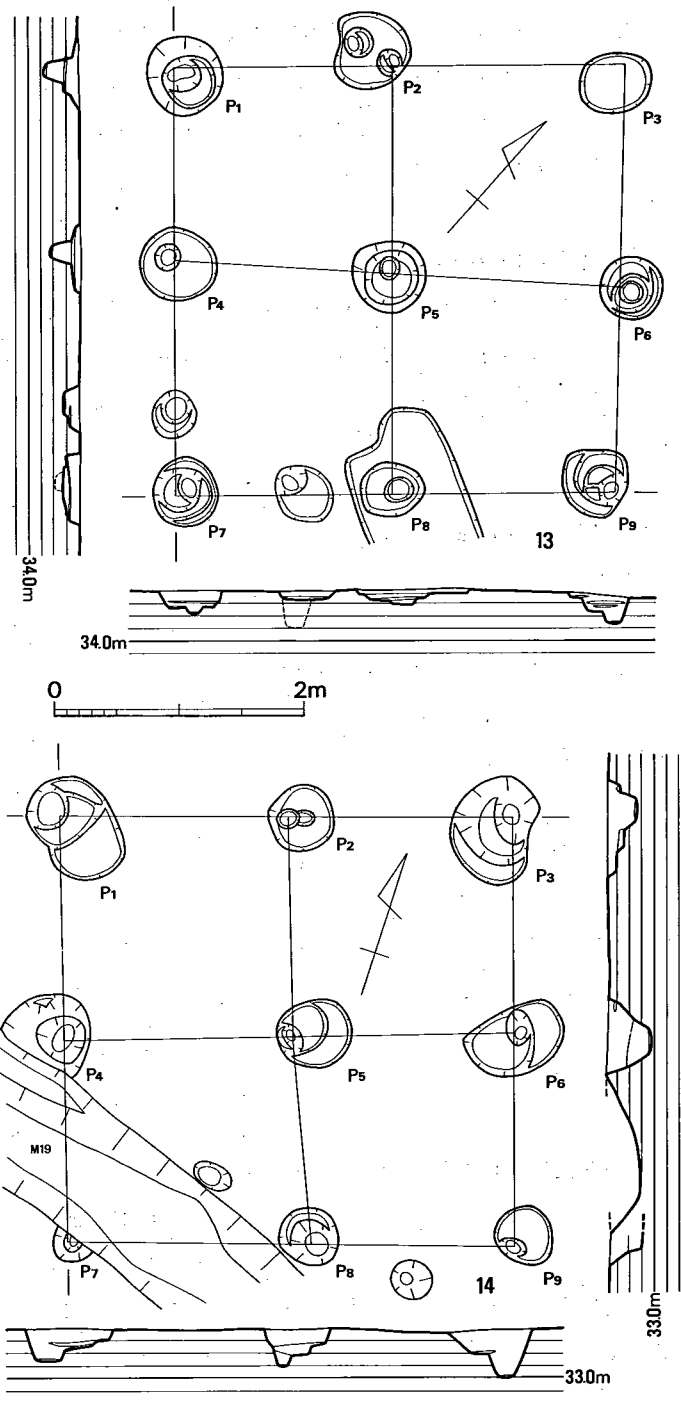
12号掘立柱建物跡は調査区北部住居群のほぼ中央で58・61号住居跡の南東1mに位置し、古墳時代の56号住居跡に切られる。2×2間の建物で、梁行2.65×桁行3.15mの規模を有する。柱穴は径35～55cm、深さ25～50cmを測る2段掘りで、2段目の径は15～20cmである。出土遺物は多く、土師器と須恵器で40点あまりの破片数を数える。

須恵器（第204図11・12・14）

P6出土の坏蓋11には、天井部外面に回転ヘラケズリが施される。坏身12の口縁部の調整はナデで、P4からの出土である。P2から出土した14は撮の付く壺の蓋で、天井部外面には回転ヘラケズリが施される。

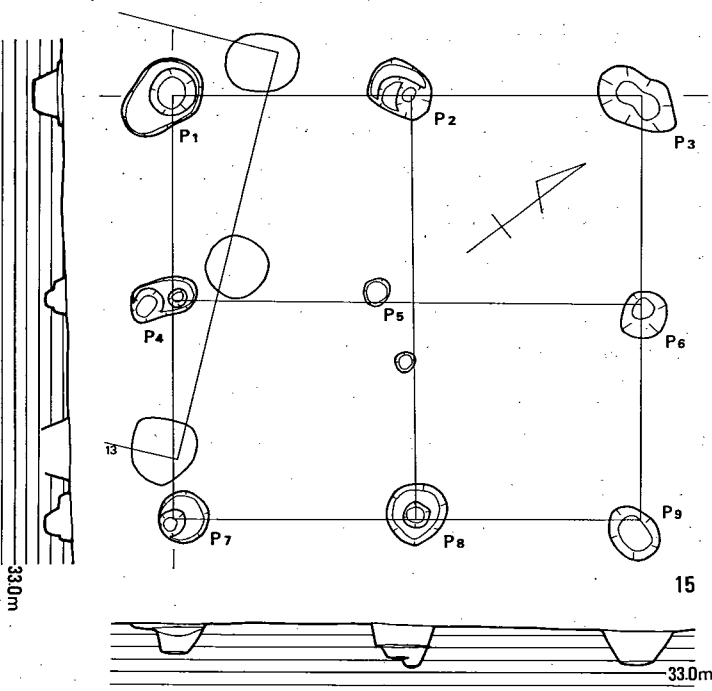
13号掘立柱建物跡（図版89, 第199図）

13号掘立柱建物跡は調査区



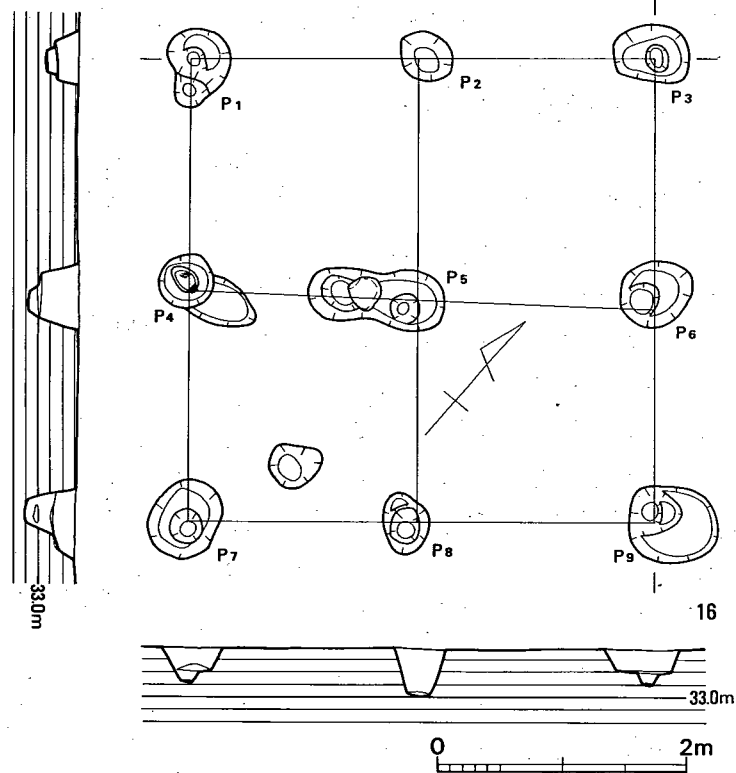
第199図 13・14号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

北部住居群の中でもやや西寄り、14号掘立柱建物跡の東3m、16号掘立柱建物跡の北5mに位置し、15号掘立柱建物跡と切り合うがその先後関係は不明である。2×2間の総柱建物で、梁行3.3×桁行3.35mの規模を有する。柱穴の径は45～60cmと比較的大きいが、削平されているためか深さは10～25cmと浅い。遺物の大半は土師器だが、須恵器片も2点だけある。



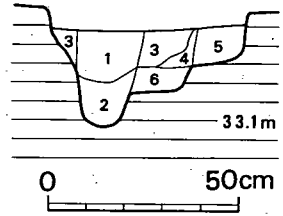
14号掘立柱建物跡 (図版90, 第199・201図)

14号掘立柱建物跡は調査区北部住居群の中でも西端で、13号掘立柱建物跡の西3m、51号住居跡の北東2mの距離に位置し、古墳時代の19号溝に切られる。2×2間の総柱建物で、梁行3.45×桁行3.65mの規模を持つが、P2・5・7は中心からやや東に寄っている。柱穴の径は60～105cmと比較的大きいが、深さは削平のためか35～50cmと浅い。第201図はP2の土層断面図であるが、(1)黄褐色土と(2)茶褐色粘質土は柱痕に相



第 200 図 15・16号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

当する。その他の土層名は、(3)黒褐色土、(4)地山の黄褐色土をブロック状に含んだ黄褐色砂質土、(5)地山の黄褐色土をわずかに含んだ褐色土、(6)淡褐色粘質土である。出土遺物は多いが、図示できたのは須恵器1点だけである。本建物は古墳時代に属するものであろう。須恵器(第204図9) 坏蓋9の器面調整はナデで、P2から出土した。



第201図 14号掘立柱建物跡P2土層図(1/20)

15号掘立柱建物跡(図版89, 第200図)

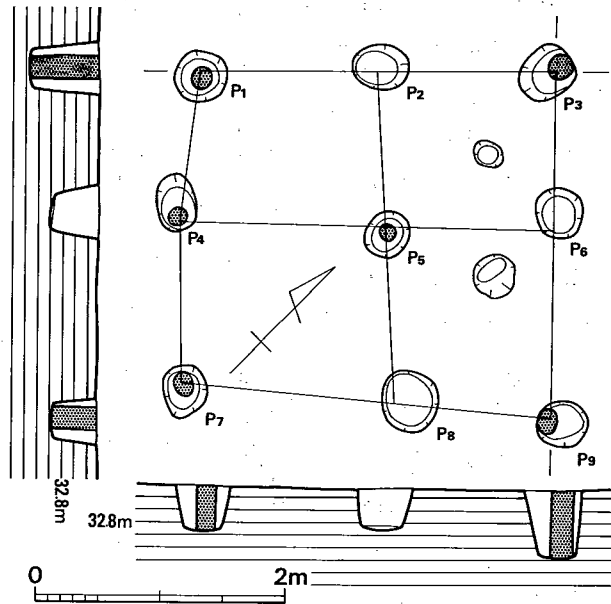
15号掘立柱建物跡は調査区北部住居群のほぼ中央で58・61号住居跡の南1m, 12号掘立柱建物跡の西3mに位置し、古墳時代の56号住居跡は切るが、13号掘立柱建物跡との切り合いについての先後関係は不明である。2×2間の建物で、梁行3.45×桁行3.65mの規模を有する。柱穴は径30~50cm, 深さ15~35cmと比較的浅い。遺物の出土はない。

16号掘立柱建物跡(図版91, 第200図)

16号掘立柱建物跡は調査区北部住居群の中でも最も南に位置し、54号住居跡の西1.5m, 13・15号掘立柱建物跡の南東5mの距離にある。2×2間の総柱建物で、梁行3.65×桁行3.7mの規模を有し、柱穴は径40~55cm, 深さは25~40cmを測る。遺物は出土していない。

17号掘立柱建物跡(図版91, 第202図)

17号掘立柱建物跡は調査区中央の東寄り、66号住居跡の東0.5m, 69号住居跡の西2mの位置にある。2×2間の総柱建物で、梁行2.8×桁行2.85mの規模を有するが、柱穴間の距離はまちまちで配置は整然としておらず、平面プランも全体的に歪んでいる。柱穴の規模は径35~50cm, 深さ35~55cmで、そのうちP1・3~5・7・9では径20cm前後の柱痕が検出された。遺物は本遺跡で検出された32棟の掘立柱建物跡の中で最も



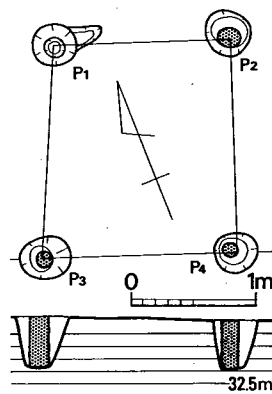
第202図 17号掘立柱建物跡実測図(1/60)

多く、60点余りを数えるが、図示しえたのは須恵器1点だけである。本建物は、古墳時代に属するものであろう。

須恵器（第204図13） 坏身13の器面調整はナデで、P9からの出土である。

18号掘立柱建物跡（図版92，第203図）

18号掘立柱建物跡は調査区中央のやや東寄り、66号住居跡の南0.5m、67・74号住居跡の北2mに位置する。1×1間の建物で、規模は梁行1.5×桁行1.7mを測る。柱穴はいずれも径30cm、深さ40cmで同じような大きさである。P2～4では径15cmの柱痕が検出された。規模や間数から判断して、あるいは竪穴住居の主柱穴であるかも知れない。なお、遺物は出土していない。



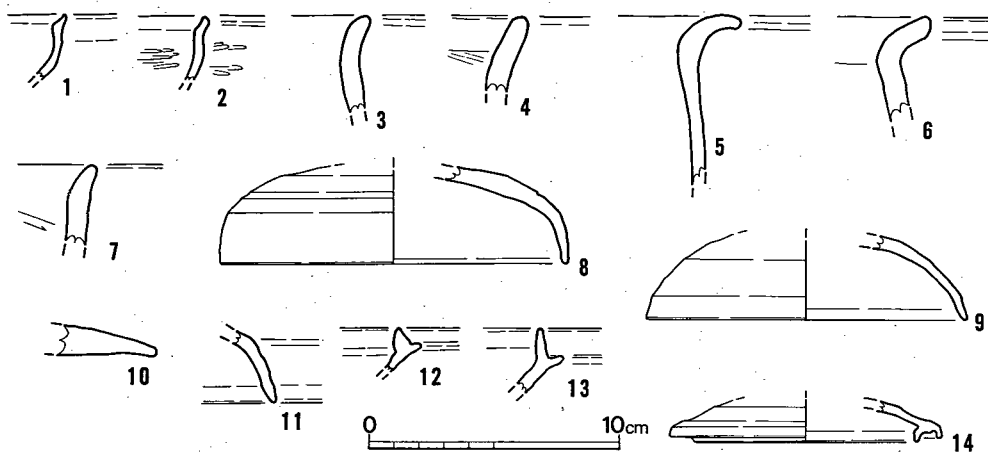
第203図 18号掘立柱建物跡実測図(1/60)

19号掘立柱建物跡（図版93，第205図）

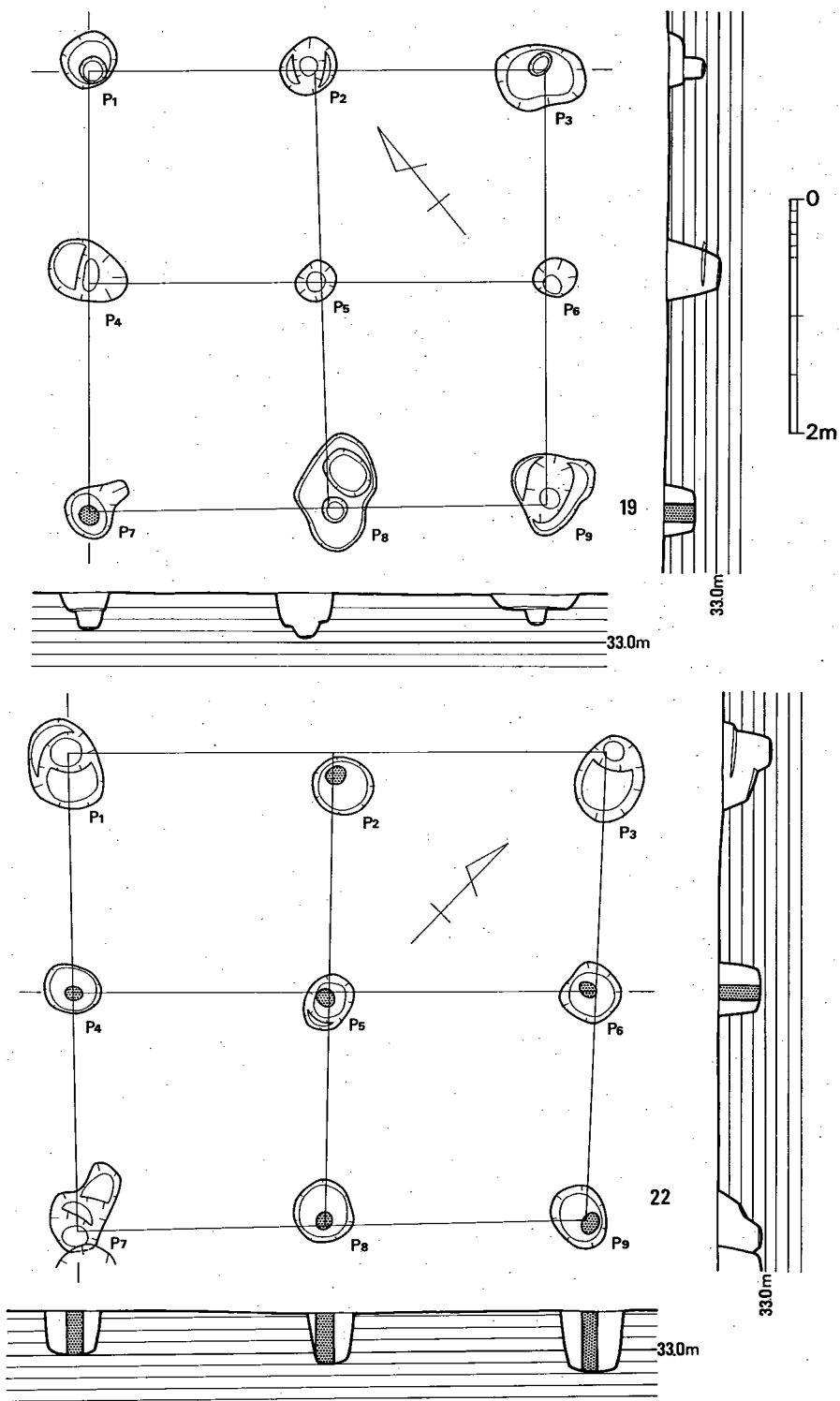
19号掘立柱建物跡は調査区中央部の東寄り、71号住居跡からは北4mにあり、73号住居跡とはその南西壁に接するような位置にある。2×2間の総柱建物で、梁行3.7×桁行3.95mの規模を有する。

柱穴は整然と配置され、径30～75cm、深さ30～45cmを測り、P7では径15cmの柱痕が検出された。遺物は20点あまりでそのうち2点の土師器を図示したが、この他に回転ヘラケズリを施された須恵器片もある。所属時期は古墳時代であろうか。

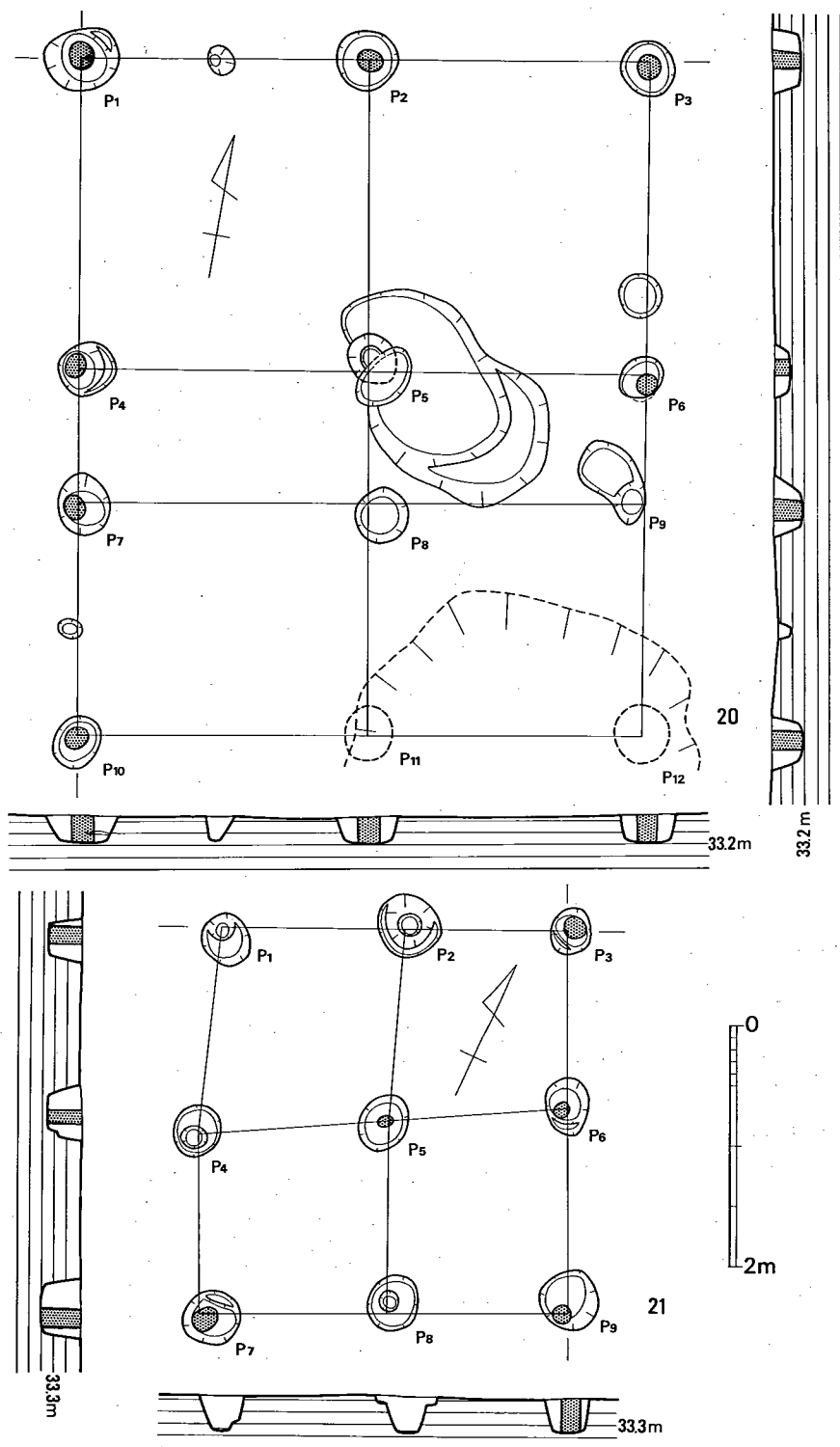
土師器（第204図1・3） P4出土の1は坏の口縁部、P1出土の3は甕の口縁部で、いずれも摩滅により調整不明。



第204図 掘立柱建物跡出土土器実測図(1/3)



第 205 图 19·22号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第 206 图 20·21号掘立柱建筑物迹实测图 (1/60)

20号掘立柱建物跡 (図版92, 第206図)

20号掘立柱建物跡は調査区中央のやや南東寄り、71号住居跡の西2m、24号掘立柱建物跡の東0.5m、21号掘立柱建物跡の北3mに位置する。削平によりP11・12は残っていないが、2×3間の総柱建物で規模は梁行4.75×桁行5.65mを有し、本遺跡では最も大きな建物である。柱穴の径は35～45cm、深さは10～25cmを測り、P1～4・6・7・10では径15～20cmの柱痕を検出した。遺物は2点の土師器片だけである。

21号掘立柱建物跡 (図版94, 第206図)

21号掘立柱建物跡は調査区中央部のやや南東寄り、20号掘立柱建物跡の南3m、11号住居跡の7mに位置する。2×2間の総柱建物で梁行3.0×桁行3.15mの規模を有するが、P2・5・8は中心部から若干東に寄っている。柱穴は径35～50cm、深さ30～40cmを測り、P3・5～7・9では径10～15cmの柱痕を確認した。20点ほどの遺物は大半が土師器片であるが、外面に平行タタキ、内面に青海波のタタキを持つ須恵器甕の小破片もある。时期的には、古墳時代に属するものであろうか。

土師器 (第204図4) 4は甕の口縁部で、外面にはナデ、内面にはハケが施される。P4からの出土。

22号掘立柱建物跡 (図版76, 第205図)

22号掘立柱建物跡は調査区東部中央に位置し、75号住居跡を重なるようにして切る、2×2間の総柱建物である。梁行4.05×桁行4.7mの規模を持ち、整然と配置された柱穴は径50～70cm、深さ40～50cmを測る。P2・4～6・8・9では径10～15cmの柱痕が検出された。遺物は30点ほど数えるが、すべて土師器片である。

土師器 (第204図5) 5は甕の口縁部で、内面にはケズリが施されるが、外面は摩滅のため調整不明。

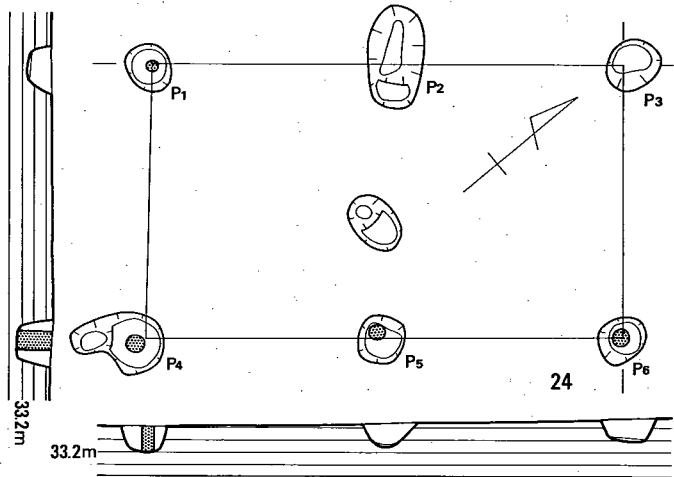
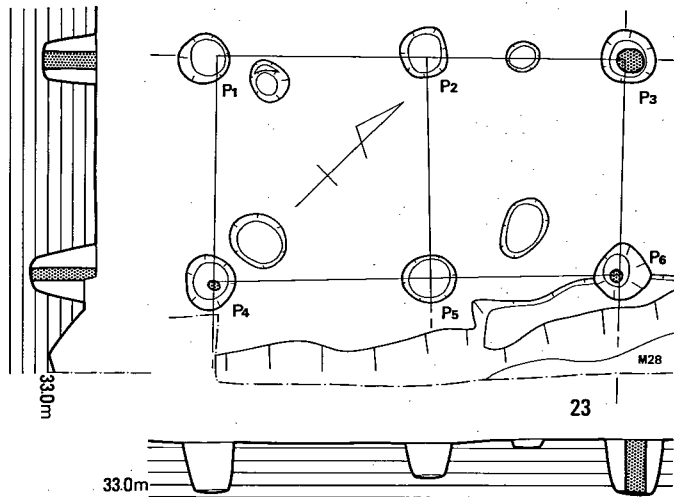
23号掘立柱建物跡 (図版94, 第207図)

23号掘立柱建物跡は調査区東部のほぼ中央で75号住居跡の東2m、76号住居跡の北4mに位置し、奈良時代の28号溝に切られる。検出された柱穴は6本で1×2間の建物のように見えるが、実際は調査区外へも延びていき2×2間の総柱建物と推定される。仮に1×2間の建物とした場合、梁行1.75×桁行3.25mという規模になる。柱穴は径35～45cm、深さ30～55cmを測り、P3・4・6では径10～15cmの柱痕を検出した。遺物は50点あまりでかなり多いが、すべて土師器片である。

土師器 (第204図2) 2はP2から出土した坏で、内外面にはミガキが施される。

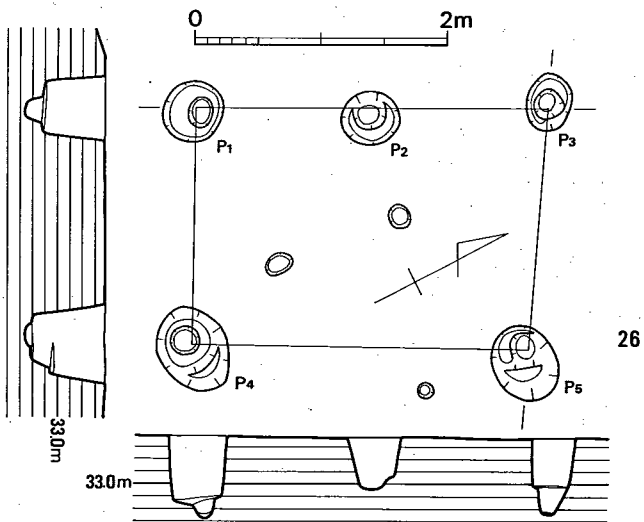
24号掘立柱建物跡 (図版92, 第207図)

24号掘立柱建物跡は調査区南部のやや北東寄り、20号掘立柱建物跡の西0.5mに位置し、72号住居跡と切り合うが削平が著しいためその先後関係は不明である。本遺跡では唯一確実な1×2間の建物で、梁行2.2×桁行3.95mの規模を有する。柱穴の径は45×80cmのP2を除いていずれも30～45cmの幅に収まり、深さは15～30cmと浅い。径10cm前後の柱痕が検出されたのは、P1・4～6である。なお、遺物は出土していない。



25号掘立柱建物跡 (図版95, 第208図)

25号掘立柱建物跡は調査区東部中央に位置し、75号住居跡の南5m、1号溝の東4mの距離にある。2×2間の総柱建物で、梁行4.0×桁行4.15mの規模を有する。柱穴は径25～40cm、深さ10～25cmと浅く、P1・2・8では15cm程度の柱痕が検出された。遺物は小破片が20点あまりで図示できるものではないが、須恵器坏身の口縁部付近の破片がある。本建物は古墳時代に属



第207図 23・24・26号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

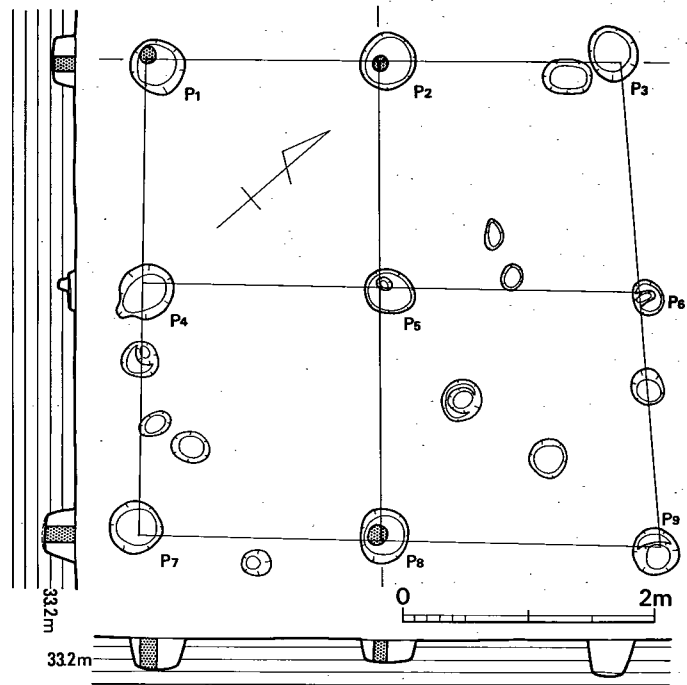
するものであろう。

26号掘立柱建物跡 (図版95, 第207図)

26号掘立柱建物跡は調査区南東部の中でもやや北寄り、3号掘立柱建物跡の西10m, 11号住居跡の東11mに位置する。中世の2号溝に切られているため4本の柱穴しか検出されなかったが、実際にはもっと北西方向に延び、1×2間程度の建物であったと推定される。仮に1×1間とした場合、梁行1.9×桁行2.75mの規模を有することになる。

柱穴は45~70cm, 深さ60~70

cmと大きくて深い。なお、遺物は出土していない。



第 208 図 25号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

27号掘立柱建物跡 (図版96, 第209図)

27号掘立柱建物跡は調査区東端で、26号溝の南5m, 30号溝の北2mに位置するが、切り合っている29号溝との先後関係は不明である。検出されたのは4つの柱穴で1×1間の建物になるが、調査区外の南東方向に延び、1×2間程度の建物である可能性も捨てきれない。あるいは竪穴住居の主柱穴とも考えられている。梁行2.6×桁行2.65mで、柱穴は径55~70cm, 深さ40~70cmを測り、すべての柱穴で径15cm前後の柱痕を確認した。遺物は20点あまりだが、すべて土師器片である。

28号掘立柱建物跡 (図版96, 第209図)

28号掘立柱建物跡は調査区北東部端に位置し、29~32号掘立柱建物跡の南6m, 26号溝の北3mの距離にある。2×2間の建物だが検出された柱穴は7本で、梁行2.8×桁行3.3mの規模を有する。柱穴は径40~50cm, 深さ20~40cmを測り、P5・6・7では径10~20cmの柱痕が確認された。遺物は土師器・須恵器合わせて15点ほどだが、破片は小さく図示できるものはない。

29号掘立柱建物跡 (図版97・98, 第210図)

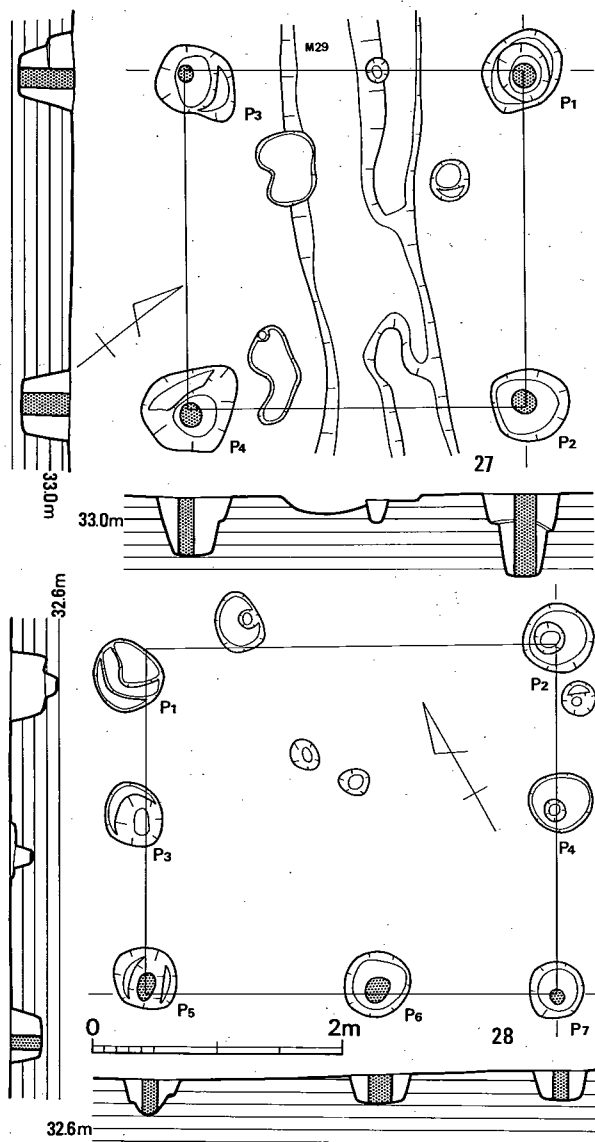
29号掘立柱建物跡は調査区北東端で、79号住居跡の西4m、32号掘立柱建物跡の東1mに位置する。30・31号掘立柱建物跡と切り合うが、その先後関係は不明である。2×2間の総柱建物で、梁行3.95×桁行4.15mの規模を有する。柱穴は径35~50cm、深さ35~50cmを測るが、柱痕を確認できるものはなかった。遺物は多く50点ほどあるが、そのうち須恵器は2点だけである。

土師器 (第204図6・7) 6はP6, 7はP9から出土した甕の口縁部で、いずれも外面にはナデ、内面にはケズリが施される。

30号掘立柱建物跡 (図版98, 第210図)

30号掘立柱建物跡は調査区の北東端で、79号住居跡の西4m、32号掘立柱建物跡の東1mに位置する。30・31号掘立柱建物跡と切り合うが、その先後関係は不明である。検出された柱穴は6本で1×2間の建物だが、実際には調査区外の北方向に延びて2×2間程度の建物であったと推定される。仮に1×2間の建物とした場合、梁行1.9×桁行3.85mの規模を有することになる。柱穴は径35~40cm、深さ30~45cmを測り、P5では径15cmの柱痕が検出された。土師器片ばかりが10点ほど出土した。

土師器 (第204図10) P2からの出土で、調整はナデである。



第209図 27・28号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

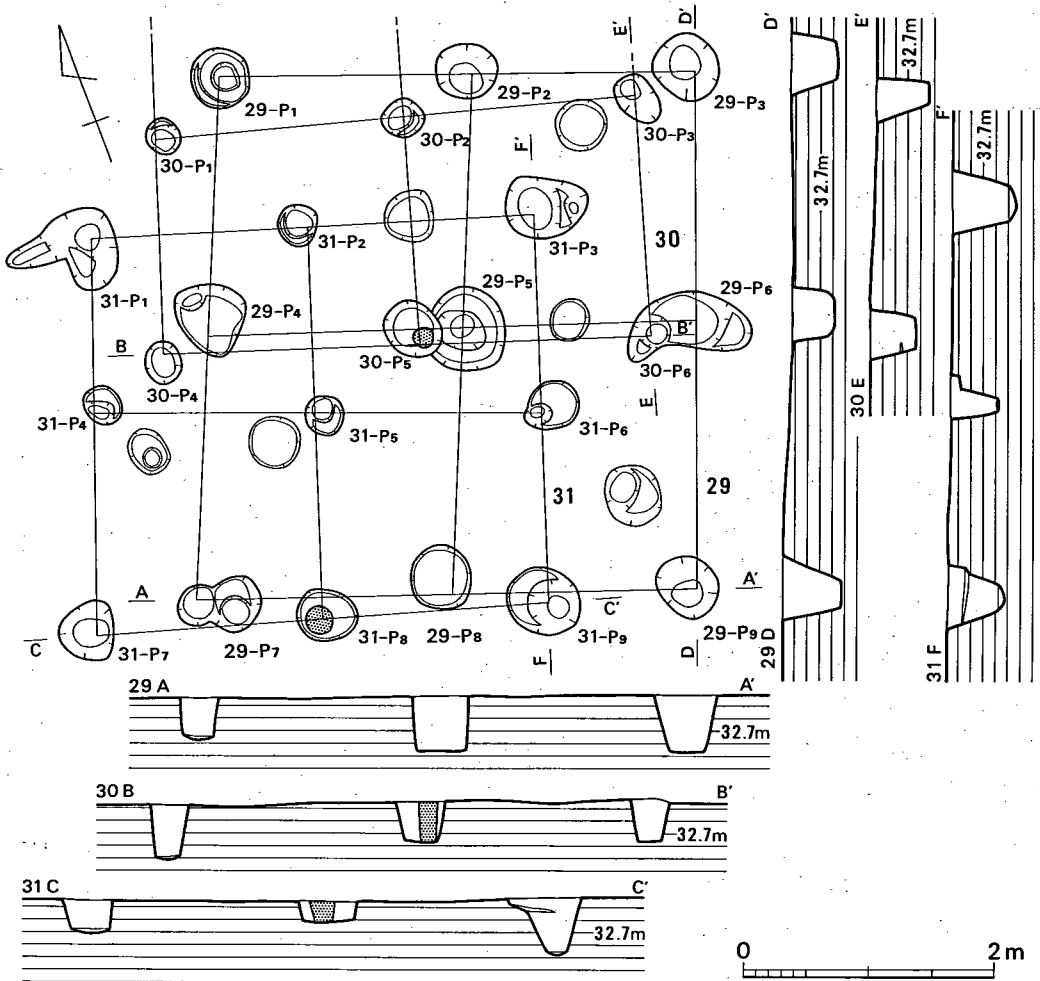
第209図 27・28号掘立柱建物跡実測図 (1/60) 仮に1×2間の建物とした場合、梁行1.9×桁行3.85mの規模を有することになる。柱穴は径35~40cm、深さ30~45cmを測り、P5では径15cmの柱痕が検出された。土師器片ばかりが10点ほど出土した。

31号掘立柱建物跡 (図版98, 第210図)

31号掘立柱建物跡は調査区の北東端で、79号住居跡の西4m、32号掘立柱建物跡の東1mに位置する。30・31号掘立柱建物跡と切り合うが、その先後関係は不明である。2×2間の総柱建物で、梁行3.15×桁行3.2mの規模を有する。柱穴は径30~50cm、深さ15~50cmを測り、P8では径25cmの柱痕が検出された。土師器片が3点出土している。

32号掘立柱建物跡 (図版98, 第211図)

32号掘立柱建物跡は調査区北東端で、29~31号掘立柱建物跡の西1mに位置する。検出された柱穴は4本で1×1間の建物だが、調査区外の北方向に延びる1×2間程度の建物もしくは竪穴住居の主柱穴である可能性もある。仮に1×1間の建物とした場合、梁行2.6×桁行2.65m



第 210 図 29~31号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

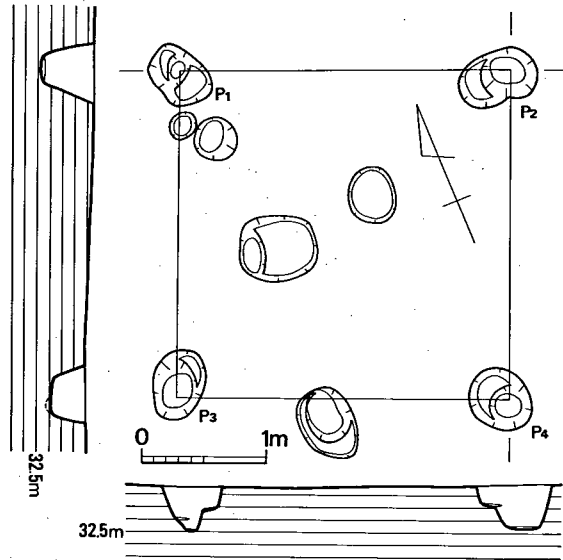
の規模を有することになる。柱穴は径35~60cm、深さ35~40cmを測る。遺物は10点ほどで、すべて土師器片である。

(3) 土 壙

本遺跡で古墳時代以降の土壙は、1・3~5・9・11~25号の20基である。性格や所属時期については、以下順次説明する。

1号土壙 (図版50, 第212図)

1号土壙は調査区の南部で、13~18号の住居跡群に取り囲まれるような位置にある。上面プランは2.15×1.90mの不整楕円形で、底面も上面とほぼ同じプランだが規模は1.86×1.42mとひとまわり小さい。壁は緩やかに傾斜し、深さは36cmを測る。遺物は土師器の小破片が数点出土したが、図示しうるものはない。



第 211 図 32号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

3号土壙 (図版52, 第212図)

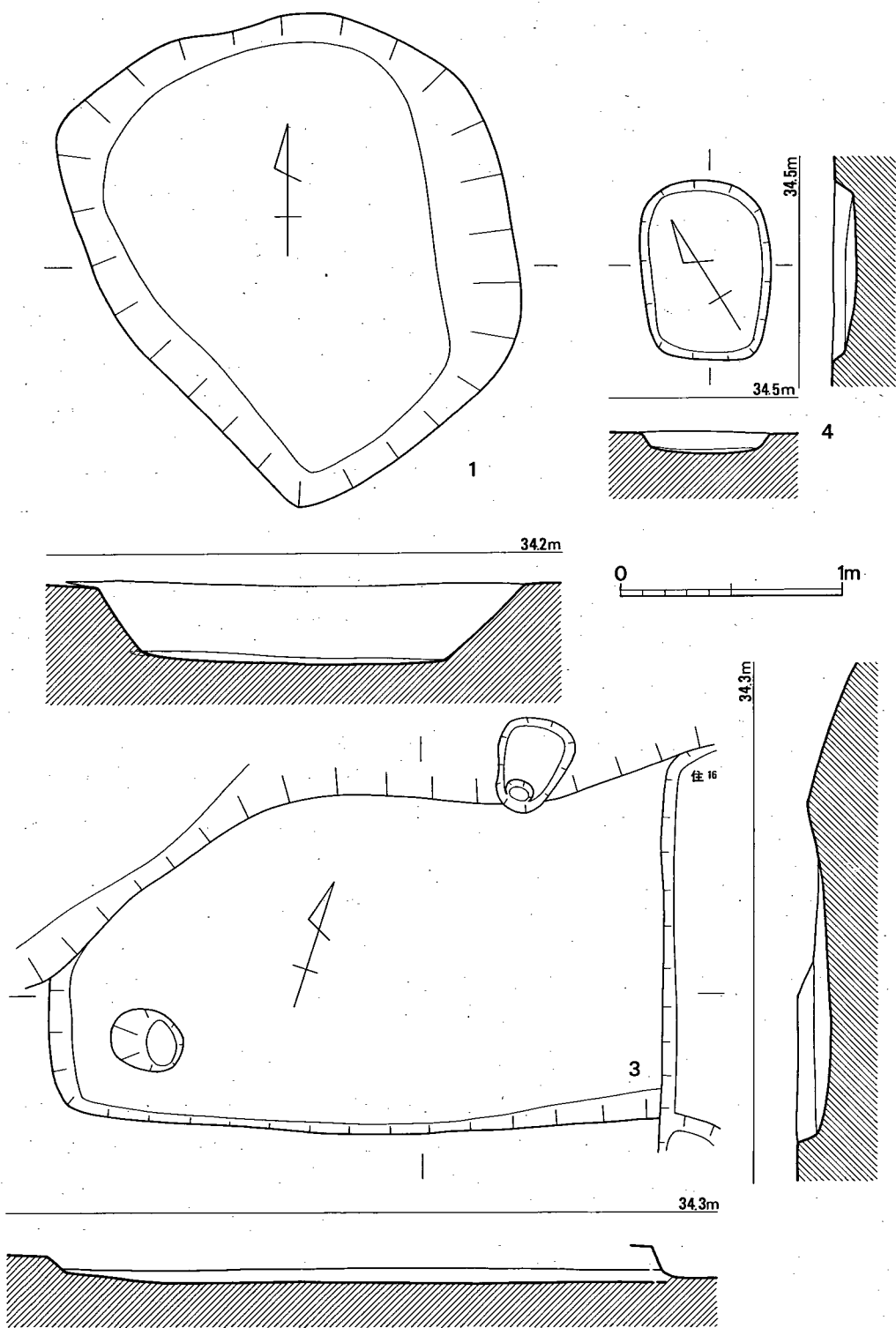
3号土壙は調査区の南部に位置し、16号住居跡に切られる。北側が大きく削平され正確なプランは明確でないが、南側を見るかぎりでは壁は「L」字状に残っており、本来は方形を呈していたと考えられる。残存する長軸2.8m、短軸1.55m、深さ13cmを測る。遺物は少なくいずれも小破片だが、土師器のほか須恵器も数点見られる。図示できたのは第213図1の1点だけである。

土師器 (第213図1) 甕の口縁部で、器面調整はナデ。

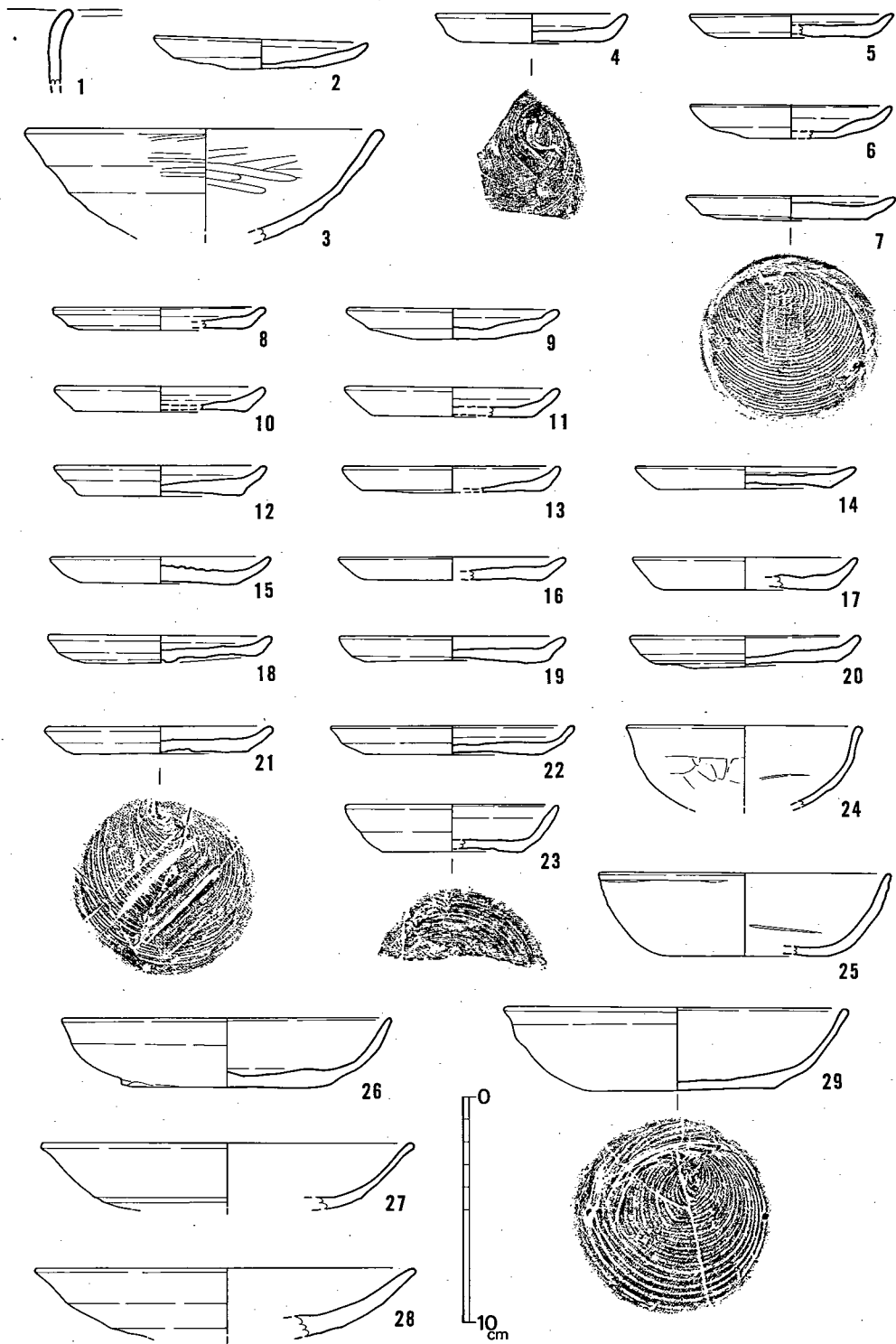
4号土壙 (第212図)

4号土壙は調査区の南西部で、19号住居跡の南東7m、20号住居跡の南西10mに位置する。上面プランは83×58cm、底面プランは74×50cmの緩やかな隅丸方形で、深さは11cmを測る小さな土壙である。埋土は灰青色粘質土で、小礫を少量含む。中世の土師皿と埴が出土。

土師器 (第213図2・3) 口径9.6cm、器高1.2cmの土師皿2の底部外面には、回転糸切りの跡が残る。埴3は摩滅が著しいが、口縁部の内外面にはミガキが窺える。



第 212 图 1 · 3 · 4 号土坑实测图 (1/30)



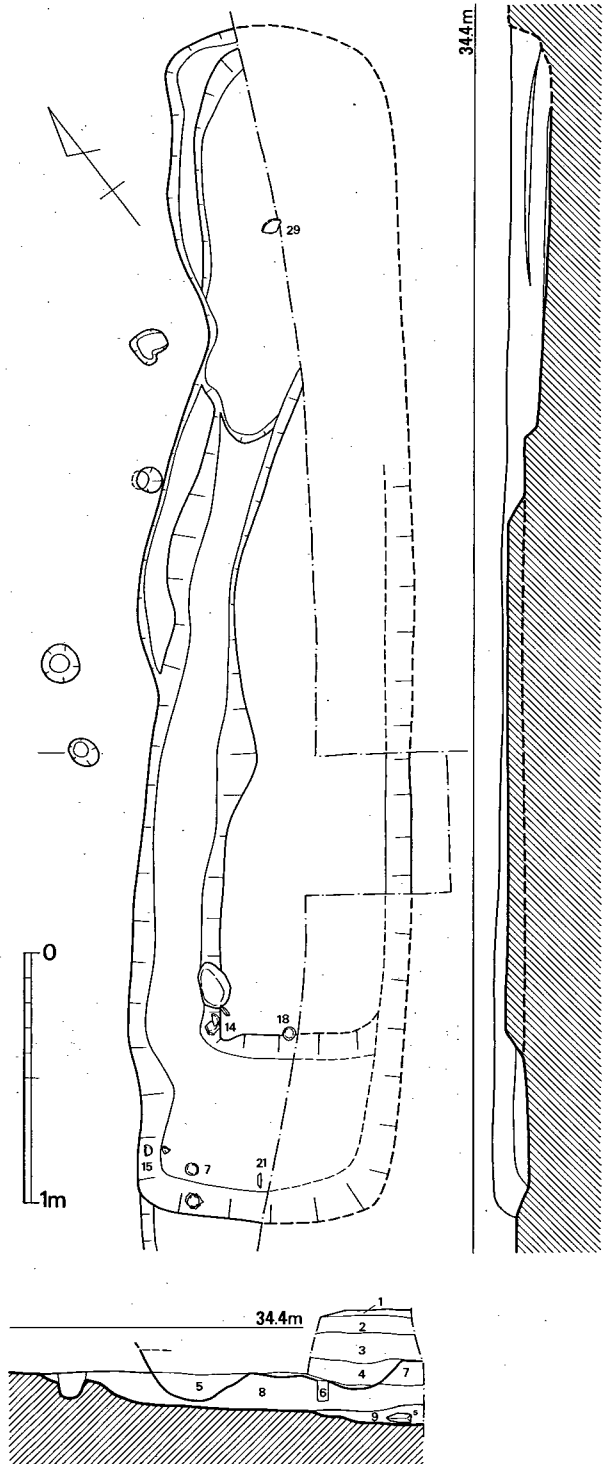
第 213 图 3~5号土坑出土土器实测图 (1/3)

5号土壙 (図版99, 第214図)

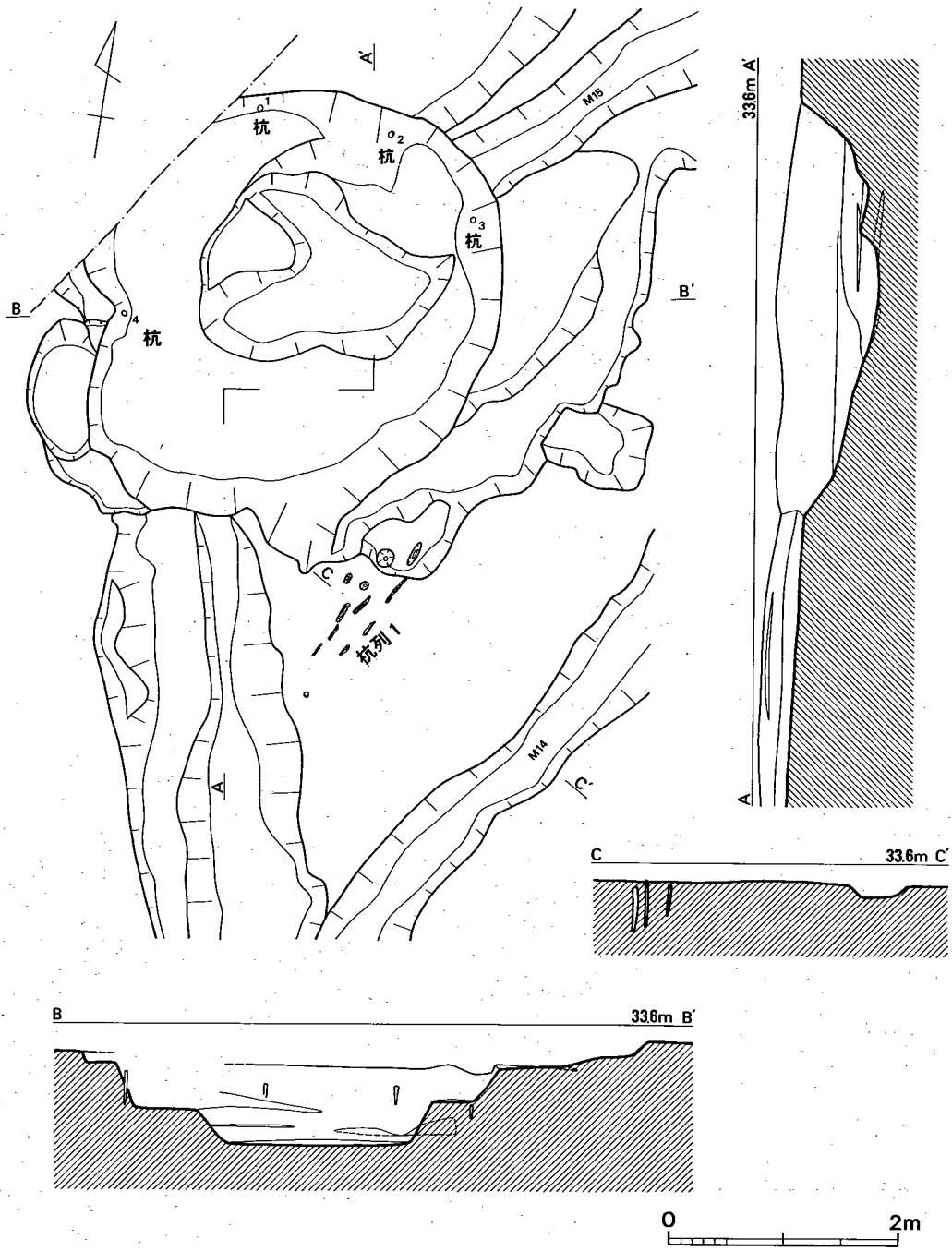
5号土壙は調査区の中央部に位置し、35号住居跡の南2mにある。遺構の大半が調査区外にあるためその全容がなかなか把握できず、当初いくつかの遺構が切り合っているものと考えた。そこで「5号土壙」「8号土壙」「10号土壙」「13号溝」の4つの遺構に分けて遺物を取り上げたが、最終的には細長い1つの遺構であることが確認でき「5号土壙」として纏め、他の遺構番号は欠番とした。

5号土壙の平面プランは9.5×2.1mの細長い長方形を呈し、最も深い部分で40cmを測る。土壙の西側には幅70cm、深さ20cmの溝状の落ち込みがあり土師皿の多くはここから出土した。第214図の土層名は、(1)黒褐色の水田土、(2)小礫を多く含む暗黄褐色の床土、(3)小礫を少量含む茶褐色粘質土で床土、(4)黒褐色粘質土、(5)灰色の粘土をブロック状に含む黒灰色粘質土で多くの土師皿が出土、(6)黒褐色土で杭の跡、(7)黒褐色土、(8)褐色砂質土、(9)褐色粗砂質土である。

土師器 (第213図4~29) 皿4~23の底部外面には、6・9にナデ、10・14に回転ヘラケズリ、それ以外には回転糸切りが窺える。5・7・18~21には回転糸切り後の板状圧痕が窺える。口径は8.7~10.6cm、器高は1.0~1.3cmの範囲に収まるが、23だ



第 214 図 5号土壙実測図 (1/30)

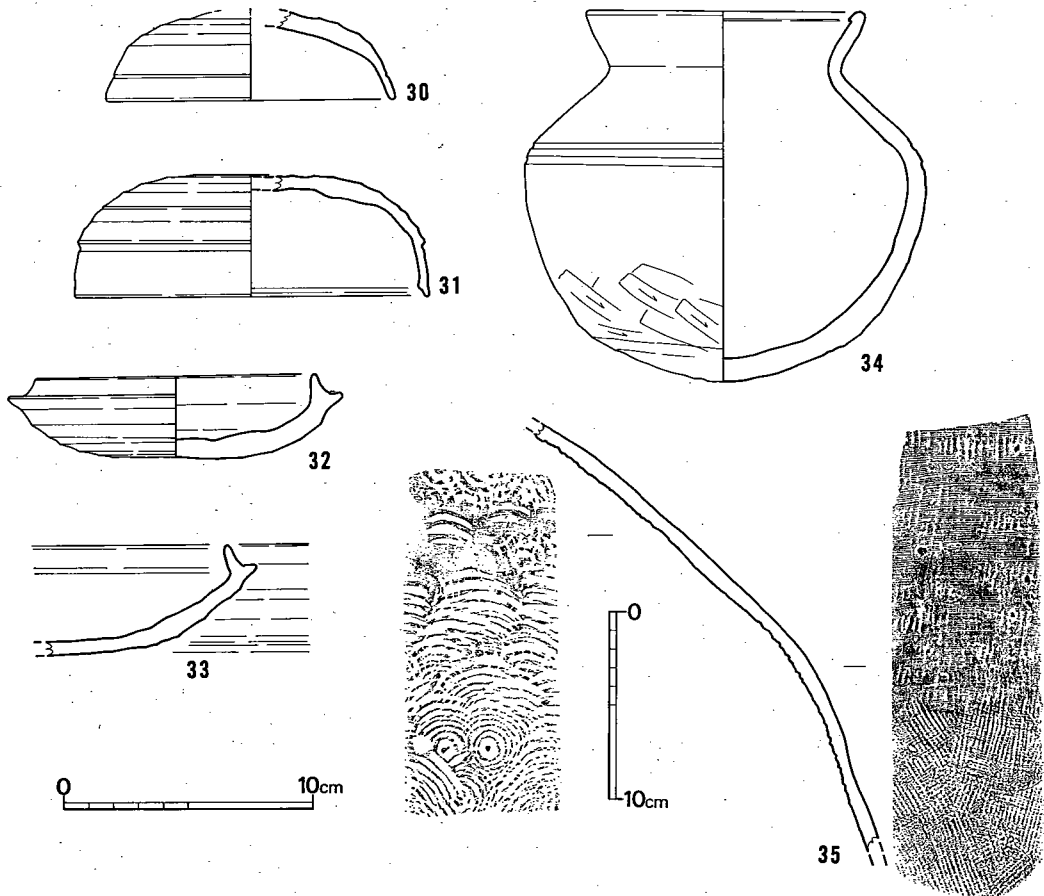


第 215 图 9号土城实测图 (1/60)

けは器高2.1cmと深い。埴24~29の器面調整は基本的にはナデだが、24の外面下半部にはケズリの痕跡が窺え、29の底部外面には回転糸切りを有する。

9号土壙 (図版99, 第215図)

9号土壙は谷地区1区と2区の境に位置する土壙で、流入口から続く奈良時代の溝には切られるが、谷地区内を流れる古墳時代の15号溝は切る。北西隅は調査区外にありその全容は窺い知れないが、平面プランはおよそ4.5×3.5m程度の不整形円形と考えられる。土壙の南側には上面から深さ50cmの所に大きなテラスを作る。そして北側にはそのテラスからさらに20cmほど下がる落ち込みがあり、土壙の断面形態は2段の階段状を呈する。壁の傾斜は比較的きついが、その壁の北側半分の中位付近にはほぼ1mの間隔で、第217図2のような杭が打ち込まれている。杭の性格もさることながら、本土壙自体の性格も判然とせず、周辺遺構や遺構の立地に注

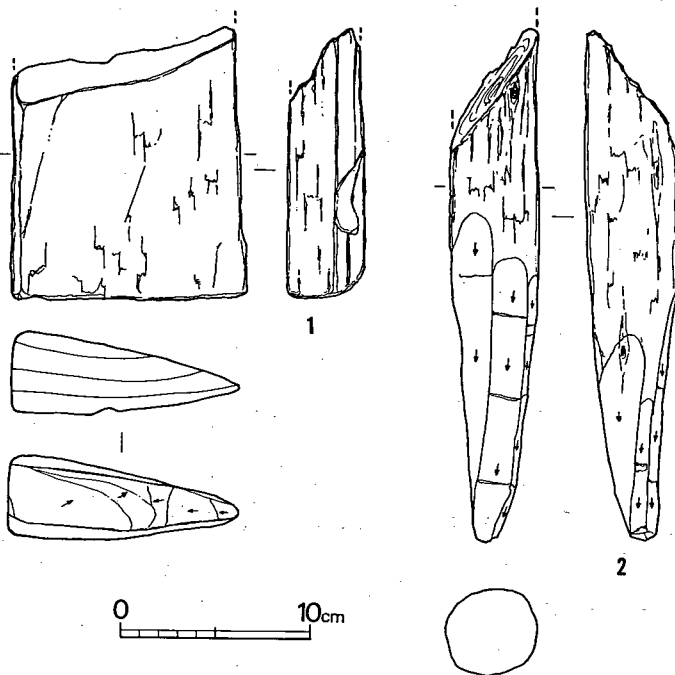


第 216 図 9号土壙出土土器実測図 (1/3, 35は1/4)

意が払われる。遺物は土師器や須恵器の他に、第217図1のような加工材もあるが、土師器については図示できるものがなかった。

須恵器 (第216図30～35)

坏蓋30・31の天井部外面および坏身32・33の底部外面には、いずれも器面調整として回転ヘラケズリが施される。31は口径14.3cm, 器高4.6cm, 32は口径11.1cm, 器高3.4cmを測る。坏身の口縁部の立ち上がりは低い。2条の沈線文が施された壺34はほぼ完形に近く、口径11.1cm, 器高15.0cmを測る。器面調整は全体的にナデだが、底部外面に関しては回転ヘラケズリの後に静止ヘラケズリを施す。35は甕の胴部破片で、



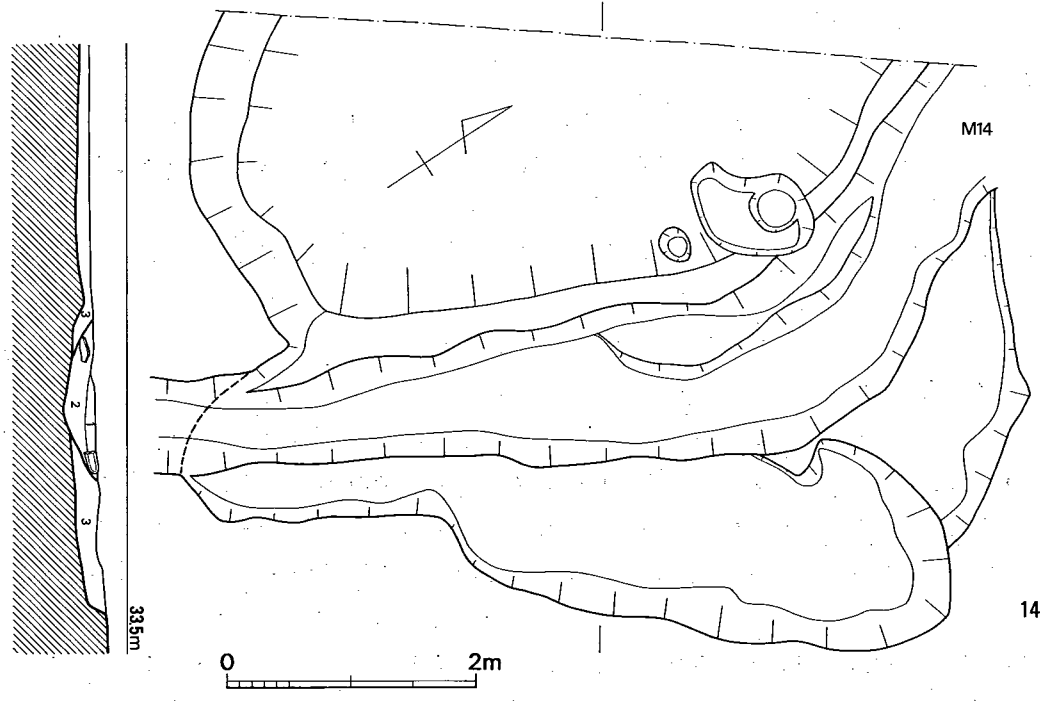
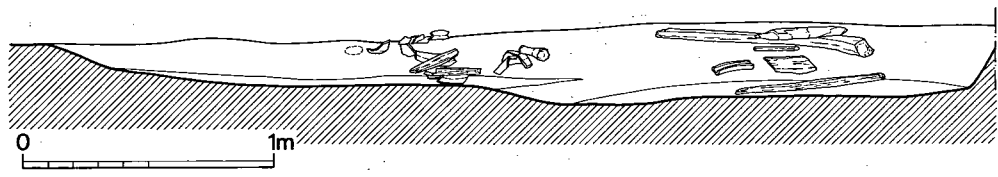
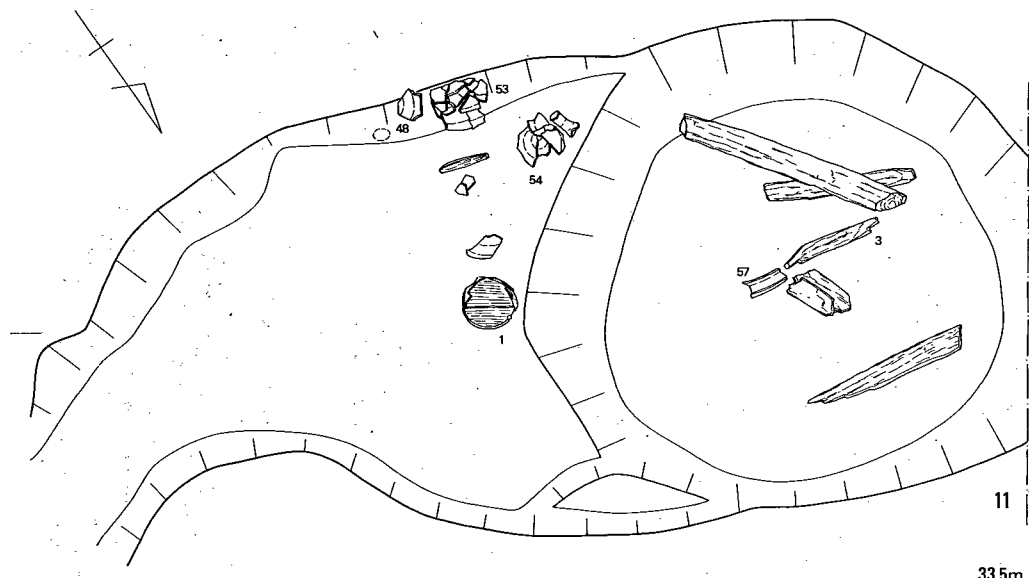
第 217 図 9号土壙出土木器実測図 (1/4)

外面上半には平行タタキの後にカキ目, 下半には格子目のタタキが, 内面には青海波のタタキが施される。

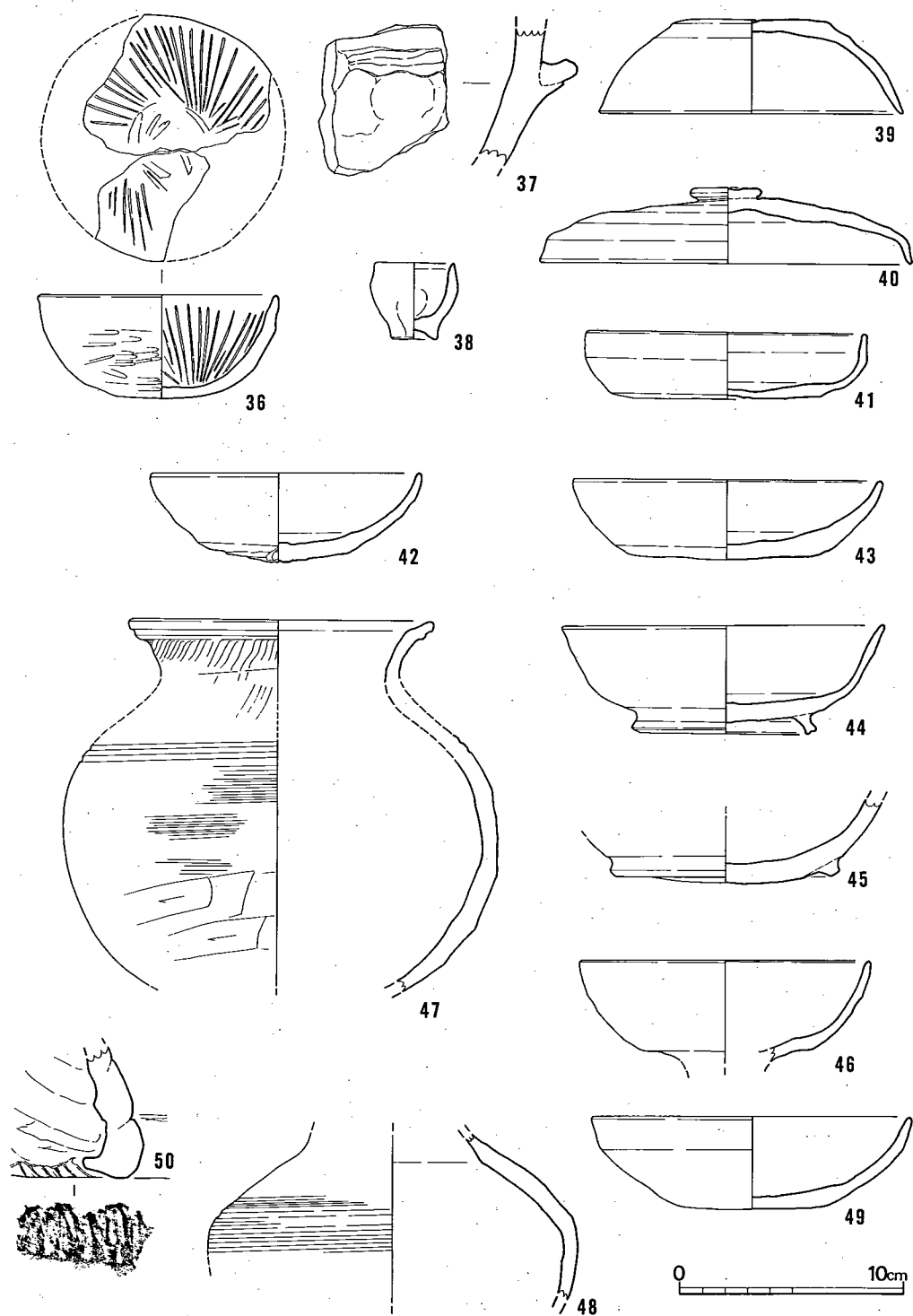
木 器 (第217図1・2) 1は11・12号土壙で出土しているのと同じ形態の加工材の一部である。2は長さ27cmの杭で, 原木の一端を尖らしているだけである。

11号土壙 (図版100・101, 第218図)

11号土壙は谷地区14区とその拡張区に広がり, 全長約6mにも及ぶメガネ状の平面プランを呈する土壙である。調査の都合上, その東側半分は個別に実測することができず, 第218図に掲げた実測図はその西側半分のみである。この西側半分の平面プランは長軸3.8m以上, 短軸1.95mの楕円形であるが, 内部は2段になっており, その低い部分は径1.8～2.0mで, 深さ30cmの緩やかな円形土壙状になる。ここからは第222図3・4をはじめとする断面三角形の加工材や第220図57の須恵器の甕等, 多くの遺物が出土した。高い方の部分は平坦で, 土壙の上面から20cmほど下がったところにある。ここの遺物は第221図1・2のように曲げ物や小さな加工材といっ



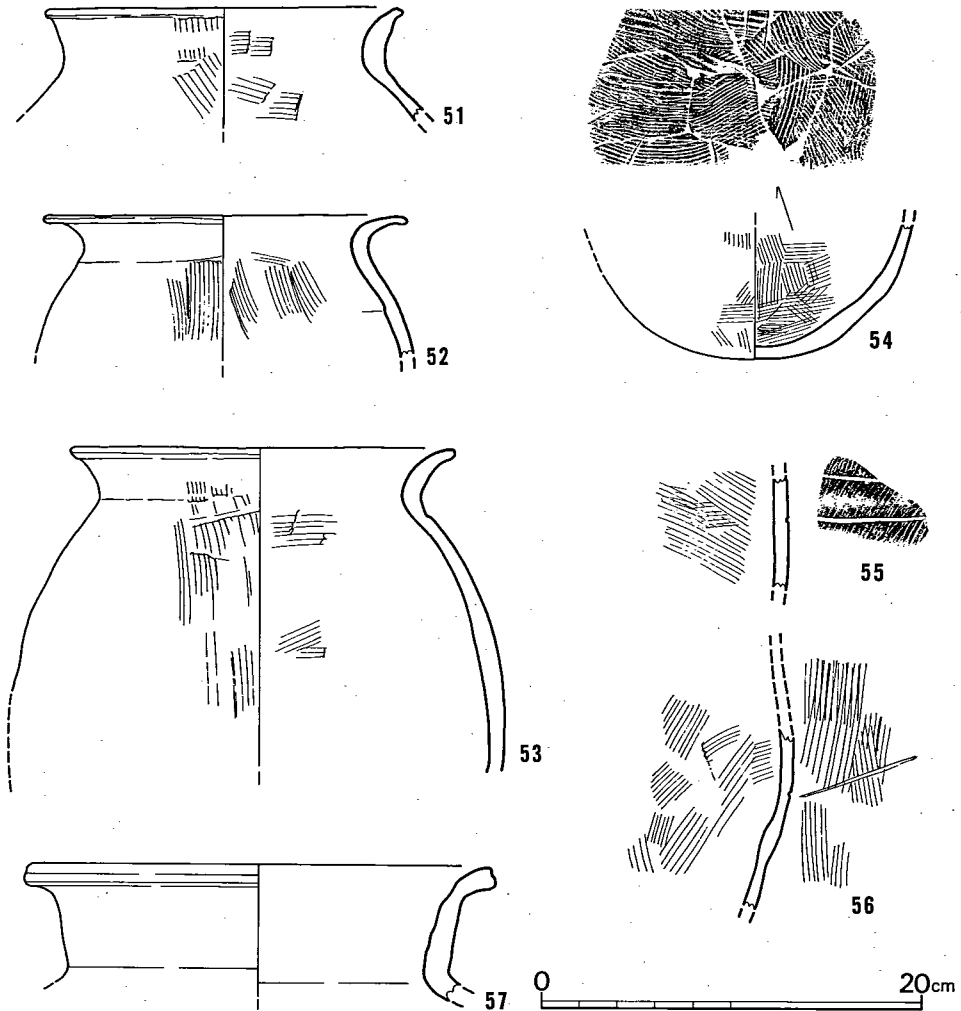
第 218 图 11·14号土坑实测图 (1/30, 1/60)



第 219 图 11号土坑出土土器实测图 1 (1/3)

た木器も多少含まれるが、その多くは第219・220図38・49・53～55のような土器である。本土壙の東側半分はやはり径約2m、深さ約30cm程度の緩やかな円形土壙で、第222図5といった断面三角形の加工材や第219・220図40・41・43・44・48の土器が出土しており、西側半分とほぼ同一の特徴を示す。断面三角形で細長い加工材は近接する12号土壙からも出土しており、いずれも同様の性格を有していると考えられる。なお、本土壙からは瓦質土器(49)や埴輪(50)も出土している。

土師器(第219・220図36～38・51～56) 坏36の器面調整は内外面ともミガキだが、内面には暗文が放射状に描かれる。口径10.7cm、器高4.5cm。37は甌の把手で、調整はナデ。38はミニチュアというよりも手捏ね土器に近い。口径・器高とも3.5cmで、多くの指頭圧痕が残る。51～56は



第220図 11号土壙出土土器実測図2(1/4)

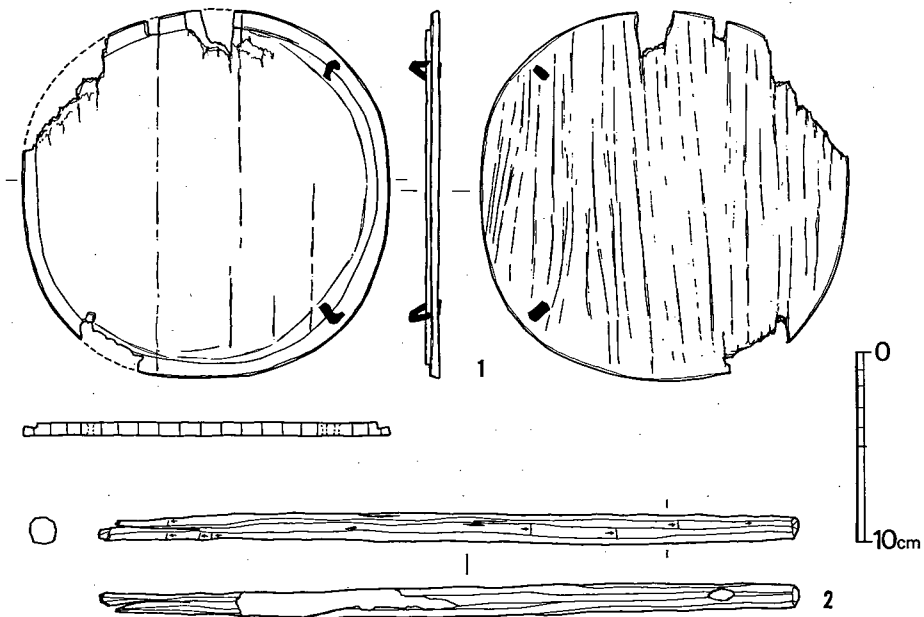
甕で、器面調整としてすべての内外面にハケが施される。口径が復原できるものについては、51が19.0cm、52が19.4cm、53が20.8cmを測り、いずれも大きい。55の外面には、ヘラ記号としての沈線文が2条見える。

須恵器（第219・220図39～49・57） 39・40は坏蓋で、39にはナデが、40の天井部外面には回転ヘラケズリが施される。40は完形品で、口径16.7cm、器高3.4cm。坏身41～45のうち、44と45には高台が付く。41の底部外面には回転ヘラケズリが施されるが、他の坏身についてはすべてナデの器面調整である。46は高坏の坏部で調整はナデ、口径は12.8cmを測る。壺47は生焼けて淡黄褐色を呈する。外面の口縁部から頸部にかけてはハケのような痕跡が窺える。器面調整は胴部がカキ目、底部が回転ヘラケズリで、肩部には2条の沈線文が施される。内面はナデである。壺48の外面にもカキ目が施される。57は甕で、調整はナデ、口径は25.1cmを測る。

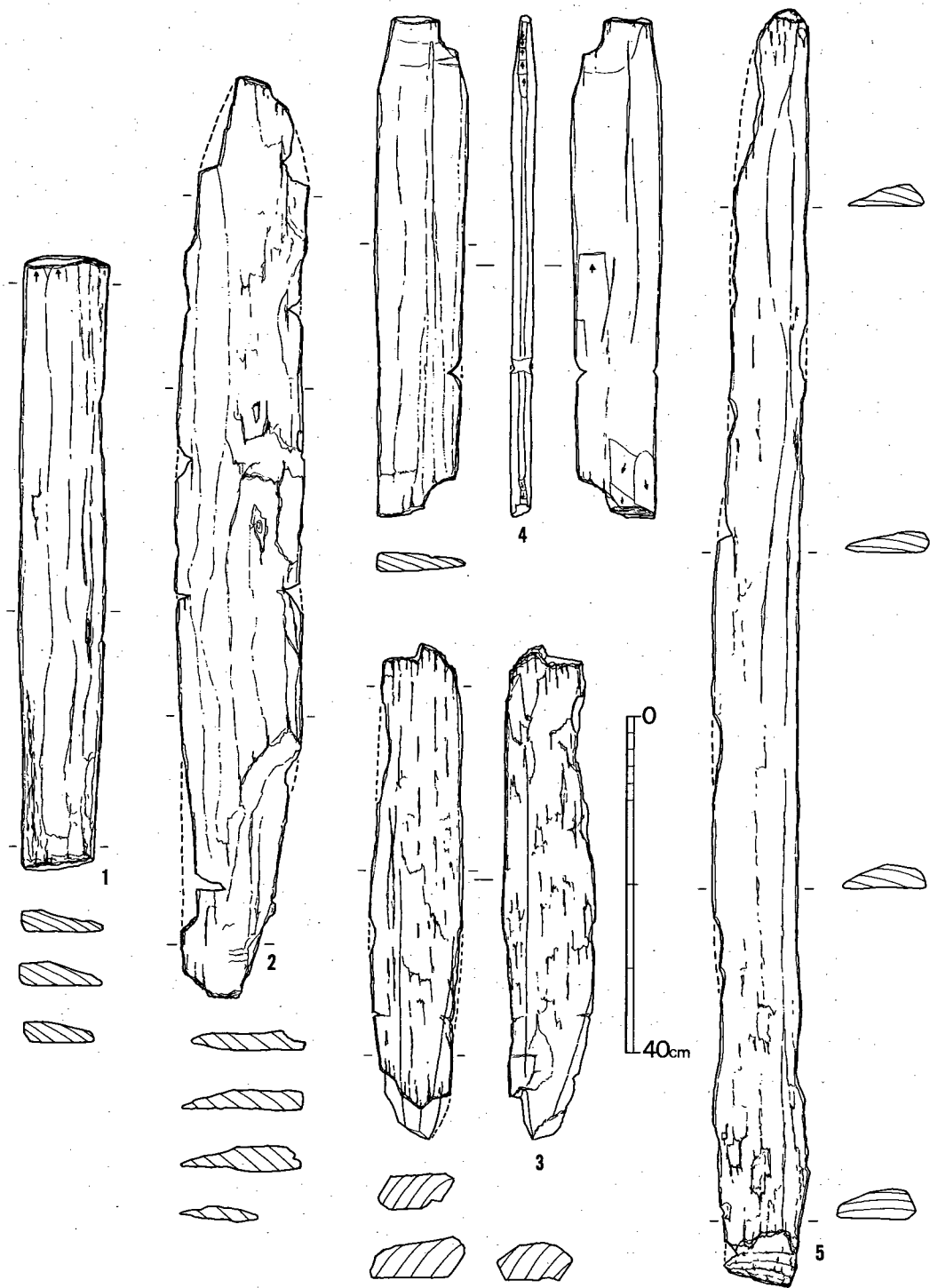
瓦質土器（第219図49） 坏身49の器面調整はナデで、口径14.2cm、器高4.2cmを測る。内面は淡灰色だが、外面はいぶされて黒色を呈する。

埴輪（第219図50） 50は円筒埴輪の底部で、端面には工具痕が残る。器面調整はナデで、内面には器面を掻き取るような粗い指頭圧痕（ナデ）が窺える。

木器（第221図1・2、第222図3～5） 1は径19.5cm、厚さ8mmの曲げ物の底で、2箇所桜樹皮の紐が残るが、もともとは四隅に付けられていたと考えられる。周縁には幅9mmの段を作り、ここに側板を付け桜紐で繋ぎ固定したのであろう。出土時点ではその側板もわずかに残っ



第 221 図 11号土壙出土木器実測図 (1/4)



第 222 图 11·12号土坑出土木器实测图 (1/8)

ていたが、その後失われている。材質はヒノキ。2は全面に加工を施した長さ37cm、径1.3cmの細い棒で、一端は欠損する。3は長さ58cm、幅11cm、厚さ4cmの加工材で、一端を尖らす。断面形態は四角で分厚く、他の大型加工材とは形態が異なる。4は長さ59cm、幅10.5cm、厚さ2.5cmの断面三角形の加工材である。5は最も長く、長さ152cm、幅10.0cm、厚さ3.8cmで断面形態はやはり三角形の加工材である。断面三角形の長い大型加工材は12号土壙でも出土しているが、これらは水中保存された木器原材と考えられる。

12号土壙 (図版102)

12号土壙は調査区西端の谷地区14区の南西隅で検出され、11号土壙と13号土壙の間に位置する。3.2×3.0mの円形で、深さ15cmと浅く、黒褐色の粘質土を埋土とする。土師器や須恵器の他に木器が3点出土するが、これらはいずれもある程度の厚みをもって細長く加工されたものであり、谷内の土壙という立地条件を含めて考えると、製品の原材を水中保存していたものと推定される。なお調査の都合上、本遺構に関する個別の実測図は特になし。

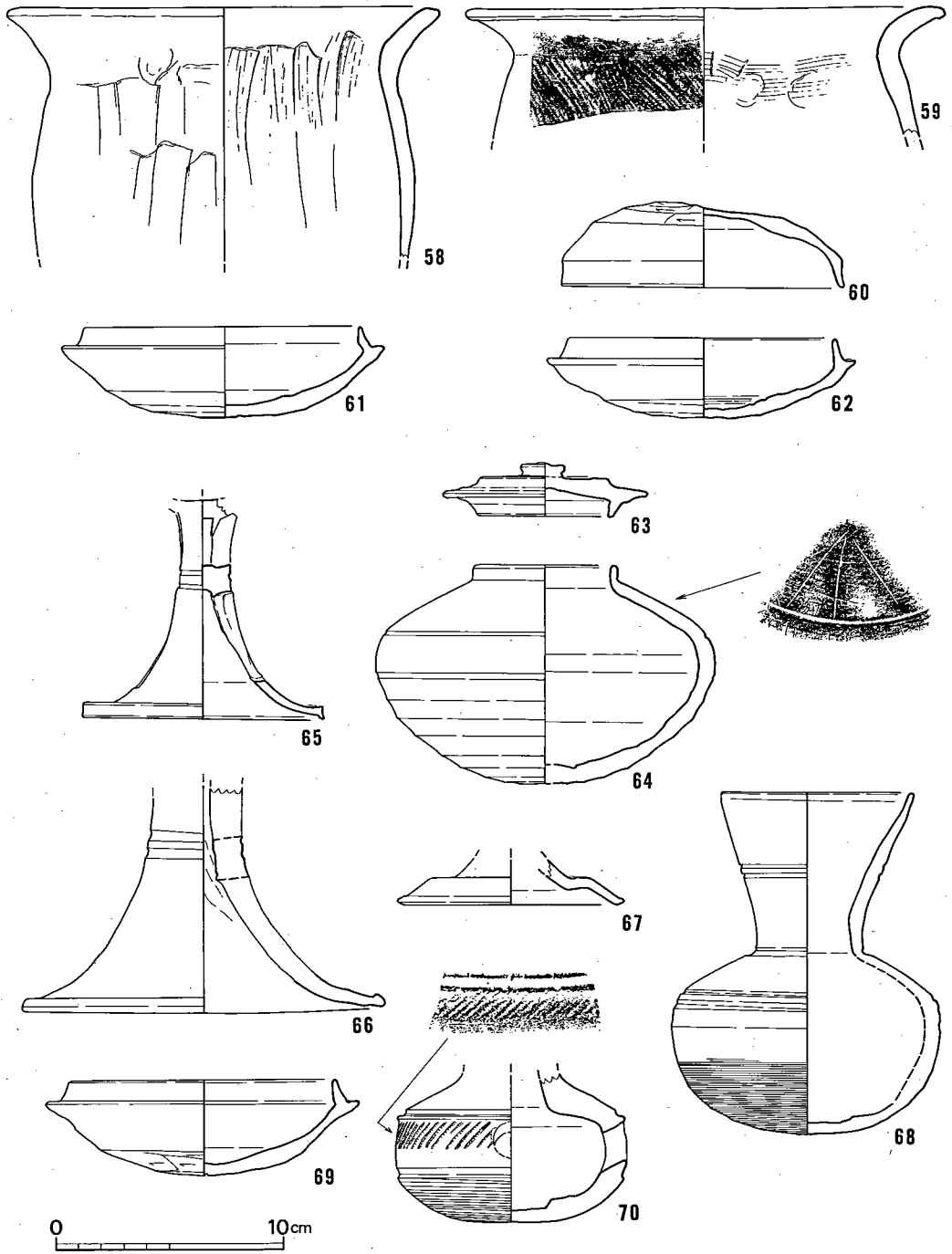
土師器 (第223図58~68) 甕58・59の器面調整は内外面ともナデだが、58は土器がかなり乾いた段階に施されたもので、削ったような痕跡(擦過)が残る。坏蓋60の天井部外面には回転ヘラケズリの後に静止ヘラケズリが、坏身61・62の底部外面には回転ヘラケズリが施される。坏の口縁部の立ち上がりは比較的高く、器高もやや深めである。壺蓋63の器面調整はナデで、全体に薄く自然釉がかかる。壺64の胴下半部には回転ヘラケズリが施され、胴上半部にはヘラ記号が見られる。65~67は高坏の脚部である。65・66の調整はナデで、2段の透孔と2条の沈線文が施される。67の文様は、櫛描きの刺突文である。68の底部付近にはカキ目が、頸部中央と胴上半部には2条の沈線文が施される。底部の内面には、ヘラ状の工具で粘土を掻き取ったような痕跡がある。

木器 (第222図1・2) 1は長さ182×幅26×厚さ7cm、2は273×36×8cmといずれも細長く、断面形は2辺の長い偏平な三角形を呈する。

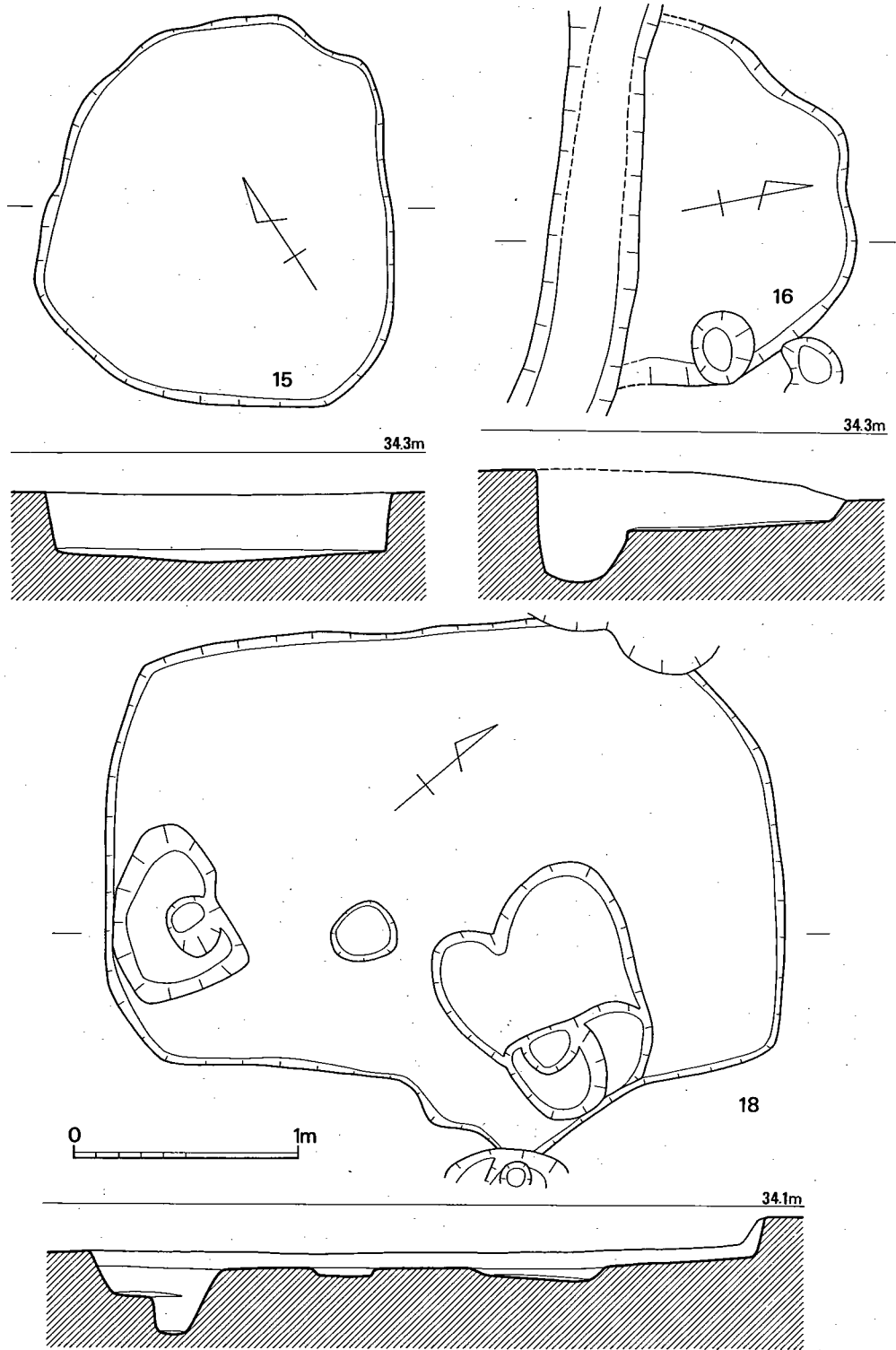
13号土壙 (図版102)

13号土壙は調査区西端の谷地区13区北西隅で検出され、12号土壙の南側に近接する。3.5×2.4mの不整楕円形で、深さは25cmと浅い。12号土壙と同じような黒褐色粘質土を埋土とするが、遺物は少なく図示できるものは2点だけで、木器は出土していない。

須恵器 (第223図69・70) 坏身69はいわゆる赤焼き土器で、底部外面には回転ヘラケズリの後に静止ヘラケズリが施される。70の底部内面の中央には青海波状の当て具圧痕(タタキ)が見られ、底部外面の器面調整はカキ目である。胴部の2箇所(屈曲部)には、それぞれ1条の沈線文が施される。



第 223 图 12·13号土壙出土土器实测图 (1/3)



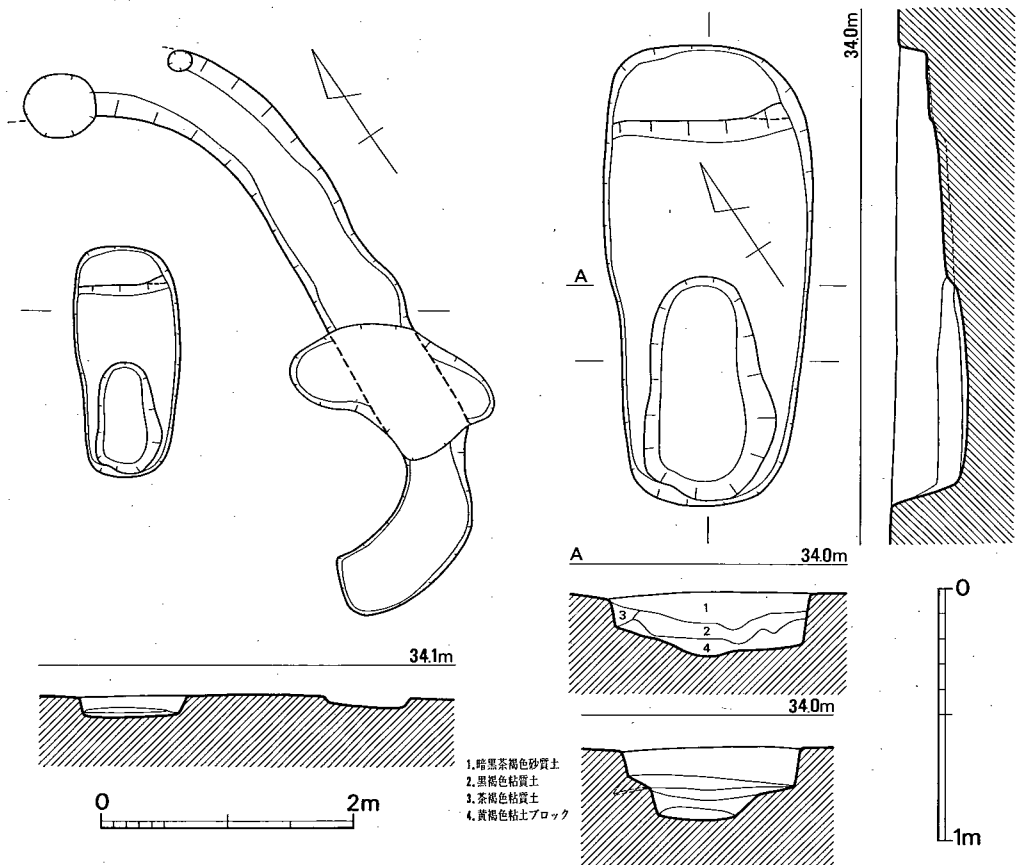
第 224 图 15·16·18号土坑实测图 (1/30)

14号土壙 (第218図)

14号土壙は谷地区の15区南東隅にある土壙で、奈良時代の14号溝に切られる。土壙というよりも、むしろ谷に付随する落ち込み状遺構といったほうが適切かもしれない。南北6.4m、東西2.6m程度の不整楕円形で深さは20cmほどあり、西側の壁はなく、谷の中へ落ちていく。谷との間に切り合い関係はなく、埋土は同じ黒褐色粘質土である。遺物は少なく小破片ばかりだが、土師器の他に須恵器も窺える。

15号土壙 (図版103, 第224図)

15号土壙は調査区中央部やや西寄りで、38号住居跡の北1m、16号土壙の南1.5mに位置する。上面プランは1.75×1.55m、底面プランは1.65×1.50mの不整円形で、深さ30cmを測る。埋土は淡黒褐色土で、遺物は出土していない。



第 225 図 17号土壙実測図 (1/60, 1/30)

16号土壙 (図版103, 第224図)

16号土壙は調査区中央やや西寄りで、15号土壙の北1.5mに位置し、その南側1/3を古墳時代後期の16号溝に切られる。上面プランは1.61×0.98~1.37mの不整形円形を呈していたようで、深さは25cmが最高で壁際は10cmを測る。

17号土壙 (図版104, 第225図)

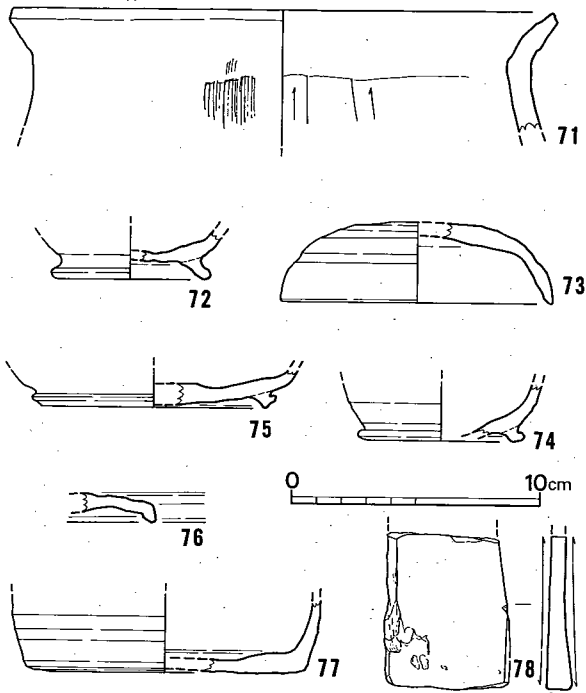
17号土壙は調査区北西部の住居群の中でもやや南寄りにあり、46号住居跡と49号住居跡の中間に位置する。上面プランは181×85cmの隅丸長方形だが、底面には北隅に126×55cmのテラス、南側に91×46×12cmの浅い落ち込みがあり必ずしも平坦でない。中央付近の深さは22cmで、遺物の出土はなかった。また、本土壙の北から南東の方向へ1~1.5m離れた場所には、幅60cm、深さ25cmの浅い溝が巡るが、遺物は出土していない。遺構の検出当初、土壙の隅丸長方形という平面プランと1/3程度ではあるがそれを巡る溝の存在から、周溝墓の可能性を想定して調査を進めたが、それを決定付ける遺構の性格や遺物の出土は見られなかった。

18号土壙 (第224図)

18号土壙は調査区北西部の住居群の西方に位置し、42号住居跡の南西6mに位置する。平面プランは南東部が若干突出するが、3.0×1.95mの隅丸長方形である。深さは20cm程度で、底面の南西部からは径78×57cm、深さ28cmの柱穴が検出され第226図72の須恵器が出土した。

土師器 (第226図71) 71は甕の口縁部で、外面にはハケが、内面にはケズリが施される。

須恵器 (第226図72) 72は埴の底部で、調整は内外面ともナデ。

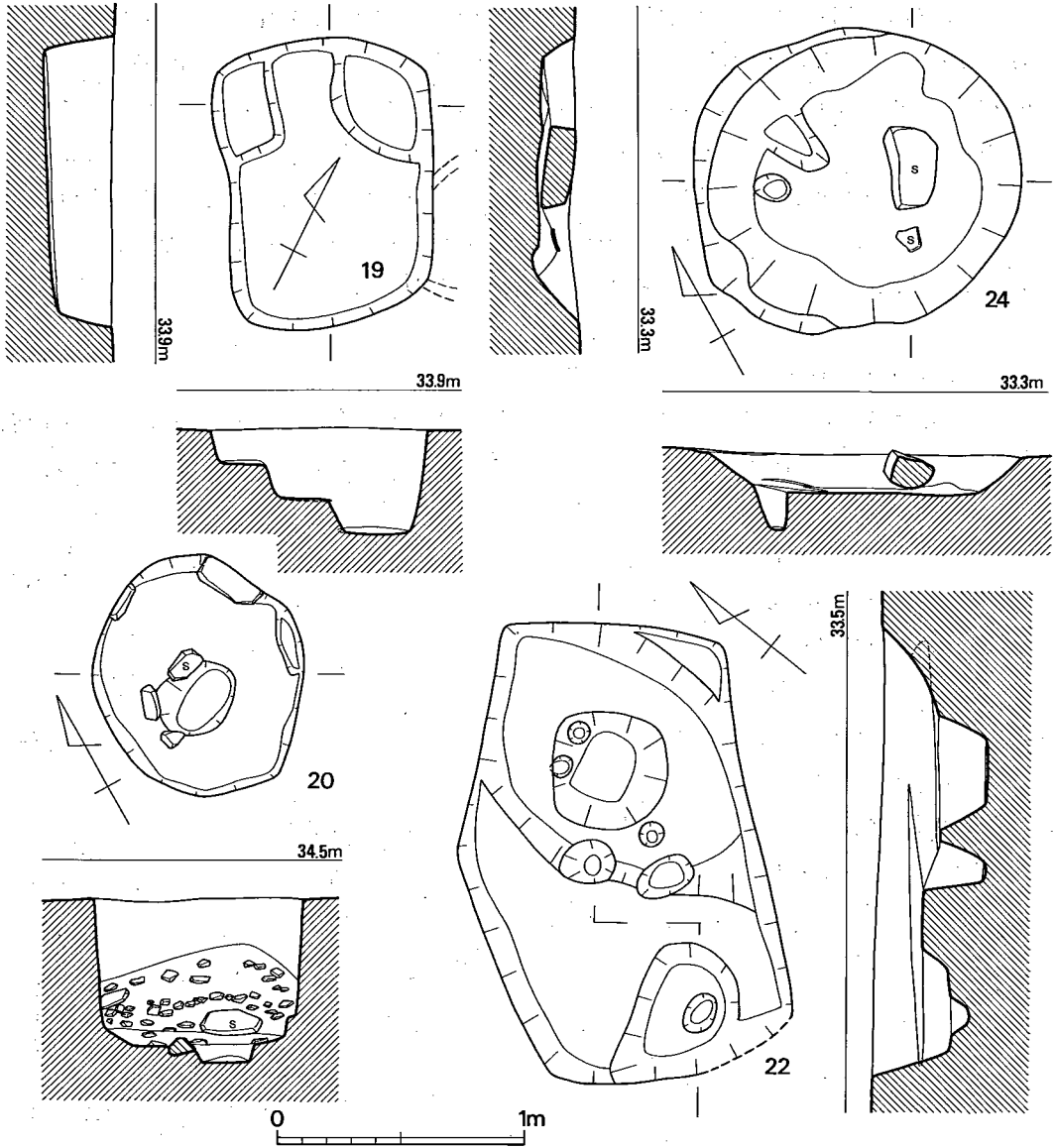


第 226 図 18・19・21・22号土壙出土土器・石器実測図 (1/3)

19号土壙 (図版9, 第227図)

19号土壙は調査区北西部の住居群中のやや北寄りに位置し、49・50号住居跡の北東1mにある。上面は1.15×0.8mの隅丸長方形を呈し深さ28cmを測るが、北西隅には32×20cmのテラスがあり、北隅には34×22cmの落ちがあり、北西壁付近の断面形は階段状になる。

須恵器 (第226図73・74) 坏蓋73の天井部外面には、回転ヘラケズリが施される。74は壙の底



第 227 図 19・20・22・24号土壙実測図 (1/30)

部で、器面調整は内外面ともナデである。

20号土壙 (図版104, 第227図)

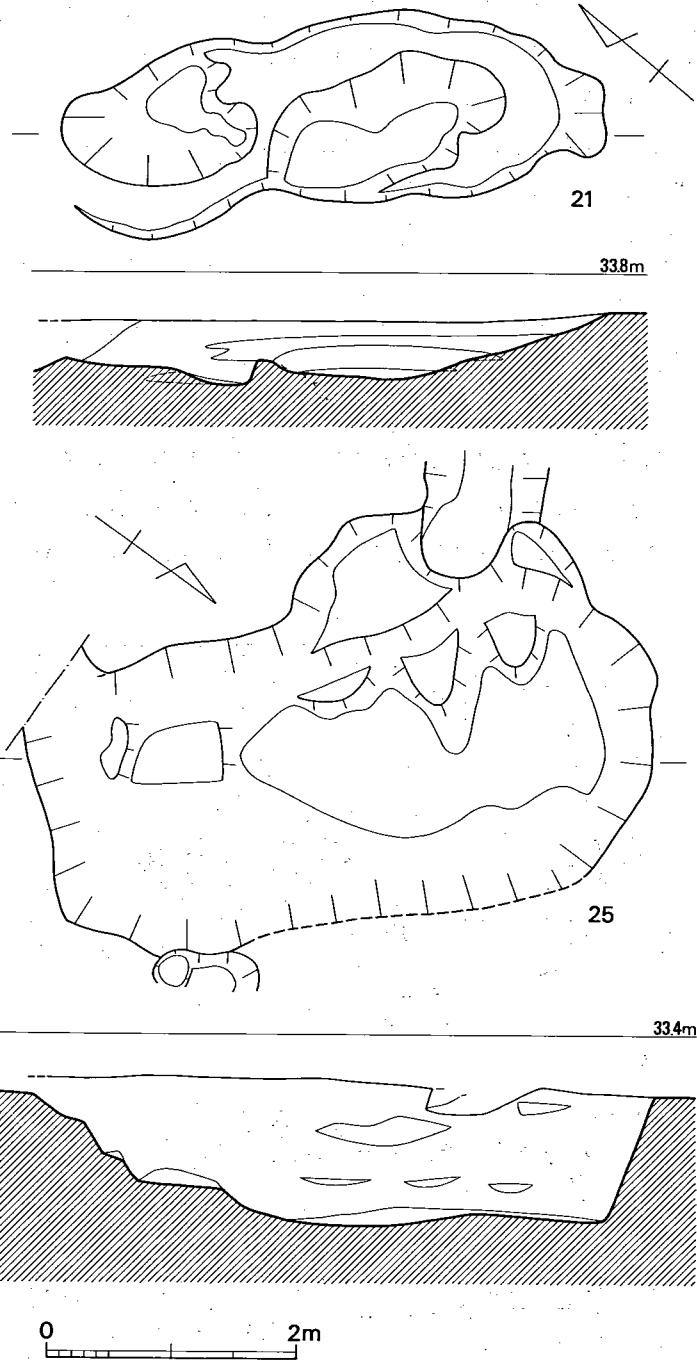
20号土壙は調査区北西部の住居群中の東端で、49・50号住居跡の南東6mに位置する。上面プランは98×87cmの円形を呈し、深さ60cmを測る。底面中央には30×25×8cmの浅い柱穴が掘られる。埋土は小礫を多く含んだしまりのないバサバサした黒色土で、遺物は出土していない。本土壙は砂礫層を抜いており、井戸である可能性が高い。

21号土壙 (第228図)

21号土壙は調査区北西部の谷地区25区東端に位置し、45号住居跡の南西壁に接する。北西部は大きく削平されるが、平面プランは4.4×1.5mの不整長楕円形の土壙である。底面は平坦でなく、東側には深さ45cm、西側には深さ50cmの落ち込みがある。遺物の出土はなく、本土壙の所属時期や性格は明確でない。

22号土壙 (第227図)

22号土壙は調査区北部の住



第 228 図 21・25号土壙実測図 (1/60)

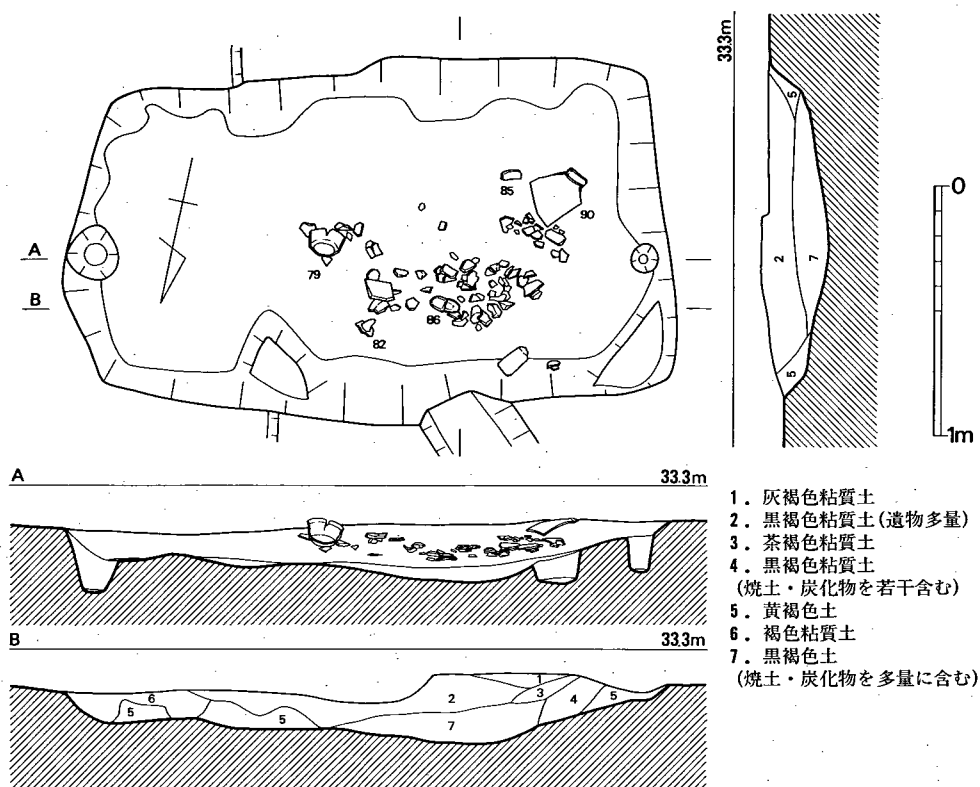
居群中でも北寄りに位置し、58・61号住居跡と59号住居跡との中間にある。上面プランは1.89×1.20mの若干歪んだ長方形で、底面には大小7つの柱穴があり、平坦な部分は南側1/3程度である。本土壙の上部では黄褐色粘土が検出され、当初カマド等の遺構を想定していたが、それに相当する根拠は得られなかった。

須恵器 (第226図77) 77は長頸壺の底部で、外面には回転ヘラケズリが施される。

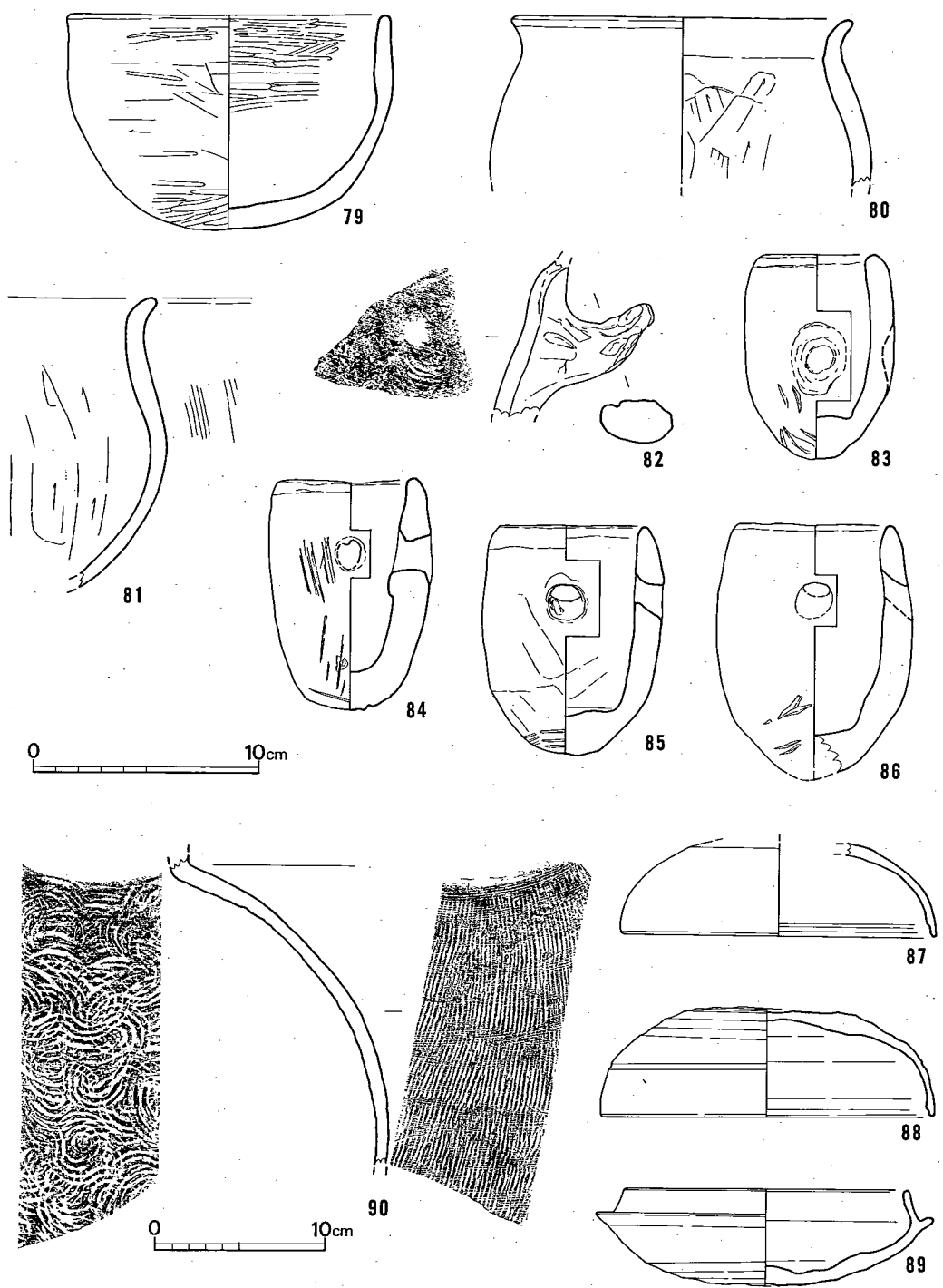
砥石 (第226図78) 頁岩製の砥石で、両面と欠損していない方の先端面にはかなりの研磨痕が残る。

23号土壙 (図版105, 第229図)

23号土壙は調査区の東部中央付近に位置し、68号住居跡を切るが、遺構の中央部には現代の溝が南北方向に走り、上面の東側半分は10cm程度削平される。上面プランは2.45×1.48mの長方形を呈し、壁は緩やかに傾斜して、深さは最高で28cmを測る。東壁と西壁の中央部にはそれぞれ壁に接して対峙するように、東壁には径20cm、深さ16cmの、西壁には径10cm、深さ15cmの柱穴が掘られ、本土壙に上屋状の付設物等が存在した可能性を窺わせる。壁際には遺物をほと



第 229 図 23号土壙実測図 (1/30)



第 230 図 23号土壙出土土器実測図 (1/3, 90は1/4)

んど含まない黒色もしくは褐色の粘質土（土層番号5・6）が巡り、土壙中央部には焼土や炭化物を多量に含んだ黒褐色土（土層番号2・4・7）が広がる。この黒褐色土には遺物も多く含まれるが、その中でも特に目を引くのがタコ壺である。タコ壺は小さく破碎し量的には多いが、全体の形がわかるまでに復元できたのは図示した4個体だけである。

土師器（第230図79～82） 鉢79の底部外面にはミガキが、それ以外の外面にはケズリの後にナデが施される。内面はナデだが、底部付近はあたかも二次的な火熱を受けたかのように器面が剥落している。甕80・81には内面にケズリ、外面にハケが施される。甕82の内面には、青海波のタタキ痕が窺える。タコ壺（83～86）は口径5.3～6.8cm、器高9～11cmで赤褐色を呈する。口縁部はわずかに内傾し、端部は丸く仕上げられる。上半部に1箇所紐通しの穴を持つが、83だけは焼成後に穿孔されるが貫通していない。器面調整は基本的にナデだが、底部の内外面にはいずれも工具の圧痕（タタキ）が残る。

須恵器（第230図87～90） 坏蓋87・88の天井部外面の器面調整は回転ヘラケズリで、器高は比較的深い。坏身89の底部外面は回転ヘラケズリで、口縁部の立ち上がりは比較的高い。90は甕の胴部で、外面には平行タタキの後のカキ目、内面には青海波のタタキが見られる。

24号土壙（図版107，第227図）

24号土壙は調査区の東端部で、28号掘立柱建物跡の北東2mに位置する。上面プランは1.36×1.23m、底面は0.94×0.92mの円形を呈し、壁は緩やかに傾斜して深さ13cmを測る。底面の西端には径10cm、深さ15cmの小さな柱穴が掘られ、中央部やや東寄りには人頭大の礫がある。遺物の出土はなく、所属時期不明。

25号土壙（図版107，第228図）

25号土壙は調査区の北東部で68号住居跡の東8mに位置し、奈良時代の28号溝に切られる土壙である。南東端は現代の水路下にありその全容は窺えないが、平面プランは5.0×2.4mの楕円形を呈する。北西壁を除き他の壁は随所にテラスを作りながら比較的緩やかに傾斜し、1.1mほどで底面に至る。底面自体は平坦でなく若干起伏があり、2.8×1.2mの不整形である。遺物の出土はなく、本土壙の所属時期や性格については不明である。

(4) 落ち込み

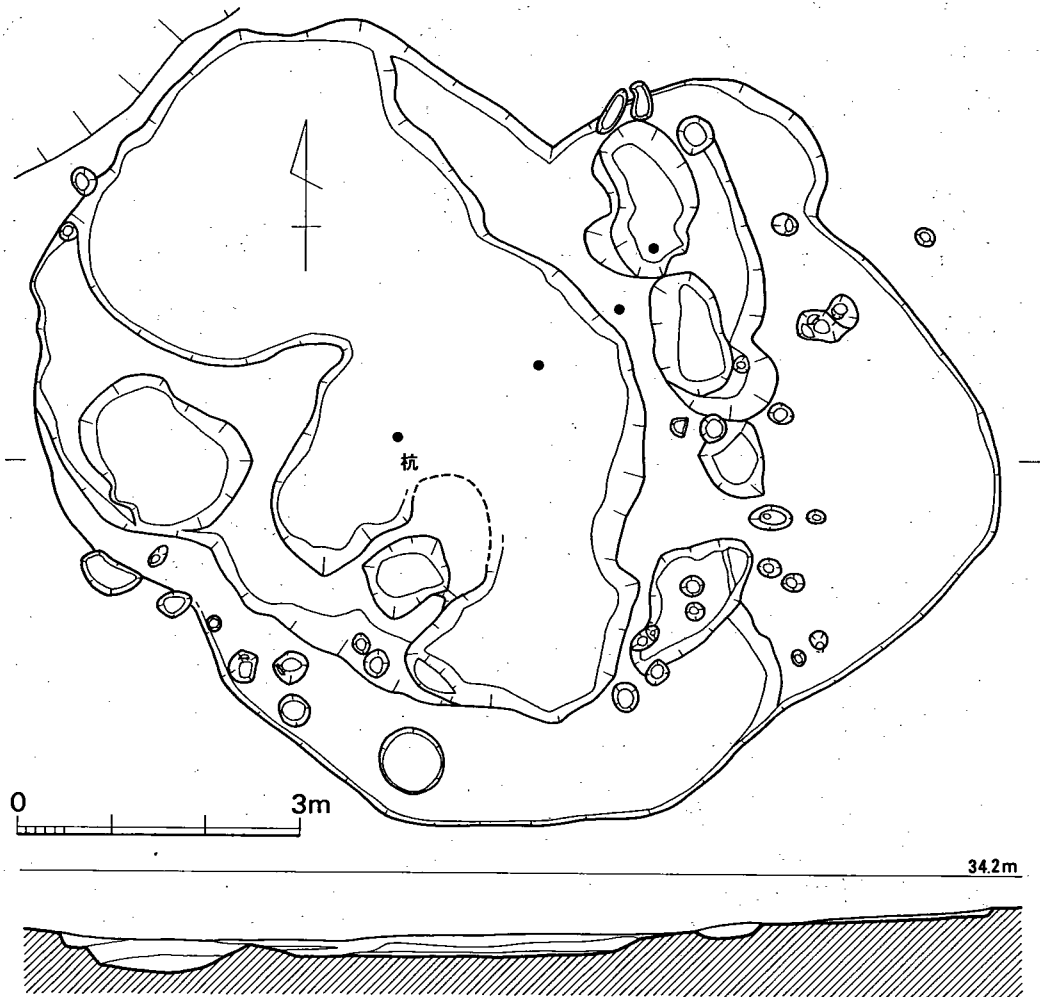
本遺跡では、谷地区に近接もしくは付随した落ち込み状遺構を2基確認した。

1号落ち込み（図版108，第231図）

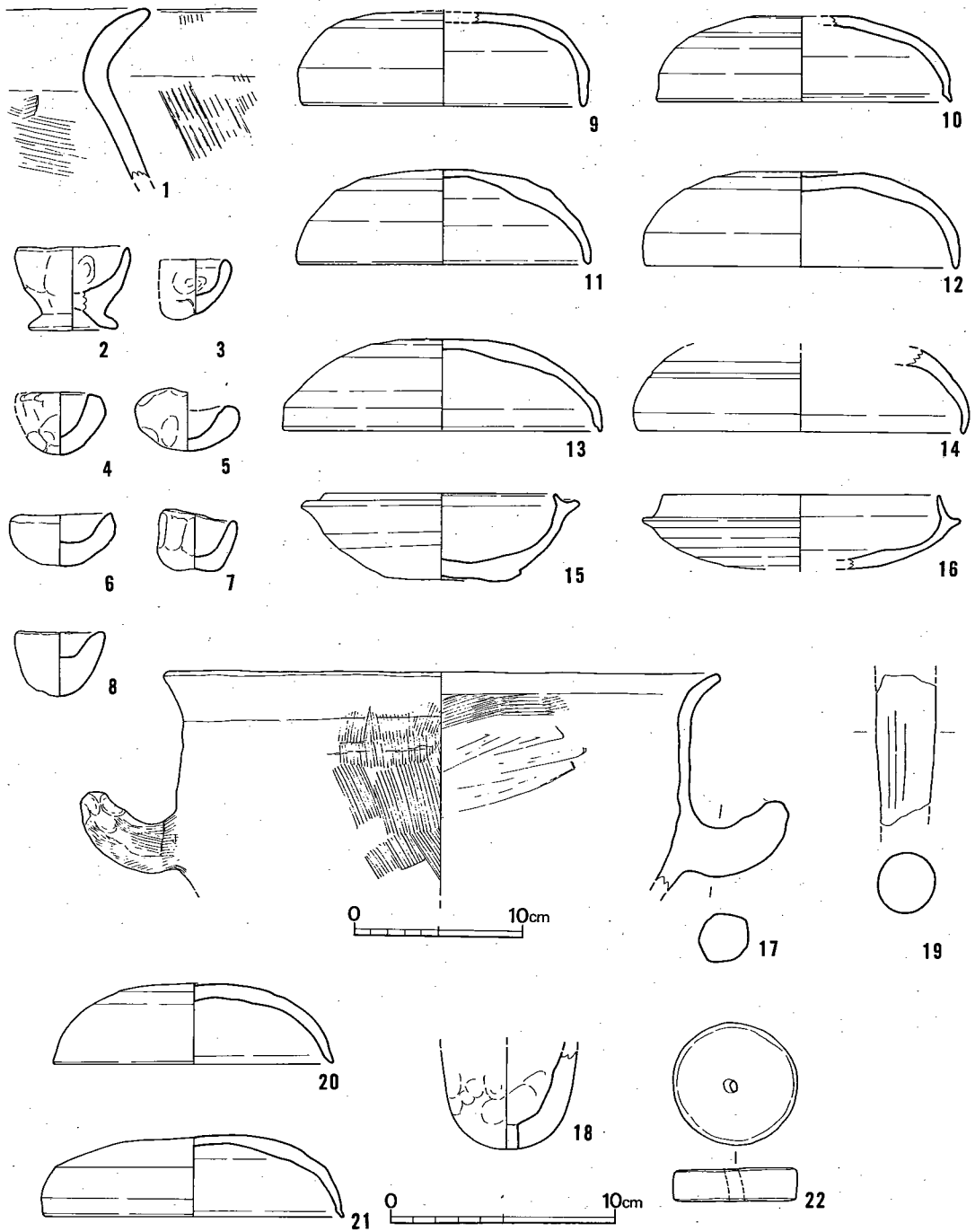
1号落ち込みは調査区南西部の谷地区5・6区に近接し、24号住居跡の西2m、19号住居跡

北西6mの位置にある。北西—南東に9.3m、北東—南西に7.8mの不整形で、柱穴やテラスの他に5~10cmの浅い落ち込みが多く凹凸が著しい。最も深い部分でも50cm程度で、断面形態は緩やかな播り鉢状を呈する。埋土は上位から茶褐色土、灰褐色粘質土、茶灰色粘質土の3層に分れるが、遺物は1つの層に集中することなく均等に包含される。本遺構中央の北東—南西ライン上で長さ20cm、太さ5cm程度の杭を4本検出した。それぞれの間隔は不定、遺構の底面まで届いていない等の状態にあり、本遺構との係わりは明確でない。古墳時代に属する遺構であるが、出土遺物に比較的多くの手捏ね土器が含まれる、という特徴が窺える。

土師器(第232図1~8) 甕1の内外面には、器面調整としてハケが施される。2~8は手捏ね土器で、いずれも多く指頭圧痕が残る。2は口径5.1cm、器高3.9cmで台が付く。3~8の



第231図 1号落ち込み実測図(1/80)



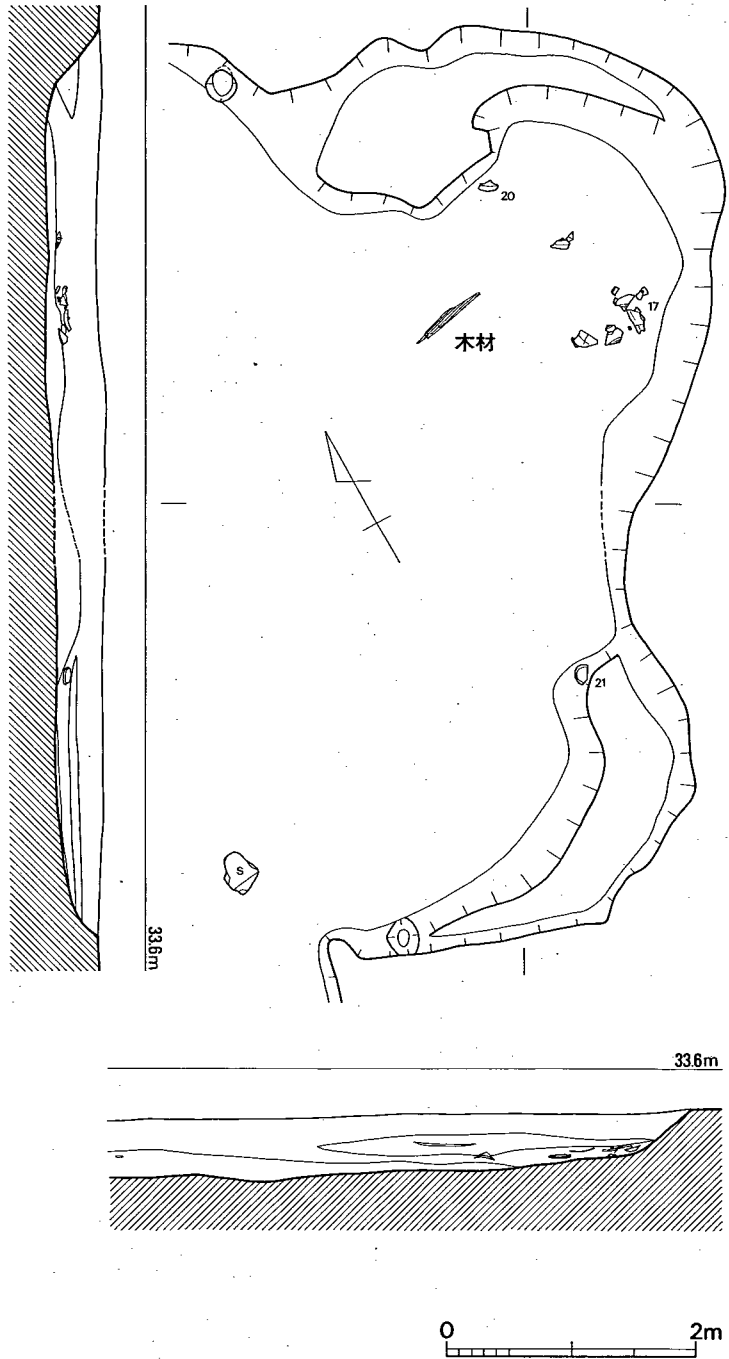
第 232 図 1・2号落ち込み出土土器・石器実測図 (1/3, 17は1/4)

口径は3.2~4.8cm, 器高は2.4~2.8cmの範囲に収まる。須恵器(第232図9~16) 坏蓋9~14の天井部外面および坏身15・16の底部外面には, 器面調整として回転ヘラケズリが施される。坏蓋の口径は13.3~14.3cm, 器高は3.8~4.1cmの範囲に収まる。坏身口縁部の立ち上がりは低く, 15の口径は12.6cm, 器高3.8cmを測る。13はいわゆる赤焼き土器である。

2号落ち込み(図版108・109, 第233図)

2号落ち込みは谷地区19区の東端で検出された, 南北7.4m, 東西4.4mの落ち込み状遺構である。落ち込み状といっても谷に付随しており, むしろ谷の張り出し部とするのが適当かもしれない。南北両端にはテラスを作るが底面は全体的に平坦で, 深さは40cmほどを測る。壁の傾斜も緩やかで, 断面形態は低い逆台形になる。遺物にはタコ壺や石製紡錘車もある。

土師器(第232図17~19)
17は口径33cmの甗で外面に



第233図 2号落ち込み実測図(1/60)

は密なハケ調整が、内面には胴部にケズリ、口縁部にハケが施される。口縁部は大きく外反するが、端部に面を作るのが特徴的である。18は内外面に指頭圧痕が多く残るタコ壺で、穿孔は底部に施される。19は一方が細くなる円筒形の土師質土器で、表面にはケズリにより面取りが行なわれる。三脚土器の脚のような特徴をみせる。

須恵器（第232図20・21） 20・21は坏蓋で天井部外面には回転ヘラケズリが施されるが、20にはさらにその後ナデられるようである。口径は20が12.6cm, 21が13.5cm, 器高は20が3.7cm, 21が3.5cmを測る。

石製紡錘車（第232図22） 径5.6cm, 厚さ1.4cmの石製紡錘車で、軸となる穴は若干傾く。

(5) 溝

本遺跡で検出された溝は29条に及ぶ。所属時期不明の溝もあるが、その内訳は古墳時代2条、奈良時代8条、中世2条である。調査区の中央付近を除いてほぼ全域に亘り検出され、住居跡や掘立柱建物跡との位置関係が問題になる。なお、5号土壇の項でも触れたが、当初13号溝として認識していた遺構はその後5号土壇に改称したため欠番となっている。

1号溝（図版110, 第234図）

1号溝は調査区東部において約65mに及ぶ溝で、古墳時代の4・76号住居跡を切る。断面形態は上面幅46cm, 底面幅39cm, 深さ14cmの逆台形で、暗褐色粘質土が埋土となる。遺物は本遺跡から出土する古墳時代の須恵器の中でも、最も古い一群（6世紀前半代）に属するものが多く含まれる。

土師器（第235図1～3） 1・2はいずれも坏身で、器面調整には丁寧なミガキが施される。外面には漆のようなものが塗布されている。口縁部の立ち上がりは高い。1の口径は11.5cm, 器高4.0cmを測る。3は長さ3.6cm, 孔径0.5cmの土錘である。

須恵器（第235図4・5） 4は坏身で口縁部の立ち上がりは高く、調整にはナデが施される。壺5の底部外面には、回転ヘラケズリが施される。口径は8.1cm。

2号溝（図版111, 付図）

2号溝は調査区の南東部で、長さ約30mに亘り検出された。1号溝に平行して南北に延びるが、直線的でなく若干蛇行し、5・26号の掘立柱建物跡を切る。上面幅1.0～1.3m, 底面幅0.7～1.0m, 深さ20cmの逆台形を断面形態とする。遺物は豊富で中世代に属する。

土師器（第236図12～22・24・25） 12～15は土師皿で、12～14の底部外面には回転ヘラ切りが、15には回転糸切りが残る。12は口径10.5cm, 器高1.5cm, 13は10.5cm, 1.8cm, 14は10.9cm, 2.1cm, 15は10.3cm, 1.8cmを測る。16～22は高台付きの坏である。16は接合部で高台がはずれ

ており、内外面に黒斑が付く。器面調整は内外面ともミガキで、復原口径は14.3cmである。17はいわゆる内黒土器で、内面全部と外面の口縁部の一部はいぶされ黒くなる。やはり高台がはずれ、内外面にミガキが施される。復原口径は15.1cmで、胎土は粗く2mm程度の石英が多く含まれる。18は外面に漆が塗布される。調整はミガキで、復原口径は15.1cm、器高6.6cmを測る。19もいわゆる内黒土器で、内面全部と外面口縁部はいぶされて黒くなる。調整は外面と内面の口縁部付近がナデ、内面の底部付近はミガキである。土器の質は瓦質に近い。口径15.5cm、器高6.8cm、底径8.7cmの完形品である。20も内黒土器である。外面はナデだが、内面にはミガキが施される。底径は8.2cm。21は摩滅が著しく器面調整不明。22の調整はナデ、復原口径は14.6cm、器高5.7cmを測る。24・25は手捏ね土器で、内外面に指頭圧痕が残る。24は口径2.8cm、器高1.9cm。25の口径は4.6cm、器高2.5cm。

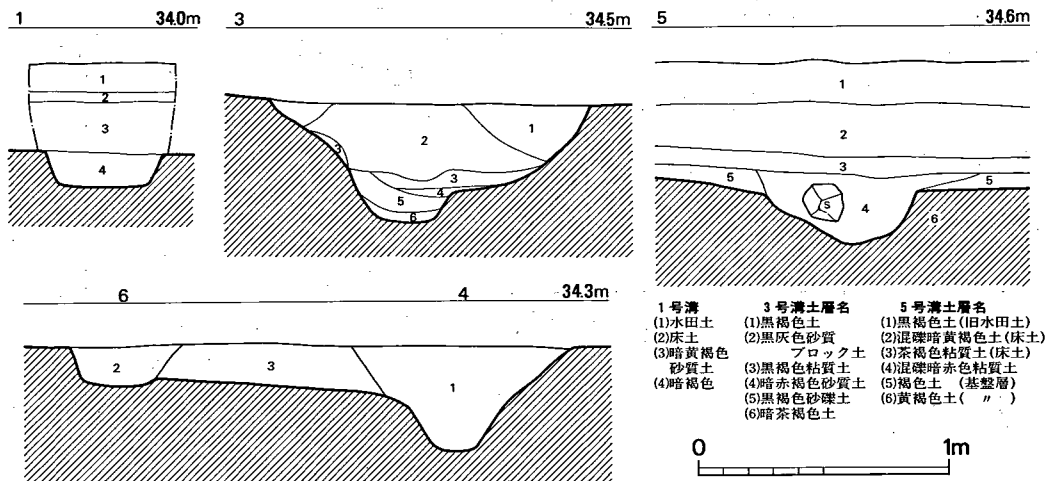
須恵器（第236図26） 復原口径35cm程度の甕の口縁部で、器面調整はナデ。外面には2条沈線文の間に波状文が施される。

緑釉陶器（第236図23） 底径8.2cmの緑釉陶器で、高台の端部以外に釉がかけられる。

3号溝（図版111、第234図）

3号溝は調査区南部中央を南北に流れる溝で、長さ約40mに亘って検出された。上面幅1.3m、底面幅0.3m、深さ50cmを測るが、深さ30cmの所で幅20~30cmの階段状のテラスを作る。出土遺物から中世代に属すると考えられる。

土師器（第236図29・30） 高台付きの坏である。29はいわゆる黒色土器で内外面ともいぶされ



第234図 1・3～6号溝土層図 (1/30)

黒くなる。調整は外面がナデ、内面がミガキである。30はいわゆる内黒土器で、内面はいぶされ黒くなる。復原口径は15.3cm、器高5.5cmを測る。

須恵器（第236図27・28） 高台付きの坏で、器面調整はナデ。27の底径は9.3cm、28が11.0cm。

石 鍋（第236図31） 31は滑石製石鍋の把手の部分で、内面にはノミ痕、外面には煤が残る。

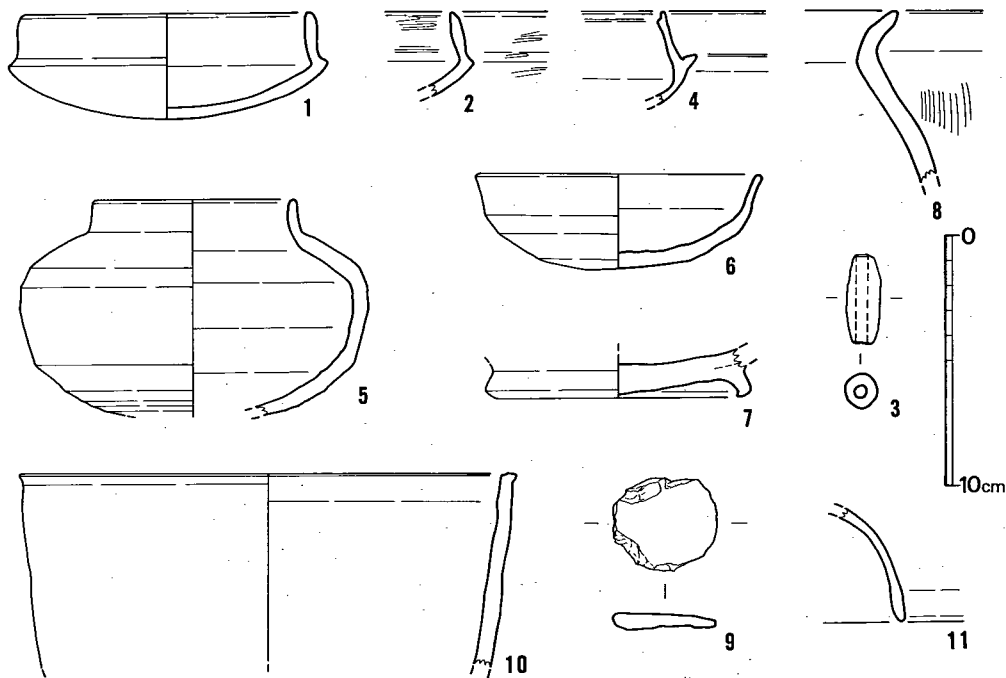
4号溝（図版56，第234図）

4号溝は調査区南西部において約60mに亘り検出された、北東—南西に流れる溝である。古墳時代の8号掘立柱建物跡を切るが、奈良時代の5号溝には切られるという切り合い関係を有する。6号溝と9号溝はこの4号溝の支流と考えられる。断面形態は上面幅0.9m、底面幅0.2m、深さ40cmの「V」字状を呈し、茶褐色粘質土（1）を埋土とする。出土遺物は比較的多いが遺存状態は悪く、図示できたのは2点だけである。

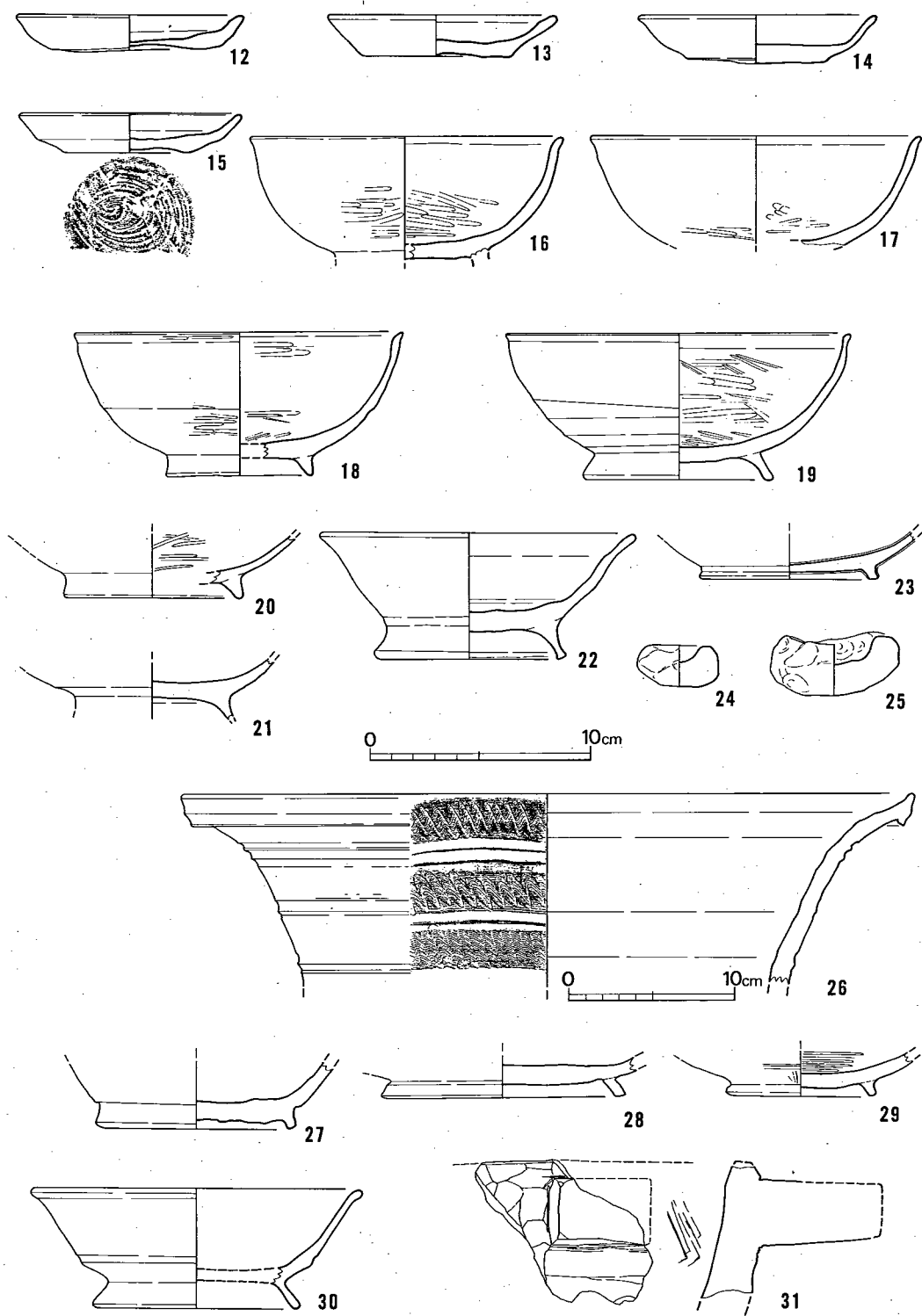
須恵器（第235図6・7） 坏身6の器面調整はナデで、口径11.4cm、器高3.7cmを測る。7は高台付きの坏身で、底部外面には回転ヘラケズリが施される。

5号溝（図版110，第234図）

5号溝は調査区南西部において約25mに亘り検出された。古墳時代の26号住居跡および奈良



第 235 図 1・4～6号溝出土土器実測図（1/3）



第 236 图 2・3号沟出土土器・石器实测图 (1/3, 26は1/4)

時代の4・6号溝を切る。上面幅0.7~0.9m、深さ30cmを測り、断面形態は緩やかな「U」字状になる。他遺構との切り合いから、本溝は奈良時代に属するものであろう。

土師器（第235図8・9） 8は甕で、外面にはハケ内面にはナデが施される。9は土器片を再加工した土製円盤で、径5.0cmを測る。

須恵器（第235図10） 10の器面調整はナデで、口径は20.1cm。

6号溝（図版56、第234図）

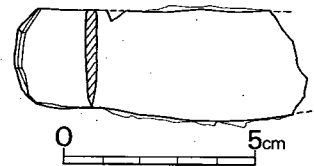
6号溝は調査区の南西部で約20mに亘り検出された溝で、古墳時代の25・31号住居跡と8号掘立柱建物跡は切るが、5号溝に切られるという複雑な切り合い関係を有する。断面形態は上面幅4.5m、底面幅0.3m、深さ15cmの浅い逆台形を呈し、古墳時代の包含層である褐色粘質土（3）を切って掘り込まれる。埋土は茶褐色土（2）だが、9号溝とともに4号溝の支流と考えられ奈良時代に属するものであろう。第237図のような鉄器も出土している。

須恵器（第235図11） 11は坏蓋で、器面調整はナデである。

鉄器（第237図） 一端に刃部を持ち、現存長7.7cm、最大幅3.0cm、厚さ3mmを測る。

7号溝（図版56、付図）

7号溝は調査区南西部で検出された溝で、5号溝の南1mをそれと同じ東西方向に流れる。幅30cm、深さ10cmと浅く長さ12mほどで途切れる。埋土は灰褐色粘質土で遺物はないが、かなり新しい溝と考えられる。



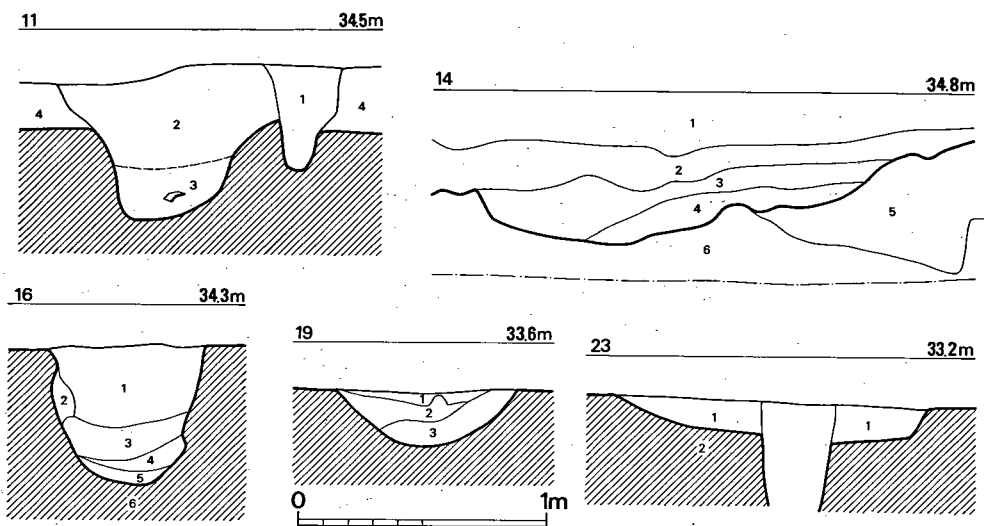
第237図 6号溝出土鉄器実測図（1/2）

8号溝（図版56、付図）

8号溝は、調査区の南西端部で20mに亘り検出された北東—南西に流れる溝で、その南端部で枝分れする。古墳時代の28号住居跡と切り合うが、おそらく28号住居跡に切られているのであろう。上面幅20cm、底面幅15cm、深さ15cmを測り、断面形態は逆台形を呈する。埋土は灰褐色粘質土で、遺物はなく所属時期は不明である。

9号溝（図版56、付図）

9号溝は調査区南西端部で10mに亘り検出されたやや蛇行する溝で、6号溝とともに4号溝の支流に相当する。上面幅50cm、底面幅20cm、深さ30cmを測り、断面形態は緩やかな「U」字状である。遺物は少なく図示できるものはないが、奈良時代に属すると考えられる。



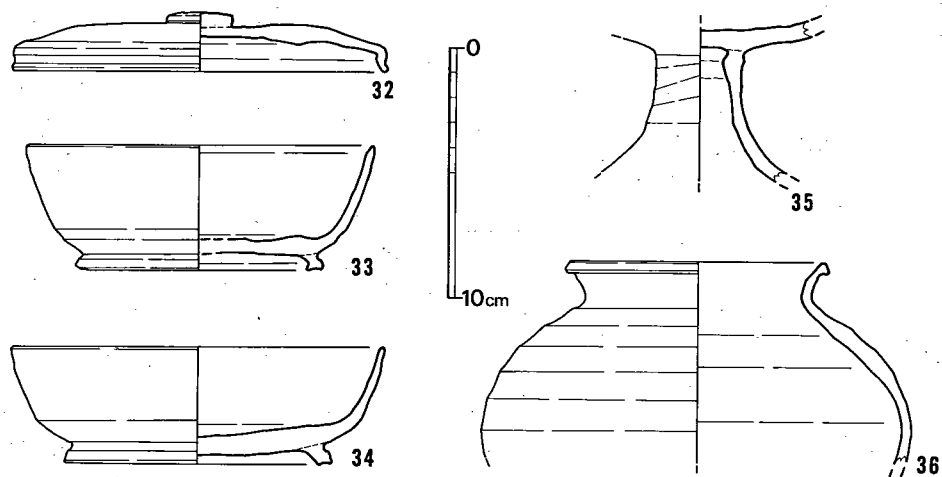
第 238 図 11・14・16・19・23号溝土層図 (1/30)

10号溝 (図版56, 付図)

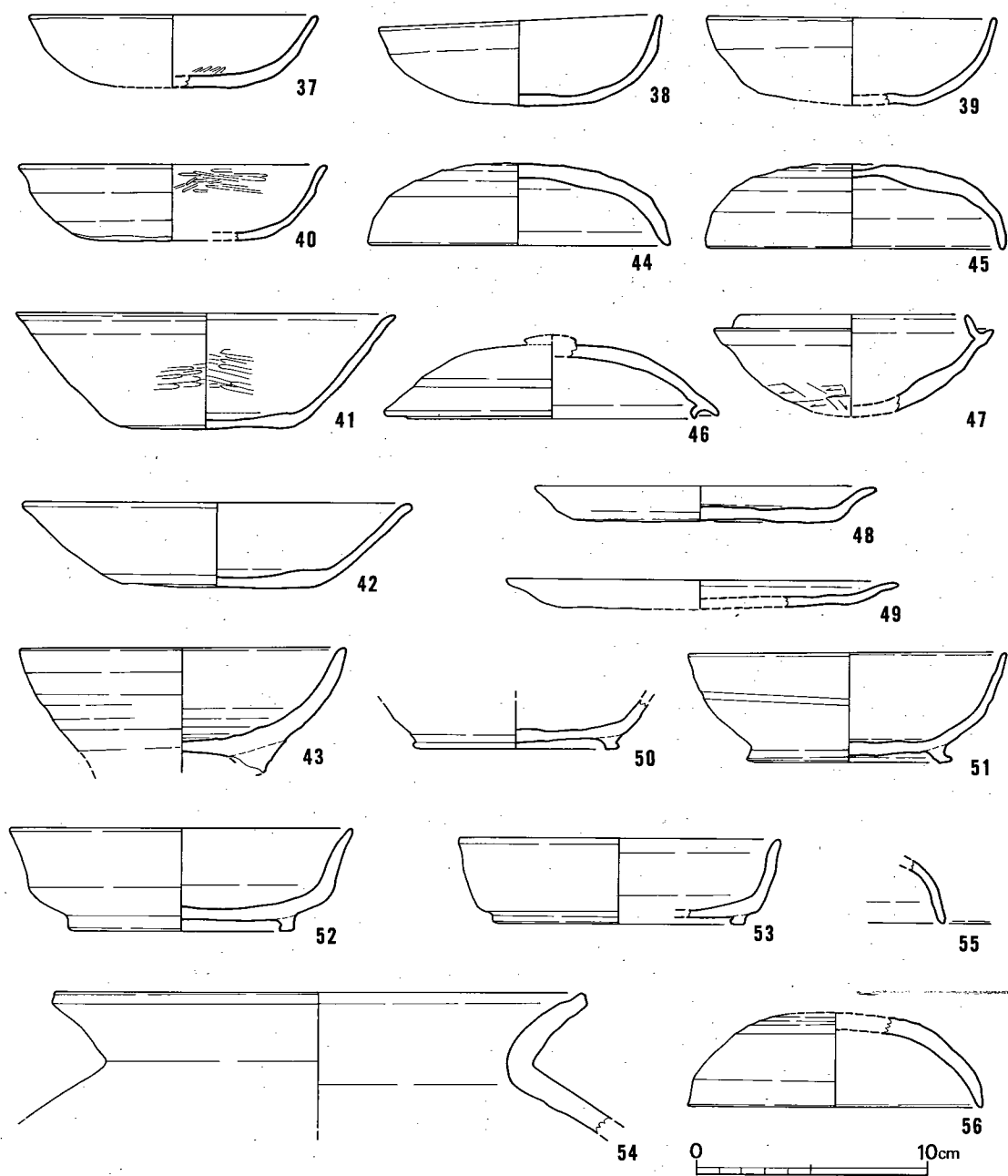
10号溝は調査区南西部の32号住居跡の東0.5mで、15mに亘り検出された南北に流れる溝である。幅30cm、深さ5cmと浅く、埋土は灰褐色粘質土で遺物は出土していないが、かなり新しい時期の溝と考えられる。

11号溝 (図版113, 第238図)

11号溝は調査区中央やや西寄りにおいて東西方向に25m検出された溝で、弥生時代の6・7



第 239 図 11号溝出土土器実測図 (1/3)



第 240 图 14·15号沟出土土器实测图 (1/3)

号土壙は切るが、9号掘立柱建物跡に切られる。断面形態は上面付近が開く「U」字状を呈し、上面幅1.1m、底面幅0.4m、深さ60cmを測り、掘り直されたような幅20cmほどの溝状の掘り込みが部分的に窺える。土層名は、(1) 9号掘立柱建物跡のP1で黒褐色土、(2) 小礫を含む黒褐色粘質土、(3) 黒色土、(4) 古墳時代の包含層に当たる黒褐色土である。遺物は多く遺存状態も良好で、奈良時代に属する。土師器も多いが、図示できたのは須恵器に限られる。

須恵器 (第239図32~36) 撮付き坏蓋32及び高台付き坏身33・34の器面調整はナデである。32は口径15.0cm、器高2.3cm、32は14.2cm、5.0cm、34は14.9cm、4.7cmを測る。35は高坏の脚部で、器面調整はナデ。壺36の器面調整はナデで、口径は10.5cmを測る。

12号溝 (付図)

12号溝は調査区中央やや南西寄りで見出された、東西方向に35m流れる溝である。断面形態は幅40cm、深さ30cmを測るシャープな方形で、黒褐色粘質土を埋土とする。遺物は小さな土師器片が少量出土しただけで、所属時期は明確でない。

14号溝 (図版112・114, 第238図)

14号溝は、調査区の西側に大きく広がる谷地区内で120mに亘り見出された。谷地区内といっても実際には谷の肩口に沿って蛇行しており、谷に関連した遺構と考えられる。幅1.2~1.6m、深さ20cm程度と浅く、第238図に図示された土層名は(1) 旧水田土の褐色土、(2) 古墳時代の包含層である灰褐色粘質土、(3) この溝の埋土上半部にあたる灰色粘土、(4) この溝の埋土下半部にあたる灰褐色粗砂質土、(5) 基盤層の淡黄褐色粘土、(6) 基盤層の青灰色粘土である。谷という立地条件にあるためか長さの割に他の遺構との切り合いは少なく、唯一14号土壙を切るだけである。遺物は多く遺存状態も良好で、主に奈良時代に属する。この中で特に注目すべき遺物は第265図1に図示した墨書土器で、高台付き坏身の底部外面に文字が記される。

土師器 (第240図37~42) いずれも坏であるが、37~40は口縁部が碗状に立ち上がり口径12.3~13.4cm、器高3.2~3.7cmの範囲に収まる。器面調整は主にナデだが、37と40の内面にはミガキが施される。41の調整は、内外面ともミガキである。42の内面にはミガキが、底部外面には回転ヘラケズリが施される。41の口径は16.6cm、器高は5.0cmで、42は16.9cmと3.6cmである。

黒色土器 (第240図43) 欠損しているが高台付き碗で、外面はいぶされて黒色を呈する。器面調整はナデで、口径は14.2cmを測る。

須恵器 (第240図44~54) 44~46は坏蓋で、天井部外面にはいずれも回転ヘラケズリが施される。44の口径は13.1cm、器高3.5cm。坏身47の底部外面は静止ヘラケズリである。48と49は器面調整がナデの皿で、48は口径14.9cm、器高1.5cmを測る。50~53は高台の付いた坏である。器面

調整はいずれもナデで、52は口径14.9cm、器高4.4cmを測る。54の器面調整はナデで、口径は23.2cmである。

15号溝 (図版112, 付図)

15号溝は14号溝と同様に谷地区で検出された溝で、長さは60mにも及ぶ。14号溝に併走するような流路で、一部それに切られる。北へ延びるにつれて細くなり、谷地区8区付近で途切れるが、およそ幅1.0m、深さ20cm程度の浅い溝である。遺物は少なく図示できたのは2点だけで、時期的には古墳時代に属する。

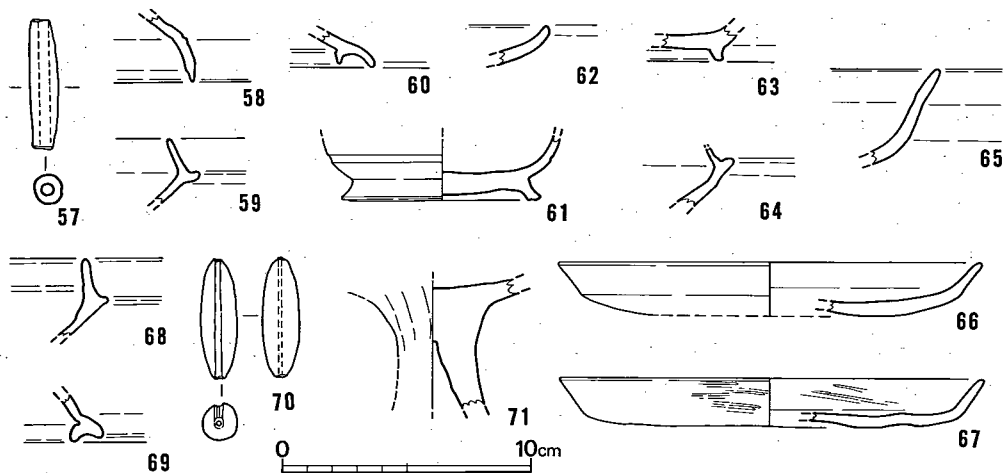
須恵器 (第240図55・56) 55・56は坏蓋で、56の天井部外面には回転ヘラケズリが施される。

16号溝 (図版64, 第238図)

16号溝は調査区中央部やや西よりに位置し、16号土壙と奈良時代の40号住居跡を切る溝で、東西約30mに亘って流れる。断面形態は幅65cm、深さ55cmの「U」字状で、第238図の土層名は(1)黒褐色粘質土、(2)黄褐色砂質ブロック土、(3)黄褐色砂質土が混ざる黒褐色土、(4)淡黒褐色粘質土、(5)暗灰色粘質土、(6)基盤層の黄褐色砂質土である。遺物は古墳時代に属するが、40号住居跡との切り合いから判断すれば、本溝は奈良時代以降に属すると考えられる。

土師器 (第241図57) 57は土錘で、長さ5.1cm、孔径0.5cmを測る。

須恵器 (第241図58・59) 58は坏蓋、59は坏身の口縁部で、この部分の調整はナデである。



第 241 図 16~25号溝出土土器実測図 (1/3)

17号溝 (図版64, 付図)

17号溝は調査区北西部で検出された、東西方向に流れる7mほどの短い溝である。幅40cm、深さ10cmの浅い溝で、奈良時代の51号住居跡を切る。遺物は少なく図示できるのは須恵器2点だけであり、奈良時代に属するものである。

須恵器 (第241図60) 60は坏蓋の口縁部で、この部分の器面調整はナデである。

18号溝 (付図)

18号溝は調査区北部住居群の中を東西方向に15mほど流れる溝で、古墳時代の55号住居跡を切る。幅30cm、深さ10cmと浅く、灰褐色粘質土を埋土とする。遺物から判断して、本溝は中世に属するものである。

土師器 (第241図62) 62は土師皿であるが、摩滅により調整は不明。

須恵器 (第241図63) 63は高台の付く坏身で、器面調整はナデである。

19号溝 (図版67, 第238図)

19号溝は調査区北部住居群と北西部住居群の間を東西方向に流れる25mの溝で、古墳時代の14号掘立柱建物跡を切る。断面形態は幅75cm、深さ20cmの緩やかな「U」字状で、第238図の土層名は(1)鉄分を含む黄褐色土、(2)黒褐色土、(3)基盤層の黄褐色砂質土をわずかに含む黒褐色粘質土である。遺物は少ないが、古墳時代に属する溝と考えられる。

須恵器 (第241図64) 64は坏蓋の口縁部で、調整はナデである。

20号溝 (付図)

20号溝は調査区中央部を南北に25mほど流れる溝で、幅50cm、深さ5cmと浅い。調査時のミスで、本溝から出土した遺物と21号溝から出土した遺物とを一括して取り上げてしまい、両溝の所属時期がわからなくなってしまった。ここではこの一括してしまった遺物の中から、とりあえず2点だけを図示したが、これらは21号溝に所属する可能性もあるので注意しておきたい。なお、遺物自体は奈良時代に属するものであり、本溝ないし21号溝は奈良時代に比定される。

土師器 (第241図66・67) 66・67は皿で内外面ともにミガキが施される。指頭圧痕が目立つ底部外面には化粧土が塗布され、赤褐色を呈する。67は口径17.0cm、器高1.9cmを測る。

須恵器 (第241図65) 65は坏身で器面調整はナデ。

21号溝 (付図)

21号溝は調査区中央部を南北に15mほど流れる溝で、幅50cm、深さ8cmを測る。20号溝の項で述べたように、本溝から出土した遺物は20号溝のそれと一括して取り上げたため本溝の所属

時期は明確でない。

22号溝 (図版114, 付図)

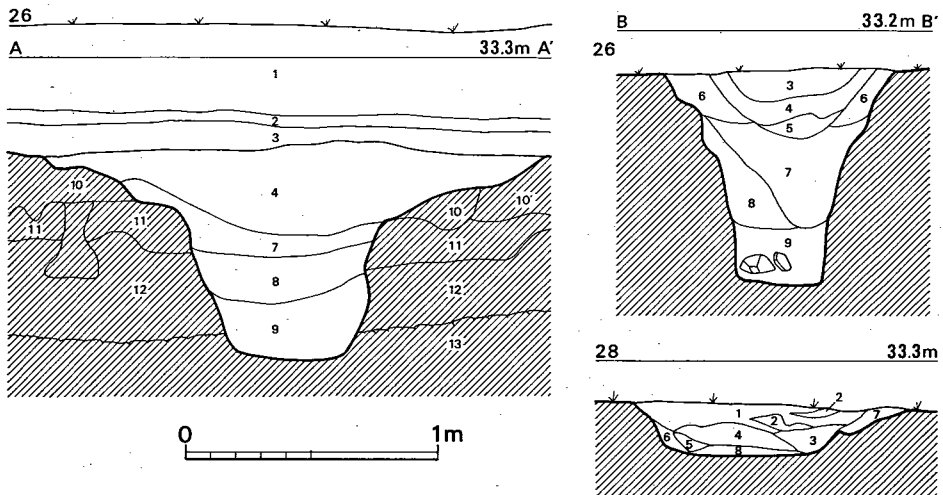
22号溝は調査区中央部で検出された、長さ6.5m、幅1.5m、深さ10cmの浅い落ち込み状遺構であるが、ここでは便宜的に22号という番号を与え溝として取り扱った。64号住居跡の南東10mに位置する。遺物は小破片ばかりで、図示できたのは1点だけである。

須恵器 (第241図68) 68は口縁部が比較的高く立ち上がる坏身で、器面調整はナデである。

23号溝 (図版119, 第238図)

23号溝は調査区北東部において北東—南西に18m延びる溝で、道路状遺構や24号溝の北2mにある。幅1.2m、深さ10cmと浅く、第238図の土層名は(1)黒褐色粘質土、(2)基盤層の暗褐色粘土で、中央はこの溝を切る柱穴である。遺物は少ないが、奈良時代に属するものであろう。

須恵器 (第241図69) 69は坏蓋の口縁部で、この部分の器面調整はナデである。



第 242 図 26・28号溝土層図 (1/30)

24号溝 (図版119, 付図)

24号溝は調査区北東部で検出された北東—南西に12m延びる溝で、66号住居跡の北7m、23号溝の南2mに位置する。幅20~40cm、深さ5cmの浅い小溝であるが、後述する道路状遺構に併走しており、道路の側溝的機能を有していたものと考えられる。遺物は少ない。

土師器 (第241図70) 70は長さ4.7cm、孔径1mmの有溝土錘で、縦に1本だけ幅2mm、深さ1mmの溝が施される。

25号溝 (付図)

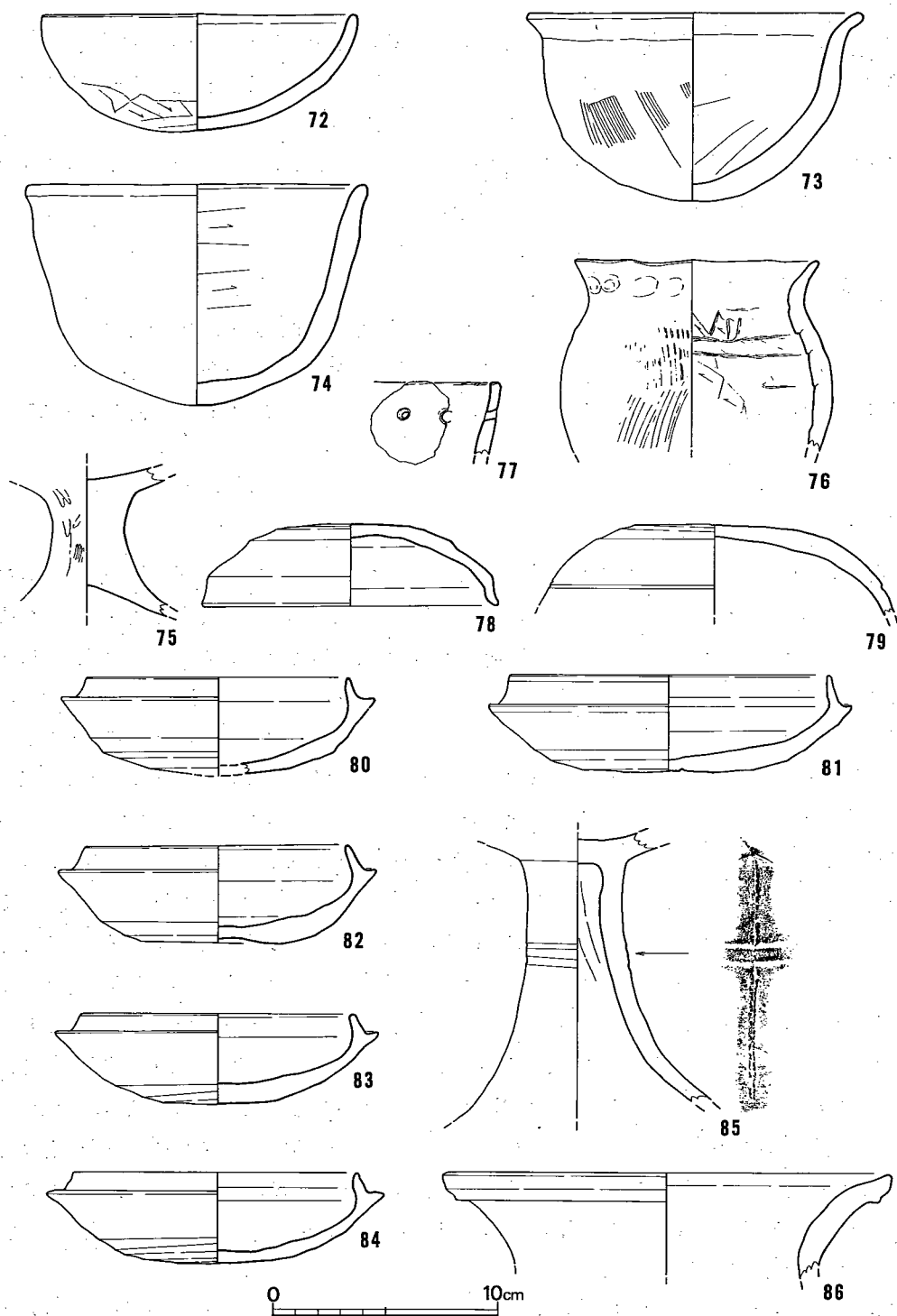
25号溝は調査区中央部付近で検出された、北東—南西に8m延びる溝である。67・74号住居跡の西7m、65号住居跡の南東8mに位置する。幅25cm、深さ12cmの小溝で、遺物は少ない。

土師器 (第241図71) 71は高坏脚部で、器面調整はナデだがケズリの痕跡が外面上半部に窺える。

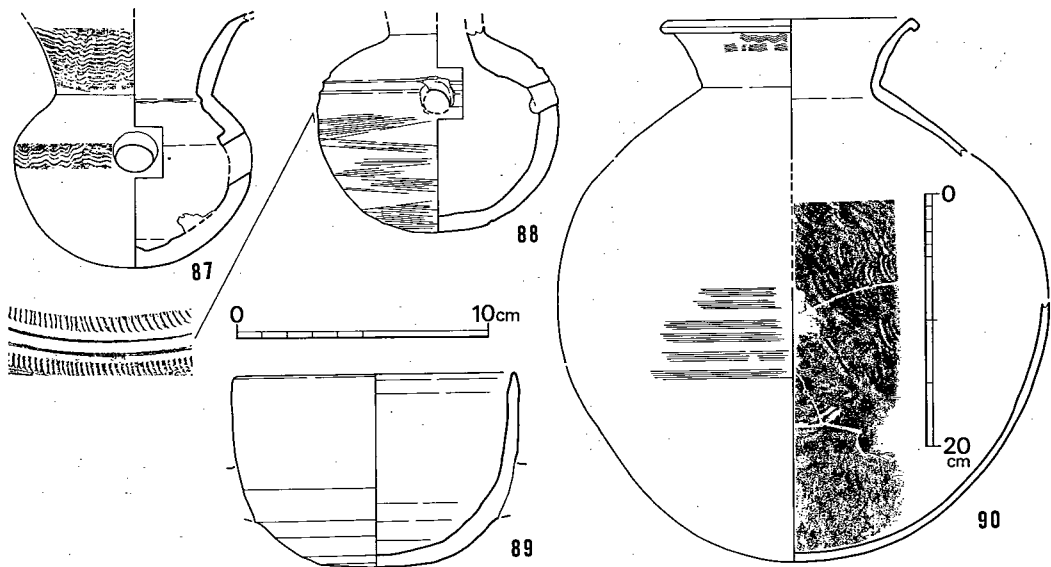
26号溝 (図版115~118, 第242図)

26号溝は調査区北東部で検出された溝で、南東—北西方向に流れる。両端は調査区外へ延びるためその全容は窺えないが、60mに及ぶ直線的なこの溝は西端付近で方向を北へ変え、中央付近では奈良時代の28号溝に切られる。断面形態は基本的に逆台形を呈するが、第242図に図示したように遺存状態の違いによって若干異なった形態になるようである。第242図左はこの溝の北端部の土層断面図で、全体の規模としては上面幅2.0m、底面幅0.5m、深さ0.85mを測る。しかし、上面から深さ0.3m、幅0.8mまでは緩やかな傾斜であるのに対し、それ以下は急激な傾斜で底面にまで至る裾の大きく開いた逆台形になる。かたや同図右はこの溝の中央からやや東で確認された土層断面図で、規模は上面幅0.9m、底面幅0.35m、深さ0.85mを測り、斜面にはほとんど変化の見られないスマートな逆台形を呈する。このように断面形態は二者に分れるが、多くの場合は後者の形態で、前者の形態は主にこの溝の方向が変わる北端付近でのみ見られる。遺物は質量ともに充実しており、完形品や完形近くまで復原できるものも少なくはない。また、拳大から人頭大までの礫が上位から下位まで比較的多く含まれ、場所によってはそれが集中することもある。第245図に図示した鉄鏝も出土している。土層名は(1)耕作土、(2)床土、(3)灰色粘土をブロック状に含む灰褐色土、(4)黒褐色砂質土、(5)茶褐色粘質土、(6)基盤層の黄褐色土を少量含む褐色粘質土、(7)基盤層の黄褐色土を微量含む茶褐色粘質土、(8)基盤層の黄褐色土を多く含む淡茶褐色粘質土、(9)黒褐色粘質土、(10)淡茶褐色粘質土、(11)暗黄褐色粘質土、(12)黄褐色シルト層、(13)河原礫層である。本溝は遺物から判断して、古墳時代に属するものである。

土師器 (第243・246図72~77・91~94) 72は坏で外面にはケズリ、内面にはナデが施される。



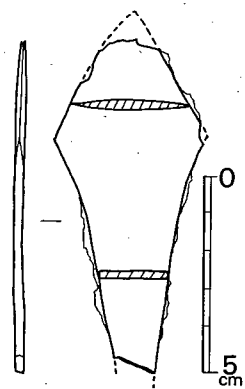
第 243 图 26号沟出土土器实测图 1 (1/3)



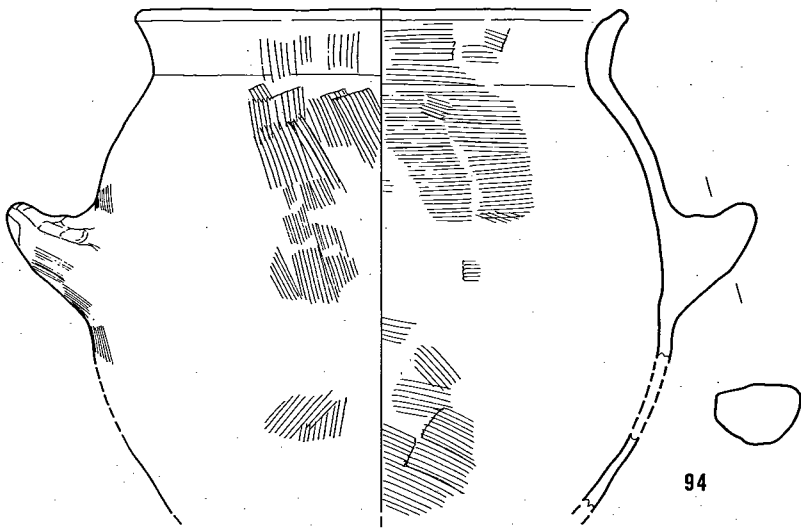
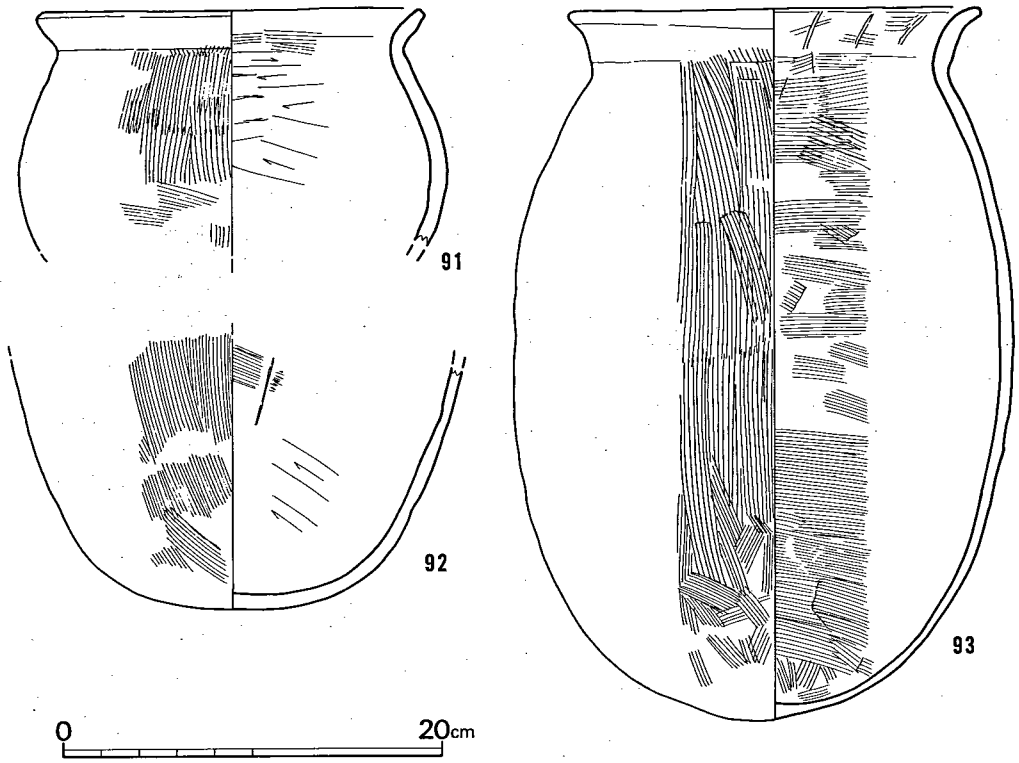
第 244 図 26号溝出土土器実測図 2 (1/3, 90は1/6)

73・74は鉢で内面はいずれもケズリ，外面には73にハケ，74にはナデが施される。73の口径は14.9cm，器高8.3cm，74は口径15.2cm，器高9.9cm。75は高坏の脚部で摩擦するが，外面にはミガキのような痕跡もある。76は口径11.1cmの小型甕で，口縁部には指で摘んだ指頭圧痕が残り，外面にはハケ，内面にはケズリが施される。また，内面には接合痕が明瞭に窺える。91～93は大型の甕である。91と92は別個体であるが，外面のハケ，内面のケズリ後の部分的なハケ調整には共通点が窺える。93はほぼ完形品で，口径22.5cm，器高37.5cmを測る。内外面とも密なハケが施されるが，口縁部内面には工具痕が見える。94は甕で内外面ともハケが施されるが，口縁形態や器形は甕とほぼ同じ特徴を有しており注目される。口径は26.5cm。

須恵器 (第243・244図78～90) 坏蓋78・79の天井部外面および坏身80～84の底部外面には，器面調整として回転ヘラケズリが施される。坏身については口径12.1～13.8cm，器高4.0～4.4cmの範囲に収まり，口縁部はあまり高く立ち上がらず，端部は丸く仕上げられる。78と82はいわゆる赤焼き土器である。85は高坏の脚部で，器面調整はナデだが内面にはしほり痕が残る。外面には2条の沈線を施文した後に貫通しない透孔を施す。甕86の調整はナデ，口径は19.8cm。87・88は甕である。内外面ともナデだが，胴部内面の調整は粗い。自然釉が全体にかかる。88の外面胴下半部には回転ヘラケズリ後にカキ目，内面に



第 245 図 26号溝出土鉄器実測図 (1/2)



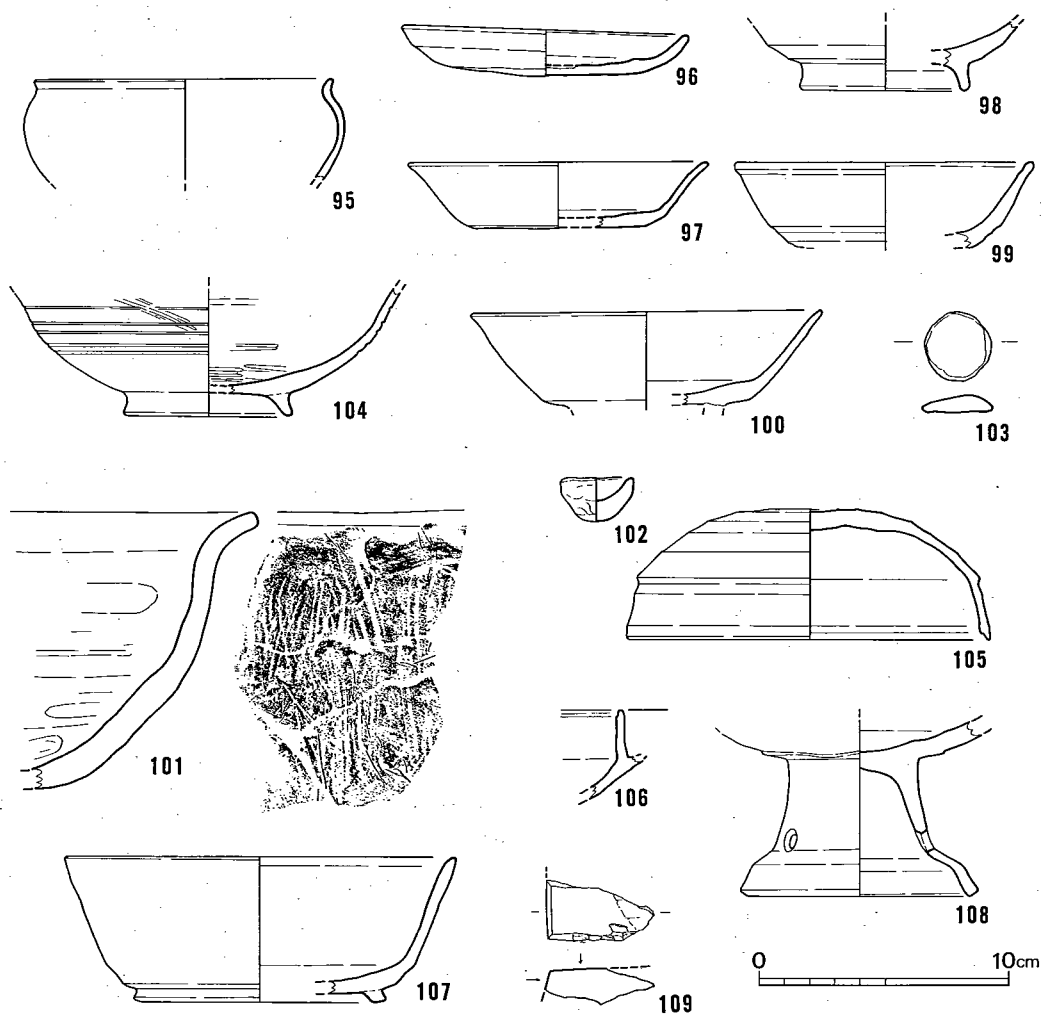
第 246 图 26号沟出土土器实测图 3 (1/4)

はナデが施される。文様は刺突文である。89は鉢で口縁部はかなり歪んでいるが、復原口径は11.2cm、器高は7.6cmを測る。底部外面には回転ヘラケズリが施され、焼成時に他の土器と接触していたと考えられる器面剥落の痕跡が外面中位付近に窺える。90は復原で口径20.5cm、器高43cmを測る甕で遺存状態は悪いが、外面にはカキ目、内面には青海波のタタキが施される。

鉄 鏝 (第245図) 最大幅4.2cm、現存長9.0cmの鉄鏝で、厚さは最大で2mmを測る。

27号溝 (付図)

27号溝は調査区東部中央で、71号住居跡の南東4m、75号住居跡の南西9mに位置する。削



第 247 図 28号溝出土土器・石器実測図 (1/3)

平されその全容を窺うことはできないが、現存する部分は長さ3m、幅60cm、深さ10cmを測る浅い小溝である。土師器や須恵器の小片がかなり出土したが、図示できるものはなかった。

28号溝 (図版118, 第242図)

28号溝は調査区北東部において南北に35mほど延びる溝で、両端は調査区外へ続きその全容を知ることはできない。古墳時代の26号溝をほぼ直交するように切り、また時期不明の25号土壌も切る。上面幅1.1m、底面幅0.6m、深さ20cmの浅い逆台形を呈するが、25号土壌の南側に限って幅4mと大きく膨らむ。土層名は、(1) 灰褐色粘質土、(2) 灰褐色砂質土、(3) 灰色砂質土、(4) 褐色砂質土、(5) 淡褐色砂質土、(6) 淡黄褐色粘質土、(7) 灰褐色粘質土、(8) 鉄分を含む灰褐色粗砂質土である。(1)には少量、(4)・(8)には多量の遺物が含まれるが、時期差は窺えない。所属時期は奈良時代であるが、第81図の分銅形土製品もこの溝からの出土である。

土師器 (第247図95~102) 95は小型の鉢で口径12.0cm。96は完形の土師皿で、口径11.5cm、器高1.6cmを測り調整はナデ。97は灯明皿である。調整はナデで、内面には炭化物が多量に付着する。98~100は欠損するものもあるがいずれも高台の付く坏で、調整はナデである。101は最高厚1.1cmの分厚い鉢で、内面にはナデ、外面には粗いハケが施される。なお、外面には煤の付着が著しい。102は手捏ね土器で、外面に指頭圧痕が残る。103は径2.6cm、厚さ0.8cmの土製円盤であるが、土器片の転用ではない。

黒色土器 (第247図104) 104は全面が黒化した黒色土器で、底部径は6.9cmを測る。内外面ともミガキが施され、外面にはその後沈線が施文される。底部外面には糸切りの痕跡が窺える。

須恵器 (第247図105~108) 坏蓋105の天井部外面と坏身106の底部外面には回転ヘラケズリが施され、口縁部の立ち上がりは高い。107は高台付きの坏で、調整はナデ。108は高坏の脚部で、坏部の底部外面には回転ヘラケズリが窺える。円形の透孔は3方向に施される。

砥石 (第247図109) 109は頁岩製の砥石で、粗い研磨痕が残る。

29号溝 (図版96, 付図)

29号溝は調査区北東端で北西—南東に延びる溝で、現存長28m、幅0.8m、深さ20cmを測り、26号溝の南6mに位置する。27号掘立柱建物跡と切り合うが、先後関係は不明。遺物は少なく、土師器の小破片が数点出土しただけである。

30号溝 (付図)

30号溝は調査区北東端において北西—南東へ延びる溝で、29号溝の南3mに位置する。現存長11m、幅40cm、深さ5cmの浅い小溝で、遺物は全く出土しなかった。

(6) 道路状遺構 (図版119, 第248図)

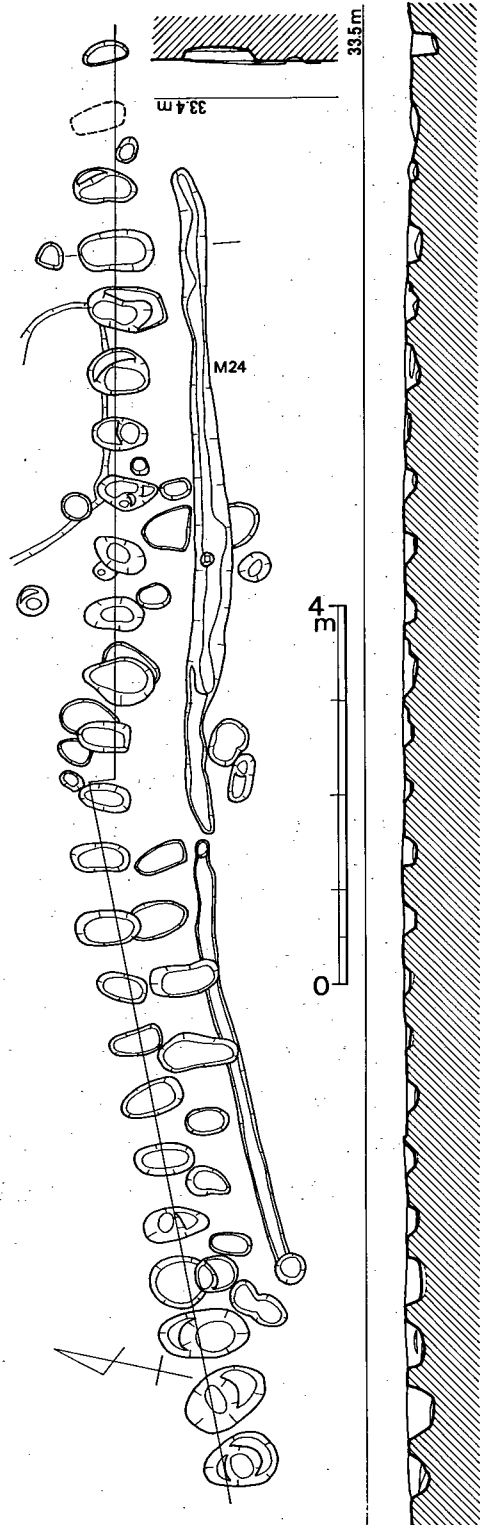
道路状遺構は調査区中央の東側で検出された列状に並ぶ楕円形のピット群とその南側に併走する溝 (24号溝) からなる。楕円形のピットは長軸45~80cm, 短軸25~45cm, 深さ5~18cmと浅く, 断面形態はおおよそ碗状を呈する。このピットは20~30cmの間隔でわずかに弧を描きながら東西方向に33基並び, 全体で21mに及ぶ。そしてこのピット列の南40cmには24号溝とした幅20cm, 深さ5cmの小溝が併走する。埋土は黒褐色粘質土で, 遺物が出土したピットは10基にのぼるが, いずれも細片で所属時期の明確なものはない。このような楕円形の浅いピット列は足場補強のため丸太等が敷かれた道路状遺構と考えられ, 南に併走する小溝はその側溝であろう。

(7) 土 壙 墓

本遺跡では古墳時代以降に属すると考えられる土壙墓を, 調査区北東端で1基だけ確認した。

4号土壙墓 (図版120, 第249図)

4号土壙墓は調査区北東端で検出され, 28号掘立柱建物跡の東4m, 24号土壙の南東4mに位置する。西端は一部削平されるが, 平面プランは長軸145cm, 短軸75cm, 深さ22cmの隅丸に近い長方形になる。壁は全体に変化なく傾斜するが, 南西壁だけはその傾斜がなだらかである。人骨や副葬品は確認されていないが, 底面には小枝のような細長い炭化した木片が2cmの厚さで全体に敷き詰められ, また北東壁には枕とも思える長さ20cm, 幅9cm, 厚さ5cmの石が据えられていることから, 本遺構は土壙墓という認

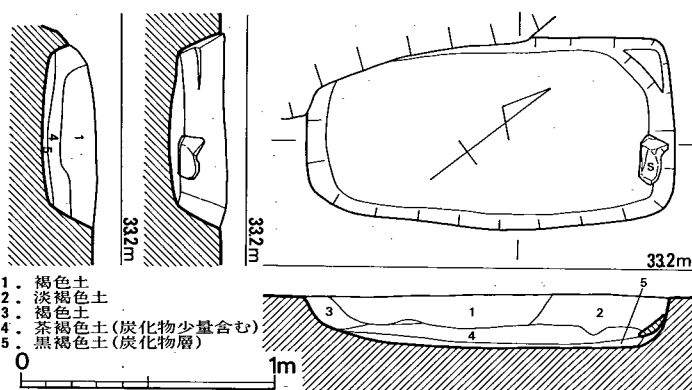


第 248 図 道路状遺構実測図 (1/80)

識に至った。遺物は細片ばかりで時期の決定できるものはないが、土師器の他に須恵器も含まれている。

(8) 柱 穴

柱穴は、他の遺構も少ない調査区中央部から北東方向に広がる旧谷部ではやはり少ないが、それ以外では谷地区を



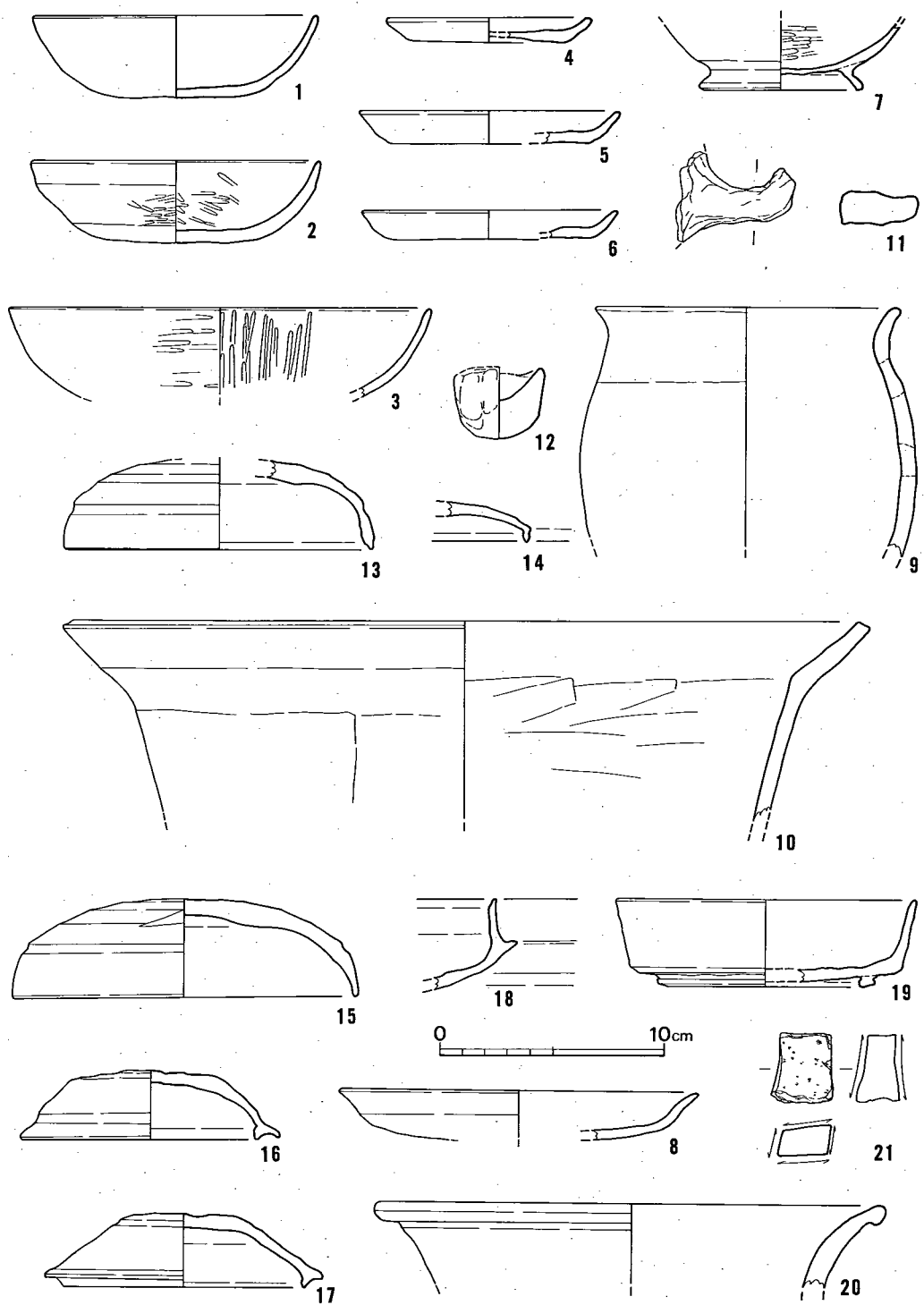
第 249 図 4号土壙墓実測図 (1/30)

除いてほぼまんべんなく分布する。出土の遺物は多岐に亘り、土師器・須恵器の他に砥石もある。

土師器(第250図1~12) 1~3は坏である。1は口径12.8cm, 器高3.7cm, 器面調整は摩滅により不明。2は口径13.0cm, 器高3.8cm, 器面調整は内外面ともミガキである。3は口径19.0cmで、外面には横方向, 内面には縦方向のミガキが施される。4~6の土師器皿底部外面には、回転糸切りの痕跡が残る。口径と器高は、4が9.2cmと1.0cm, 5が11.7cmと1.4cm, 6が11.5cmと1.3cmである。7は高台付きの坏で、外面にはナデ, 内面にはミガキが施される。8は高坏の坏部で、器面調整はナデ。9は口径13.7cmの比較的小さな甕で、調整はナデだが、口縁部は器面を削り取るように強く横方向にナデられている。10は甑であろうか。内外面ともケズリで、外面には煤が付着する。11は甑の把手で、調整はナデ。12は口径4.1cm, 器高3.0cmの手捏ね土器で、指頭圧痕が残る。

須恵器(第250図13~20) 13~17は坏蓋で、13・15の天井部外面には回転ヘラケズリが施されるが、16・17は未調整である。口径と器高は、13が13.9cmと4.0cm, 15が15.6cmと4.5cm, 16が11.8cmと3.2cm, 17が12.6cmと3.3cmである。18と19は坏身で、底部外面には回転ヘラケズリが施される。18の口縁部の立ち上がりはかなり高い。20は甕の口縁部で調整はナデである。

砥石(第250図21) 頁岩製の砥石で、両端以外は4面ともかなり使い込まれている。



第 250 图 柱穴出土土器・石器实测图 (1/3)

(9) 杭 列

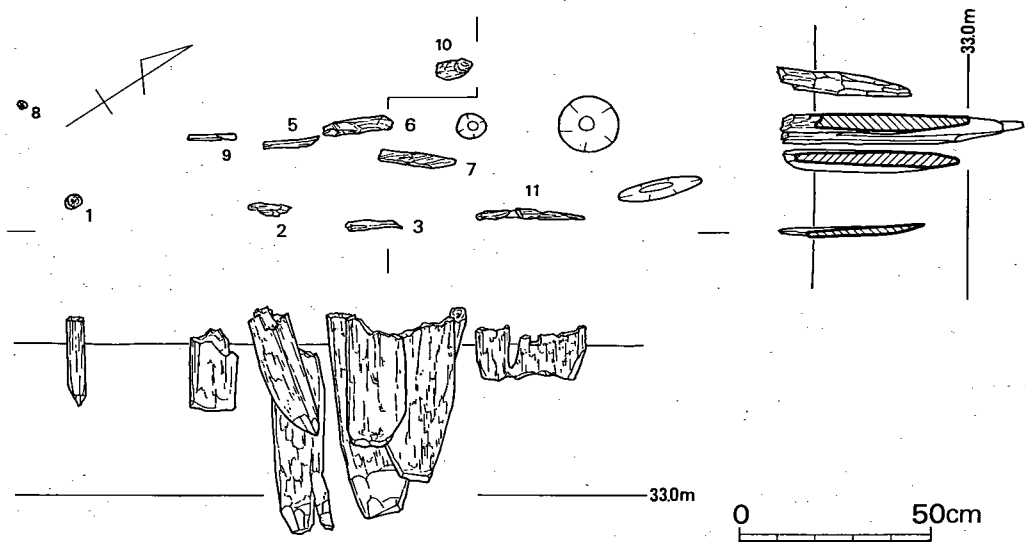
谷地区では3箇所て杭列が検出され、1区のものて1号(第251図)、25区のものて2号(第253図)、34区のものて3号(第255図)とした。しかし、いずれも所属時期や性格(他の遺構との関連性)については明確にできない。

1号杭列(図版122, 第251・252・254図)

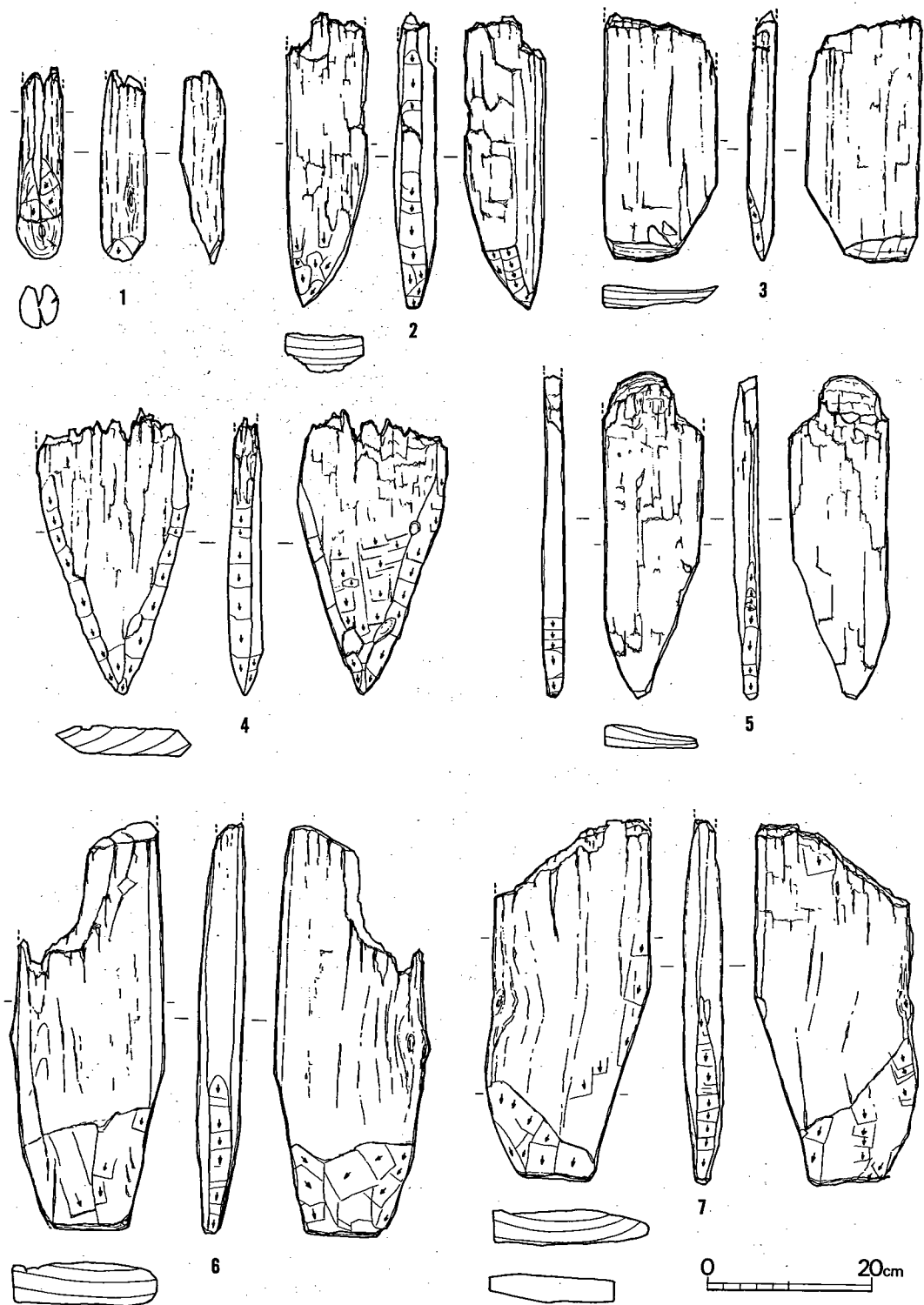
1号杭列は流入口と9号土墾の切り合う部分から南東に1m、14号溝の北西2mに位置する。杭列として扱ってはいるが、実際には7枚の板と3本の杭からなり、北東—南西を軸とした長さ3.5m、幅1mの2列に配置される。また北端では、板の抜き取り痕が1箇所、杭の抜き取り痕が2箇所確認されている。杭(第252図1)については原木の先端部を加工しただけであるが、板(第252図2~7)については長方形の平たい板材の先端部を尖らしており、幅10~20cm、厚さ4~5cmを測る。長さは打ち込まれた深さによりまちまちである。この杭列と流入口や9号土墾との関係、または杭列自体の性格や所属時期も明確でない。なお、6の材質はチャンチンモドキである。

2号杭列(図版123, 第253図)

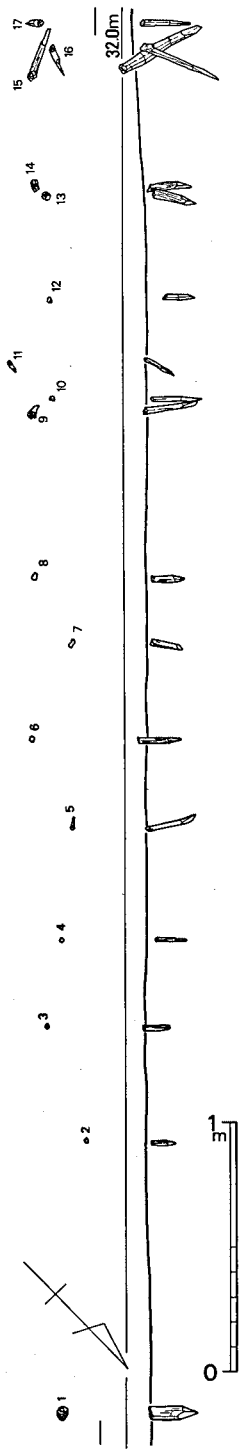
2号杭列は25区の肩口で検出された25本の杭からなり、直線状ではなく30~40cm間隔で掛け違い状に配列される。いずれも原材の一端を加工しただけのもの(第284図5~8)で、径は2~4cmと細い。6には枝を払った跡が窺える。谷の肩口に並ぶことから谷に対する柵的機能が



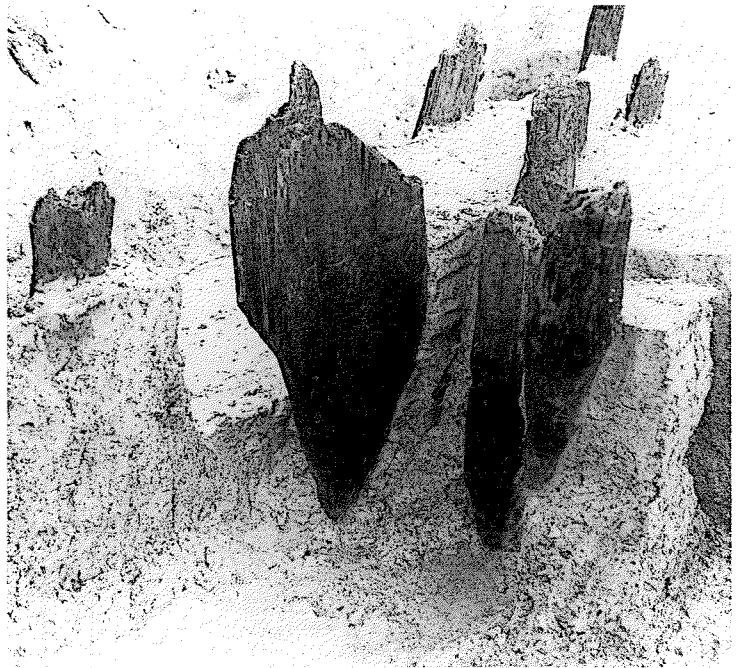
第 251 図 1号杭列実測図(1/20)



第 252 图 1号杭列出土木器实测图 (1/8)



第 253 図 2号杭列実測図 (1/30)

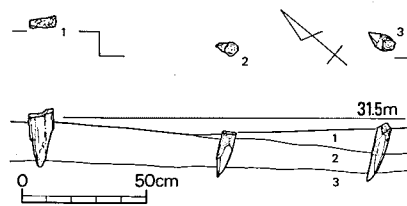


第 254 図 1号杭列断面

想定されるが、所属時期については不明。8の材質はユズリハ。

3号杭列 (図版123, 第255図)

3号杭列は34区で検出された3本からなる杭列である。北西—南東を軸とし、60~70cmの間隔でほぼ直線的に並ぶ。南側の2本は原材の一端を加工したものであるが、北側の1本は板材の一端を尖らしたものである。まったくの谷の中からの出土で、性格や所属時期については不明である。なお、基盤層の土層名は(1)混礫褐色砂層、(2)青灰色粗砂層、(3)礫層である。



第 255 図 3号杭列実測図 (1/30)

5. 包含層および谷地区出土の遺物

ここでは包含層および谷地区出土の遺物についての説明を行なうが、包含層出土遺物に関しては、量的に少なくしかも縄文時代・弥生時代・古墳時代以降の各時代の遺物を含んでいることから、敢て谷地区出土石器と並列して説明した。また、墨書土器や木簡などの文字資料についても、出土した遺構に関係なく本項で一括して扱っている。

さて谷地区であるが、本章冒頭部分で詳述したように、本遺跡では幅15~30m、長さ200mに及ぶ旧谷部を検出し、縄文時代から中世に至るまでの土器・石器・鉄器・木器や、貝ブロック・獣骨(図版127)といった各種遺物が多量に出土した。調査ではこれらの遺物を、便宜的に分割した36区の地区別と粘土層・バフン層・砂層の層位別に分けて取り上げたが、それに基づく明確な時期分類はできなかった。しかし、弥生土器は主に1~16区の砂層から、奈良時代の土器や木器は20~36区の粘土層・バフン層から出土しており、ある程度の傾向は窺える。また16区では槌の子の集中出土も見られた。以下、土器・石器・鉄器・木器の順で遺物の説明を行なう。

(1) 土 器

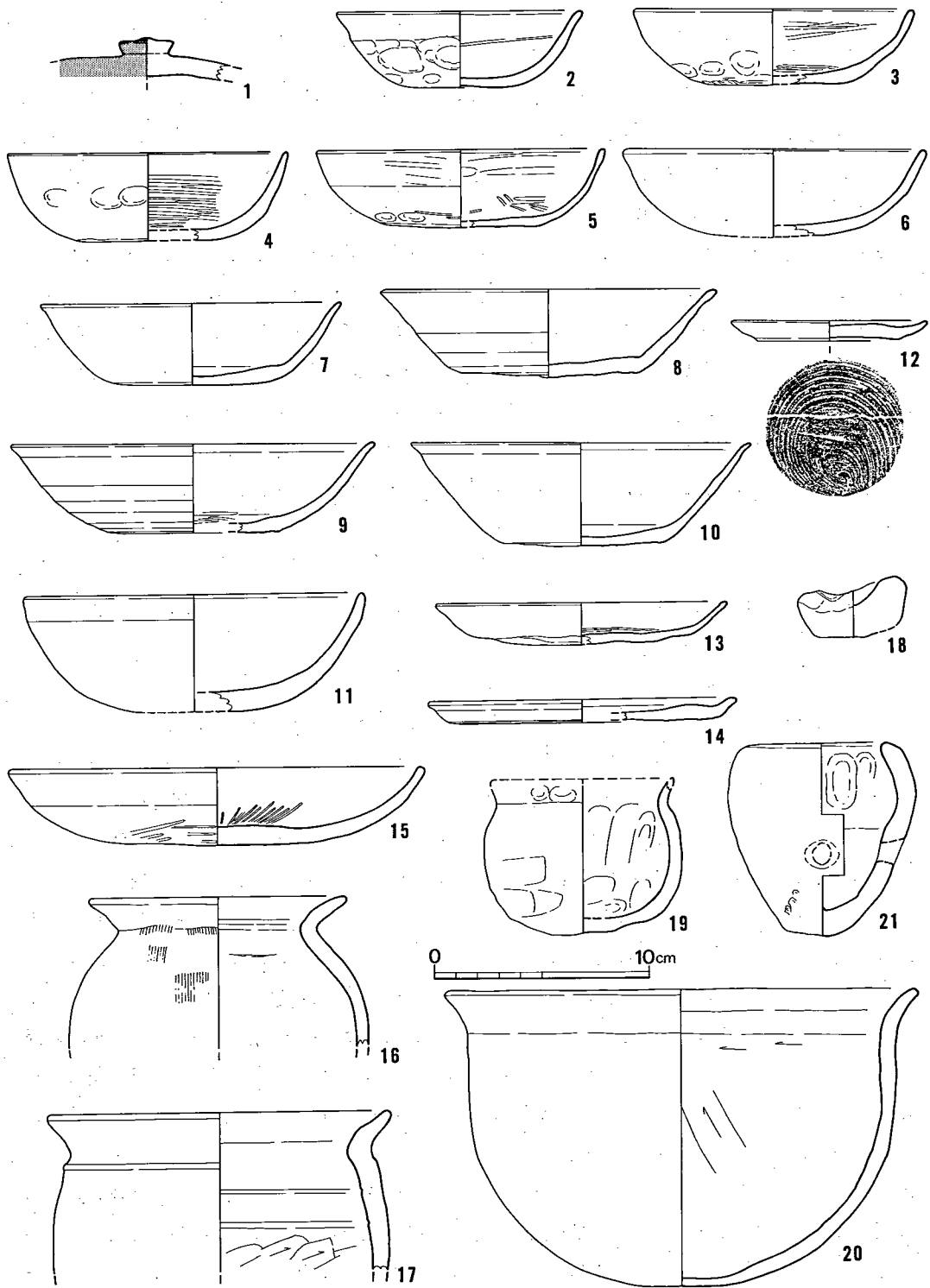
土器については、土師器・須恵器・墨書土器・陶磁器・製塩土器・埴輪・瓦の順で説明をおこなう。

土師器 (第256~258図 1~33)

蓋 (第256図1) 調整はナデが施される撮付き蓋で、外面には丹が塗布される。

坏 (第256図2~11) 形態的には底部が平坦なもの(7~10)と、丸いもの(2~6・11)とに分かれる。2は口径11.4cm、器高3.5cmで内外面ともナデを施し、外面の底部付近には指頭圧痕が残る。3は口径13.0cm、器高3.5cmで内面には丁寧なミガキが施される。外面は摩滅により調整不明だが、底部付近には指頭圧痕が残る。4は復原口径13.1cm、器高4.0cmで内面にはミガキが施されるが、外面は摩滅により指頭圧痕が残るだけである。5は全体に摩滅しており、内面底部付近にミガキと外面底部付近に指頭圧痕が残るだけで、口径は13.1cm、器高3.8cmを測る。6・7は摩滅により器面調整がほとんど窺えないが、復原口径は6が14.0cm、7が13.9cm、器高は6が3.9cm、7が3.8cmを測る。8~10の外面底部および底部から上方へ2~3cmの範囲には回転ヘラケズリが施され、それ以外の器面調整は摩滅により明確でない。復原口径は8が15.7cm、9が17.0cm、10が15.7cmで、器高は8・9が4.0cm、10が4.8cmを測る。11は摩滅により調整不明だが、復原口径は16.0cm、器高は5.3cmである。

皿 (第256図12~15) 12の底部には糸切り痕が残り、口径は9.1cm、器高は0.9cmを測る。13の口径は13.5cm、器高は1.9cmで、底部外面には指頭圧痕が残り内面にはミガキが施される。14の底部外面には回転ヘラケズリが施され、口径14.4cm、器高1.0cmを測る。15の口径は19.1cm、器



第 256 图 谷地区出土土器实测图 1 (1/3)

高は3.7cmでミガキが内外面に施されるが、内面のミガキは放射状である。

鉢（第256図19・20） 19は復原口径8.5cm，器高7.1cmでミニチュア的なものであるかもしれない。内面には指頭圧痕が多く残り，外面にはヘラケズリが施される。20は口径22.1cm，器高14.0cmとかなり大きく，内外面にはケズリが痕跡的に窺える。

甕（第256・258図16・17・31～33） 甕は16が口径11.9cmと比較的小さく，17が15.9cm，31が15.8cm，32が20.1cmと大きい。16の外面にはハケ，内面にはナデが施される。17は摩滅により内面にケズリが残るだけである。31の内面はナデ，外面はハケで，この外面の胴下半部には黒斑が付く。32は内外面ともハケである。33も内外面ともハケだが，内面の底部付近にはそれ以前のケズリが痕跡的に窺える。なお，32・33は包含層からの出土である。

手捏ね土器（第256・257図18・29） 18は口径5.2cm，器高2.5cm，29は口径4.5cm，器高3.0cm。

タコ壺（第256図21） 復原口径7.2cm，器高9.0cmのタコ壺で，口縁部は内傾する。内面には指頭圧痕が，外面の底部付近には工具痕が残る。

土 錘（第257図22～28） 22・28以外は完形品で，3.4～6.1cmと長さには幅があるが，孔径は4～5mmの範囲に収まる。調整はすべてナデ。28は棒状の土錘で，孔径8mmで横断面形態は頭部隅丸方形，それ以下

は円形を呈する。

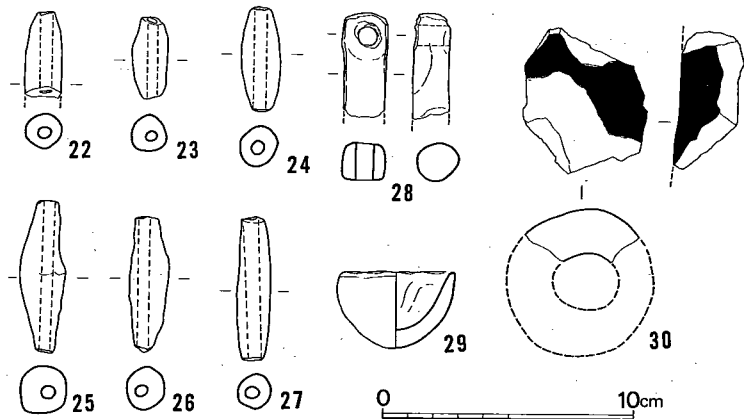
鞆（第257図30） 30は鞆で，復原径は6cm程度である。外面は二次火熱により灰青色に変色する。

須恵器（第258～263図）

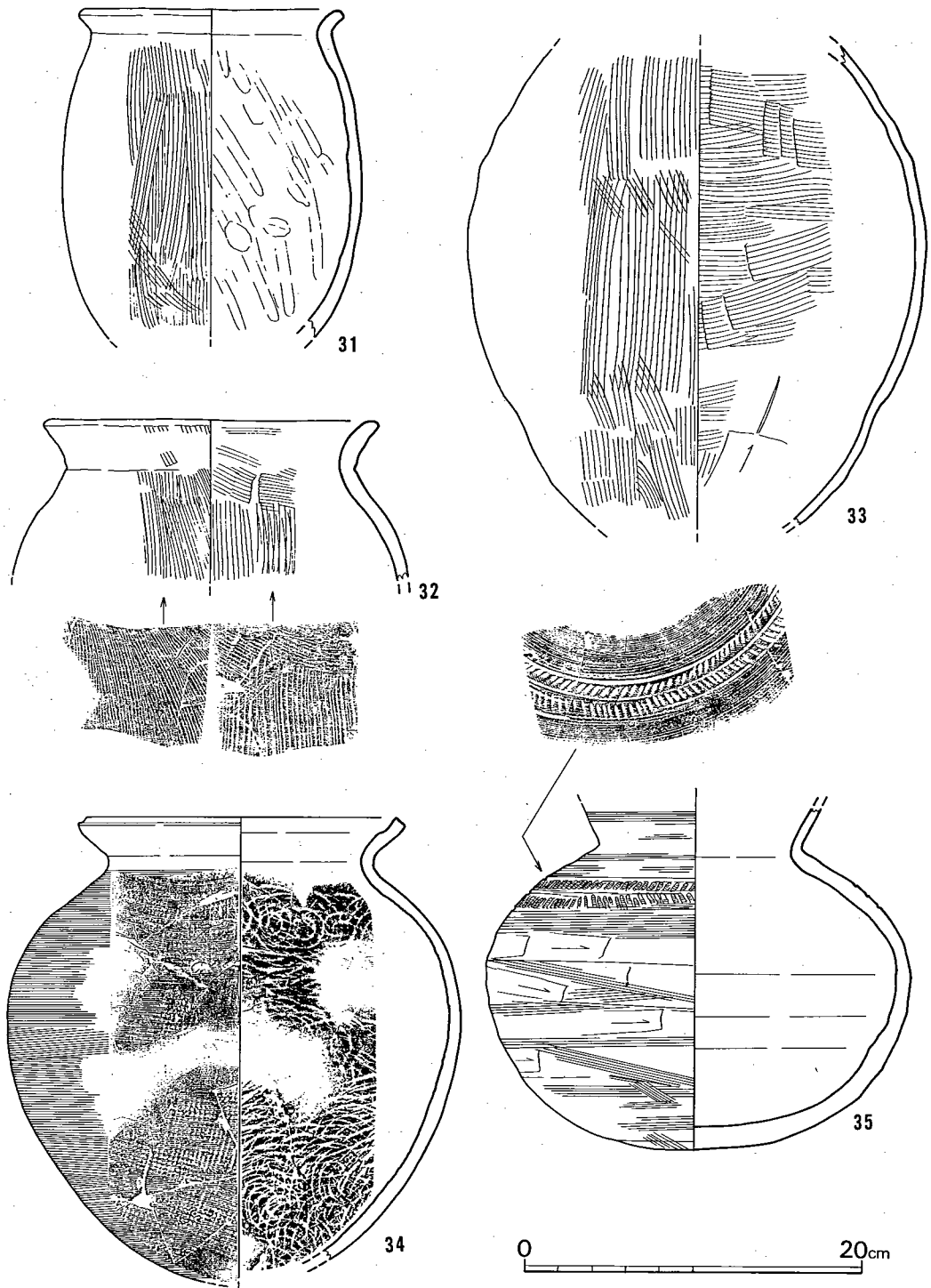
蓋（第259・261図

36～56・91） 蓋は器

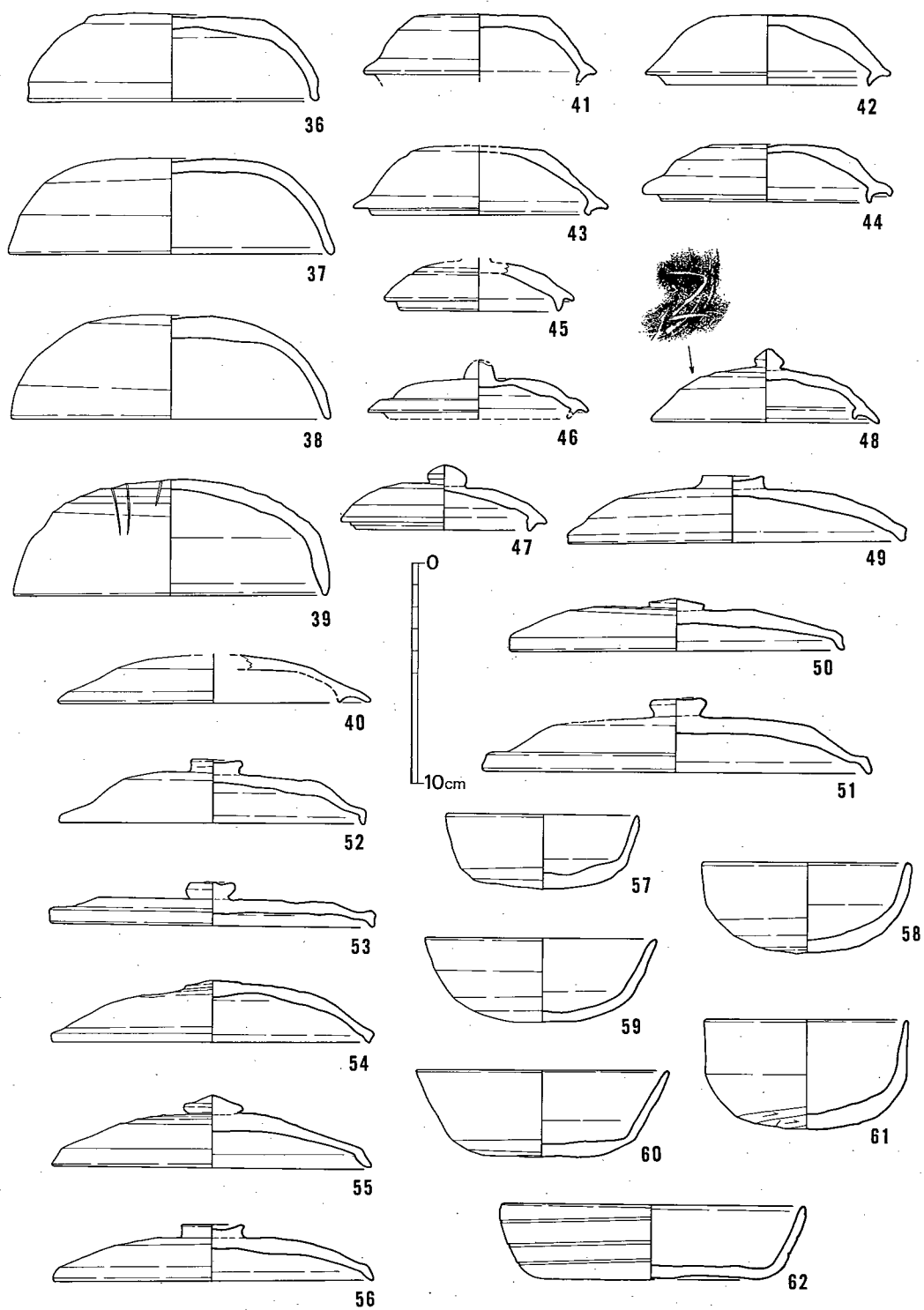
種的には坏蓋（36～43・48～56）・壺蓋（44～47）・高坏蓋（91）とに分かれるが，ここでは器形と口縁部の形態に基づいて分類・説明する。36～39は天井部から口縁部にかけて内弯し，口縁部は直線的で端部は丸く仕上げられる。36～38の器面調整はナデ。39の天井部外面には回転ヘラケズリが施された後にナデという調整方法を採用し，その後3本の短沈線文がヘラ記号としてほぼ平行に記される。また天井部内面には青海波の当て具痕が残る。この4点に関しては，復原口径13.8～14.7cm，器高4.2～5.1cmの範囲に収まる。40～44は口縁部が受け口状で撮の付かない蓋である。このうち41～44については口径10.8～11.5cm，器高2.6～3.2cmと小さく，天



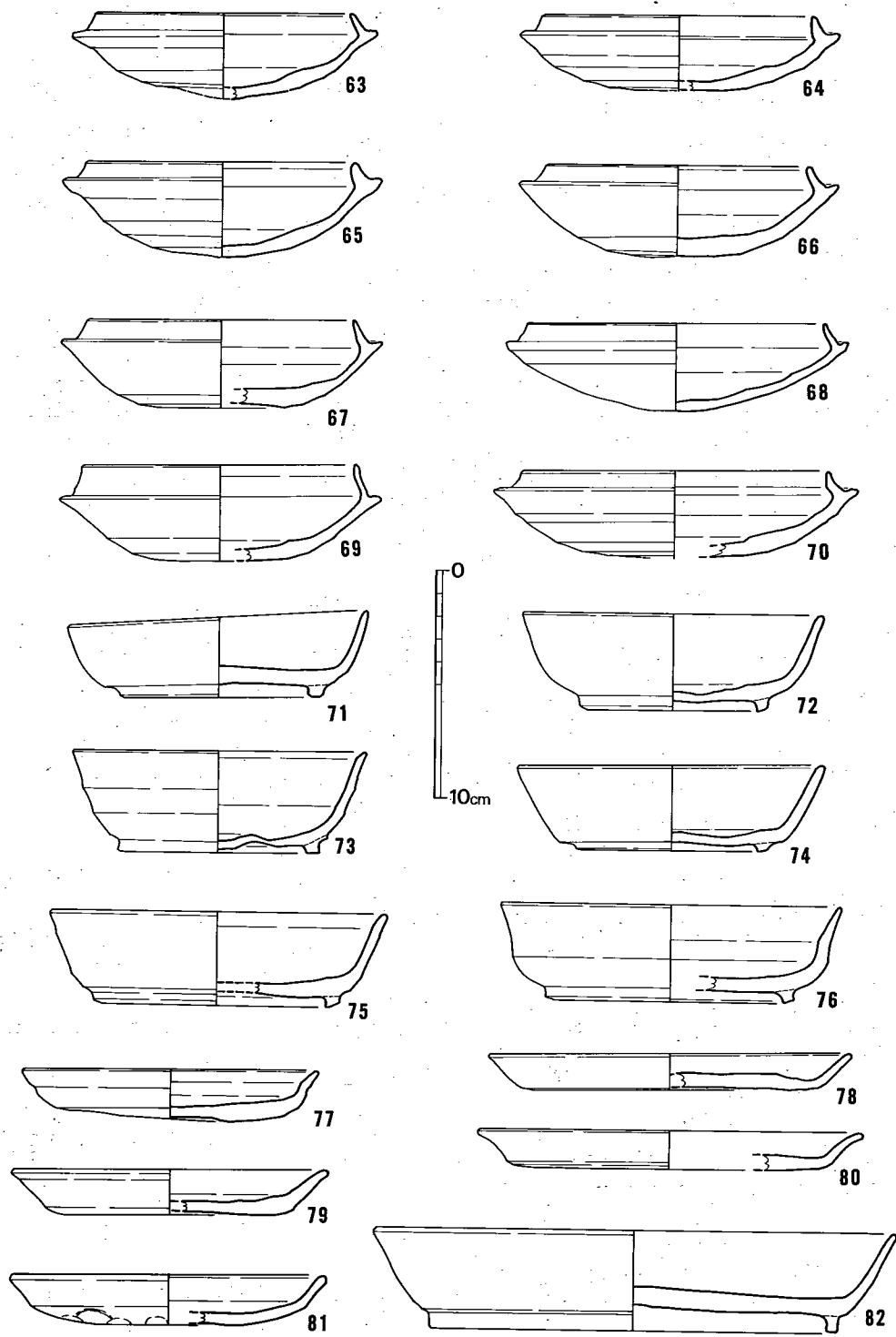
第 257 図 谷地区出土土器実測図 2 (1/3)



第 258 图 谷地区出土土器实测图 3 (1/4)



第 259 图 谷地区出土土器实测图 4 (1/3)



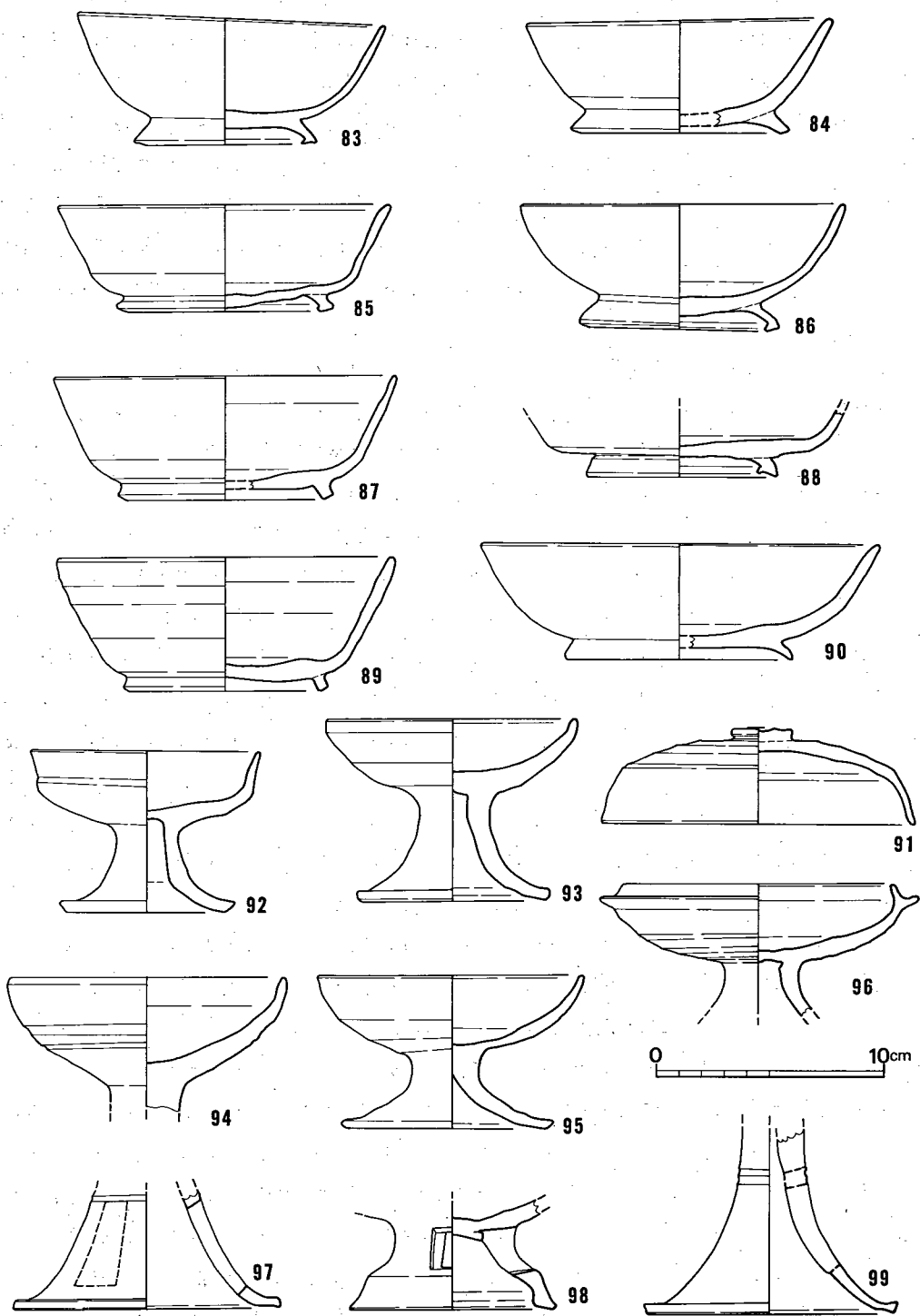
第 260 图 谷地区出土土器实测图 5 (1/3)

井部外面の調整は、41・43が未調整、42が静止ヘラケズリ、44が回転ヘラケズリの後のナデである。受け口部はいずれも内側が長い。40の天井部外面には回転ヘラケズリが施され、内面には漆が塗布される。44～47は口縁部が受け口状になり、天井部に撮の付く壺蓋である。44～46は復原口径8.7～9.6cmと小さいが、47は10.6cmでやや大きい。天井部外面の調整はいずれも回転ヘラケズリであるが、撮を付けた後に若干ナデられている。47の外面にはヘラ記号が記され、受け口部は外側が長い。49～56は撮が付き、口縁部が内側へ屈曲する坏蓋である。天井部外面の器面調整は50・51・55・56が回転ヘラケズリ、49・53がナデ、52・54は未調整である。91は高坏の蓋で、天井部外面には回転ヘラケズリが施される。復原口径13.7cm、器高4.4cmと比較的高い。

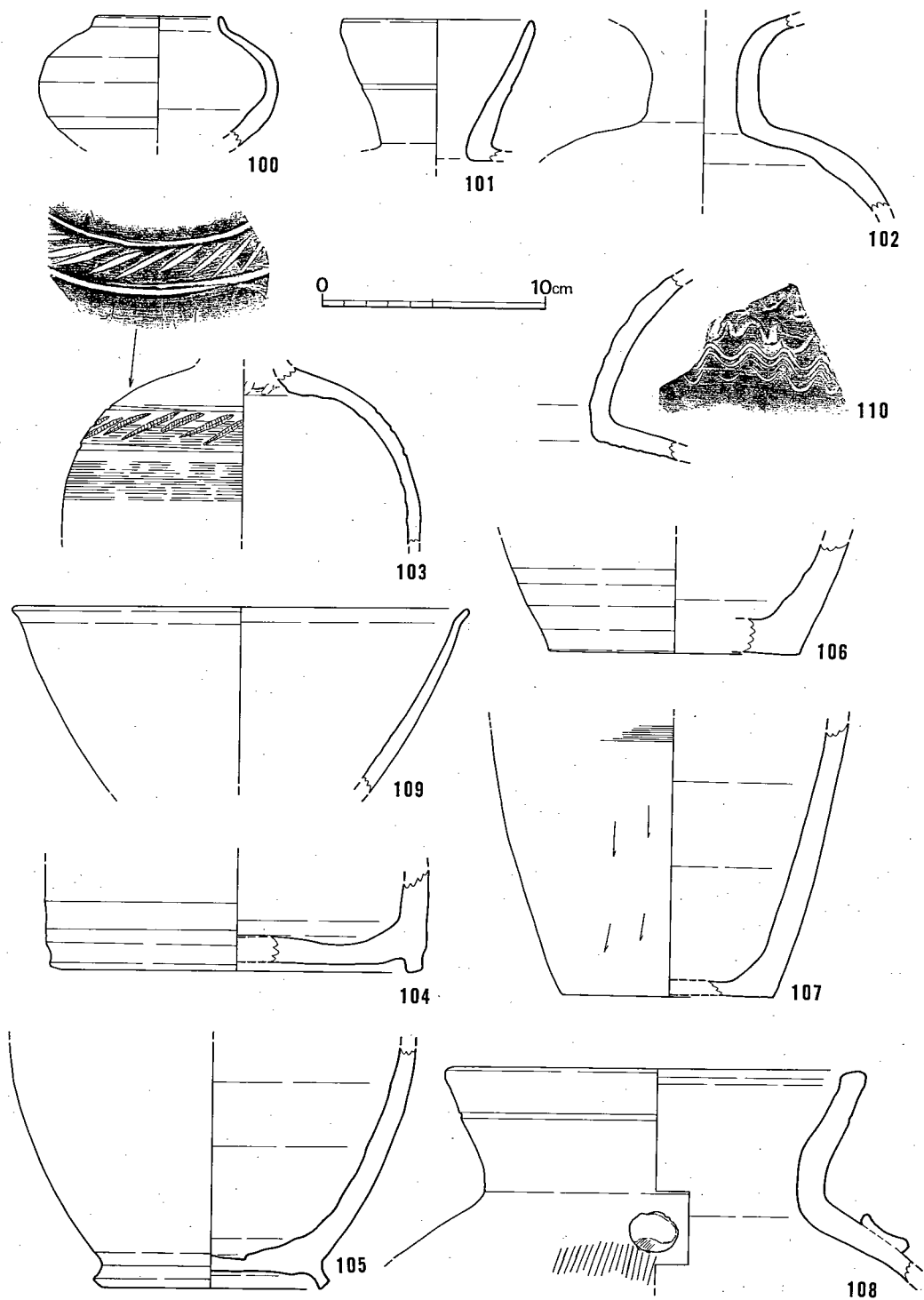
坏身（第259～261図57～76・83～90） 57～62は口縁部が直線的に立ち上がる小型の坏身である。底部外面の調整は57が未調整、58・59が回転ヘラケズリ、60・62はナデ、61は静止ヘラケズリである。57～61は復原口径9.0～11.3cm、器高3.6～4.8cmの範囲に収まるが、62は口径13.8cm、器高3.5cmと低く、むしろ皿に近い形態を有する。また62には、螺旋状に繋がる沈線文が外面に3周分施され、内面には墨が入れられていたのか黒褐色の付着物が窺える。63～70は口縁部が受け口状になる坏身である。いずれも底部外面には回転ヘラケズリが施され、口縁部の立ち上がりは69以外すべて低い。65はいわゆる赤焼き土器で、外面には黒斑が付く。65・69の胎土は実に粗く、3mm前後の砂粒が多量に含まれる。65で復原口径は11.9cm、器高4.3cmを測る。71～76・83～90は高台付きの坏身である。71～76の高台は直線的であるのに対し、83～90のは外側に開いたり、端部が受け口状になったりする。また83・84・86・90は内弯する器形で、他と若干異なる。85・86の底部外面にはヘラ起こしが窺えるが、他の器面調整はすべてナデである。71は全体的に歪んでおり、口径13.1cm、器高3.6cmを測る。74の高台は低く断面形態も丸みを帯びる。復原口径13.5cm、器高3.8cm。87はいわゆる赤焼き土器で、復原口径15.2cm、器高5.4cm。90の高台は舌状に尖り、復原口径17.6cm、器高5.4cmを測る。

皿（第260図77～82） 77～81については、口径12.9～17.2cmとかなり幅があるが、器高は1.7～2.1cmとさほど差がない。底部外面の調整は78・80が回転ヘラケズリ、77は未調整、79・81はナデとさまざまで、81には指頭圧痕が多く残るが、口縁部はいずれも緩やかに外反する。82は高台付きの皿とした。復原口径23.0cm、器高4.4cmで復原底径は18.0cmを測る。

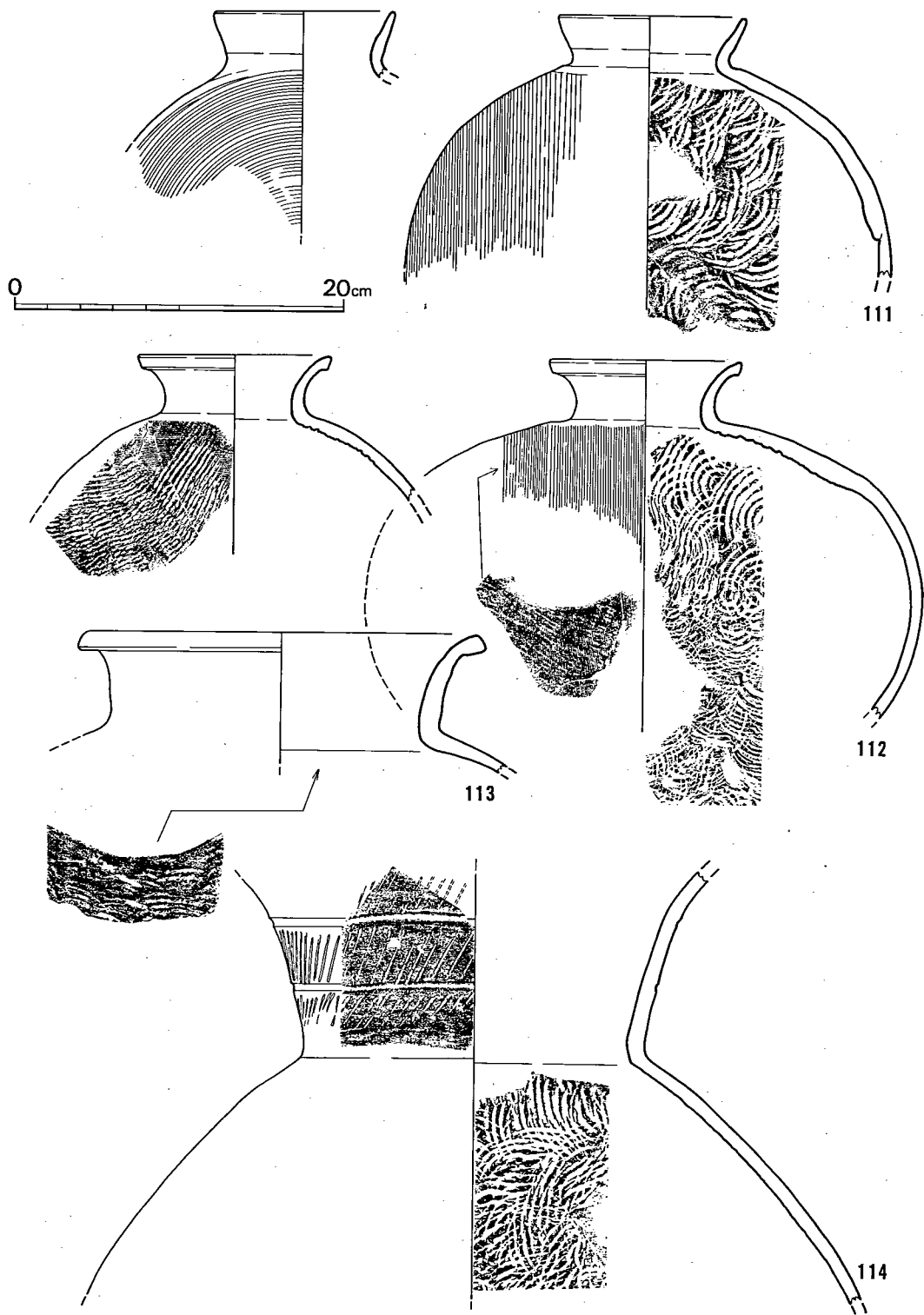
高坏（第261図92～99） 坏部については92～95のように口縁部が直線的に立ち上がるものと、96のように受け口状になるものに分かれる。脚部については、おそらく92～95のような坏部に付くような低くて透孔の施されない92・93・95の一群と、96に付くような高く透孔や沈線文が施される一群に分かれる。92～95の器面調整はナデで、92の口径は10.0cm、器高7.2cm、95の復原口径は11.8cm、器高6.8cmを測る。94には浅くて幅の広い沈線文が2本巡る。96の器面調整はナデで、口径は12.1cm、口縁部の立ち上がりは低い。97の上端部には沈線文が見ら



第 261 图 谷地区出土土器实测图 6 (1/3)



第 262 图 谷地区出土土器实测图 7 (1/3)



第 263 图 谷地区出土土器实测图 8 (1/4)

れ、2段の透孔が施されていたと考えられる。98の透孔は1段4方向、99には2条沈線文の上下に2段2方向が施される。脚部の調整はいずれもナデである。

壺 (第262図100~108) ここでは100~108の土器をとりあえず壺として扱ったが、実際には他の器種も含まれているようである。100は短頸壺で復原口径は9.7cm、外面の底部付近には回転ヘラケズリも見られるが、他はナデである。101は平瓶の口縁部であろうか。調整はナデで、外面には沈線文が1本施される。102は長頸壺になろうか。口縁部は強く外反し、頸部には焼け膨れが多い。調整はナデ。103の外面にはカキ目の後に2条の沈線文が施され、さらにその間を充填するかのように斜位の櫛描き刺突文が施される。内面の調整はナデ。104~107の底部については全体の器形がはっきりしないが、若干の説明を行なうと、104・105は高台が付く底部である。104の器面調整は外面が胴部・底部とも回転ヘラケズリ、内面ナデで、底部の復原径は17.0cm。105は外面胴部には回転ヘラケズリが施されるが、底部は未調整。内面はナデで、底部の復原径は11.0cm。106の外面胴部は回転ヘラケズリで、外面底部と内面にはナデが施される。107の外面胴部には上部にカキ目、下部に縦方向のケズリが施される。底部外面と内面はナデで、底部の復原径は10.0cmである。108の胴部上端には径2.5cmの円形浮文が付着される。胴部の外面にはハケが、内面には青海波のタタキが施される。復原口径19.0cmで、全面に自然釉が付着する。

鉢 (第262図109) 109は復原口径21.0cmの鉢で、器面調整はナデである。

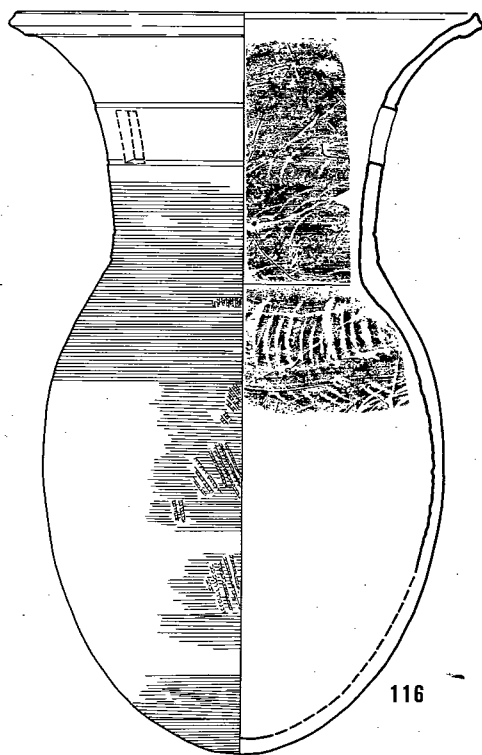
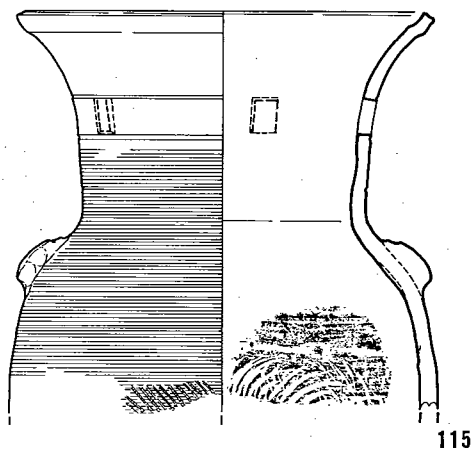
横瓶 (第263図111・112) 111は口縁部が歪んでおり、口径は最高で6.1cm、最低で5.2cmを測る。外面にはカキ目、内面には青海波のタタキが施される。口縁端部は舌状に仕上げられる。112の復原口径は11.8cmで、外面にはカキ目、内面には青海波のタタキが施される。口縁端部は肥厚し若干外反する。

壺 (第258図34・35、第262図110、第263図113・114) 34は口径19.4cm、残存高26.5cmで、外面には平行タタキの後にカキ目が、内面調整には青海波のタタキが施される。35の胴部最大径は24.5cmで、外面にはカキ目の後に横方向のケズリと2条で綾杉状の刺突文が施される。内面調整はナデ。なお、この土器は包含層からの出土である。110の頸部には外面に波状文、内面にナデが、胴部には外面に平行タタキが、内面に青海波のタタキが施される。113の復原口径は23.8cmで、胴部の内面に青海波のタタキが施される以外はすべてナデである。114の屈曲する部分の径は21.8cmで胴部の外面には平行タタキが、内面には青海波のタタキが施される。頸部の内面はナデだが、外面には沈線文の間に斜位の短沈線文が充填される。

特殊壺 (第264図115・116) 谷地区29区粘土層からは、頸部に透孔を持つと考えられる特殊な長胴の壺形土器が2個体分出土した。115は復原口径21.0cm、残存高22.0cmを測り、色調は濃い灰色を呈する。口縁部は緩やかに外反して玉縁状に肥厚させ、端部には凹線状の凹みを持たす。頸部には3本の沈線文が施され、上2本の間には長方形の透孔が穿たれる。頸部と胴部の境は

稜こそ持たないが、116より強く屈曲し、長胴になるであろう胴部へと下がって行く。胴部の肩の部分には縦形の把手状の突起が最低2つは付くが、それが二耳になるのか四耳になるのかは明らかでない。口縁部・頸部の器面調整は内外面ともナデ。胴部は外面が斜位の平行タタキの後にカキ目を施し、それから突起を付ける。内面には青海波のタタキが残るが、その後のナデにより一部消されている。116は115とほぼ同様の器形・施文・透孔を有するが、細部に亘って異なった特徴を見せ、明らかに115とは別個体の土器である。口縁部は115よりも大きく開き、玉縁状に肥厚させた端部には凹線状の凹みを持たすが、形態的には115と微妙に異なる。頸部には2本の沈線文が施され、その間に長方形の透孔が穿たれる。透孔は、5ないし6方向になろう。頸部と胴部の境には1.5cmの間隔で2本の沈線文が施され、稜はもちろん屈曲もほとんどすることなく、極めて緩やかに長胴の胴部へと続いて行き、さらに丸底の底部に至る。復原口径24.2cm、胴部最大復原径20.5cm、復原高39.2cmを測り、色調は比較的淡い灰色を呈する。外面の器面調整は、口縁部から頸部の透孔までナデであるが、透孔から底部までは平行タタキの後にカキ目を施す。内面の口縁部・頸部はナデ、胴部には青海波のタタキが窺える。当初、器台という認識で復原作業を進めたが、全体のプロポーションや底部形態等から、とりあえず頸部に沈線文や透孔を有する長胴形の特殊な壺という認識に至っている。

(水ノ江)



墨書土器 (図版132, 第265図)

本遺跡からは2点の墨書土器が出土した。1

第264図 谷地区出土土器実測図9 (1/4)

は14号溝から、2は谷地区36区バフン層からの出土であるが、墨書土器ということで敢て谷地区出土遺物の項で一括して説明を行なう。いずれも須恵器の高台付き坏で、器面調整はナデ、高台は潰れたように低くなり、8世紀中葉に位置づけられよう。2の外面はいぶされて黒くなり、内面は炭化物か墨が付着しているようである。

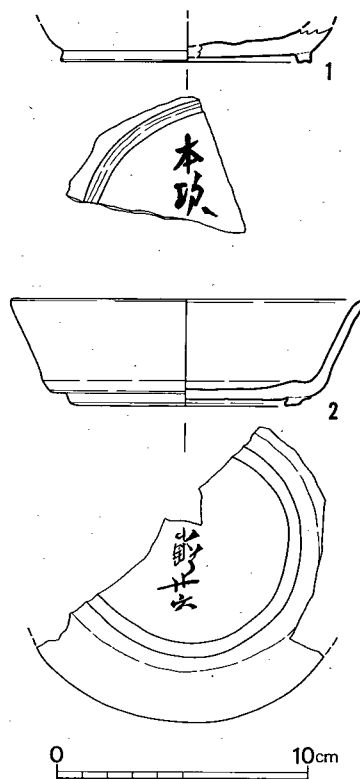
1の底部外面には墨書があり、「本項」と判読した。第1字の墨は極めて薄い、赤外線テレビによる観察などを参考として判読した。「項」にはうなじ・首筋・事柄などの意味があるが、これが何を意味するかは明らかでない。復原底径は10.0cmを測る。

2の底部外面には「小口廿六」と墨書されている。第2字は偏の下端が不鮮明であるため断定を保留したが、字形的には「野」に近似する。小野とすれば、氏名の可能性が考えられるが、同氏は広く全国に分布する。また当地方に存在したかどうかは明らかでないが、地名としても見られる。いずれにしても、これだけでは判断しがたい。なお、「廿六」が何を意味するのかわかに判断できないが、序数詞ではないだろうか。復原口径14.2cm、復原底径9.5cm、器高4.3cmを測る。

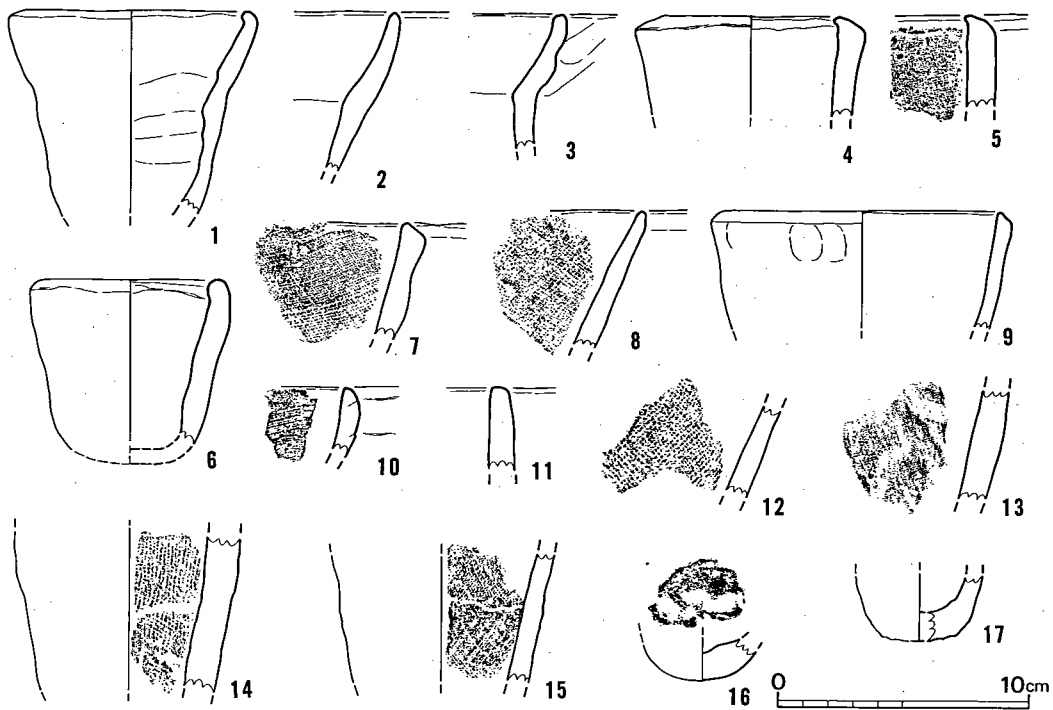
(倉住)

製塩土器 (第266・267図)

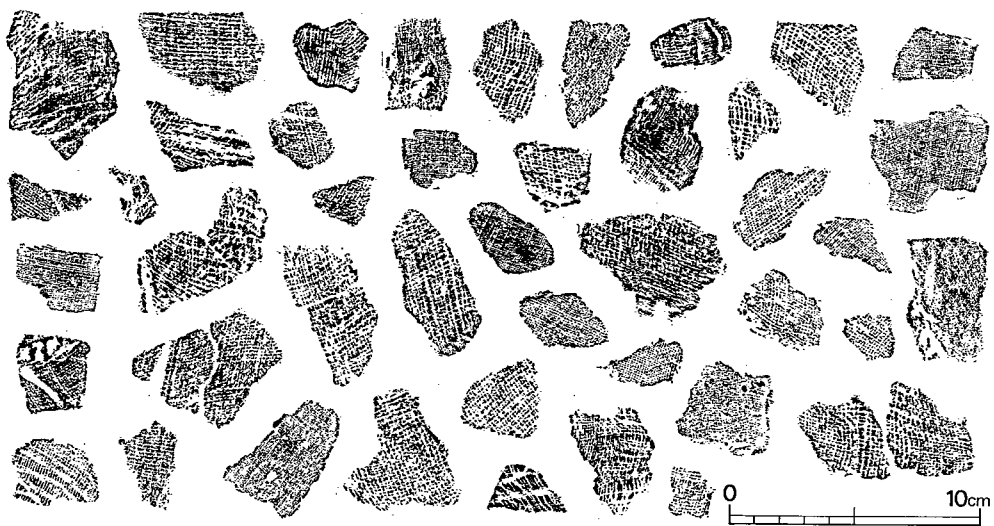
本遺跡から出土した製塩土器のほとんどは谷地区からの出土で、20・22・24・36区の粘土層に特に集中する。谷以外では、28号住居跡から1点だけ(第135図255)出土している。総破片数は約350点に及ぶが、いずれも小破片ばかりで図示できたのは17点に留まる。復原口径は8～21cmの範囲に収まるが、器高の測れるものはない。器壁厚は6～12mmとかなりの幅があるが、その多くは10mm前後と厚い。器形的には口縁部付近で内面に明瞭な稜を作るように外側へ屈曲するもの(1～3)と、直線的に立ち上がり外側へ開くもの(4～11)とに分かれる。口縁端部の形態は、内側へ摘み出されるもの(1・4～6)、丸く仕上げられるもの(2・3)、平坦面を作りそれが上ないし外側を向くもの(7～11)の3種からなる。器面調整はナデで多くの指頭圧痕が残るが、5・7・8・10・12～16の内面には布目圧痕が窺える。第267図では製塩土器の内面に残った各種布目圧痕の拓影を提示した。なお、底部は丸底である。



第 265 図 墨書土器実測図 (1/3)



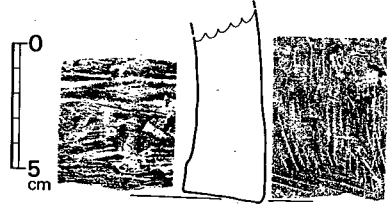
第 266 图 谷地区出土製塩土器实测图 (1/3)



第 267 图 谷地区出土製塩土器拓影 (1/3)

埴輪 (第268図)

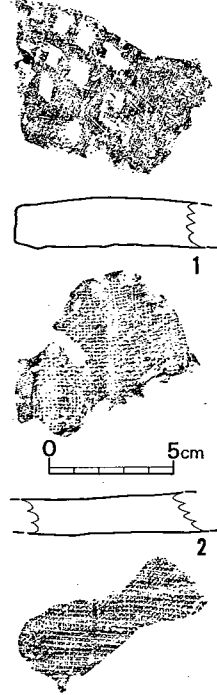
谷地区8区粘土層からは、埴輪の底部片が1点出土している。外面には主に縦方向、内面には横方向のハケ目が窺える。器壁厚は3.1mmを測る。6世紀代に属しようか。本遺跡では11号土壙からも埴輪の底部片(第219図50)が1点出土しており、本遺跡内もしくはその近辺にはかつて古墳があったと推定される。



第 268 図 谷地区出土埴輪実測図 (1/3)

瓦 (第269図)

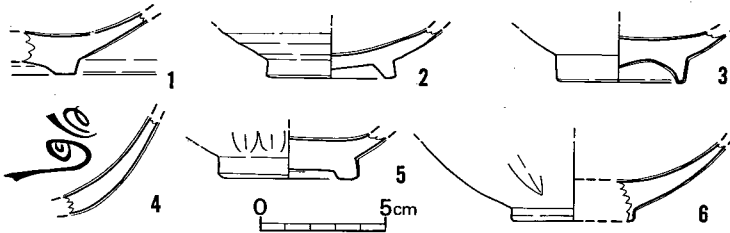
本遺跡からは須恵質の瓦が2点出土した。1の外面には格子目のタキギが、内面には布目圧痕が残り、厚さは1.9cmを測る。2の器面調整は外面が板ナデで、内面には布目圧痕が窺える。厚さは1.5cm。



第 269 図 谷地区出土瓦実測図 (1/3)

陶磁器 (第270図)

1は口縁部が玉縁状になる白磁の底部で11世紀代のものである。33区黒褐色土出土。2の白磁は29区地山直上出土で、底径5.3cm。4～6は龍泉系の青磁でいずれも13世紀代に属する。4は35区黒褐色土出土で、内面には草花文が施される。5と6の外面には連弁が施されしのがかすかに窺える。5は3区出土で、底径は5.6cm。6は5区地山直上出土で、底径5.0cm。3は3区砂層出土の陶器で、高台の端部以外の全面に淡黄白色の釉がかかる。底径は5.3cmで、近世のものか。



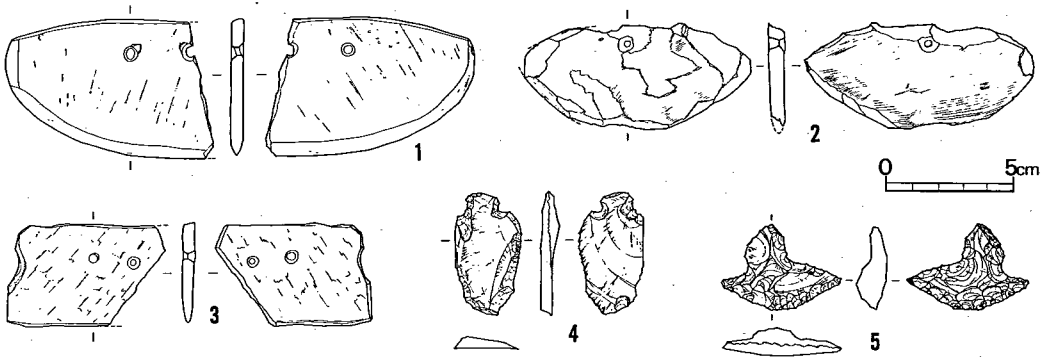
第 270 図 谷地区出土陶磁器実測図 (1/3)

(2) 石 器 (第271~276図)

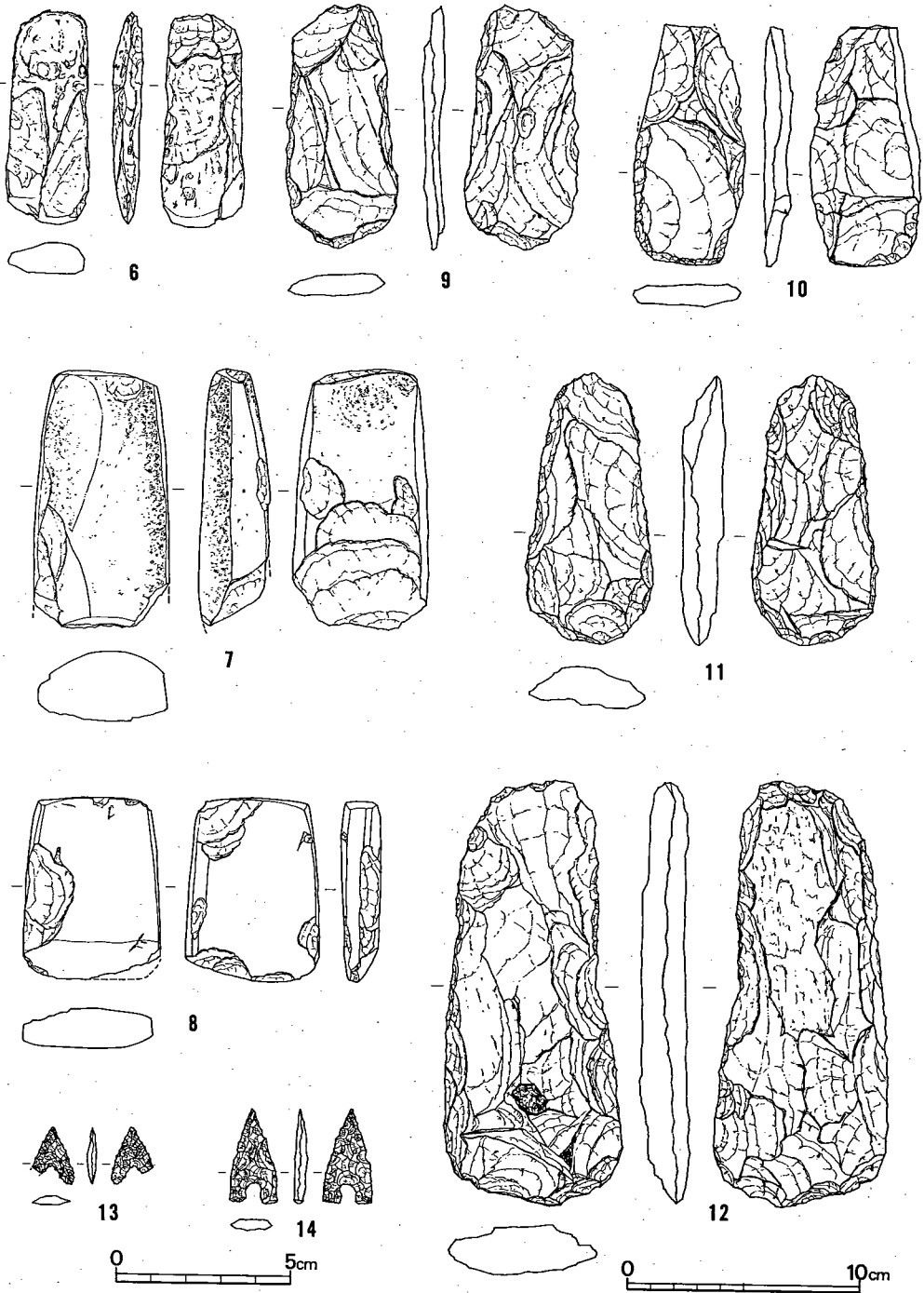
本項の冒頭でも述べたように、ここでは包含層出土の石器と谷地区出土の石器を一括して取り扱った。包含層出土の石器とは古墳時代以降の遺構に混入した縄文・弥生時代の石器で、谷地区出土の石器とは谷地区から出土したすべての石器を指すことを断わっておきたい。なお、実測図に付けた番号は両者の通し番号である。

石庖丁 (第271・274図 1~3・18~25) 1は2号落ち込みから出土した淡灰青色を呈した片岩系の石材で、縦幅5.5cm、厚さ5mmを測る。2には紐通し穴が1つしか穿たれていない石庖丁で、片岩系の石材を使用する。横幅9cmで、1号落ち込み出土。3は結晶片岩製で、平面形態は長方形になろう。端部には紐擦れが窺える抉りがあり、ここに紐を掛けたと考えられる。26号溝出土。18~25は谷地区の出土である。18は粘板岩製で、32区粘土層出土。19も粘板岩製で、20区砂層出土。横幅13.4cm、縦幅4.4cm、厚さ8mmで、重量は70gを測る。20は砂岩で5区粘土層出土。21は粘板岩で36区粘土層出土。22も粘板岩で19区出土。23は恐らく結晶片岩製の石庖丁で、横幅9.0cm、縦幅5.1cm、厚さ8mm、重量72gを測る。両端部に抉りを持ち、ここに紐を掛けたものと考えられる。貫通していない穴が1つだけあるが、位置はかなり上の方にある。30区バフン層出土。西部瀬戸内で見られる石庖丁に類似する。24は砂岩製で、35区地山直上出土。25は結晶片岩製の打製石庖丁で、出土地点は不明。

磨製石斧 (第272・274・275図 6~8・26~35) 6は蛇紋岩製の片刃石斧で、2号溝より出土。長さ9.2cm、幅2.3cm、最高厚1.1cmで重量は61gを測る。両側縁の中位には紐擦れの痕跡があり、片刃という刃部形態からも膝柄横斧であったと考えられる。7は玄武岩製で11号土壙からの出土。全面に敲打痕が残る。8は蛇紋岩製で1号落ち込み出土で、長さ7.9cm、幅5.9cm、最高厚1.7cm、重量152gを測る。一応片刃石斧ではあるが刃部は1方向からの作出で、また長さが異常に短いこと等から、本来は10~12cm程度の長さがあり、それが欠損後再加工されたも



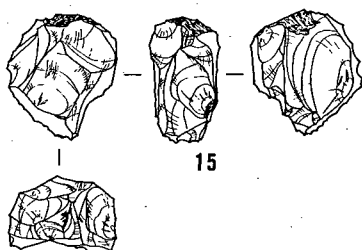
第 271 図 包含層出土石器実測図 1 (1/3, 5は1/2)



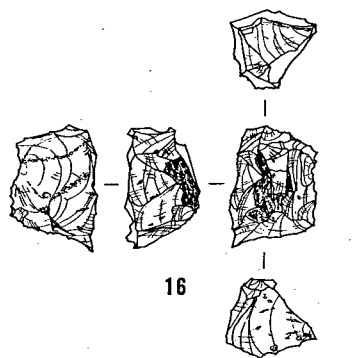
第 272 图 包含層出土石器实测图 2 (1/3, 13·14(±1/2))

のと考えられる。26は頁岩のような石材で3区粘土層出土。幅1.2cm、厚さ9mmの片刃石斧で、ノミ的機能を果たしていたと考えられる。27は11区粘土層出土の蛇紋岩製扁平片刃石斧で、幅3.8cm、厚さ5mmを測る。14区砂層から出土した28は緑泥片岩であろうか。長さ7.1cm、幅2.5cm、厚さ9mm、重量20gを測る扁平な片刃石斧ではあるが、基部が細くなる平面形態やレンズ状になる断面形態に特異性が見られる。29は33・34区出土の乳棒状蛇紋岩製石斧であるが、かなり摩滅しており器面の剥落が著しい。30は2区、31は7区砂層、32は3区出土で、いずれも蛇紋岩製の両刃石斧である。厚さは2.4~2.8cmと比較的厚く、直柄縦斧の可能性が高い。33は29区バフン層出土の蛇紋岩製石斧である。幅3.9cm、厚さ2.5cmで、基端部には面を作る。34は砂岩製で2区粘土層出土。摩滅により表面の剥落が著しい。幅7.3cm、厚さ4.1cm。35は25区粘土層から出土した蛇紋岩製の石斧で、基端部には面を作る。幅6.4cm、厚さ2.4cm。

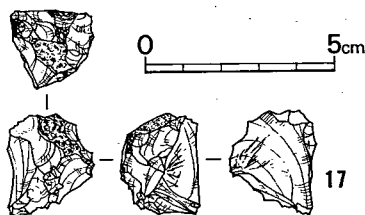
打製石斧 (第272・275図9~12・36) 打製石斧はすべて結晶片岩製である。9は26号溝出土



で、長さ10.4cm、幅4.9cm、厚さ8mm、重量54gを測る。10は28号溝出土で、幅4.8cm、厚さ10mm、重量81gを測る。11は14号溝出土で、長さ11.5cm、幅5.4cm、厚さ18mm、重量158gを測る。12は26号溝出土で、長さ18.5cm、幅7.4cm、厚さ2.4cm、重量412gを測る。基部の片面には自然面が残る。36は20区砂層出土。刃部は欠損する。



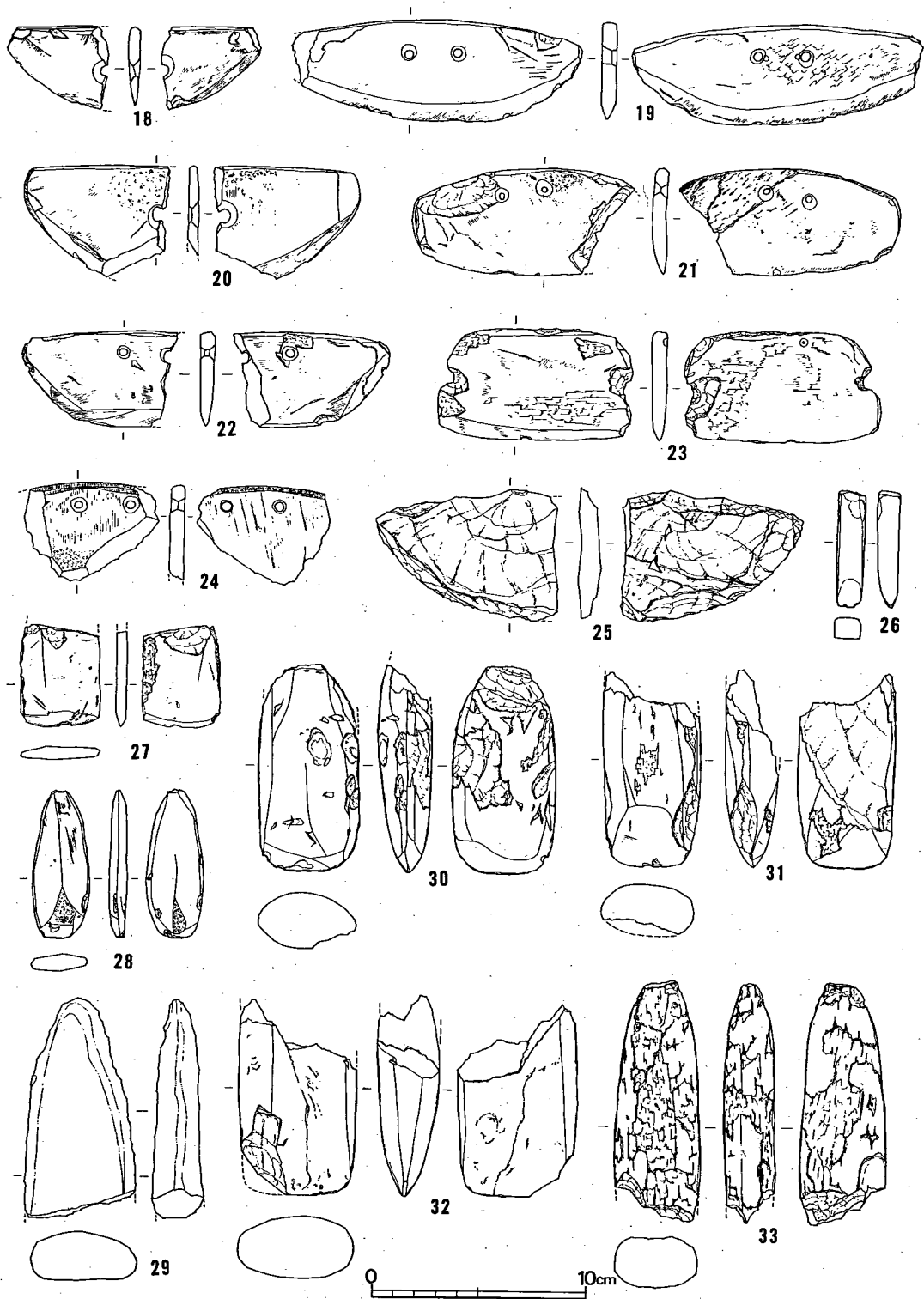
石鏃 (第272・275図13・14・40・41) 13は表採品で腰岳系の黒曜石である。14はサヌカイト製で、28号溝出土。長さ2.8cm、最大幅1.5cm、厚さ3mm、重量1.0g。40は谷地区2区から出土した腰岳系黒曜石製石鏃で、復原長7cm、復原幅4cm、厚さ4mmとかなり大きい。谷地区20区粘土層から出土した41も腰岳系黒曜石製で純度は高く、長さ1.6cm、幅1.4cm、厚さ3mm、重量0.8gを測る剥片鏃である。素材は対峙する2点の方向から打撃が加えられ剥ぎ取られた縦長剥片で、いわゆる鈴桶技法的な剥片剥離技術が用いられたと考えられる。なお、石鏃の実測図に限り縮尺は1/2である。



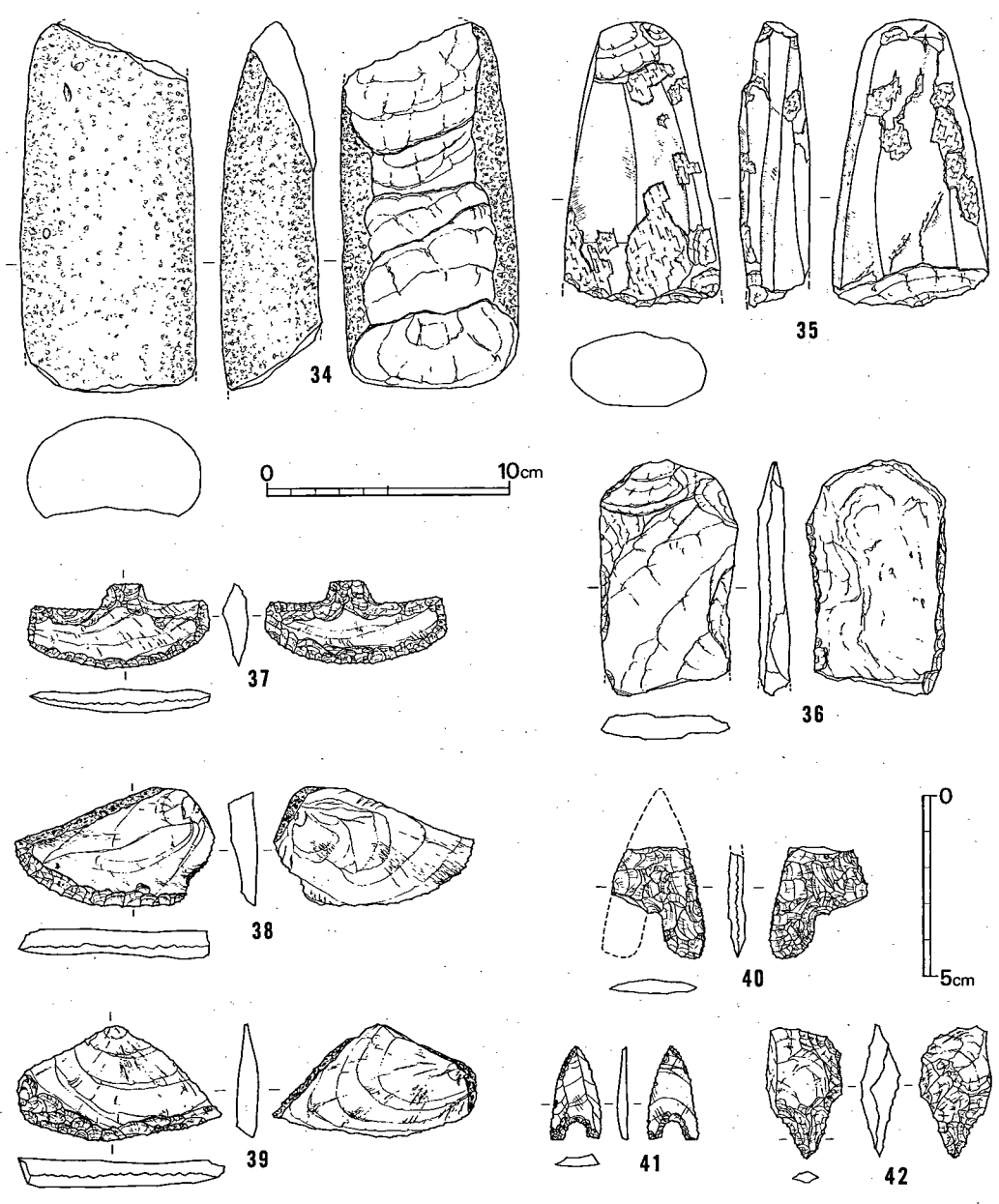
石錐 (第275図42) 谷地区5区粘土層から出土したサヌカイト製の石錐で、長さ3.6cm、幅1.9cm、厚さ9mm、重量6.6gを測る。

石匙 (第271・275図4・5・37) 4は16号溝から出土したサヌカイト製の縦長の石匙で、長さ5.1cm、幅2.5

第273図 包含層出土石器実測図3 (1/2)



第 274 图 谷地区出土石器实测图 1 (1/3)



第 275 图 谷地区出土石器实测图 2 (1/3, 40~42は1/2)

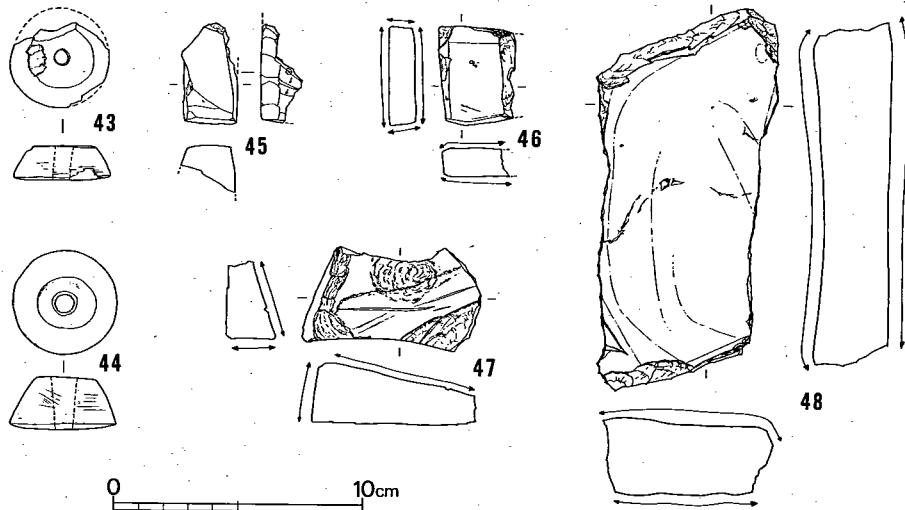
cm, 厚さ4mm, 重量7.8gを測る。5は78号竪穴住居跡のカマドの下部から出土した姫島系黒曜石である。縦3.4cm, 横4.9cm, 幅12mm, 重量9.9gの横長の石匙で, 撮の先端部には自然面が残る。谷地区13区砂層から出土した37はサヌカイト製の石匙で, 横長剥片を素材とし, 縦3.4cm, 横7.6cm, 厚さ10mm, 重量22.8gを測る。

スクレイパー (第275図38・39) いずれも横長剥片を素材としたスクレイパーで, 刃部以外の側縁にはすべて自然面を残す。38は谷地区30区砂層出土, 縦4.9cm, 横8.2cm, 厚さ11mm。39は谷地区11区粘土層出土, 縦4.6cm, 横8.6cm, 厚さ9mm。

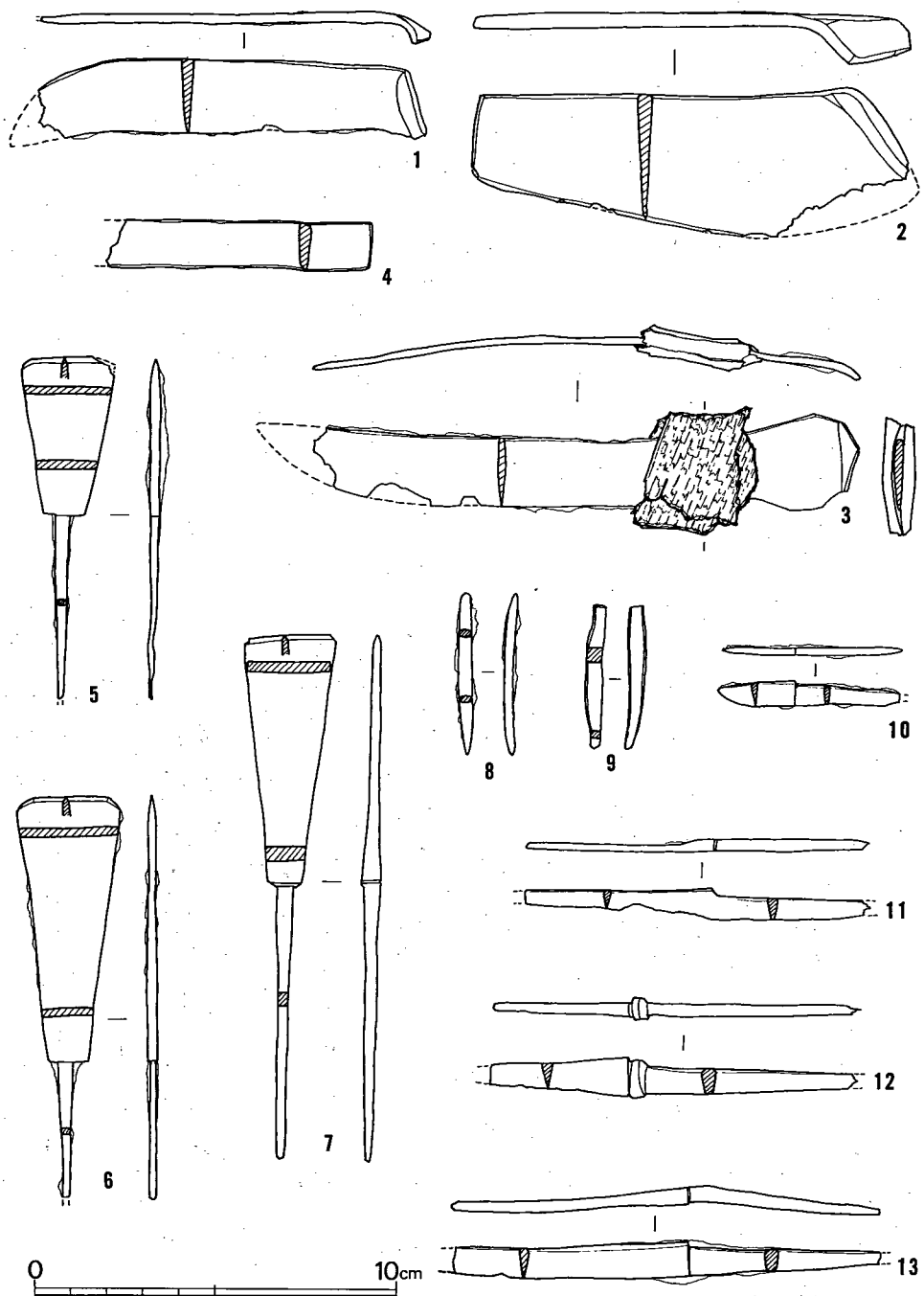
石核 (第273図15~17) いずれも黒曜石ではあるが, 15には透明感がなく縞目が入り, 16・17には不純物が比較的多く含まれる。15・16は11号土壙から17は28号溝からの出土で, 15と17には自然面を残し, 16には階段状剥離が窺える。あらゆる方向から剥片の剥離が行われており, また最大の15でさえ2.8×3.5cmしかないほど使い込まれていることから, これらの石核はかなり貴重品として扱われていたようである。このように小さな石核からできる剥片を素材とする製品は, 本遺跡においては石鏃以外に該当するものはない。

紡錘車 (第276図43・44) いずれも蛇紋岩製の紡錘車である。43は谷地区14拡張区の粘土層からの出土で, 径3.9cm, 高さ1.4cm, 軸孔径8mm, 残存重量25.1gを測る。44は表採された完形品で, 径4.1cm, 高さ2.0cm, 軸孔径7~10mm, 重量57.6gを測る。

砥石 (第276図46~48) 46は頁岩製の砥石で谷地区9区地山直上から出土した。端部と欠損部を除き全面に亘って研磨される。47は砂岩製で谷地区33区地山直上の出土。底面と欠損部以外は全面に亘って研磨されるが, 表面には幅2mm, 深さ1mmの浅い溝が2条走る。48は谷地区20区粘土層から出土した砂岩製の砥石で, 底面には粗い研磨痕がわずかにしか残らないが,



第276図 谷地区出土石器実測図3 (1/3)



第 277 图 谷地区出土鉄器実測図 (1/2)

表面には密な研磨が施され相当にツルツルしている。

その他(第276図45) 滑石製品であるが、全体の形状は不明。

(3) 鉄器(第277図)

ここで扱う鉄器はすべて谷地区出土である。1～3は鉄鎌でそれぞれに異なった形態を持つ。1は36区バフン層出土の内弯刃で、残存長10.4cm、幅2.1cm、厚さ3mmを測る。2は長さ12.1cm、幅4.0cm、厚さ4mmの外弯刃で、36区砂層出土。3は14区粘土層で出土した外弯刃で、残存長15.0cm、幅2.0cm、厚さ2mmを測る。基部には幅2.5～2.8cm、厚さ3mmの樹皮が巻かれたままの状態に遺存していた。5～7は鉄鏃で、6は鏃身端部が欠損するが、5・7はほぼ完全な形である。5は14区粘土層出土で、長さ9.5cm、刃部幅2.7cm、厚さ2mmである。6は1区粘土層出土で残存長11.0cm、刃部幅3.0cm、厚さ2mmを測る。7は16区拡張区で集中していた槌の子群周辺からの出土で、長さ14.3cm、刃部幅2.6cm、厚さ3mmを測る。8・9はともに釘のように細長いが、性格は不明。20区粘土層出土の8は長さ4.5cmで、断面形態は4×2mmの楕円形を呈する。9は20区拡張区の貝ブロック出土で、長さ4.0cmの断面形態は4×4mmの方形を呈する。10～13は刀子であるがいずれも欠損しており、その全容を窺えるものはない。10は7区粘土層出土の小さな刀子で、残存長5.1cm、厚さ2mmを測る。5区粘土層出土の11はかなり使い込まれている。残存長9.5cm、厚さ2mm。12は20区砂層出土で、残存長10.0cm、厚さ3mmを測る。13は20区拡張区の貝ブロック出土で、残存長11.7cm、厚さ3mmを測る。4は25区で採集された青銅製品であるが、便宜的に本項で扱った。残存長7.3cm、幅1.3cm、厚さ3mmを測る。断面形態は扁平な楕円形で刃部が作り出されているわけでもなく、性格は不明である。(水ノ江)

(4) 木筒(図版135, 第278図)

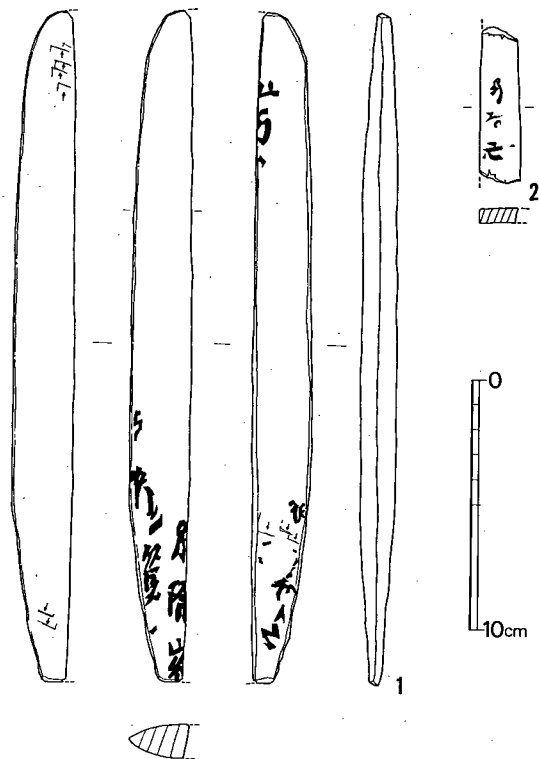
本遺跡からは2点の木筒が出土した。1は36区粘土層から、2は16区粘土層からの出土である。ともに原形をとどめていないし、墨痕も断片のかつ不明瞭であるため、各文字の判読は容易でない。後述のような各文字の残存字形や前後の関係などから推して、いわゆる習書木筒の可能性も考えられ、現状では内容的に特記すべき点は見られないといってもよいだろう。

近年は全国的に各種の遺跡からさまざまな形態の木筒の出土が報告されているが、その範疇を広く解釈するにしても、豊前地方においてはこれまでに数点の出土例が報告されているにすぎない。たとえば、京都郡豊津町に位置する豊前国府跡推定地の12世紀後半頃のものと同定される井戸から出土した呪符木筒、あるいは平安時代後半から鎌倉時代初期にかけての寺院跡に比定される豊前市の如法寺遺跡で検出された経巻片などがその代表例であろう。したがって、その意味においても、また同時に墨書土器が出土していることから見て、本木筒の出土は注目されるので、以下ではその概要を報告し、あわせて若干の所見を述べることにする。なお、釈

文の冒頭に付した黒点は表裏両面に記載があることを示す。

(1) □□□□
 □□□□
 ·□□ □□□□

便宜的に木簡としたが、形状からも明らかかなように、本来はある種の木製品であり、形態的には用途未詳の木製品の墨書したものとすなわち065型式に分類できる。現状ではいわゆる刀子のような形状を呈しているが、把ないし刀身という茎に相当する部分は見られない。仮に表とした面の墨痕の状況から見て、右辺つまり刀身という棟の部分は二次的に截取されていると判断される。また上端は若干腐蝕しているが、それによる損傷は極めて小さく、下端および左辺は原形をとどめている。表面の中央部付近に見える打撃痕を除けば、特記すべき損傷はみられない。現存法量は、長さ26.8cm、幅2.5cm、厚さ1.4cmである。



第 278 図 木簡実測図 (1/3)

表面では下端部に2行にわたって墨書され、それぞれの大きさから、右行は4文字、左行は4～5文字と推定される。面の調整状況から見て、これらは成形後に墨書されたものであり、またこの上部には墨書されなかったとみなしてよいだろう。残存する墨痕は比較的明瞭であるが、いずれも部分的に削り取られたり、右半分を欠いたりしている。そのためこれらを特定の文字に比定することはできないが、観察結果から1、2点を補足しておく。

まず、右行の第3字は阜部(こごとへん)の文字であり、隣の残存部から推せば、「除」や「際」などの文字が想定されるが、断定はできない。第4字は山部の文字であろうが、第3画に当たる横棒の右上りが極端すぎるようにも思われる。次に左行では、第2字のかなりの部分は残っているようであるが、核ともいべき部分が削り取られているので、具体的な文字の見当はつかない。この下の墨痕はこれと連続しないので、とりあえず別字とみなしたが、その左半部は削り取られており、第4字と対比すれば、第2字の下端部である可能性も否定できない。第4字がごく一部を削り取られているものの、ほぼ原形をとどめているとみなしうる。貝部(こが

い)の文字であり、字形的には「貧」・「資」・「質」などに近似するようであるが、現状ではいずれとも判断しがたい。

裏面では、上端部に3文字分、下端部におそらく3～4文字と1文字の2行になると推定される墨痕が見られるが、腐蝕のため表面以上に断片的であり、見当もつけがたい。

このように、結局のところ1文字も判読できなかった。可能性としていくつかの文字を指摘したが、そのいずれにしても具体的な成語を想定することはできない。右辺が二次的に截取されているにしても、これらが一応の成形後に墨書されたものであることからすれば、本来は何らかの意味をもつものであったとみなすべきかもしれないが、この書法から見てその可能性は小さいように思われる。この点についても明確な結論を提示しえないので、書法的には習書あるいは落書の一種である可能性を指摘するにとどめる。

(2) □□□

上下両端を欠き、左辺は現状をとどめているが、右辺はその断面から見て二次的に截断されているようである。そのため原形を推定することはできず、形態的には081型式に属する。現存分量は、長さ6.3cm、幅1.7cm、厚さ0.6cmである。現状では3文字分と推定される墨痕が見られるが、上の2文字は極めてかすかな墨痕にすぎない。第3字は「亡」のように見え、これから上下を判断した。ただ、これが「亡」なのか、あるいはたとえば「忘」のような他の文字の傍なのかは判断できない。

(倉住)

(5) 木 器 (図版137～143, 第281～292図)

本遺跡から出土した木器は谷地区もしくは谷地区内の遺構(貯蔵穴・土壇)に限られ、他の場所からは出土していない。遺構出土の木器に関しては各遺構の項で個別に説明しているので、ここでは谷地区から出土した木器についてのみ説明を行なう。

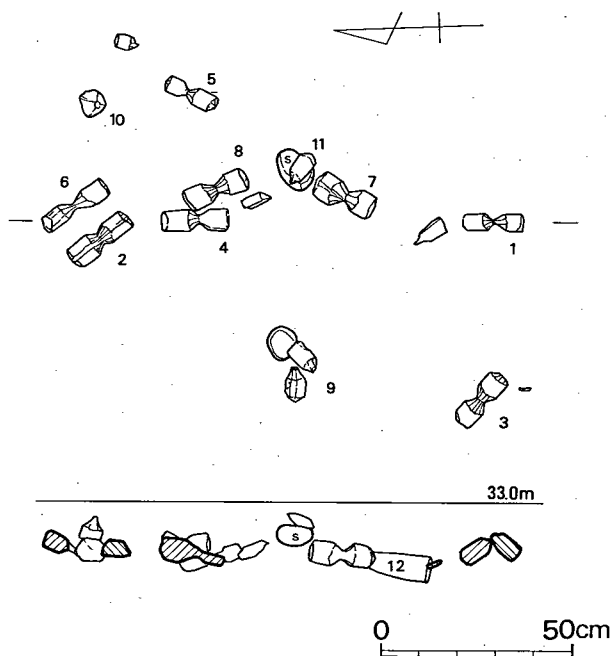
槌の子(第281図) 谷地区16区では1.5×1.5mの範囲に、12点の槌の子と1点の杵が集中して出土した。槌の子は長さ20cm、太さ6cm程度の細長い原木の両端を丸く加工し、その中央部を両方向から抉っていき、太さ3cm程度までにしたものである。いずれも長さ17.5～18cm、太さ5.5～6.0cmの範囲に収まる大きさで、統一された企画に基づく。材質は5がヤブツバキ、6がリョウブ、10がツツジである。12は杵で半分しか遺存していないが、製作方法は槌の子とほぼ同じものと考えられる。残存長27.5cm、太さ7.4cm。材質についてはカツラと鑑定されている。なお、この槌の子群とともに土器と鉄器が出土している。図示した土器は第280図の4点である。3は土師器の甕で口径は14.9cm。外面全面にはハケが、内面口縁部にはハケが施されるものの内面胴部には粗いナデが施されるだけである。1・2は須恵器の坏蓋で、2の天井部外面の調整は回転ヘラケズリである。1・2ともに復原口径15.1cmを測る。4は須恵器甕の胴部上半で、外面には平行タタキの後にカキ目が、内面には青海波のタタキが施される。鉄器は第

277図7の鉄鏃である。

櫛(第282図) 欠損しており端部しか残らないが、横4.5cm、縦2.2cm、厚さ7mmを測る。歯は1cm当たり11本ある。36区粘土層出土。

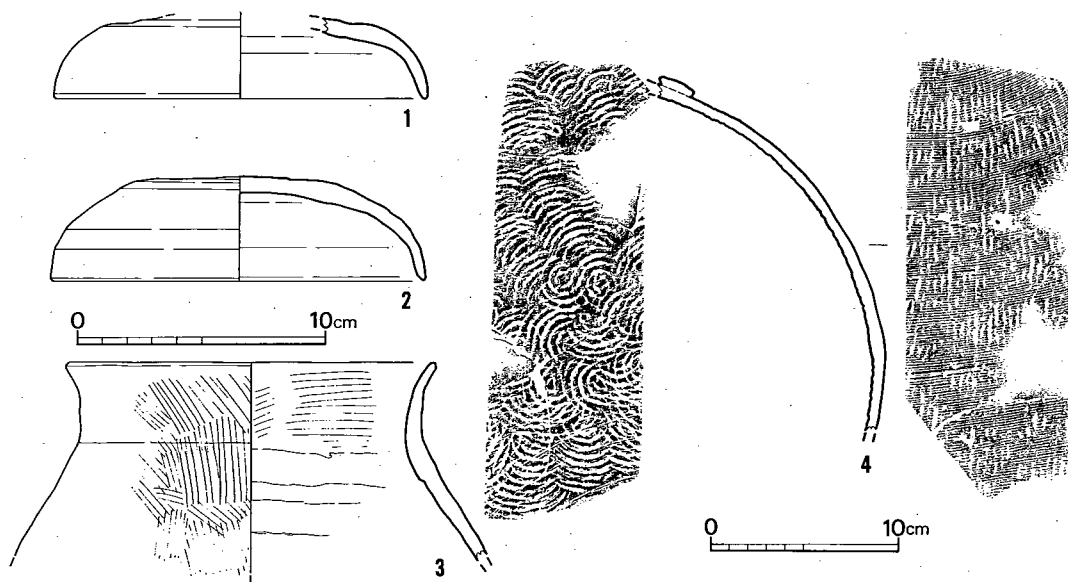
田舟(第283図) 22区の粘土層からは田舟と考えられる、薄く弯曲した板状のものを検出した。遺存状態は悪く、取り上げに際しかなり崩れた。残存長2.8cm、最大幅1.2cm、厚さ3mm。材質はカシである。

鏃(第284図3・4) 3は22区粘土層下部、4は24区粘土層下部出土で、いずれも歯と装着部がわずかに残るだけで、欠損が著しい。3は残存長24cm、厚さ2.6cm、4は残存長27.5cm、厚さ2.1cm。3は三股であろうか。材質はいずれもカシ

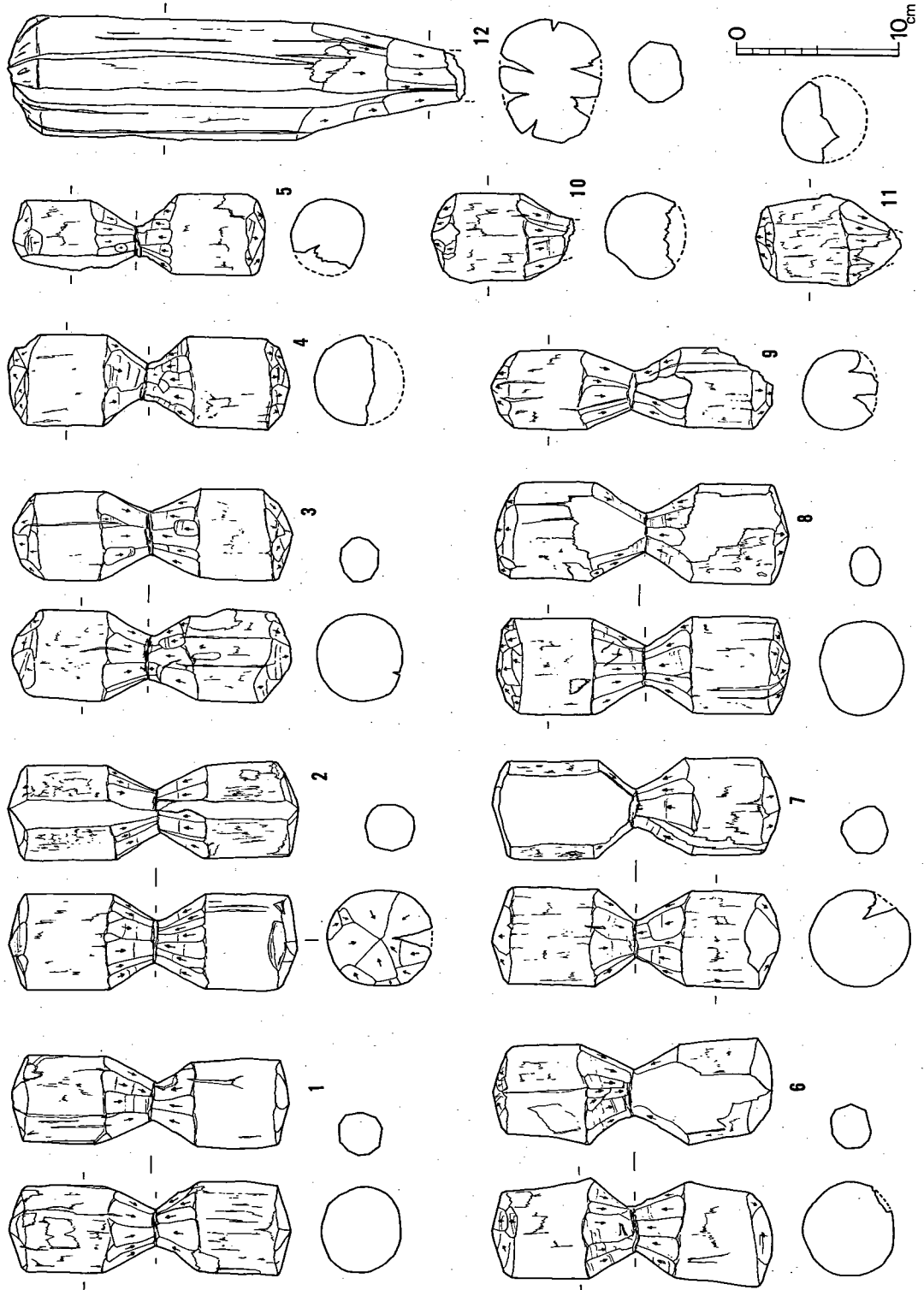


第279図 谷地区槌の子群出土状況実測図(1/20)

は22区粘土層下部、4は24区粘土層下部出土で、いずれも歯と装着部がわずかに残るだけで、欠損が著しい。3は残存長24cm、厚さ2.6cm、4は残存長27.5cm、厚さ2.1cm。3は三股であろうか。材質はいずれもカシ



第280図 谷地区槌の子群付近出土土器実測図(1/3, 4は1/4)



第 281 図 谷地区槌の子群付近出土木器実測図 (1/4)

である。

曲げ物 (第285図9~17) 9~15は曲げ物の底で、16・17はその側板にあたる。そのうち9~11には側板との接続をした桜の皮の紐が残る。9は25区粘土層出土。復原径18.2cm, 厚さ8mmで、縁辺には側板との接触痕が残る。10は3区粘土層出土。復原径8.5cm, 厚さ7mm。11は16区出土。縁辺には幅9mmの段がつくが、これは側板を固定させるものと考えられる。復原径14cm, 厚さ9mm。12は36区バ

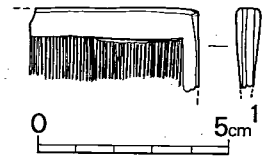
ファン層出土で、縁辺には長さ8mm, 幅3mm, 深さ3mmのほぞ穴が付く。復原径20cm, 厚さ10mm。材質はヒノキ。13は26区粘土層出土で、径11.7cm, 厚さ9mm。14は16区出土で、縁辺の両端部は幅1mmの面取りがなされている。復原径9.5cm, 厚さ9mm。15は36区バファン層出土で、復原径7.3cm, 厚さ7mm。16・17はいずれも36区

バファン層出土で、一端を尖らしている。16は長さ10.8cm, 幅1.3cm, 厚さ2mm, 17は残存長19.5cm, 幅2.3cm, 厚さ2mm。

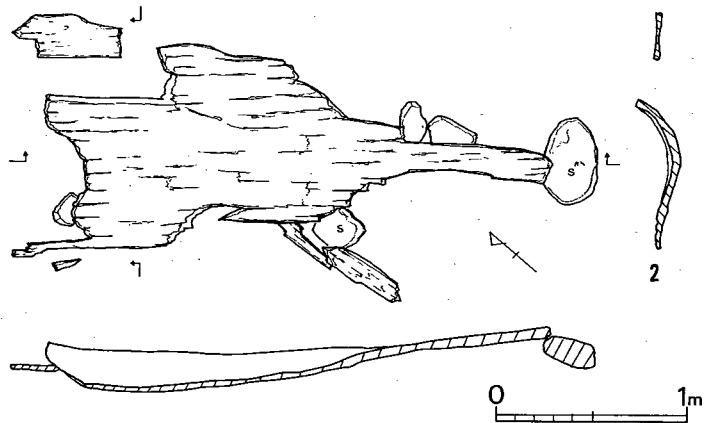
扉 (第287・291図25・56) 25は25区粘土層から出土した抉りのある扉で、長さ44.4cm, 幅18.5cm, 厚さ3.4cmを測る。断面形態が円形の突起は5cmの長さで、その反対の側縁中央部には幅6.5cm, 奥行き5cmの方形抉りがあるが、これは把手的機能を有するものであろうか。56は36区砂層出土で、長さ123.5cm, 最大幅35.0cm, 厚さ4mmを測る。端部にある断面円形の突起は長さ4.5cm, 径3.5cmで、かなり擦れている。56の材質はクスノキ。

その他 (第286~292図18~24・26~55・57~64) ここでは器形や用途の不明なものをすべて「その他」として扱う。

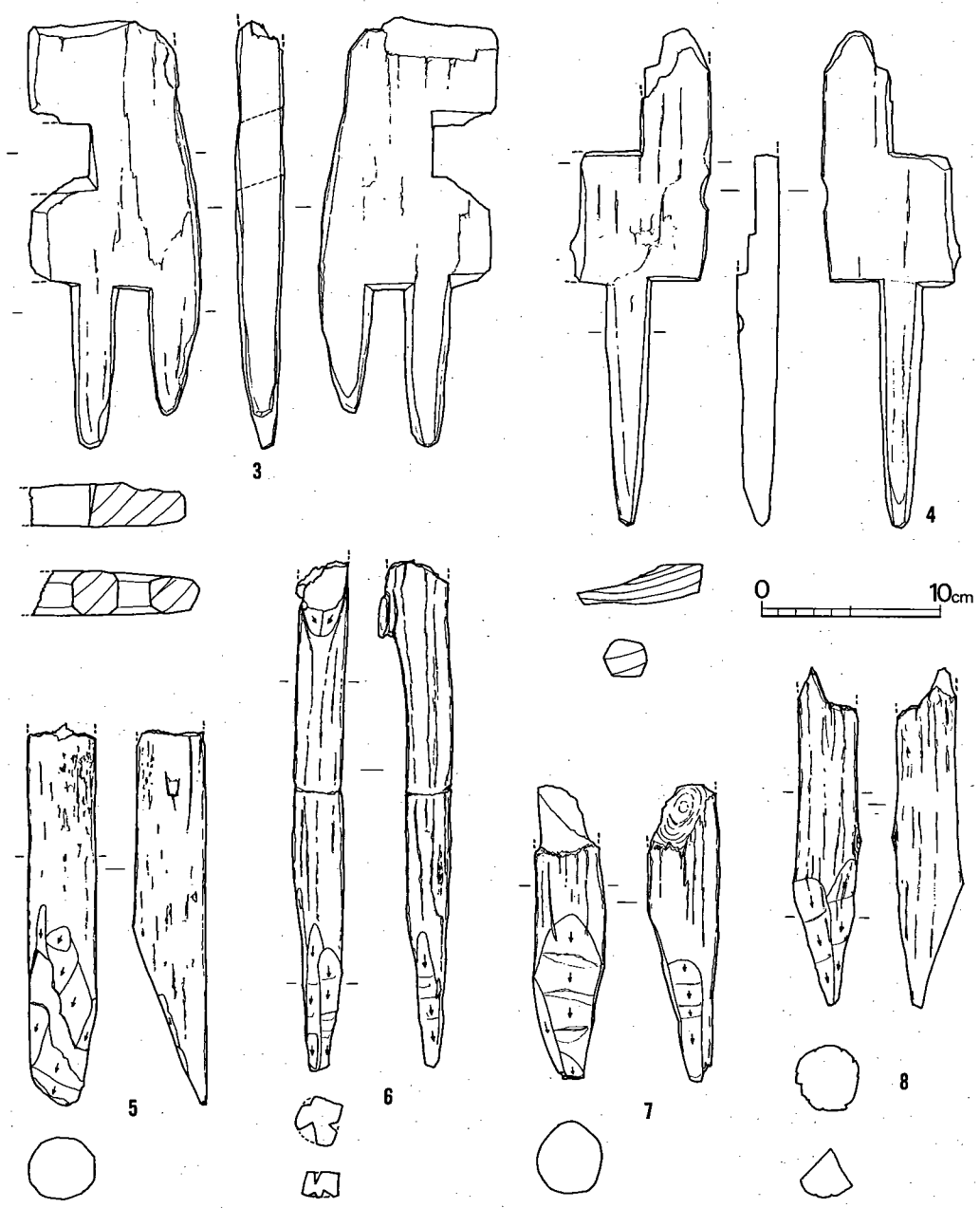
18~22は一端もしくは両端が細く加工された板状の製品である。18は36区粘土層出土で、長さ52.5cm, 幅5.9cm, 厚さ2.3cm。19は6区粘土層出土で、長さ43.3cm, 幅10.6cm, 厚さ1.8cm。20には本来両端に長さ3.2cm, 幅1.8cmの突起が付いていたようである。なお、この突起の中央には径4mmの穴が穿たれている。34区砂層出土で、残存長25.6cm, 幅5.0cm, 厚さ1.0cm。21は24区粘土層出土の完形品で、長さ27.8cm, 幅5.0cm, 厚さ1.7cmを測る。22は一端が欠けるが、



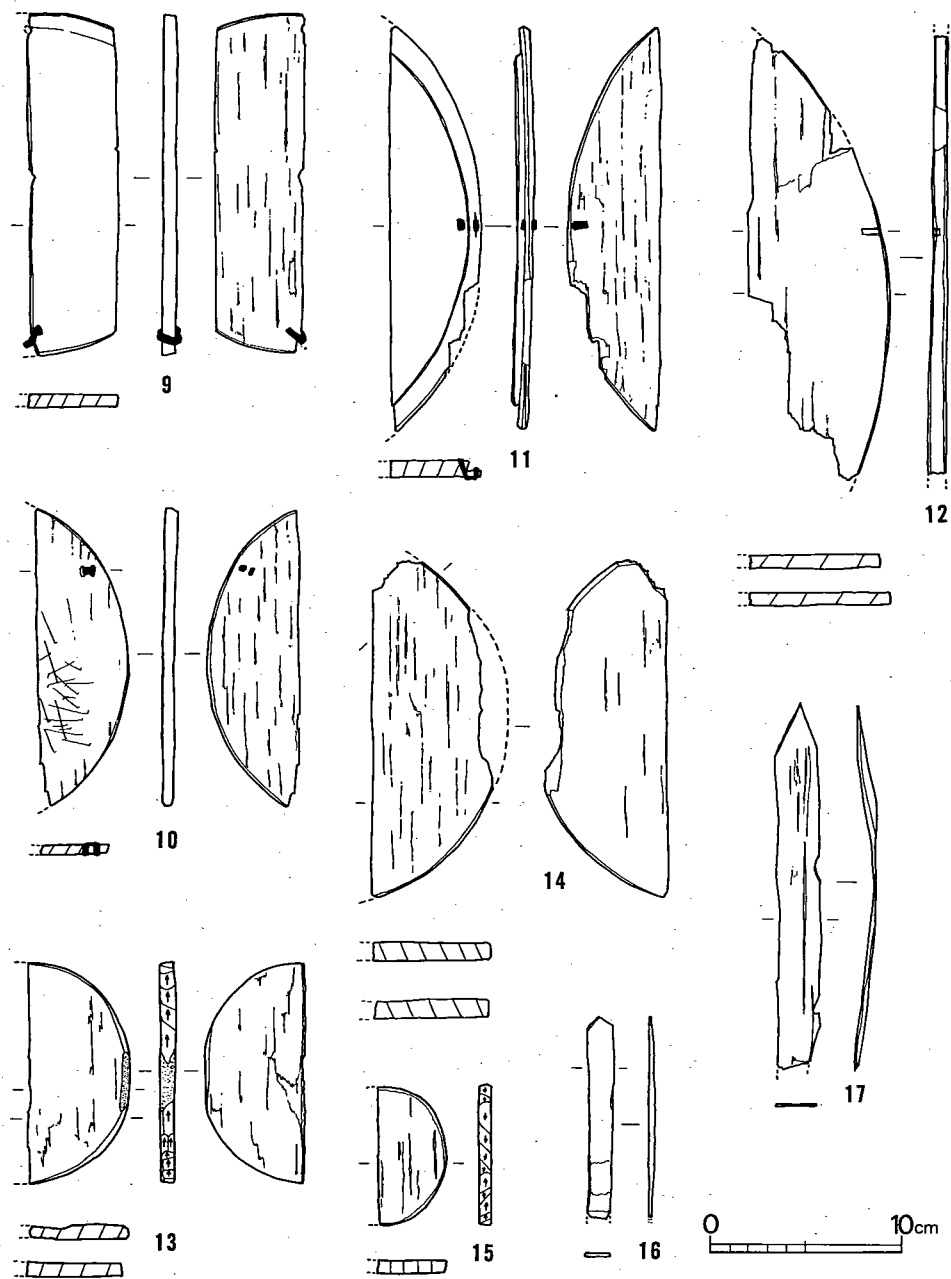
第282図 谷地区出土木器
実測図1 (1/2)



第283図 谷地区出土木器実測図2 (1/20)



第 284 图 谷地区出土木器实测图 3 (1/4)



第 285 图 谷地区出土木器实测图 4 (1/4)

本来は両端に長さ11.4cm、幅4.8cmの同じような突出部が付いていたようである。残存長39.3cm、幅9.0cm、厚さ1.8cmを測る。なお、この突出部は丁寧に調整されている。

23・24は端部付近にほぞ穴が施される板状製品である。いずれも33区地山直上から出土しており、また形態やサイズが近似することから同一個体の可能性もある。24は残存長42.5cm、幅7.0cm、厚さ1.9cmを測るが、端部付近は厚さ2.6cmに作り出され、そこに2.0×2.3cmで深さ1.5cmのほぞ穴が施される。23は幅・厚さとも24と同じサイズで、残存長は57.0cmを測る。ほぞ穴の作り方は24と似ているが、端部が若干欠損しているため細部ははっきりしない。

26～28は端部に抉りを持つ板状製品である。26は35区砂層出土で、長さ32.2cm、幅6.1cm、厚さ1.5cmを測る。27は34区砂層出土で、両端は弧を描き、径5mmの3つの穴が穿たれる。長さ36.6cm、幅10.8cm、厚さ9mm。28は抉りというよりも、階段状に端部を作り出すといった感じである。34区砂層出土で、長さ34.0cm、幅6.3cm、厚さ1.2cm。

29・30は小さな穴を持つ板状製品である。29の一端は弧状に作られ、その近くには1.8×0.7cmの長方形の穴が1つ穿たれている。26区粘土層出土で、長さ37.5cm、幅4.9cm、厚さ1.5cm。30は18区粘土層出土で、長さ34.0cm、幅7.6cm、厚さ8mmの長方形を呈する。穴は2つあり、1つは径4mmの円形、もう1つは10×4mmの長方形である。

31は木の枝をそのまま利用したもので、両端は丸く仕上げられる。18区粘土層出土で、太さ6.4cm。

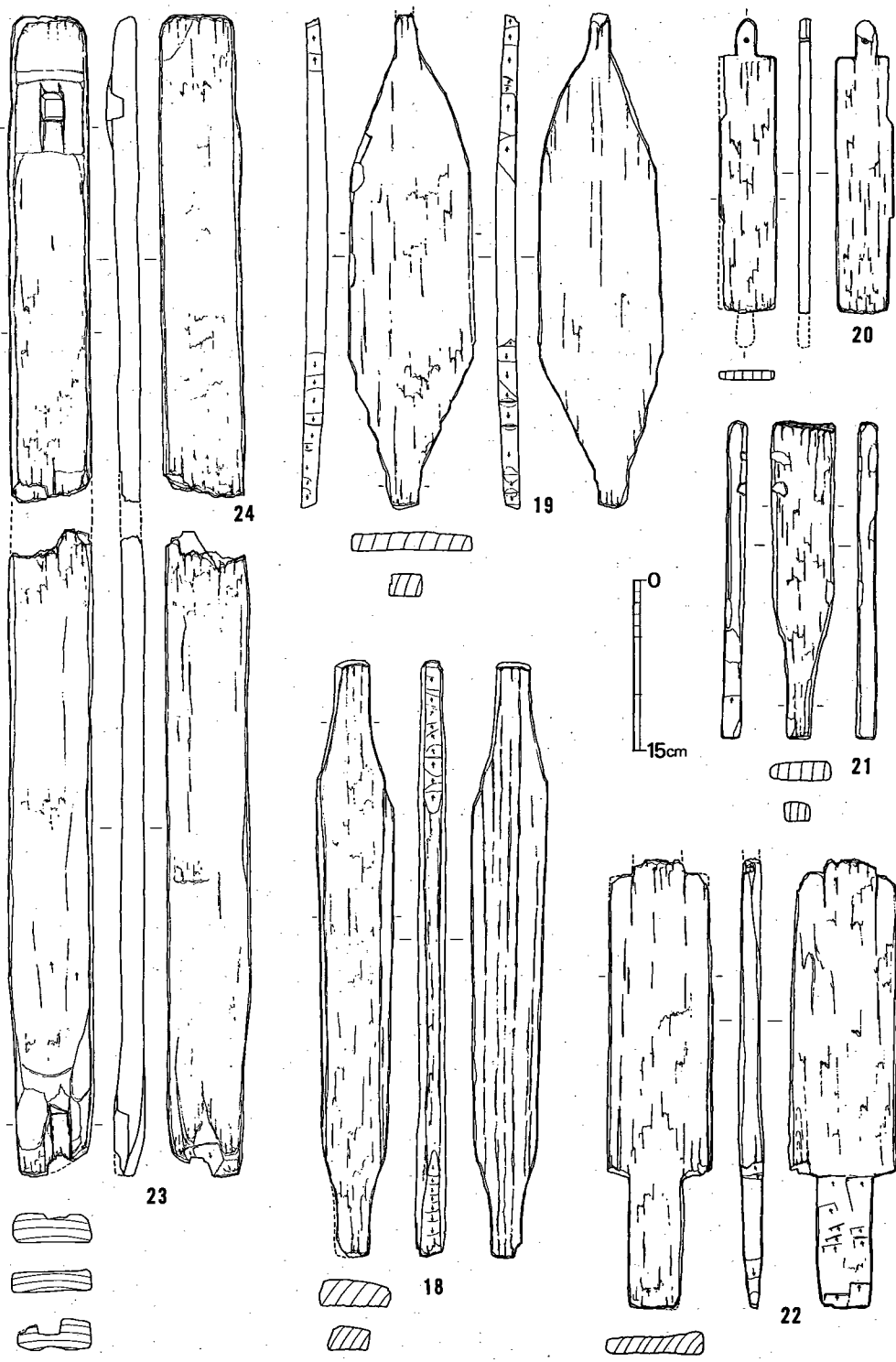
32は杓子の未製品であろうか。欠損が著しいためはっきりとしないが、中央部が半円状に彫り込まれ把手のようなものが付く。残存長17.6cm、残存幅10.9cmで36区砂層出土。

33は槽の一部であろうか。端部は平坦に加工され、お椀状に丸く作られる。底部は最も薄い部分で9mmを測る。

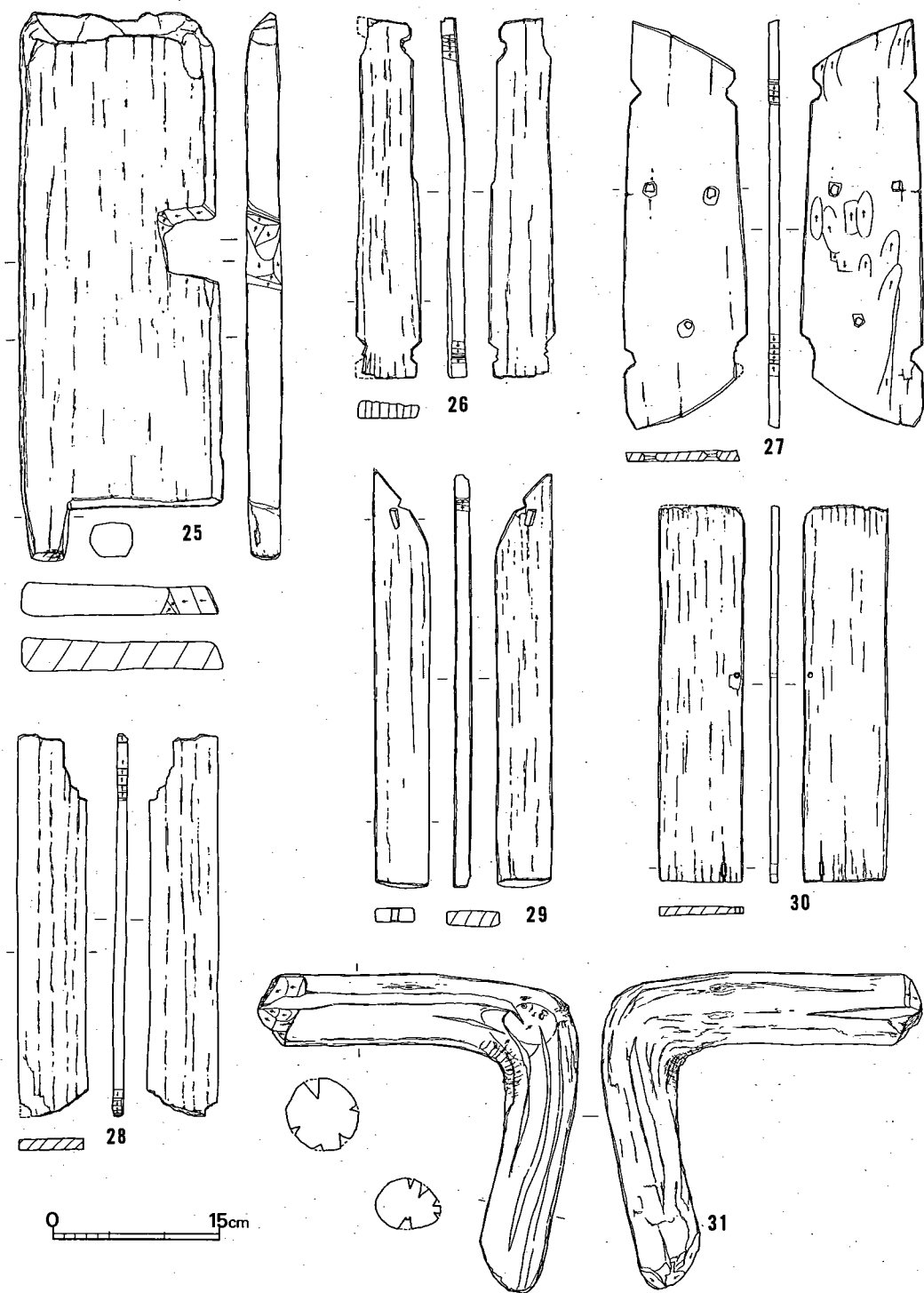
34・35は縁辺に斜位の平坦面を作る。現在は半月形だが、本来は楕円形を呈していたと考えられる。接合こそしないが、同一個体の可能性もある。34は18区粘土層出土で、残存長30.0cm、残存幅6.7cm、厚さ10mmを測り、径2mmの小さな穴が1つある。35は18区砂層出土で、残存長29.5cm、残存幅4.3cm、厚さ10mm。

36・37は18区粘土層から近接して出土したが、明らかに別個体である。本来はこの2つを組み合わせて使用したものであろうか。36は残存長34.8cm、幅4.5cm、厚さ1.8cmで、一方の側縁には1.6～3.3cmの間隔で幅5mm、深さ3mmの溝が刻まれる。欠損しない方の端部は丸く仕上げられている。37は両端部とも欠損しており、残存長50.5cm、幅4.0cm、残存厚1.4cmを測る。溝の間隔は36より大きく一定しない。

38～40は弧状の端部に段や抉りを有する一群である。38は26区粘土層出土で、残存長33.5cm、残存幅6.3cm、厚さ10mmを測る。端部には段というよりもむしろ溝に近く、幅1.2～1.8cmで深さ4mmの断面三角形である。39は18区粘土層出土で、段の端に径5mmの穴が対に穿たれており、



第 286 图 谷地区出土木器实测图 5 (1/6)

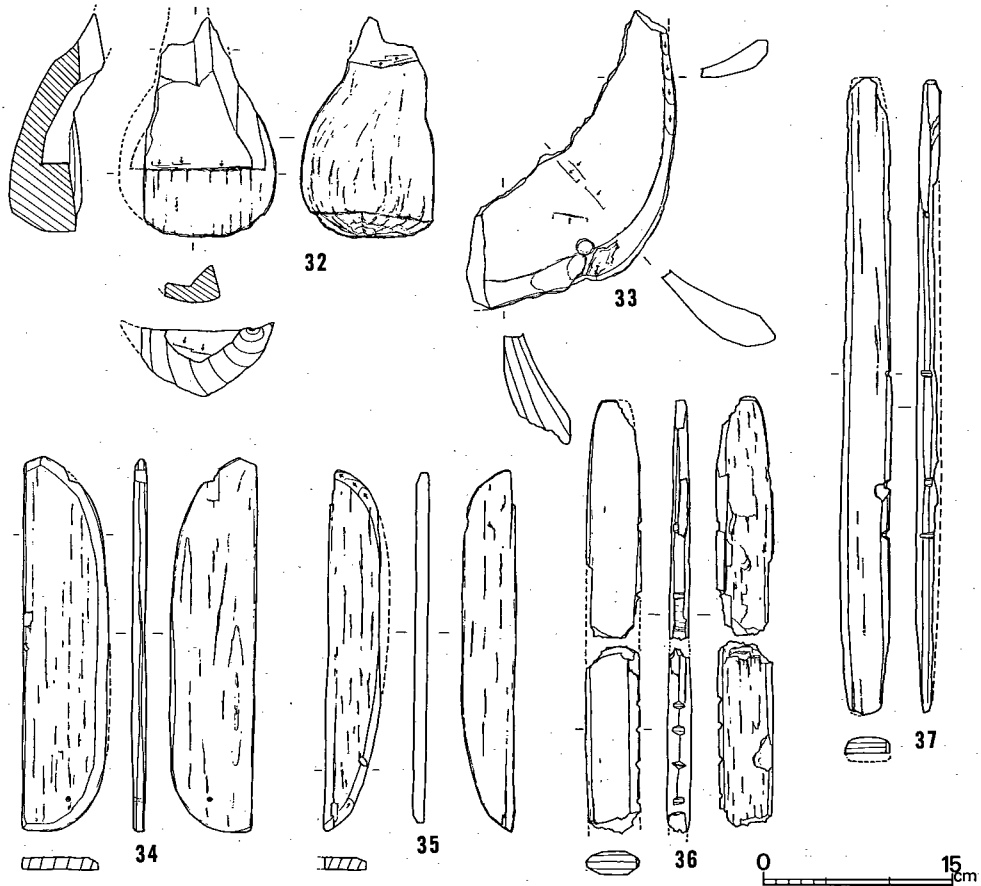


第 287 图 谷地区出土木器实测图 6 (1/6)

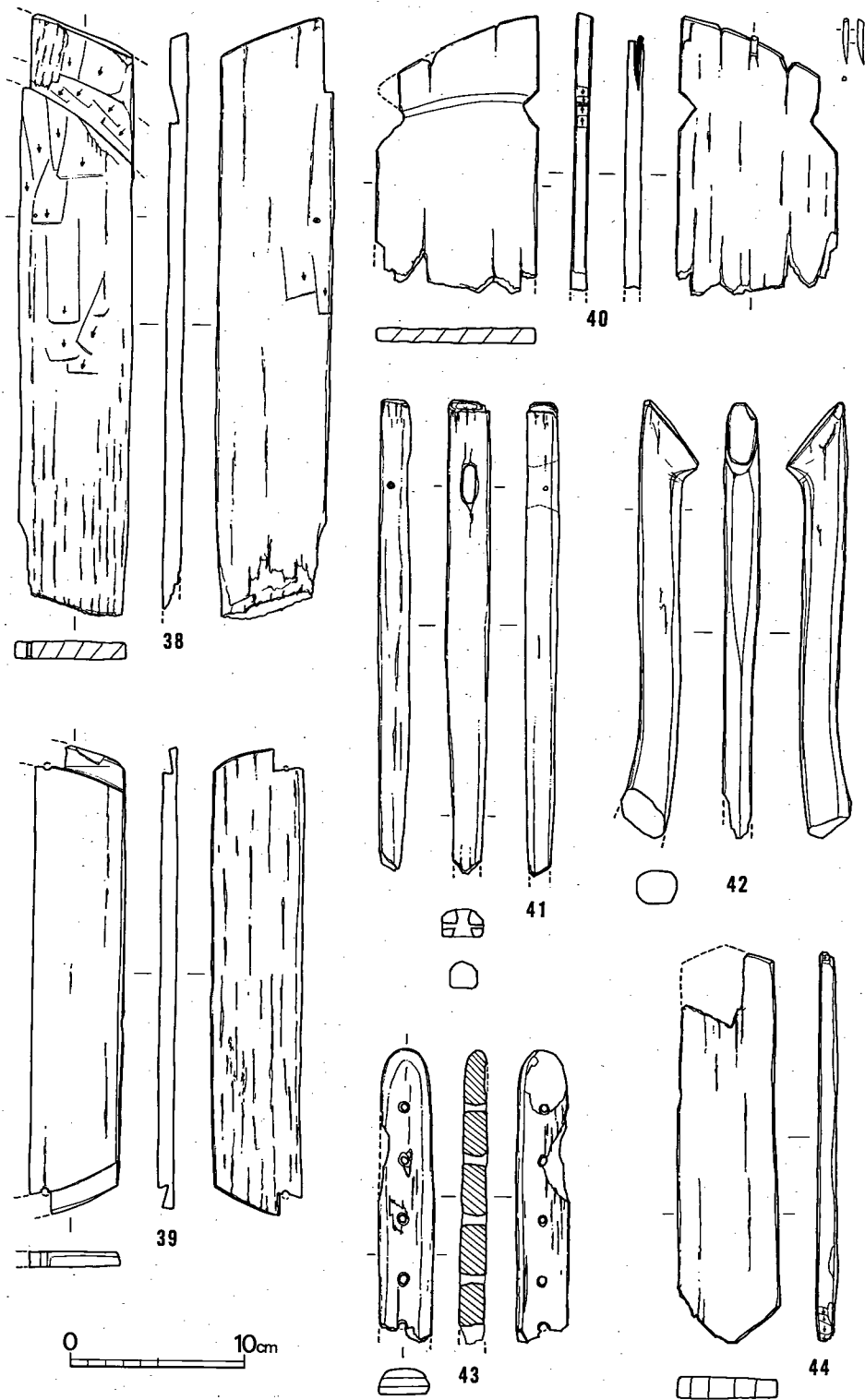
側板のようなものが付いていたと考えられる。残存長26.8cm, 残存幅5.3cm, 厚さ8mm。40は34区バフン層出土で, 残存長15.8cm, 幅9.2cm, 厚さ9mmを測る。両側縁には幅2.1cm, 奥行き8mmの三角形の抉りがあり, その2つの抉りを結ぶように紐擦れの痕跡が窺える。端部には, 長さ2.6cm, 径3mmの先の尖った爪楊枝のようなものが刺し込まれているがその用途は不明である。なお, 漆の塗布された痕跡が部分的に見られる。

41・42は形態こそ違うが, いずれも何らかの柄と考えられる。41は14区粘土層出土で, 残存長27.5cm, 太さ2.5×1.6cm。2.5×1.0cmの楕円形の穴が穿たれるが, この穴にはほぼ直交するように径2mmの小さい穴が横方向から穿たれる。補強のための穴であろうか。42も14区粘土層出土で, 残存長25.1cm, 太さ2.5×1.9cmの断面楕円形を呈する。

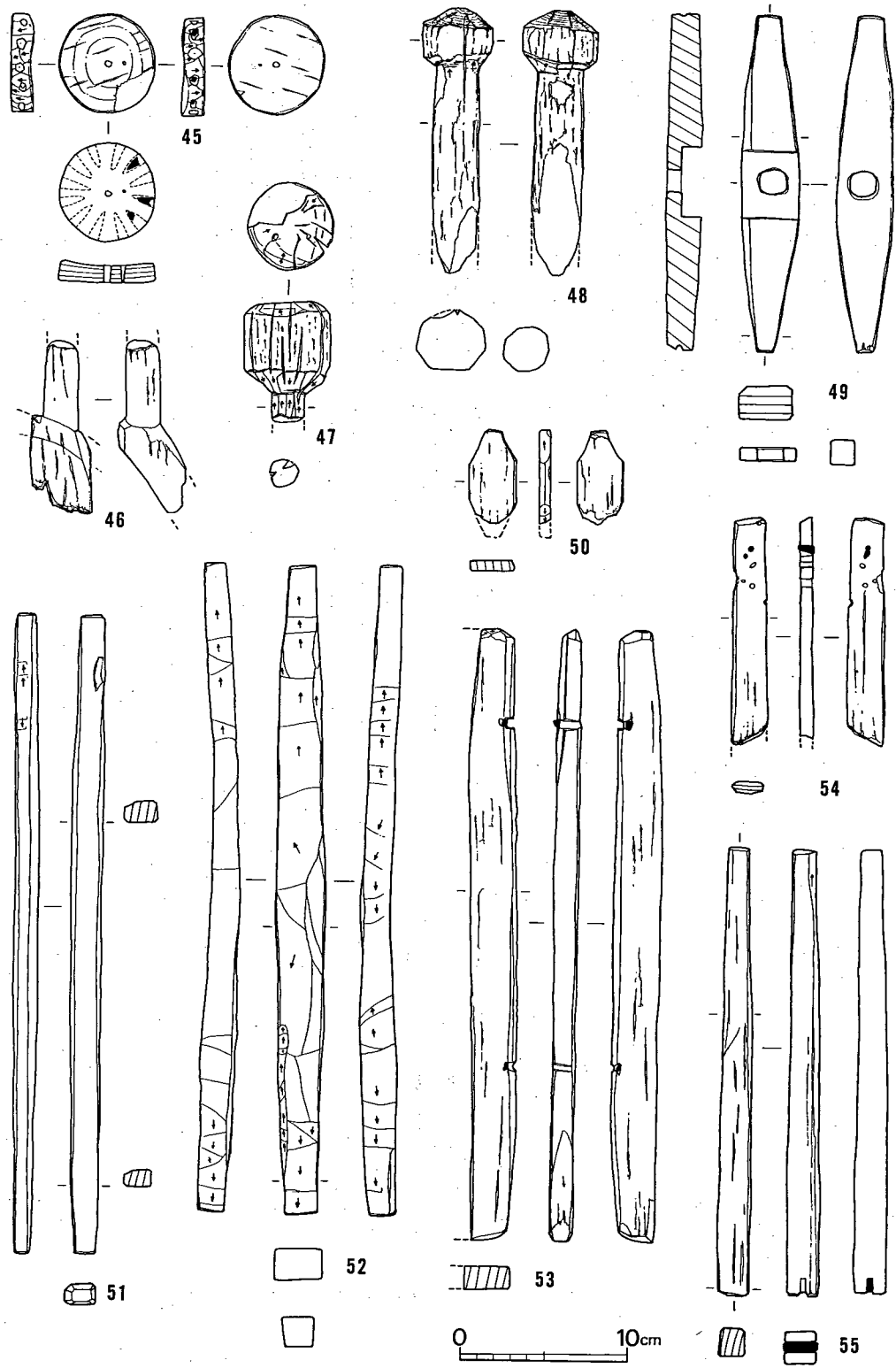
43は20区粘土層出土で, 径6mmの穴が3.5cm間隔で穿たれる。残存長16.4cm, 幅3.0cm, 厚さ1.5cmの断面カマボコ形を呈する。44は長六角形の板で, 36区バフン層出土の残存長22.2cm, 幅



第 288 図 谷地区出土木器実測図 7 (1/6)

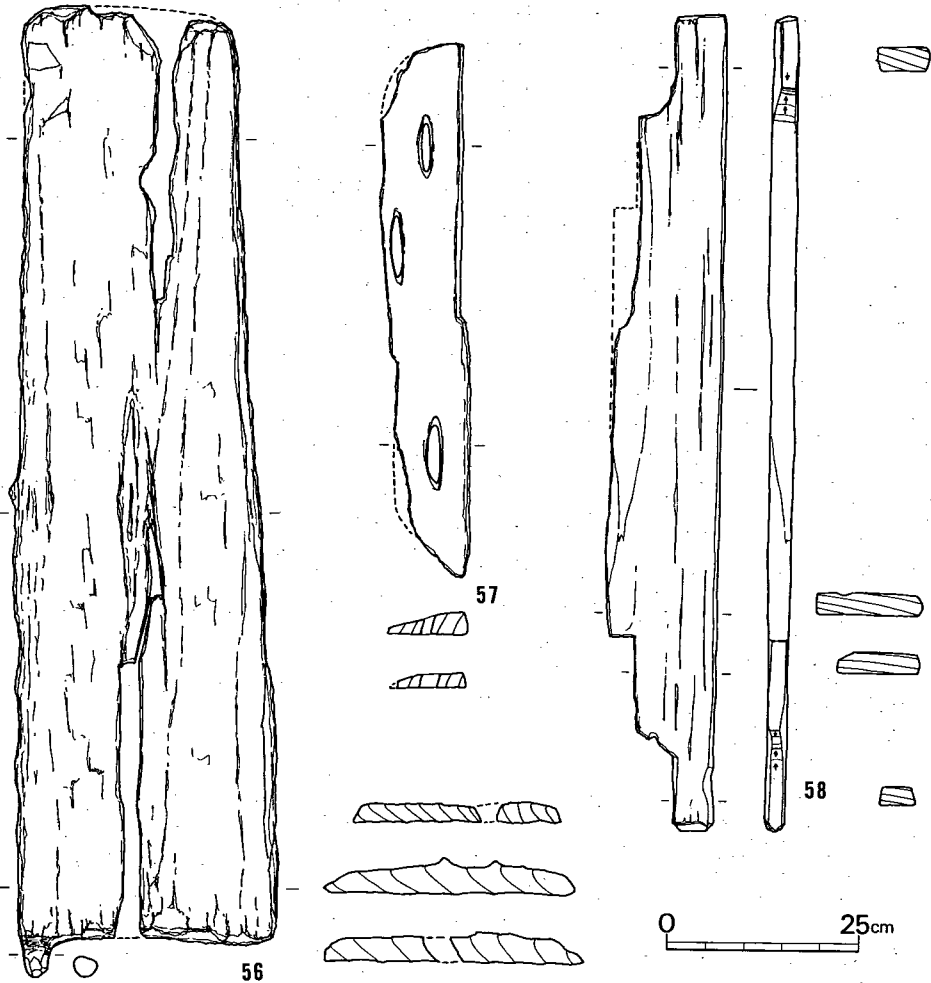


第 289 图 谷地区出土木器实测图 8 (1/4)



第 290 图 谷地区出土木器实测图 9 (1/4)

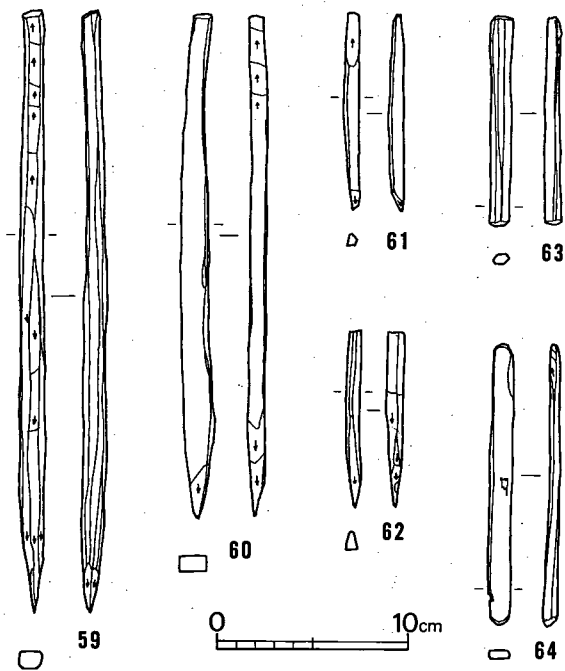
5.5cm, 厚さ1.1cm。45は20区粘土層の出土で, 径6.0cm, 厚さ1.2cmの円盤中央に径3mmの穴と, この穴から1cmほどズレた場所に径1mmの小さな穴が穿たれる。側面には約1cm間隔で径5mm, 深さ1.5cmほどの穴が計12個彫られ, その中には先の尖った爪楊枝のようなものが詰まっている。用途ははっきりとしないが, 滑車か歯車と考えられる。46は杓子状の形態を呈するが, 欠損が著しく詳細不明。14区粘土層出土で, 残存長10.0cm。47・48は棒状の端部が丸太く仕上げられている。47は14区粘土層出土で, 残存長6.3cm, 最大径5.4cm。48は20区砂層出土で, 残存長16.1cm, 最大径4.2cm。49は10区粘土層出土で, 中央部に段と穴を有する。長さ20.0cm, 幅3.4cm, 厚さは両側で1.9cmを測り, 深さ1.0cmの段の中に径1.5cmの穴があげられる。この段と穴は接続部の役割を果たすものであろう。50は長八角形の楔のようなものである。22区粘土層出土



第 291 図 谷地区出土木器実測図10 (1/10)

で、残存長6.8cm、幅3.6cm、厚さ8mm。51は19区砂層出土で長さ38.2cmあり、断面は1.9×1.2cmの八角形を呈する。52は長さ38.9cmで両端部へ向けてやや細くなるが、中央部は2.8×1.7cmの断面方形である。36区バフン層出土。

53は31区バフン層出土で、長さ36.3cm、残存幅2.8cm、厚さ1.4cmを測る。側面には2箇所幅3mmの溝があり、その中には長さ1.0cmの軸が詰め込まれている。54は残存長13.5cm、幅2.0cm、厚さ7mmを測り、端部付近には2~4mmの5つの穴が穿たれ、そのうち2つには軸のようなものが詰められている。出土地点不明。55は29区バフン層出土で、長さは26.8cm、断面は2.0×2.0cmの正方形を呈する。一方の端部には幅3mm、深さ1.1cmの溝が彫り込まれ、その中には軸のようなものが詰められている。57・58は建築部材であろうか。57は長さ71.2cm、幅10.5cm、最大厚3.5cmの中央部で若干ズレる半月形



第 292 図 谷地区出土木器実測図11 (1/4)

を呈する。9.0×2.5cmのレンズ状の穴が3箇所に穿たれるが、位置的には中央部のズレに対応しているようである。36区出土。58は本来両端部に2段の加工が施されていたのであろう。36区バフン層出土で、長さ107.4cm、最大幅14.8cm、厚さ3.1cmを測る。59~62はいずれも36区バフン層出土で、一方の端部を尖らせたものである。断面形態は円形・方形・台形と様々であるが、もっとも大きい59で長さ31.5cm、太さ1.2cmを測る。63・64は端部が丸く仕上げられた小さく細い棒で、いずれも36区バフン層出土。63は長さ10.3cm、幅1.0cm、64は長さ14.6cm、幅1.0cmを測る。

(水ノ江)

6. おわりに

(1) 弥生時代の土器について

弥生時代の竪穴住居跡・土壙・貯蔵穴・甕棺等の遺構及び包含層・谷地区砂層で出土した土

器は、壺・甕・高坏・鉢・器台・ミニチュア土器で、器形等によって次の様に分類できる。

壺 1—広口壺, 2—短頸壺, 3—長頸壺, 4—直口壺, 5—袋状口縁壺, 6—その他

1類の広口壺はA～Dに細分される。1A類は上下に拡張した口縁部に3ないし4条の凹線文を施すもので、50号住居跡出土の25（以下住50—25と記す）に代表される。肩が張る器形で、頸部にも2条の凹線文を、胴部上半にはヘラ先沈線文を施す。内面の底部付近はヘラケズリ、外面は擦過痕がある。底部は平底でケズリ。線刻による絵画（水鳥・鹿）土器である。包—2には円形浮文が、包—4の胴部上半には刺突文が見られるが、広島県東広島市助平2遺跡のSB12住居出土品に類似する（註1）。他に住65—115等に出土。1B類はほぼ直立ないし外傾する長めの頸部に、屈折して内弯・外傾する口縁部を有す。口唇部を太い凹線状に窪ます。住52—76のように内外面とも密なハケ目調整が特徴的だが、住35—4と比べると口唇部に差異が認められる。包—1の口縁部には円形浮文が付く。住52—57～59・76, 包—6・7等があたる。住50—22は口縁部を欠く資料だが、頸部の状況から当類に含めておく。頸部・胴部に凸帯を有し、胴部は刻み目も施す。住74—120は同形の破片だが胴部の凸帯は2条。1C類は「く」字形に外反する素口縁の大型壺である。口径22～36cmを測り、頸部に三角凸帯を持つ住35—3, 谷—7・8・13と付けない住50—26, 包—9がある。谷—13は口縁部がラッパ状に広がるもので胴部にもM字状凸帯2条を巡らし、底部は突出する。住50—26は口縁部全体に丸味があり、胴部も膨らむようだ。嘉穂郡嘉穂町上椎遺跡5号住居跡出土の土器群（註2）は時期的に下の資料であるが類似している。1D類は長めの頸部に鋤形の口縁部、半球状に近い胴部には3条の三角凸帯が付く。住35—1は頸部に2条、胴部に3条の三角凸帯だが、谷出土の1のように低いM字状凸帯4条を頸部に有すものもある。他に住52—89, 谷—2・3等があり、円形浮文も見られる。

2類は口縁部が「く」字形を呈す短頸壺で、1C類の小型のもの。口径が15cm前後で、胴部が球形に近く内弯する口縁部には紐孔を持つもの（溝3—1）もある。底部は平底ないしやや突出しており、外底面はヘラケズリされる。丹塗り土器にはヘラミガキを施す。住60—92, 住74—119, 溝3—1・2等がある。

3類は長頸壺だが完形品はない。口縁直下に三角凸帯1条を有し、扁球状の胴部が付く。住50—24, 住60—93, 包—11, 谷—9～11。

4類は口縁部が内傾ないし直に立ちあがる直口壺でA・Bに2分される。Aは短く内傾する頸部に2条の凹線文を施し、円孔を穿つ。住44—13のみの出土。Bは薄手で長めの口縁部直下に高い凸帯を巡らす。この種の凸帯は壺1Bの内に含めた住50—22に似る。住52—60の1点のみ出土。

5類は袋状口縁を呈す長頸壺の口縁部で、軽い稜線が入る外面にはハケ目調整を施す。古墳時代の26号溝より出土（包—4）。

6類はその他の壺を一括した。住74—124は櫛描波状文を2段描く胴部破片で、他に柱穴より

1点出土した。住69—113・114は短く外反する口縁部と、三角形の刺突文を施す。包—8は肥厚させた口縁部外面に山形沈線文を施す。

甕 1—「く」字形口縁, 2—鋤形口縁

1類はA～Cに分けられ、B・C類はさらにa・bに細分される。1A類は口縁部端を若干上方に上げ、2条の凹線文を施す。住35—6は胴部に張りのある器形で、内面頸部下までヘラケズリ。P727出土(柱—1)の土器は完形品。外面上半部は横方向の平行タタキ、下半はケズリの後にハケ目調整。内面と頸部下までヘラケズリを施し、薄く仕上げる。底部は上げ底。住50—46・47, 谷—6がある。1B類は跳ね上げ口縁で、口唇部がナデにより窪み両端部が突き出すa, 内弯する口縁部と丸味のある口唇下端を有すbに細分される。aは溝3下層出土の3・4や1号甕棺下甕が代表例である。胴部の張りは弱く口縁部と同等。薄手で内外面とも擦過状のケズリを施す。外面はその後頸部以外にハケ目調整。底部は平底。住35—8, 住50—33~38, 住52—66・67・79~84, 住60—97~99, 住74—131・132, 貯2—3・6, 谷—41の他, 三角凸帯を頸部に持つ住50—32, 甕—2, 包—20, 谷—24・25・28~33等多数出土している。bは住60—96が完形品である。やはり胴部の張らない器形で底部は小さく径7.3cmの平底。外面の頸部付近にはヘラケズリが残り, 下位はハケ目調整。住44—15, 住50—39~42, 住52—65・86, 住60—100, 住74—126~130等があり, 谷—26・27・34は三角凸帯を有す。1C類は通常の「く」字形口縁の甕で, 住50—29, 住60—94に代表される。94は底部が若干突出するもので注意される。外面はハケ目調整で, 下半から底部外面にかけてはケズリを施す。住35—7, 住52—78, 住60—95, 貯1—1等だが, 住44—17・18や住74—130のように口縁部の内弯するものもある。bとしたものは頸部に明瞭な稜が入るほど強く屈曲するもので, 住50—31, 住52—64, 包—13, 谷—45などである。住61—106は頸部に三角凸帯を持つ。

2類は鋤形口縁部の甕で, 住60—101を始め, 丹塗土器が多い。頸部に1条, 胴部に3条の低いM字形凸帯を付す。同形の甕は谷地区2区に一括して出土し(谷—14~20), それらには, 頸部の凸帯が三角形のものも含まれる。

高 環 少数の出土で完形品はないが4分類する。

1類は鋤形の口縁部で, 住60—104の碗形の坏部と, 住74—138の浅鉢状の坏部がある。

2類は碗形の坏部上位に, 三角ないしM字状の凸帯を巡らすもので住35—12, 住—7。

3類は口縁部が屈曲する特徴的な高坏だが, 凹線文ではなく, ナデ。坏下半部はヘラミガキとハケ目調整。住50—51の1点のみの出土であるが, 住50—25と合わせて見ると瀬戸内地域の第4様式に比定され, 当遺跡の時期を決定する資料の一つに成りうる。

4類としたものは深みのある大型の高坏と考えられるものだが, 台付の鉢になる可能性もある。半球状の胴部に凸帯を1条巡らし, 口唇部を内に突出させる。この種の特徴は奈良県唐古遺跡(註3)から出土した第3様式の大型高坏に類似している。

5類は内外面ともヘラミガキを施すもので、住52—74・75は小型の高坏。谷—60は浅い皿状の坏部である。

鉢 器形の判るものは1号甕棺墓の上甕がある。口径35cmを測る大型品で、口縁部直下に2条のM字形凸帯を付す。平底で薄手に仕上げられる。外面はハケ目調整。他は口縁部の小破片で内弯する器形。住50—54—56、貯1—5、包—32—34等がある。

器台 細身のタイプのもの(谷—68・69)と豊前地方に中期後半から出土する片側を挟った器形のもの(谷—70)が出土しているが、遺構には伴わない。

ミニチュア土器 谷地区から長頸の壺を模した土器(谷—12)が1点出土。

これらの土器について若干記しておきたい。中部瀬戸内系土器である凹線文を施文した壺1A・4A、甕1Aは、少数ではあるが住35・44・50・65と半数の住居跡からの出土を見ている。他に住5・溝26からは遺構と遊離した状態で、また、P727からは甕1A類一個体が出土した。器形も壺と甕の二者があり、甕1A類も胴部にタタキを有すものと無いものが存在している。

住50は床面より割合多くの土器(壺1A・1B・1C・3、甕1A・1Ba・b・1Ca・b・2、高坏3・5、鉢)が出土している。東北部九州的な土器は29の「く」字形口縁の甕と39の跳ね上げ口縁甕ぐらいで、他は瀬戸内中部地方の土器群である。25の凹線文施文の絵画土器と51の屈折する高坏は高橋護氏の山陽地方Vb～VIa期(註4)の土器そのものと言っても良いと思われ、中期後葉～末頃に位置付けられる。しかし、22のような球状の胴部を持ち、頸部と胴部に凸帯を有す土器は瀬戸内中部・西山口地方でも出土していないようであり理解に苦しむ。この種の土器の胴部は住74に刻み目を持つ2条と1条の凸帯が知られるのみであるが、凸帯の高さに差がある。口縁部がないので推定の域を出ないが、頸部から口縁部への移行のしかたや内外面の細かいハケ目調整技法から、これも相手のいない壺1B類とした住52出土の58・59の様な口縁部が付くのではないだろうか。なお、山口県の中期末の周防型D類(註5)とされた壺の胴部に刻み目凸帯を付すものが見られ、凹線文系の口縁部と広口壺の胴部を合せ持った器形と言えようか。壺4Aに分類した住44出土の直口壺13も、住50—22と同様な頸部凹線文を有すが、甕17・18の短く内弯する口縁部やベットを持つ方形住居跡である事を考慮すると住50より後出する時期であろう。また、P727出土のタタキを持つ凹線文甕(第76図1)は、畿内第IV様式の特徴を備えた土器だが、底部は平底でなく上げ底。

一方、北部九州東部の土器との関連でみると、住35の壺1Dに分類した鋤形口縁の1がある。口縁端部は垂れており、胴部が扁球に近い点からして中期末から後期初頭としておきたい。住60出土の甕2類とした鋤形口縁部の土器(101)は中期末の土器であろう。94の甕の底部が既に突出しているが、92・96は平底である。

他の住居跡出土の土器についても、大概、中期末から後期初頭の土器群と思われるが、住居形態等との関係もあり、次章で考えて見たい。

(2) 弥生時代の竪穴住居跡について

検出した竪穴住居跡は9軒であるが、住69は炉のみであるので除外し、隣接する安武・土井の内遺跡の3号竪穴住居跡（以下、土住3と記す）についても合せて検討を加える。住居跡のプランや主柱穴の数、出土土器の分類、その他の出土遺物については表3の通りである。

住居跡の平面プランは、円形（住50・52・60・74）と方形（住35・44・61・65・土住3）に分けられる。円形住居跡の大きさは、住60の径8.4mが最大で、次いで住52の7.85m、以下7m弱で、平均床面積は28㎡を測る。そのうち中期後葉の住50は、正円ではなく、辺を意識している。製鉄跡・絵画土器を含む出土遺物は前述したとおり瀬戸内中部的であり、住居跡の形態もしかりである。一方、方形住居跡では住35が一辺3.2mの正方形で、住44はベット状遺構を持つが正方形、土住3は長方形プランである。住61は長辺6.9m、短辺6.0mのプランだが、辺が弧状に近い方（円）形で、住50とは相反する。この微妙な差異は住居跡の変遷を考える上で暗示的である。

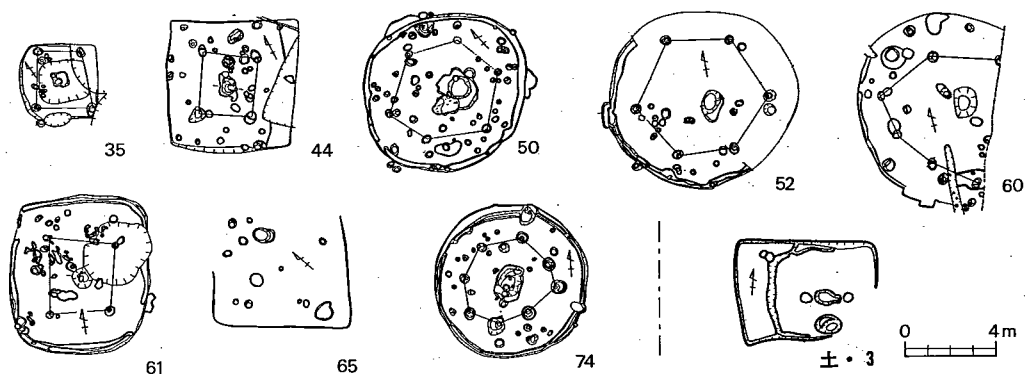
炉は住65を除き、住居跡の中央に築かれ、その周囲に主柱穴が巡る。正円形の住60・74が8本柱、住52と円（方）プランの住50が6本柱、方（円）プランの住61と方形の住35・44・65が4本柱、後期後葉に位置付けられる土住3がベットを有す2本柱である。住居跡の平面形態によって、主柱穴の差が明瞭に認められ、上部構造を考える上で良い資料となろう。なお、円形プランの住居跡には必ず壁溝が認められ、住50の北側、住52の西側では出入口の階段も検出された。

出土土器については前述した通りである。その他の遺物のうち、製鉄跡を伴う住50に鉄鏃をはじめとした鉄器類が多く出土した事は当然とは言え重要である。この鉄器については、後章にて大澤正己氏より分析結果の玉稿をいただいている。鉄器は住44、住52（鉄鏃、鉞）で出土し、石器では砥石の出土が4軒（住35・50・52・74）に認められる。

竪穴住居跡については、出土土器に時期を決定する資料に乏しいが、中期後葉から後期初頭の時期に比定されると思われる。あえて住居跡の形態を考慮に入れると、円形プランの住50・52・60・74が古く、次いで、住61が続き、方形プランの住35からベットを有す住44へ移行するものと考えている。

周辺における中期後半の円形住居跡は、遠賀川西域ではあるが、鞍手郡鞍手町中屋敷遺跡（註6）、同町高木遺跡（註7）で知られている程度で、一般的には中期後半頃を境にして方形プランに変わる。例えば、行橋市下稗田遺跡D地区16・17号住居跡（註8）、北九州市八幡西区辻田西遺跡（註9）は中期中葉頃の円形プランの住居跡で、炉の周囲に10本前後の柱穴が巡る。中期後半になると辻田西遺跡3・17・23号住居跡等方形プランと変わる。

一方、瀬戸内西域の中期後半頃の住居跡について見ると、山口県山口市吉田遺跡（註10）では



第 293 図 弥生時代竪穴住居跡 (1/320)

表 3 弥生時代竪穴住居跡一覧表

住居番号	平面プラン	面積(m ²)	主柱穴	壁溝	出入口	ベット	その他	出土遺物	時期
35	隅丸方形	9.9	4					壺1B・1C・1D, 甕1A・1Ca, 高坏1・2, 砥石	後期初頭
44	方形	30.9	4			○		壺4A, 甕1Ba・b・1Ca, 高坏1, 鉄器	後期初頭
50	円(方形)	38.7	6	○	○(北)		製鉄跡	壺1A・1B・1C・3, 甕1A・1Ba・b・1Ca・b, 高坏3・5, 鉢 磨石・石鏃・砥石・鉄鏃・たがね?, 水晶小玉, 絵画土器	中期後~末
52	円形	(51)	6	○	○(西)			壺1B・4B, 甕1Ba・b・1C, 高坏1・5, 砥石・鉄鏃・鉈	中期後~末
60	円形	(54)	8	○	?			壺2・3, 甕1Ba・b・1Ca・2, 高坏1, 石鏃・磨石・軽石・石庖丁	中期後~末
61	隅丸方(円)形	37.1	4	○				壺6, 甕1Ba・b・1Ca, 石皿	中期末
65	隅丸方形	(33)	4?					壺1A	中期末
74	円形	35.4	8	○				壺1B・2・6, 甕1Ba・b, 高坏1, 鉢・砥石・石斧	中期後~末
土・3	長方形	16.7	2	○		○	屋内土壁	壺3, 甕1Ca, 鉢, 砥石	後期後葉

中期後半まで円形プランであり、方形プランの出現は後期前半まで下るようである。広島県広島市鏡西谷遺跡H地区1号竪穴(註11)は中期後半に位置付けられる円形プランの住居跡であり、岡山県岡山市奥坂遺跡(註12)では中期後半から末に位置付けられる7軒の住居跡は六角形・円形・方形の各種プランがあり、後期中頃まで円形プランの住居跡となる。特に中期後半頃の円形プランの住居跡は正円形ではなく、辺を意識した円形状プランである。この住居跡プランは、安武・深田遺跡の住居跡のうち50・61号住居跡がその特徴を良く示している。特に、50号住居跡については、住居跡プランのみならず、水鳥を描いた凹線文土器や高坏等の土器群の有り方から、人そのものの移動を考慮しても良いと思われる。谷地区からの出土ではあるが、両端から挟り込みを入れた石庖丁(第274図23)の存在も、その傍証となろう。

九州における凹線文土器や両端に挟りの入った石庖丁等の瀬戸内系遺物については、宮崎県・鹿児島県に割合多くの出土例が知られるが(註13)、大分県・福岡県の周防灘周辺にはあまり知られていなかった。第294図は京都府南丹郡法正寺・木ノ坪遺跡(註14)出土の凹線文土器

である。同遺跡は圃場整備事業に伴う発掘調査で、弥生時代前期から古墳時代前期にかけて約100軒ほどの住居跡が確認された。土器は、集落の東端を限る幅3m、深さ2mほどの大溝内上層より出土した。いずれも甕の胴上位破片で、上・下に肥厚させた口縁部に2～3条の凹線文を施し、内面はヘラケズリ。3には2列の刺突文が見られる。また、同じ椎田バイパスの路線内の遺跡である築城町森ヶ坪遺跡では、谷状の遺構より後期の大量の土器が発見され、その内にも瀬戸内系の遺物が多く含まれており、当地域と彼地との交流が絶えず続いていた事を窺わせる。

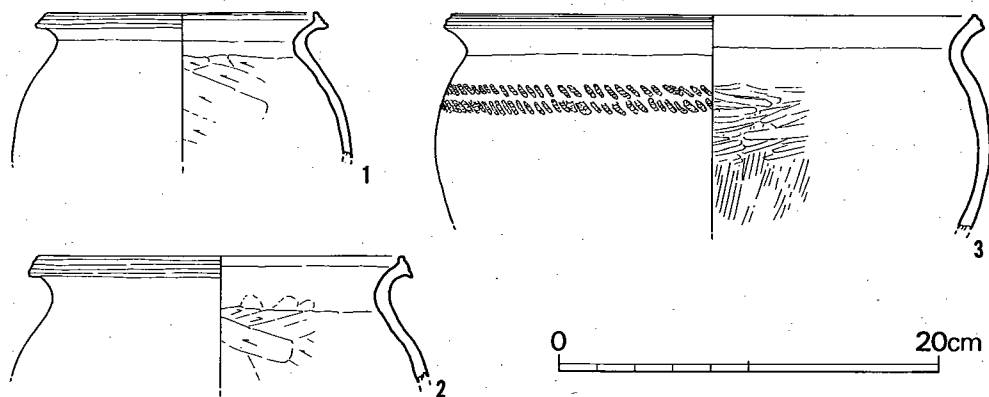
(3) 出土遺物について

弥生時代の遺物のうち分銅形土製品、絵画土器について若干ふれておきたい。

分銅形土製品は古墳時代後期の28号溝の北側下層より出土した混入品である。片側のくり込み部破片で、弧状の施文具による2条の刺突文が見られ、大きさは10cm前後になると思われる。

福岡県内では北九州市小倉南区北方の北方遺跡(註15)、同区横代のカキ遺跡について3例目の出土である。北方例は、「長軸6.5cm、幅4.1cm、くびれ部2.6cm、厚さ1.8cmである。縁に左に二つ、右につきざみがある。」とされ、弥生時代中期中葉の土器を出土する長軸1.1m、短軸0.5mの楕円形の2号土壇中より出土している。カキ例は約1/2が遺存し、幅9.1cm、残長6.7cm。周縁に刺突による孔が巡り、反対の面は弧状の沈線文を施す。微高地北側に広がる低地の弥生時代後期前半～中頃の遺物包含層より出土した(註16)。

分銅形土製品は弥生時代中期中葉から後期中葉にかけて、岡山県を中心に出土している。西は山口県で中期中葉頃の5例が知られており(註17)、今回の発見により周防灘周辺での出土は当然視されよう。北九州市の北方例は、刺突はあるが素文に近いものであり、破片とは言え当出土例の文様構成からすれば、今後ともバラエティーに富んだ土製品の出土が予想される。時期は出土遺構への混入品なので断定はできないが、当遺跡の凹線文土器との関連から中期末頃のものであろう。



第 294 図 荏田町法正寺・木ノ坪遺跡出土凹線文土器 (1/4)

一方、50号住居跡出土の凹線文土器（第40図25）には、水鳥と鹿が描かれる。鹿は4足のみの破片であるが、水鳥は完存する。右向で体長4.9cmに描かれた水鳥は、口嘴を下に向け、尾を跳ね上げ、三本指にて立つ。体内は斜格子線によって充填される。鳥を描いた土器については9例（註18）目の出土で、九州内では宮崎県下那珂遺跡（註19）、福岡県鞍手郡宮田町上大隈遺跡（註20）に次いで3例目であるが、両者は後期の資料であり、県内で鳥を描いた資料としては最も古いことになる。類例としては鳥を描いた土器の内には無く、むしろ、大阪府爪生堂遺跡の右向の鹿（註21）の描き方に筆順・体内充填方法が類似している。

福岡県内における絵画土器の例としては6例あり、福岡市西区吉武高木遺跡（註22）金海式甕棺（K-112）下甕に2頭の鹿が描かれるのが最も古い（前期末）。他に浮羽郡吉井町塚堂古墳東地区出土（註23）の壺形土器に描かれた長方形の区画文（後期終半頃）。嘉穂郡嘉穂町榎町遺跡50号住居跡出土（註24）の甕口縁部に描かれた家？（後期終末）。前述した上大隈遺跡出土の二重口縁壺に描かれた鳥と山形文（後期後半）。福岡市西区小笹^{こもぐさ}遺跡（註25）の袋状口縁壺の胴部に描かれた馬に似た絵画（後期中～後半）が知られている。そして、今回の安武・深田遺跡例である。土器は雄町6式・鬼川市0式の中期後半～末に位置付けられると思われ、伴出した高坏等も同様である。前述したように、50号住居跡は住居跡の形態をも含めて瀬戸内からの人の移動を示す遺構であり、絵画土器はその人々の生活の証として重要である。なお、第40図22の壺形土器の胴部上半ならびに下半にも細沈線による文様らしき痕跡があるが、不確実なので一応除外しておく。

（木下）

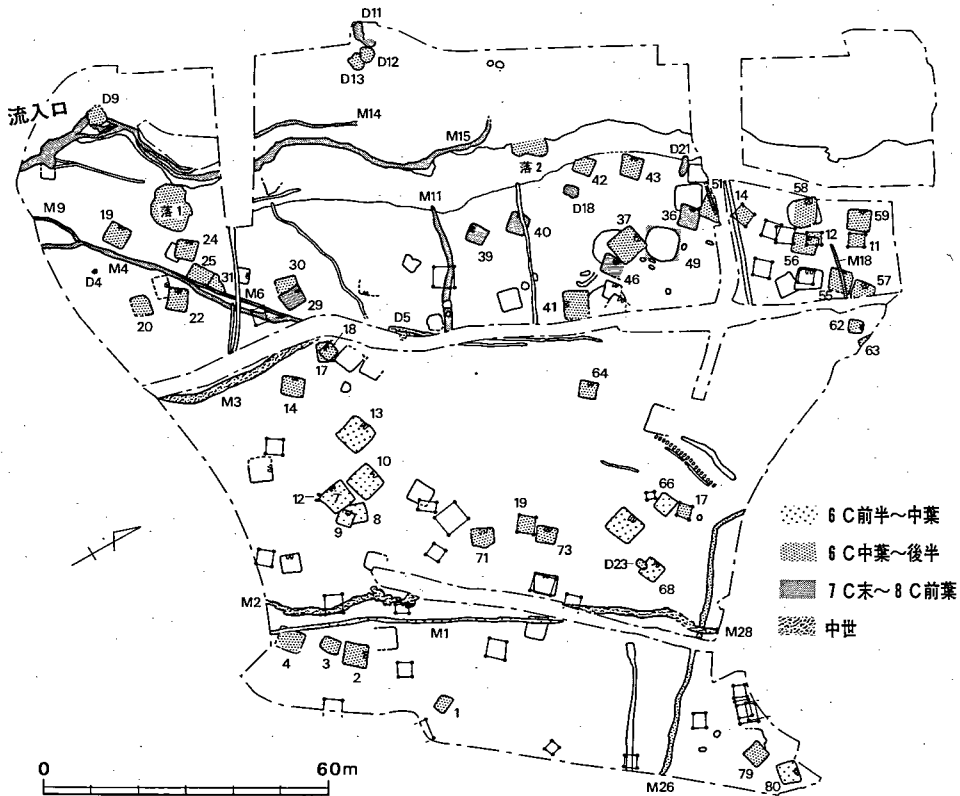
- 註1 植田千佳穂「助平2号遺跡」『西条第1土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』
広島県教育委員会 1983
- 註2 井上裕弘「上椎遺跡」『嘉穂町文化財調査報告書3』 嘉穂町教育委員会 1982
- 註3 末永雅雄・小林行雄他「大和唐古弥生式遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究报告
16』 1943 複製 臨川書店 1976
- 註4 高橋護「弥生土器 山陽2」『考古学ジャーナル175』 ニューサイエンス社 1980
- 註5 山本一郎「防長の弥生式土器」『山口県の弥生式土器—集成と編年』 周陽考古学研究所
1979
- P70の柳井田遺跡やP72の二ツ池遺跡出土の土器によるが原典にはあたっていない。
- 註6 上野精志編「福岡県鞍手郡鞍手町所在中屋敷遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化
財調査報告XXIX』福岡県教育委員会 1979
- 註7 副島邦弘編「福岡県鞍手郡鞍手町所在高木遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財
調査報告XIII』福岡県教育委員会 1977
- 註8 長嶺正秀編「下稗田遺跡」『行橋市埋蔵文化財調査報告書17』行橋市教育委員会 1985

- 註9 栗山伸司編「辻田西遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書13』北九州市教育文化事業団 1982
- 註10 河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」『山口大学構内遺跡調査研究年報V』山口大学埋蔵文化財資料館 1986
- 註11 河瀬正利他編「鏡西谷遺跡（H）地区の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報II』広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会 1983
- 註12 高畑知功編「天神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告53』岡山県教育委員会 1983
- 註13 池畑耕一「瀬戸内系遺物の出土とその背景 — 1世紀前半の南九州」『鎌木義昌先生古稀記念論集 — 考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会 1988
- 註14 木下修編「黒添・法正寺地区遺跡群」『苅田町文化財調査報告書6』苅田町教育委員会 1987
苅田町教育委員会の長嶺正秀氏に出土遺物について御配慮いただいた。
- 註15 中村修身「北方遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書43』北九州市教育委員会 1985
- 註16 北九州市教育文化事業団 川上秀秋氏の御教示による。北九州市立考古博物館「紫川 — 弥生・古墳時代の風景」 1990
- 註17 東潮「東高月遺跡群出土の分銅形土製品 — 用木山遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(4)』岡山県山陽町教育委員会 1977
- 註18 橋本裕行「弥生土器の絵」『季刊考古学19』雄山閣出版 1987 ここまで7例があげられており、福岡県上大隈、安武・深田例を含めて9例となる。
- 註19 面高哲郎「宮崎県下出土の線刻のある弥生土器」『考古学雑誌66 — 1』日本考古学会 1980
- 註20 九州考古学会「北九州古文化図鑑1」 1950
- 註21 特別展弥生人のメッセージ「絵画と記号」奈良県橿原考古学研究所附属博物館 1986
- 註22 常松幹雄他編「吉武高木」『福岡市埋蔵文化財調査報告書143』福岡市教育委員会 1986
- 註23 新原正典「塚堂遺跡I」『浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告1』福岡県教育委員会 1983
- 註24 福島日出海「榎町・勘高・巻原遺跡」『嘉穂町文化財調査報告書5』嘉穂町教育委員会 1985
- 註25 小葎遺跡発掘調査会「動物絵画のある壺形土器について」『考古学雑誌66 — 1』日本考古学会 1980

(4) 古墳時代以降の竪穴住居跡について

安武・深田遺跡で検出された古墳時代以降に所属すると考えられる竪穴住居跡は、住居跡でない31・70・77号住居跡の3軒を除くと合計で66軒を数える。これらの規模・構造・主要な出土遺物・所属時期等については第4表に記した通りである。より細かい時期細分も可能ではあったが、それでは遺跡の変遷状況を十分に抽出することができなかったので、時期的には6世紀前半～中葉、6世紀中葉～後半、7世紀末～8世紀前葉の3期に大きく分類した。以下では、これら3期における竪穴住居跡の構造等についての変遷を追ってみたい(第295図)。なお、所属時期が限定できた竪穴住居跡は44軒であり、それ以外の22軒については特に言及しない。

6世紀前半～中葉に属する竪穴住居跡は、7～10・13・66～68・80号住居跡の9軒である。谷地区の近辺にはなくいずれも調査区の東側で検出されたが、80号住居跡を除き、7～10・13号住居跡の5軒は調査区中央のやや南寄りに、66～68号住居跡の3軒は調査区のやや東寄りに集中する。規模は7・10・13・67号住居跡のように一辺が6m前後で面積30㎡程度の方形を平面プランとする大きな一群と、8・9・66・68・80号住居跡のように一辺が3～4mで面積10～15㎡程度の方形を平面プランとする比較的小さな一群とに分かれるが、これらは2つの住居跡集



第 295 図 古墳時代以降の遺構変遷図 (1/1,600)

表 4 古墳時代以降竪穴住居跡一覧表

No.	プラン	主柱穴	辺 長	面積 (㎡)	カマド	出入口施設	出 土 遺 物	時 期	切り合い関係
1	長方形	*	4.0×2.9	9.6	*	*	*	6世紀中葉～後半	*
2	正方形	4	5.0×4.6	23.3	北東	*	耳環, 手捏ね, 砥石	6世紀中葉～後半	*
3	長方形	4	4.0×2.6	11.5	*	*	*	6世紀中葉～後半	*
4	方 形	4	5.3×4.8	23.3	北東	*	*	6世紀中葉～後半	住4→溝1
5	方 形	4	3.9×3.7	14.4	西	*	手捏ね	古墳時代後期以降	*
6	長方形	3(+1)	4.9×(4.8)	(28)	北	*	石皿	古墳時代後期以降	*
7	方 形	4	5.8×5.2	28.5	西	*	手捏ね	6世紀前半～中葉	住8→住9→住7
8	正方形	4	(4.0)×(4.0)	15	*	*	*	6世紀前半～中葉	住8→住9→住7
9	方 形	4	3.2×3.1	9.5	北西	*	手捏ね	6世紀前半～中葉	住8→住9→住7
10	正方形	4	6.0×6.0	33.8	北	粘土	手捏ね	6世紀前半～中葉	住21→住10
11	長方形	4	4.15×(3.7)	15.1	*	*	手捏ね	古墳時代後期以降	*
12	*	*	*	*	北東	*	*	古墳時代後期以降	住12→住7
13	正方形	4	6.23×6.05	36.5	北	*	手捏ね, 砥石, 鉄鏃	6世紀前半～中葉	*
14	方 形	4	4.8×4.3	19.5	北西	粘土	*	6世紀中葉～後半	*
15	方 形	*	4.4×(3.0)	(18)	*	*	*	古墳時代後期以降	*
16	方 形	*	4.7×4.1	(19)	*	*	手捏ね	古墳時代後期以降	*
17	方 形	*	3.7×(3.4)	(16)	*	*	*	6世紀中葉～後半	住17→住18
18	正方形	*	3.4×3.0	9.7	西	*	*	6世紀中葉～後半	住17→住18
19	方 形	4	4.5×4.5	20.4	北西	*	*	6世紀中葉～後半	*
20	方 形	4	(5.0)×(4.0)	(17)	*	*	*	古墳時代後期以降	*
21	方 形	4	5.35×4.96	24.2	北	*	手捏ね	6世紀中葉～後半	住21→住10
22	長方形	4	4.7×4.2	18.8	北西	*	*	古墳時代後期以降	住23→住22
23	方 形	*	*	(11.6)	北	*	*	古墳時代後期以降	住23→住22
24	方 形	4	4.3×4.2	17.5	北西	テラス	*	6世紀中葉～後半	住27→住24
25	方 形	*	4.7×(3.5)	(15)	*	*	手捏ね	6世紀中葉～後半	住31→住25→溝6
26	長方形	4	3.2×(2.1)	(13)	北東	*	*	古墳時代後期以降	住26→溝5
27	長方形	*	3.2×2.9	8.8	*	*	*	古墳時代後期以降	住27→住24
28	方 形	*	2.8×(1.5)	(8)	*	*	製塩土器	古墳時代後期以降	住28→谷流入口
29	長方形	4	4.5×3.9	17.1	*	柱穴?	砥石	7世紀末～8世紀前葉	住30→住29
30	方 形	4?	4.5×(3.0)	(22)	北	*	*	6世紀中葉～後半	住30→住29
31	方 形	*	*	*	*	*	石製紡錘車	6世紀中葉～後半	住31→住25→溝6
32	*	*	(2.9)×(2.85)	*	*	*	勾玉	古墳時代後期以降	*
33	台方形	*	3.3×2.55	7.9	*	テラス	*	古墳時代後期以降	*
34	方 形	4?	*	*	南東	*	*	古墳時代後期以降	*
36	方 形	4	4.35×4.1	18.7	北西	突出部	砥石	7世紀末～8世紀前葉	住51→住36
37	長方形	4	6.2×5.65	36.1	北	*	手捏ね, 砥石, 鉄器	6世紀中葉～後半	住37→住46
38	方 形	4	4.55×4.25	19.1	西	*	*	古墳時代後期以降	*
39	方 形	*	4.0×3.65	13.8	南西	*	*	7世紀末～8世紀前葉	*
40	台 形	4	4.5×4.0	17.2	北西	テラス	*	7世紀末～8世紀前葉	住40→溝16
41	方 形	4	5.9×5.35	30.8	南	粘土	タコ壺	6世紀中葉～後半	*
42	長方形	*	4.1×3.6	(14)	北西	*	*	6世紀中葉～後半	*
43	正方形	4	4.5×4.4	18.4	北西	*	*	6世紀中葉～後半	*
45	方 形	3(+1)	4.0×4.0	(15.6)	北西	*	*	古墳時代後期以降	*
46	方 形	4	(4.5)×4.0	(18.2)	北西	*	*	7世紀末～8世紀前葉	住37→住46
47	方 形	*	(3.5)×(3.4)	(11.6)	北西	*	*	古墳時代後期以降	住47→住48
48	方 形	4	*	(12)	北	*	*	古墳時代後期以降	住47→住48

No.	プラン	主柱穴	辺長	面積(㎡)	カマド	出入口施設	出土遺物	時期	切り合い関係
49	台形	4	(7.8)×6.2	44.8	北西	*	砥石	7世紀末～8世紀前半	*
51	方形	3(+1)	5.5×(5.0)	(27)	*	*	*	古墳時代後期以降	住51→溝17
53	方形	4	5.35×4.95	23.7	北西	*	*	古墳時代後期以降	住54・建10→住53
54	方形	4	4.2×4.15	16.4	*	*	*	6世紀中葉～後半	住54・建10→住53
55	正方形	4	4.8×4.8	22.3	北西	*	*	6世紀中葉～後半	住55→溝18
56	正方形	4	5.3×3.7	21.1	北西	*	手捏ね, 粘土塊	6世紀中葉～後半	建12→住56→建15
57	長方形	4	4.55×4.0	18.1	北西	*	ミニチュア?	6世紀中葉～後半	*
58	方形	*	(5.0)×(5.0)	*	北西	*	土錘, 土鈴	6世紀中葉～後半	*
59	正方形	4	4.9×4.6	22.1	北西	*	鉄鏝	6世紀中葉～後半	*
62	方形	2	3.1×2.75	7.8	北東	*	*	6世紀中葉～後半	*
63	方形	*	(2.7)×(1.1)	*	*	*	*	6世紀中葉～後半	*
64	正方形	4	3.7×3.5	12.6	北西	粘土	*	6世紀中葉～後半	*
66	方形	*	3.9×3.5	13.3	*	*	*	6世紀前半～中葉	*
67	長方形	4	6.1×5.5	33.7	北	粘土	*	6世紀前半～中葉	*
68	正方形	4	4.1×4.1	16.1	北	粘土	*	6世紀前半～中葉	住68→土壘23
71	長方形	4	4.75×3.5	18.1	西	粘土と突出部	敲石	6世紀中葉～後半	*
72	方形	4	4.7×4.4	19.5	*	*	*	古墳時代後期以降	住72←?→建24
73	長方形	4	4.1×3.45	13.6	北西	*	手捏ね	6世紀中葉～後半	*
75	方形	4	4.75×4.4	19.1	北西	*	*	古墳時代後期以降	住75→建22
76	長方形	4	4.65×4.25	18.5	北西	*	*	古墳時代後期以降	住76→溝1
78	方形	*	(5.1)×(1.2)	16.2	*	*	*	古墳時代後期以降	住78→住79
79	正方形	4	4.1×4.0	*	北?	*	*	6世紀中葉～後半	住78→住79
80	長方形	4	4.45×4.15	18.5	北	粘土	*	6世紀前半～中葉	*

中部のいずれにも存在し、時期的な変遷として捉えられそうにもない。9・10・13・80号住居跡では良好な遺構や遺物の遺存状態が見られたが、後述する2時期に比べて住居跡数全体に占める割合は大きい。これには住居の廃棄時点における状況が当然関係しようが、それ以外に深く掘込まれ後世の削平がさして及ばなかったという条件も考えられる。つまりこの時期の竪穴住居跡は、他の2時期より比較的深く掘込まれていたようである。カマドは西壁に付設された7号住居跡を除き、いずれも北壁の中央部に付設されるが、カマドを住居跡の中心軸として考えた場合、この時期の住居跡はおよそほぼ真北を向いていたことになる。出入口の施設としては、10・67・68・80号住居跡の4軒でカマドと対峙する壁の中央付近に黄褐色の粘土が見られ、他の時期に比べその割合は大きい。ただし、テラスや突出部を持つものは確認されていない。

6世紀中葉～後半に属する竪穴住居跡は、1～4・14・17～19・21・24・25・30・31・37・41～43・54～64・71・73・79号の31軒である。調査区のほぼ全域に亘って分布するが、調査区の北部と南西部の2箇所では特に濃密な分布を示す。規模的には一辺が6mを越え面積も30㎡を越えるような大きなものは見られなくなり、一辺が4～5mで面積20㎡前後の方形を平面プランとするものが主流となる。しかしごくわずかではあるが、一辺3mで面積10㎡程度のかなり小さいもの(18・27・33・62号)も見られるようになる。この小形の竪穴住居跡は部分的に集中することなく調査区の全域に散在するが、主柱穴が明確に確認されたのは62号住居跡だけ

である。もっともこの62号住居跡も支柱穴は2本で、4本柱を主流とする本遺跡においては唯一の例となる。遺構や遺物の遺存状態が良好だったのは19・37号住居跡ぐらいで、全体的に遺存状態は良くない。このことは先述したように、住居の廃棄時点での状態とその掘込む深さに関係すると考えられるが、この時期では前代の6世紀前半～中葉より掘込みかたが浅かったようである。カマドはやはりおおむね北壁の中央付近に付設されるが、18・71号住居跡では西壁に、41号住居跡では南壁に付設される。カマドを住居の中心軸とし想定した場合、この時期の住居跡は北というよりもむしろ北西を向いていたことになり、前代の6世紀前半～中葉の住居跡群とは明らかに異なった傾向を示す。出入口の施設としては、前代と同様にカマドと対峙する壁の中央付近に黄褐色の粘土が敷かれている住居跡(14・64・71号)もあるが、粘土の代わりにテラスが作り出される住居跡(24・33・41号)や、住居の外側へ階段状の突出部を作り出す住居跡(71号)もありその形態は様々である。なお、この時期の竪穴住居跡どうしが切り合うことはない。

7世紀末～8世紀前葉に属する竪穴住居跡は29・36・39・40・46・49号の6軒である。これらの分布は6世紀前半～中葉期の分布と全く異なり、すべて調査区の西側でそれも谷地区に沿って分布する。規模は49号住居跡が一辺7m前後とかなり大きい、他の5軒はすべて一辺4～4.5mで面積18㎡程度のはほぼ同じ規模を有する。遺構の遺存状態はもちろん遺物の遺存状態も悪く、全体的に住居の掘込みかたがかなり浅かったようである。カマドはおおむね北壁の中央付近に付設されるが、39号住居跡に限っては南西側の壁でしかもそれが中央よりやや北にずれて付設されるという特異性が窺える。カマドを住居跡の中心軸として想定した場合、この時期の住居跡はおよそ北西方向を向いているようである。出入口の施設としてはカマドと対峙する壁の中央部に、29号住居跡には2本の柱穴が、36号住居跡には階段状の突出部が作り出されており、粘土が敷かれることはない。なお、この時期の竪穴住居跡どうしも前代と同様に切り合うことがない。

以上、本遺跡における古墳時代以降の竪穴住居跡の変遷を3段階に亘って見てきたが、ここで今一度近接する安武・土井の内遺跡との関係を踏まえながら纏めてみたい。本遺跡では弥生時代後期前葉以降、人間が生活した痕跡は途絶える。しかし、古墳時代後期の6世紀に至り再び集落としての人間の生活の跡が見られるようになる。それは調査区の東側において始まり、6世紀後半代には谷地区付近へと生活の中心を移して行く。住居跡の軒数も3倍近くになり、本遺跡が最も栄える時期である。掘立柱建物跡については次項で詳述するが、その多くはこの時期に属するものと考えられる。6世紀前半～中葉から6世紀中葉～後半段階での大きな変化は大小2形態あった住居が中くらいの規模に統一されてくると共に、小数ながらもかなり小さな竪穴住居跡が出現することである。また、住居の方位も真北から北西方向へ代わるのも一つの変化である。さらに近接する河岸段丘上の安武・土井の内遺跡でも竪穴住居が作られたすの

はこの6世紀中葉からであり、遺跡の広がりには最大となる。ところがそれに後続する7世紀代の竪穴住居跡は両遺跡において全く見られず、谷地区からごくわずかに遺物が確認される程度で、あたかも集落全体が他の場所へ移ったかのようである。そして約一世紀を経た7世紀末に至り再び竪穴住居が作られたが、これは安武・深田遺跡だけで軒数も少なく長続きはせず、この段階以降安武遺跡群では竪穴住居跡の構築が行なわれなくなる。

(5) 掘立柱建物跡について

安武・深田遺跡では32棟の掘立柱建物跡が検出された。分布は調査区のほぼ全域に亘るが、10～16号掘立柱建物跡は調査区北部で竪穴住居跡と共に集中し、29～32号掘立柱建物跡は調査

表 5 掘立柱建物跡一覧表

No.	間数	梁行×桁行	面積(m ²)	桁行方位	時 期	切り合い関係
1	1×1間	2.00×2.35	4.3	N-17°-W	古墳時代後期以降	*
2	2×2間	4.45	*	N-82°-W	古墳時代後期以降	*
3	2×2間	3.20×3.45	9.1	N-60°-W	古墳時代後期以降	*
4	2×2間	*	*	N-35°-E	古墳時代後期以降	*
5	2×2間	3.85×4.00	15	N-64°-W	古墳時代後期以降	(古) 建5→溝2 (新)
6	1×1間	3.40×3.40	4.6	N-54°-W	古墳時代後期以降	*
7	2×2間	3.35×3.60	12.2	N-37°-E	古墳時代後期以降	*
8	2×2間	2.75×3.40	9.7	N-82°-W	古墳時代後期以降	建8→溝4・6
9	2×2間	4.30×4.60	20.3	N-58°-W	奈良時代以降	溝11→建9
10	2×2間	3.25×3.30	10.7	N-49°-W	古墳時代後期以降	建10→住53
11	2×2間	2.35×3.60	8.6	N-40°-E	6世紀中葉～後半	*
12	2×2間	2.65×3.15	7.9	N-30°-E	6世紀中葉～後半	建12→住56
13	2×2間	3.30×3.35	12.2	N-48°-E	古墳時代後期以降	建13←?→建15
14	2×2間	3.45×3.65	12.3	N-73°-E	6世紀中葉～後半	建14→溝19
15	2×2間	3.45×3.65	12.7	N-38°-E	古墳時代後期以降	建13←?→建15
16	2×2間	3.65×3.70	13.8	N-48°-E	古墳時代後期以降	*
17	2×2間	2.80×2.85	7.8	N-50°-E	6世紀中葉～後半	*
18	1×1間	1.50×1.70	11.1	N-23°-E	古墳時代後期以降	*
19	2×2間	3.70×3.95	14.6	N-50°-W	6世紀中葉～後半	*
20	2×3間	4.75×5.65	26.3	N-10°-W	古墳時代後期以降	*
21	2×2間	3.00×3.15	9.1	N-63°-E	古墳時代後期以降	*
22	2×2間	4.05×4.7	17.7	N-45°-E	古墳時代後期以降	住75→建22
23	(2)×2間	1.75×3.25	(11.6)	N-44°-E	古墳時代後期以降	*
24	1×2間	2.20×3.95	8.3	N-40°-E	古墳時代後期以降	住72←?→建24
25	2×2間	4.00×4.15	15.1	N-41°-E	古墳時代後期以降	*
26	1×2間	1.90×2.75	(5.2)	N-28°-E	古墳時代後期以降	*
27	(1)×1間	2.60×2.65	7.3	N-37°-E	古墳時代後期以降	建27←?→溝29
28	2×2間	2.80×3.30	9.2	N-29°-E	古墳時代後期以降	*
29	2×2間	3.95×4.15	16.2	N-70°-W	古墳時代後期以降	建29←?→建30←?→建31
30	1×2間	1.90×3.85	(14.0)	N-74°-W	古墳時代後期以降	建29←?→建30←?→建31
31	2×2間	3.15×3.20	11.2	N-72°-W	古墳時代後期以降	建29←?→建30←?→建31
32	1×1間	2.60×2.65	7	N-68°-W	古墳時代後期以降	*

区東端で竪穴住居跡とは関係なく集中する。間数は2×2間がその大半を占めるが、1×2間(24号)や2×3間(20号)も各1棟ずつ見られる。1×1間とした1・6・18・26・27号の5棟の掘立柱建物跡は、竪穴住居跡が大きく削平され支柱穴のみが残った状態としての可能性が強い。23・30・32号は1×2間としているが、いずれも調査区の際で検出されたもので実際には調査区外へ延びていき、2×2間の掘立柱建物跡と考えられる。竪穴住居跡と切り合うのは10号(建10→住53)、12・15号(建12→住56→建15)、22号(住75→建22)、24号(建24←?→住72)の5棟である。そのうち確実に所属時期を押さえることのできる56号竪穴住居跡(6世紀中葉～後半)との切り合いは、12号掘立柱建物跡がそれに切られ、15号掘立柱建物跡がそれを切るといふ関係にある。この他に5号掘立柱建物跡は中世の2号溝に切られ、8号掘立柱建物跡は7世紀末～8世紀前葉に属する4・6号溝に切られ、9号掘立柱建物跡は7世紀末～8世紀前葉に属する11号溝を切る、という先後関係を有する。桁行方位ではかなりのバラツキが窺えるが、桁と梁の方位自体は32棟中26棟までが北西—南東もしくは北東—南西で、6世紀中葉～後半に属する竪穴住居跡の壁の方位とほぼ同じである。出土遺物は掘立柱建物跡という遺構の性格上極めて少なく、図化できたのは第204図の13点にすぎない。このうちある程度の時期比定ができる掘立柱建物跡は11・12・14・17・19号の5棟で、いずれも6世紀中葉～後半に位置づけられる。

以上のように本遺跡で検出された掘立柱建物跡は、出土遺物・方位・切り合い関係等から判断してその多くが古墳時代後期(6世紀中葉～後半)もしくはそれ以降に属するものと考えられる。しかし、どの掘立柱建物跡がどの竪穴住居跡と有機的な関係を持つのか、または特定の時期に何棟の掘立柱建物跡が共存していたのか、といった遺跡における掘立柱建物跡の在り方については明確でない。

(6) その他の古墳時代以降の遺構について

竪穴住居跡や掘立柱建物跡以外の古墳時代以降の遺構としては、土壙や溝をはじめ土壙墓や道路状遺構等があげられる。

土壙については18基が検出されたが、その幾つかについて注意を払っておきたい。6世紀中葉～後半に属する23号土壙からは、10個体程度になると考えられるタコ壺が破碎された状態で出土している。隅丸長方形を呈する土壙で、その両端からは柱穴も検出され、上部施設の存在も想定される。11号土壙は7世紀末～8世紀前葉に属し、12・13号土壙とともに谷地区内で検出された。いずれの土壙からも細長く断面二等辺三角形を呈した木器の原材らしきものが出土しており、木器原材の保存施設であった可能性が窺える。

溝は6世紀前半～中葉から中世まで各時期に亘って合計で30条が検出されたが、いずれの時期においても竪穴住居跡や掘立柱建物跡と有機的な関係を見いだすことはできそうにない。26

号溝については、深さ0.8mで断面は急傾斜の逆台形を呈し、遺物の遺存状態は質・量ともに注目すべきものがある。

道路状遺構は側溝を伴うものである。全長21mに及ぶものであるが、出土遺物はなくまた周囲の遺構との関連性を見いだすことはできず、所属時期は不明である。

古墳時代以降の土壙墓と断定できたのは、石枕や木片が敷き詰められた4号土壙墓だけである。このほかに周溝を伴うと考えられる17号土壙も土壙墓の可能性が窺えるが、いずれにしても群構成をなすことはなく単独に存在する。

(7) 古墳時代以降の出土遺物について

先述してきたように、安武・深田遺跡で検出された遺構は6世紀前半～中葉、6世紀中葉～後半、7世紀末～8世紀前葉、中世(12～13世紀)の4期に及ぶが、遺物については6世紀前半から8世紀中葉までのものと中世(12～13世紀)のものに分かれる。つまり、遺構こそは確認できなかったが、谷地区からは7世紀代や8世紀中葉の遺物も出土しており、遺跡全体としては古墳時代後期から奈良時代まで連続と続いていたと考えられる。

遺跡の変遷については、竪穴住居跡から出土する須恵器の坏を中心に追ってきた。そしてそれに伴う土師器の変遷も試みたが、編年に耐えうるような特徴を抽出するまでには至っていない。にもかかわらず敢えて特徴をあげるとすれば、それは甕と甑の器形についてである。つまり、甕の場合は口径20～25cmで口縁部が比較的強く外反するものと、口径10～15cmで口縁部のあまり外反しないものとの、甑の場合は胴部がほとんど張らずまた端部に平坦面を作る口縁部も外反せずにほぼ直線的に立ち上がる器形と、胴部は張り口縁部も外反する甕に似た器形とに分かれる。

谷地区には、遺構として検出されなかった時期の遺物(7世紀代や8世紀中葉)が包含されていた。製塩土器は谷地区中央付近の20・22・24区や北端の36区から纏まって出土した。遺構に伴うものは28号竪穴住居跡から出土した1点だけであるが、全体の器形がわかるのはこれだけで、谷地区から出土したものについては細かく破碎されていた。安武・深田遺跡の周辺では、京都郡豊津町の豊前国府推定地から出土しているだけである。また判読こそはできなかったが、8世紀中葉の2点の墨書土器やおそらく墨書土器と同一時期に属するであろう2点の木簡も谷地区を中心に出土しており、今後の周辺地域を含めた8世紀代の資料増加が期待される。このほかに埴輪や瓦も出土しており、遺構として検出されなかった古墳や建物も存在していたようである。

また谷地区からは多量の木器も出土したが、弥生時代から奈良・中世までの遺物を含む包含層からの出土という性格上、所属時期を特定できるものは得られなかった。集中出土した槌の子をはじめ、鋏・曲げ物・扉・櫛等器種や用途をある程度限定できるものもあるが、多くは用

途不明のもので占められる。

なお、谷地区18区で出土した獣骨及び貝類の同定については、現在その調査を依頼中であるので後日報告する予定である。

(8) 古墳時代以降の安武・深田遺跡

ここまで古墳時代以降の遺構や遺物について見てきたが、今一度改めて遺跡全体の変遷について考えてみたい。

古墳時代以降の安武・深田遺跡では、まず6世紀前半代に竪穴住居跡が構築され始める。そして近接する土井の内遺跡でも竪穴住居や掘立柱建物が構築されだす6世紀後半代にピークを迎える。深田遺跡の掘立柱建物跡も多くはこの時期に建てられたものと考えられるが、竪穴住居跡との関係は判然としなない。ところが確実に7世紀代に属する竪穴住居跡や掘立柱建物跡は全く確認されておらず、あたかも大きな人間の移動が想定される。その後7世紀末に至り再び竪穴住居が構築されだすが、それはごく小規模のもので8世紀前葉で終わってしまう。遺物自体は谷地区から7世紀代や8世紀中葉のものも若干出土するが、遺構としては確認されていない。このことが後世の削平を意味するのか、それとも調査区外における未確認の当該期遺構の存在を意味するのかは、現段階の資料で語ることはできない。その後中世まで人間の生活は窺えないが、もっとも中世においても2条の溝と2基の性格不明土壇があるだけで、人間の生活といえるほどのものではない。なお、7世紀代に大きな人間の移動を想定したが、その行く先として本遺跡の南約500mに広がる赤幡・森ヶ坪遺跡が上げられる。この遺跡は6世紀後半代から竪穴住居が構築され始め、7世紀代にそのピークを迎えるとのことである。現在当教育委員会において整理作業中であり、そのことについては後日（平成3年度）の報告書に譲りたい。いずれにせよ土井の内遺跡を含めた安武遺跡群は、古墳時代後期における豊前地域の集落変遷を考える上で重要な要素を多く含んでおり、今後周辺遺跡の状況が明らかになっていく過程でその都度その意義を確認していきたい。

さらに8世紀代に属するであろう墨書土器・木簡・製塩土器等は、安武遺跡群が当該期においては単に一般民衆の集落ではなく、何らかの政治性を有した場所であったことを連想させるものである。特に、この地域一帯は『延喜式』に登場する「築城駅」の推定地でもあり、やはりこの時期の遺構が多く確認されている赤幡・森ヶ坪遺跡をも含めて、律令期における安武遺跡群の性格について今後注意を払っていかなければならない。（水ノ江）

IV 安武・土井の内遺跡

1. 調査の概要

安武・土井の内遺跡は築上郡築城町大字安武1395～1399番地に所在する。第III章に報告した安武・深田遺跡の西側に町道を挟んで隣接する遺跡なので、詳しい立地・環境等は第II章を参照されたい。

遺跡は城井川の作り出す扇状地（築城原）の要の位置にあたり、英彦山から北方へ派生する山地が安武、船迫あたりで標高50m以下の低平な台地へと変わる。この洪積台地は複雑に谷を折り込みながら別府あたりまで延びている。遺跡はその台地の東端部、標高36.3～35.6mに立地し、西側は灌漑用溜池である双子池、東は安武・深田遺跡をのせる築城扇状地との比高1.2～1.5mの崖線に限られた、幅100mほどの狭い幅しか持たない。

調査区の西側には現水路が南北へ縦貫するが、下層から検出された1号溝の出土遺物は近世の陶器で、当地が江戸末期に既に耕地として開削されていたことがわかる。

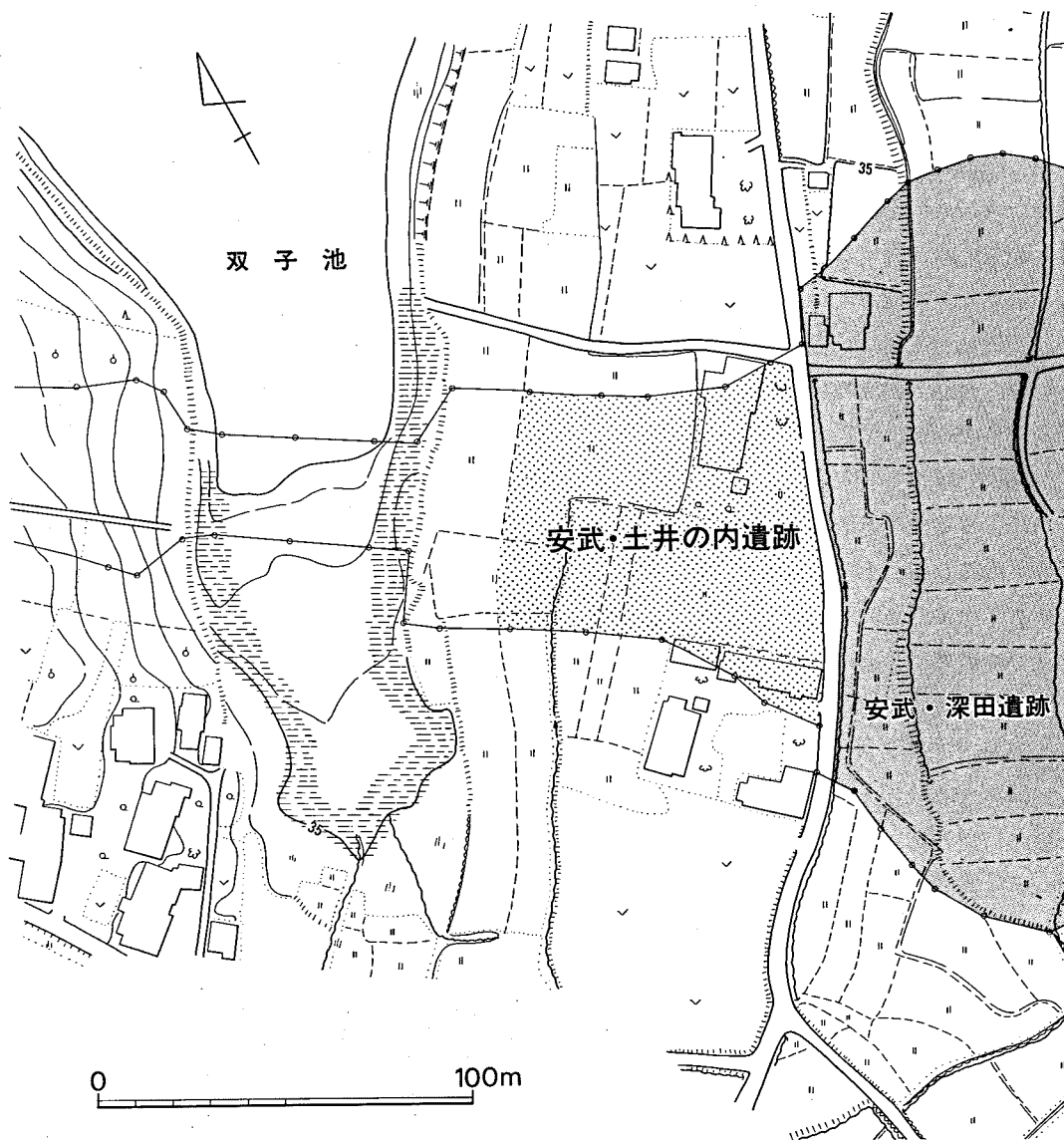
調査した遺構は、縄文・弥生・古墳・中世・江戸時代に亘る。縄文時代の遺物は極めて少ないが、形態・埋没の状況からいわゆる「陥し穴」と考えられる土壇23基と、打製石斧と縄文土器の小破片が出土したピット1基がある。弥生時代では3号竪穴住居跡が単独で検出された。古墳時代の遺構は竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡6棟、土壇1基と柱穴が、調査区の南東、つまり高い箇所にはさまって検出された。江戸時代では2条の溝がある。なお、陥し穴とした土壇のみが存在する調査区の東端は、約50cmほど削平されており、この段階で浅い遺構等は消滅したものらしい。また、3号住居跡の東方には柱穴以外の遺構が全く認められず、遺跡の主体がより南側にあることを物語っている（付図）。
(木下)



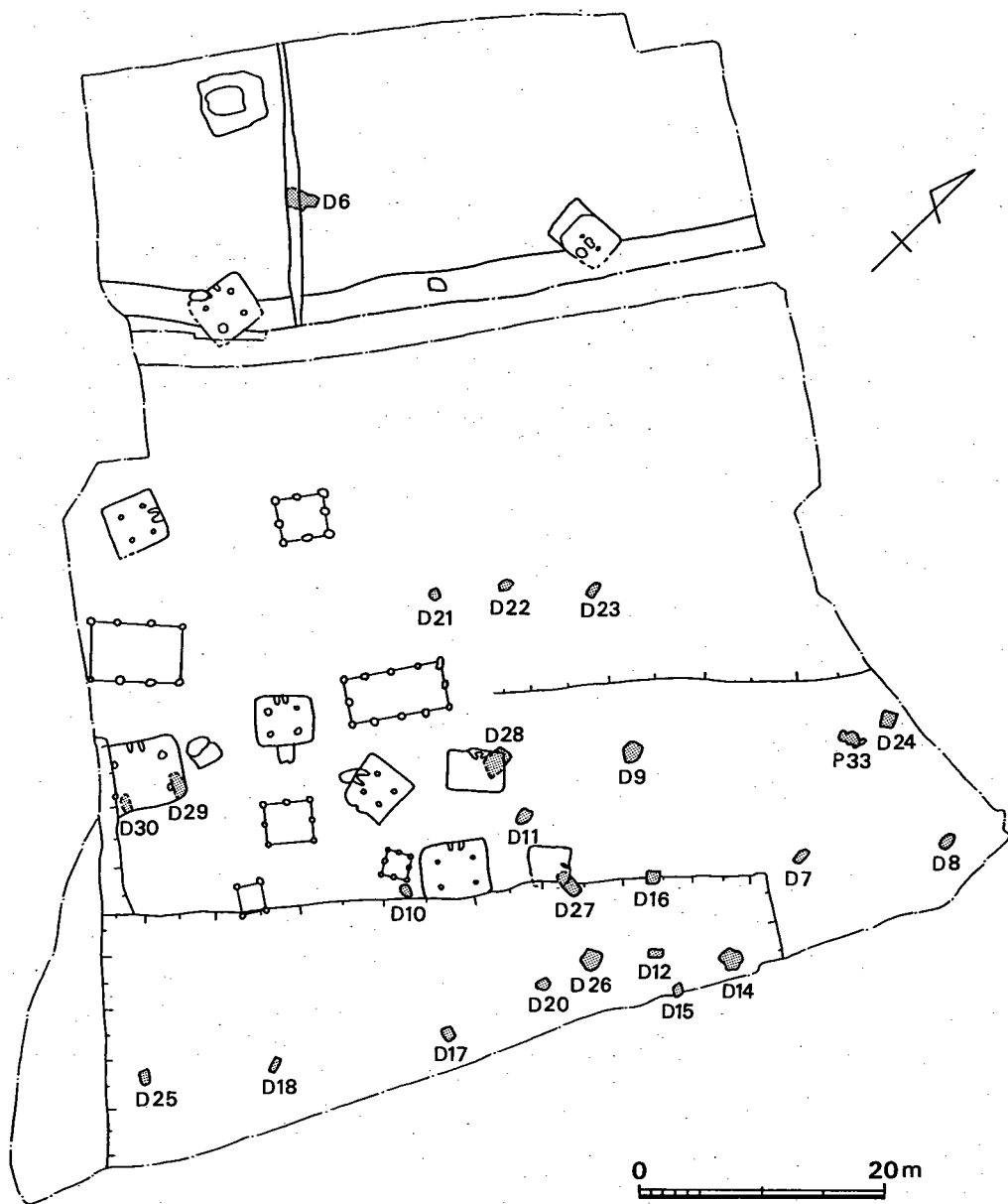
第1図 安武・土井の内遺跡調査風景

2. 縄文時代の遺構と遺物 (第3図)

本遺跡で検出された遺構の中で縄文時代に属すると考えられるのは、6・12・14・18・20・30号土壌とP33である。6・12・14・18・20・30号土壌は、その形態や遺物が全く出土しないという状況から、いずれもいわゆる「陥し穴」と認識されている遺構であろう。他の時期の遺構との切り合いについては、27号土壌が7号住居跡に、28号土壌が8号住居跡に、29・30号土壌が2号住居跡にと、それぞれ古墳時代の竪穴住居跡に切られている。調査区北西部に位置する6号土壌を除き、他の土壌はすべて調査区の南東側半分に集中する（以下便宜的にこの地区を



第2図 安武・土井の内遺跡地形図 (1/2,000)



第 3 図 縄文時代遺構配置図 (1/600)

「土壙集中部」と称する)。これらは何らかの規則性をもって列状に並んだり局部的に密集することはなく、散在といった分布状況をみせる。また、長軸の方位も不統一で規則性が窺えない。埋土はいずれも粘性の弱い粘質土で鈍く淡い褐色を呈する。なお、P33からは2点の打製石斧が出土した。

(1) 陥し穴

6号土壙 (図版7, 第4図)

6号土壙は他の「陥し穴」土壙から離れ、唯一調査区北西部に位置し、2号溝に切られる。調査の都合上、本土壙の西端で2号溝の下位にあたる部分は未掘で、平面プランや正確な規模は不明であるが、上面は長軸252cm、短軸135cmの不整楕円形で、深さは95cmを測る。断面形態はいずれの方向においても階段状を呈し、底面プランは幅32~50cmの長楕円形を呈する。なお、底面の南西よりには径25cm、深さ5cmのごく浅い窪みがある。

7号土壙 (図版7, 第4図)

7号土壙は調査区の北東端で、8号土壙と24号土壙の間よりやや南西に位置する。上面は長軸127cm、短軸69cm、底面は長軸90cm、短軸46cmでいずれも隅丸方形を呈し、深さ72cmを測る。底面中央部には2段掘りの柱穴があり、1段目は長軸43cm、短軸39cm、深さ7cmの隅丸方形で浅く、2段目は径16cm、深さ83cmと深い。

8号土壙 (図版8, 第5図)

8号土壙は調査区の北東端に位置する。肩口の北西部を若干削平されるが、上面はおおよそ長軸132cm、短軸87cmの楕円形で、深さ104cmを測り、底面は長軸95cm、短軸66cmの隅丸方形を呈する。底面には径35cm、深さ52cmの柱穴が、同南隅には径11cm、深さ12cmの柱穴が掘られる。

9号土壙 (図版8, 第5図)

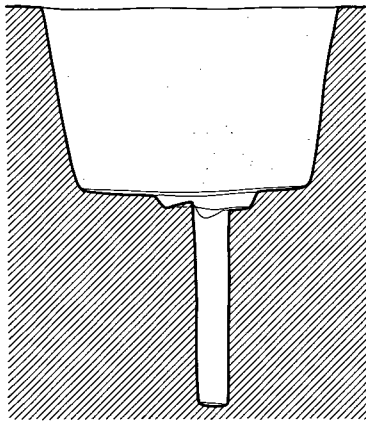
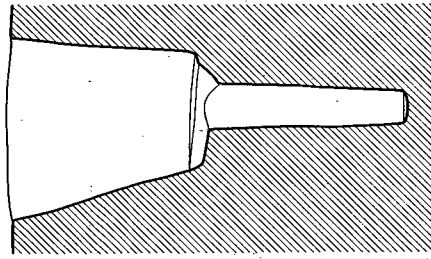
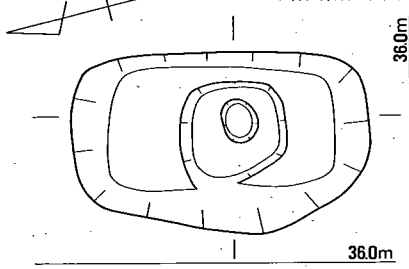
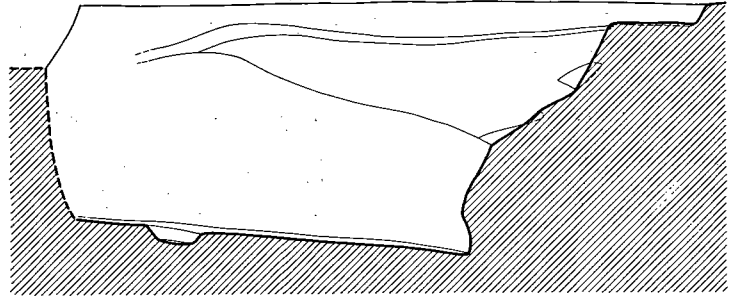
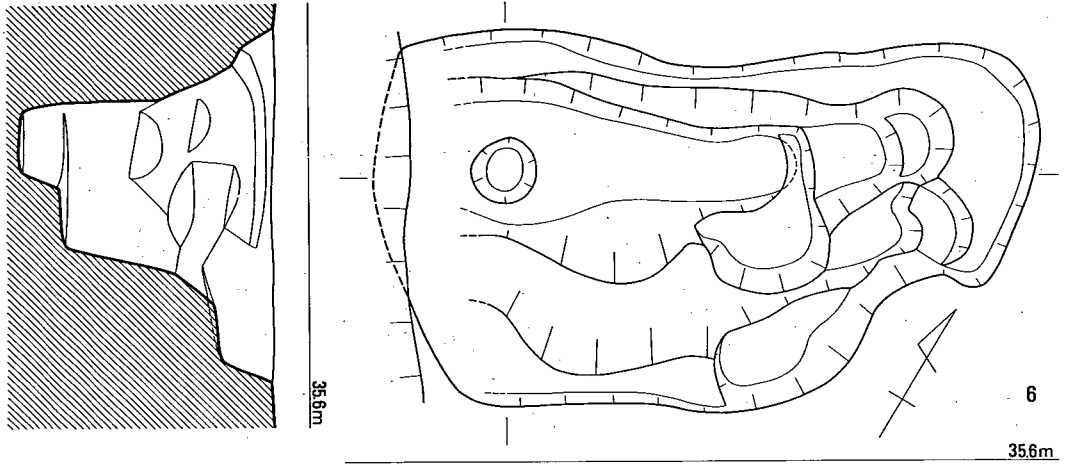
9号土壙は、土壙集中部の北東寄りに位置する。上面は長軸179cm、短軸130cmの楕円形プランで深さは108cmを測り、底面は長軸111cm、短軸60cmの長方形プランである。底面中央部には、長軸40cm、短軸26cmの隅丸方形の柱穴が34cmの深さで掘られており、その上部には5~20cmの礫が10個ほど置かれている。なお、この柱穴の北西隅には礫が置かれておらず、この部分に限って深さが53cmと他の部分よりも若干深く掘られている。

10号土壙 (図版9, 第6図)

10号土壙は土壙集中部の中央やや南で、4号掘立柱建物跡に近接した位置にある。上面は長軸116cm、短軸82cmの不整楕円形プランで深さ107cmを測り、底面は長軸103cm、短軸63cmの隅丸方形プランを呈する。底面の中央やや西寄りには、径21×17cm、深さ14cmの柱穴が掘られる。

11号土壙 (図版9, 第6図)

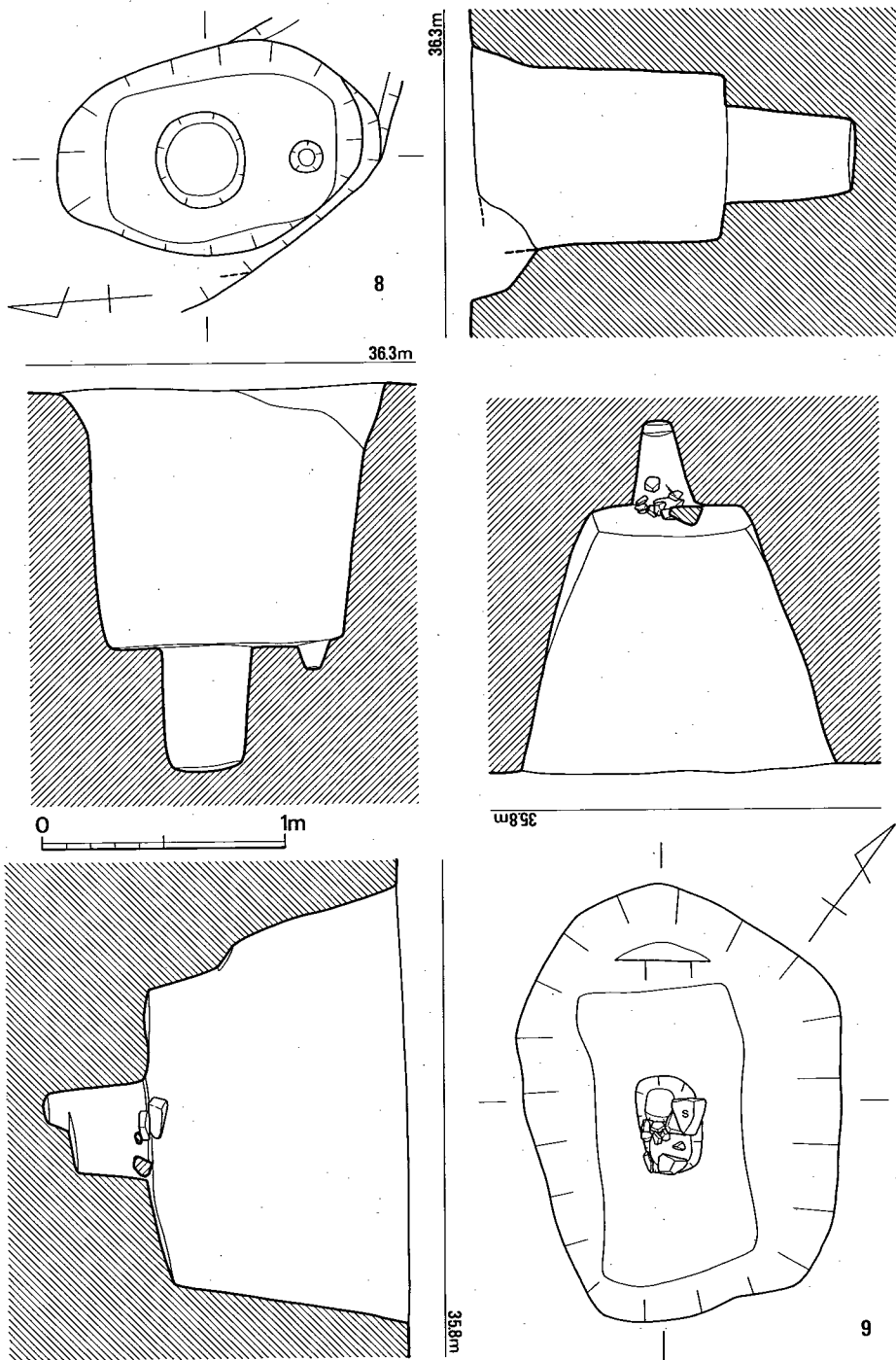
11号土壙は土壙集中部の中央で、7号住居跡と8号住居跡の間に位置する。土壙の南西部



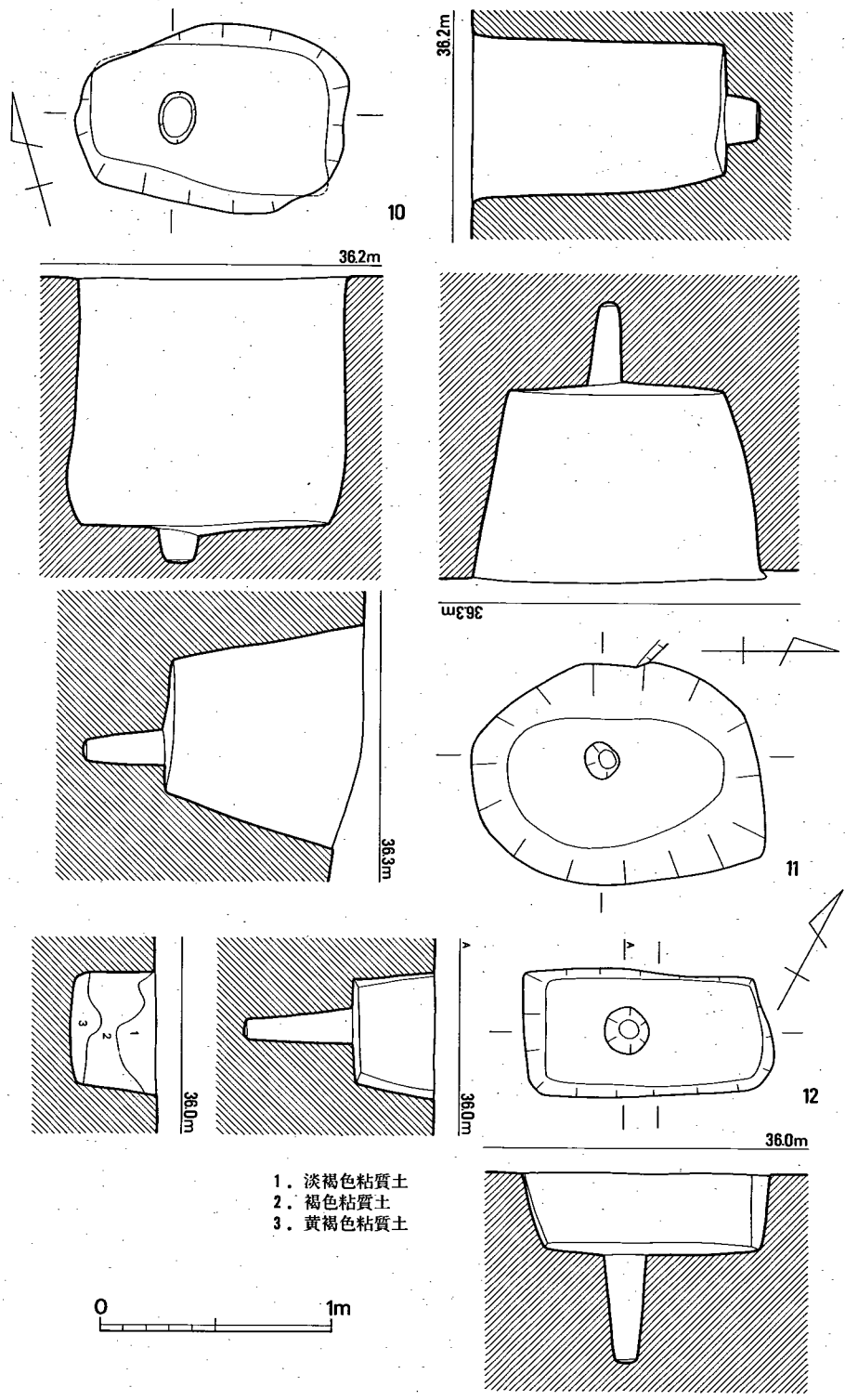
7



第 4 图 6·7号土坑实测图 (1/30)



第5图 8·9号土坑实测图 (1/30)



第 6 图 10~12号土壙实测图 (1/30)

をわずかに削平されるが、上面プランは長軸123cm、短軸97cmの北東部に若干突出した不整楕円形で、深さは84cmを測る。底面プランは長軸93cm、短軸55cmの楕円形で、中央部の西寄りには径15cm、深さ38cmの柱穴がある。

12号土壙 (図版10, 第6図)

12号土壙は土壙集中部の中央東端で、15・16・26号土壙に挟まれるような位置にある。上面は長軸107cm、短軸56cm、底面は長軸93cm、短軸47cmでいずれも長方形プランを呈し、深さは35cmを測る。底部中央には、径20cm、深さ46cmの柱穴が掘られる。柱穴内埋土は淡褐色粘質土で、粘性は比較的強い。

14号土壙 (図版11, 第7図)

14号土壙は土壙集中部の中央東端に位置する。上面プランは長軸181cm、短軸95cmの不整形だが、底面プランは長軸100cm、短軸57cmの整った長方形を呈し、深さは149cmを測る。北西壁には凹凸が多いが、他の壁は比較的平坦である。北西壁には径20×24cmで奥行き17cmと、径21×11cmで奥行き7cmの段(穴)が2つ掘られているが、これは階段的な役割を果たしていたものと考えられる。

15号土壙 (図版11, 第7図)

15号土壙は、土壙集中部の東端で12号土壙の東約3mに位置するが、上面の東端部は若干削平される。上面は長軸102cm、短軸57cmの不整長方形、底面は長軸80cm、短軸46cmの長方形で、51cmの深さである。底面中央部には径26cm、深さ41cmの柱穴がある。埋土は下位ほど粘質性が強くなる。

16号土壙 (図版12, 第8図)

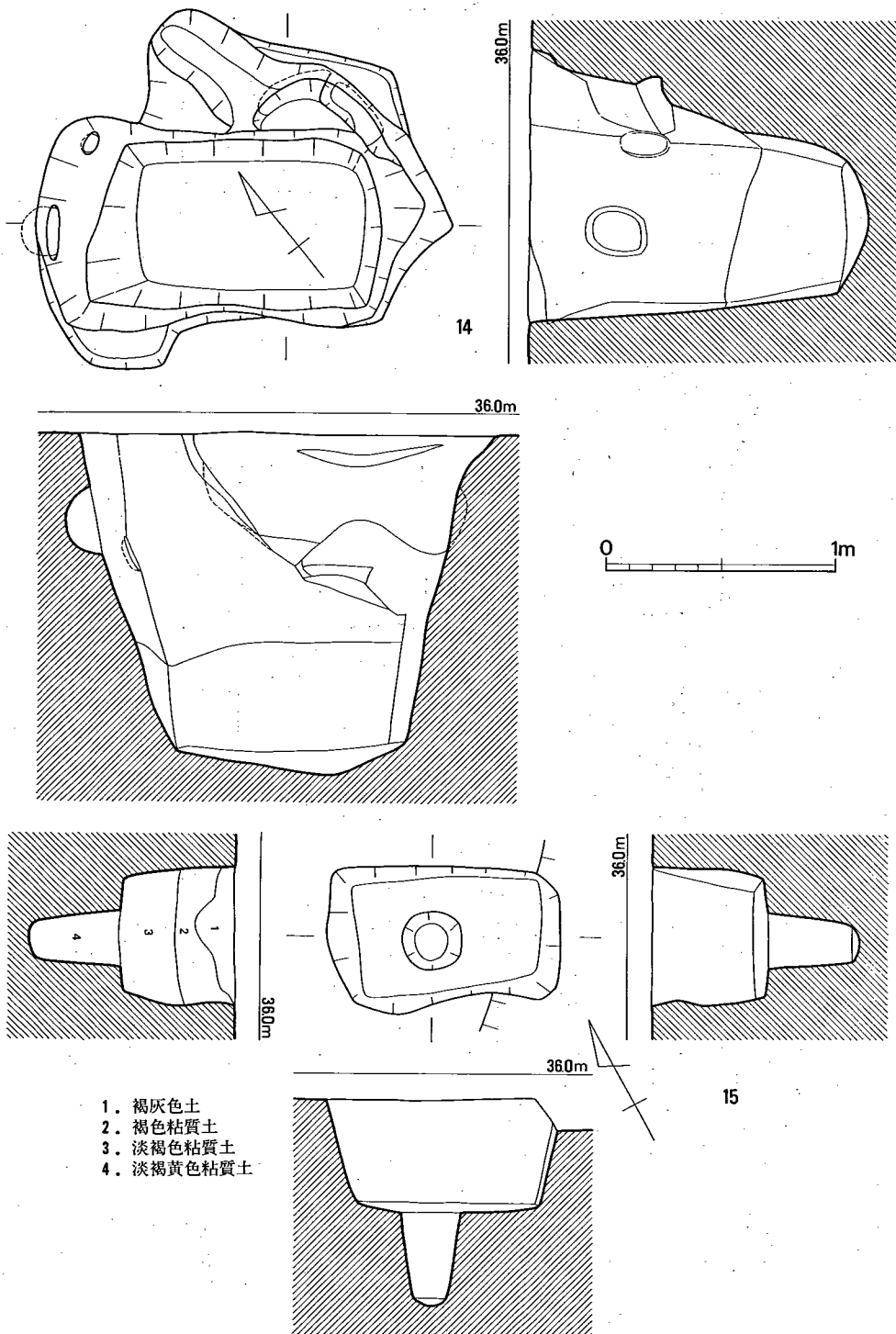
16号土壙は、土壙集中部の中央東寄りに位置する。南東側半分を大きく削平されるが、上面の長短軸とも100cm、底面の長短軸とも40cmの隅丸正方形プランで、本遺跡では他に類例がない。上面から下位30cmには一辺65~70cm、幅11~15cmのやはり隅丸方形の段(平坦面)が巡らされ、これも他に類例がない。

17号土壙 (図版12, 第8図)

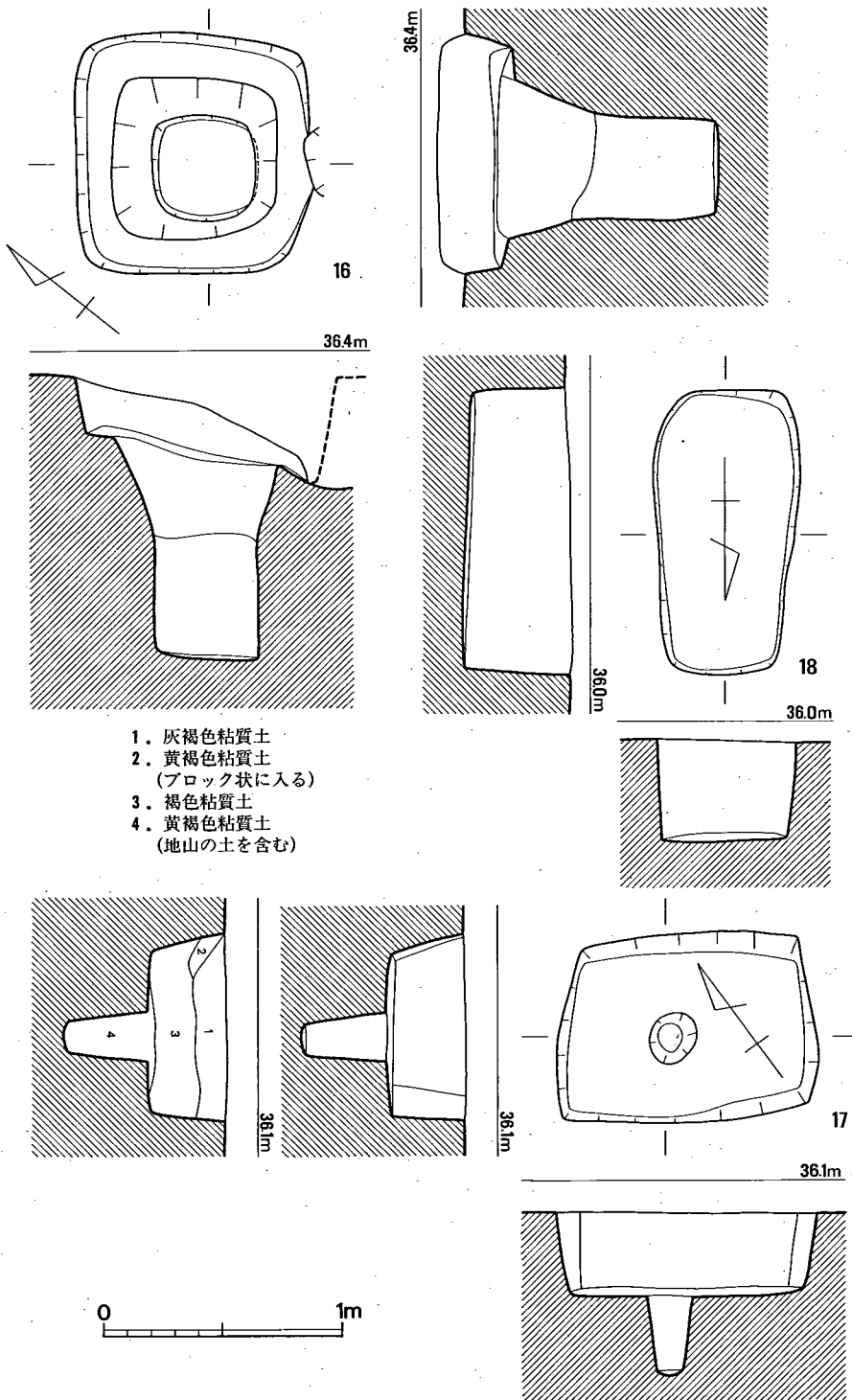
17号土壙は土壙集中部の南端で、25号土壙の北東約10mに位置する。上面の長軸109cm、短軸78cm、底面の長軸99cm、短軸68cmでわずかに歪んだ長方形プランで、深さ34cmを測る。底面中央には、径21cm、深さ38cmの柱穴が掘り込まれる。土層番号(2)は、土壙の壁が崩落したものと考えられる。

18号土壙 (図版13, 第8図)

18号土壙は、土壙集中部の南東端に位置する。上面は長軸119cm、短軸53cm、底面は長軸114cm、短軸49cmでいずれも隅丸長方形で、深さ38cmを測る。底面に柱穴等はない。



第 7 图 14·15号土壤实测图 (1/30)



第 8 図 16~18号土坑実測図 (1/30)

20号土壙 (図版13, 第9図)

20号土壙は土壙集中部の中央東端で、26号土壙の南約3mに位置する。上面は長軸120cm, 短軸86cmの卵形のプランを呈する。底面は北東に寄っており、長軸70cm, 短軸56cmの緩やかな不整楕円形である。土壙の南西隅には径22cm, 深さ41cmの柱穴が掘られており、本遺跡の土壙にあつては特異な構造を持つ。

21号土壙 (図版14, 第9図)

21号土壙は土壙集中部の北端で、22号土壙の南西約5m, 3号掘立柱建物跡の北西約5mに位置する。上面は長軸122cm, 短軸106cmの不整形を呈するが、これは壁の崩落等によるものであろうか。底面は長軸73cm, 短軸55cmの整然とした長方形プランで、上面から86cmの深さにある。底面の中央部には径22cm, 深さ59cmの柱穴が掘られ、その上部では根石と考えられる礫が5点検出された。

22号土壙 (図版14, 第9図)

22号土壙は土壙集中部の北端で、21号土壙と23号土壙との間でもやや21号寄りに位置する。上面は長軸97cm, 短軸80cmの不整円形を呈し、底面は長軸83cm, 短軸66cmの隅丸方形で、深さは81cmを測る。底面の中央部には、径25cm, 深さ66cmの柱穴が掘られる。

23号土壙 (図版15, 第10図)

23号土壙は土壙集中部の北端で、22号土壙の北東約8mに位置する。上面は長軸114cm, 短軸95cmの不整楕円形を呈し、底面は長軸107cm, 短軸66cmの隅丸長方形を呈する。上面から35~50cmのところに緩やかな段を作り、底面までの深さは104cmを測る。底面中央部には、根石と考えられる礫がその肩口に置かれた径30cm, 深さ58cmの柱穴が掘られる。

24号土壙 (図版15, 第10図)

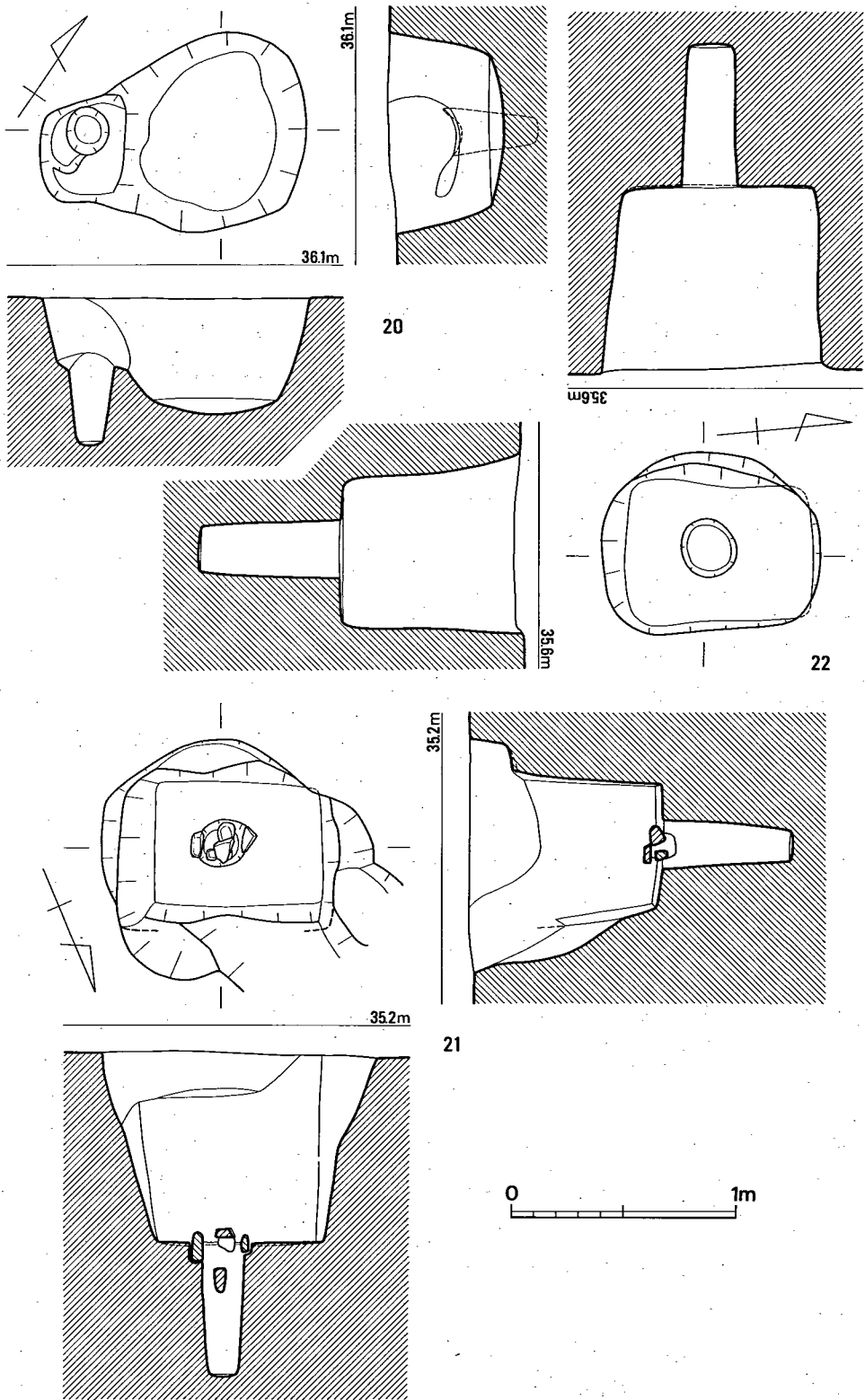
24号土壙は土壙集中部の北東端に位置し、P33の北約3mの距離にある。上面は長軸120cm, 短軸113cmで、正方形に近い隅丸方形の平面プランを呈する。上面の下位70~75cmの南西壁と北隅には、幅20cm程度のテラスが作出される。底面は長軸125cm, 短軸65cmの不整形で、西隅にオーバー・ハングする。底面の中央やや南西寄りには、径22×16cm, 深さ75cmの柱穴が掘り込まれる。

25号土壙 (図版16, 第11図)

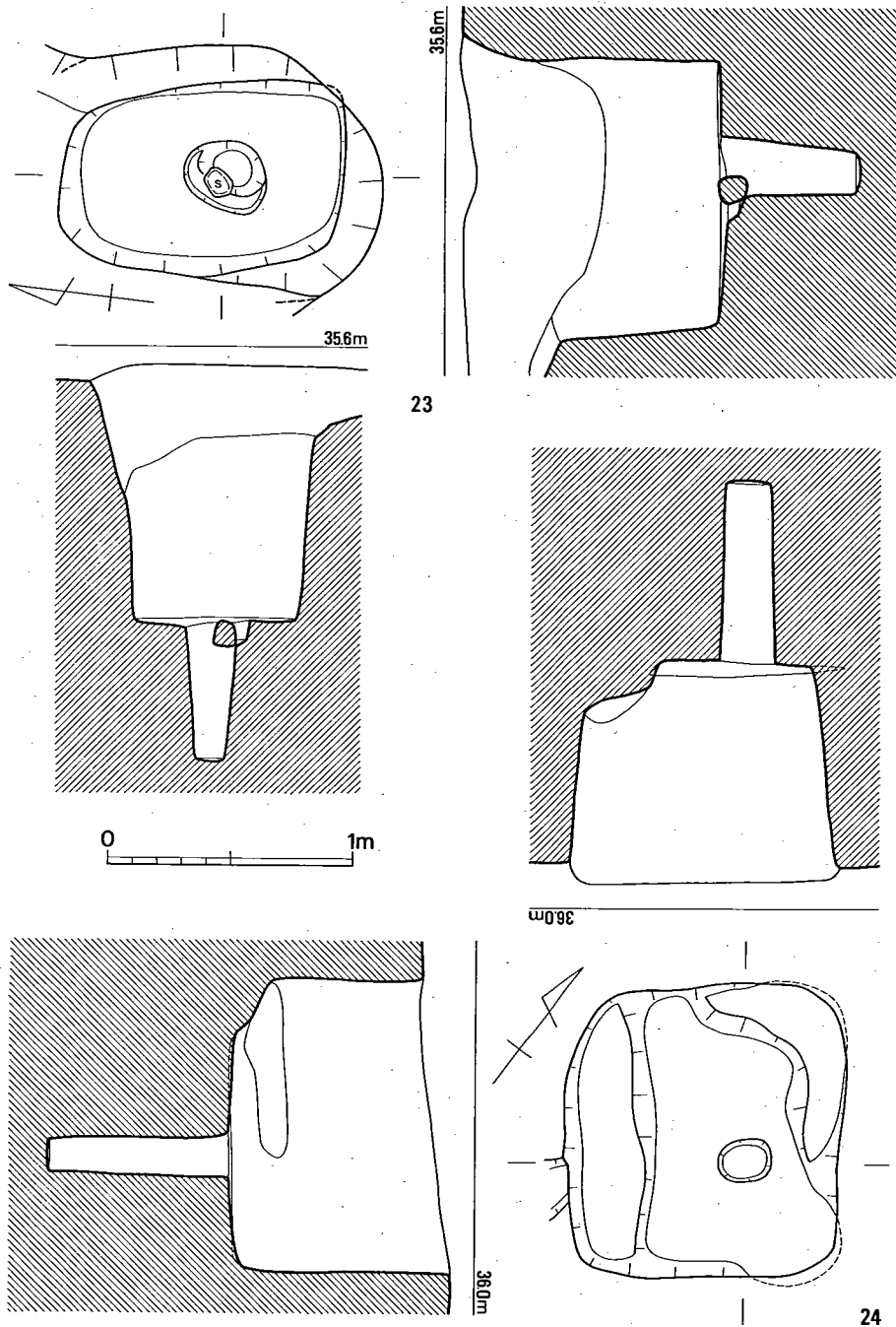
25号土壙は土壙集中部の南端で、18号土壙の南西約10mに位置する。上面の長軸103cm, 短軸58cm, 底面の長軸98cm, 短軸52cmで、いずれも隅丸方形を呈し、深さ24cmを測る。底面中央には径27cm, 深さ28cmの柱穴が掘られるが、その底には基盤層の礫が見えている。

26号土壙 (図版16, 第11図)

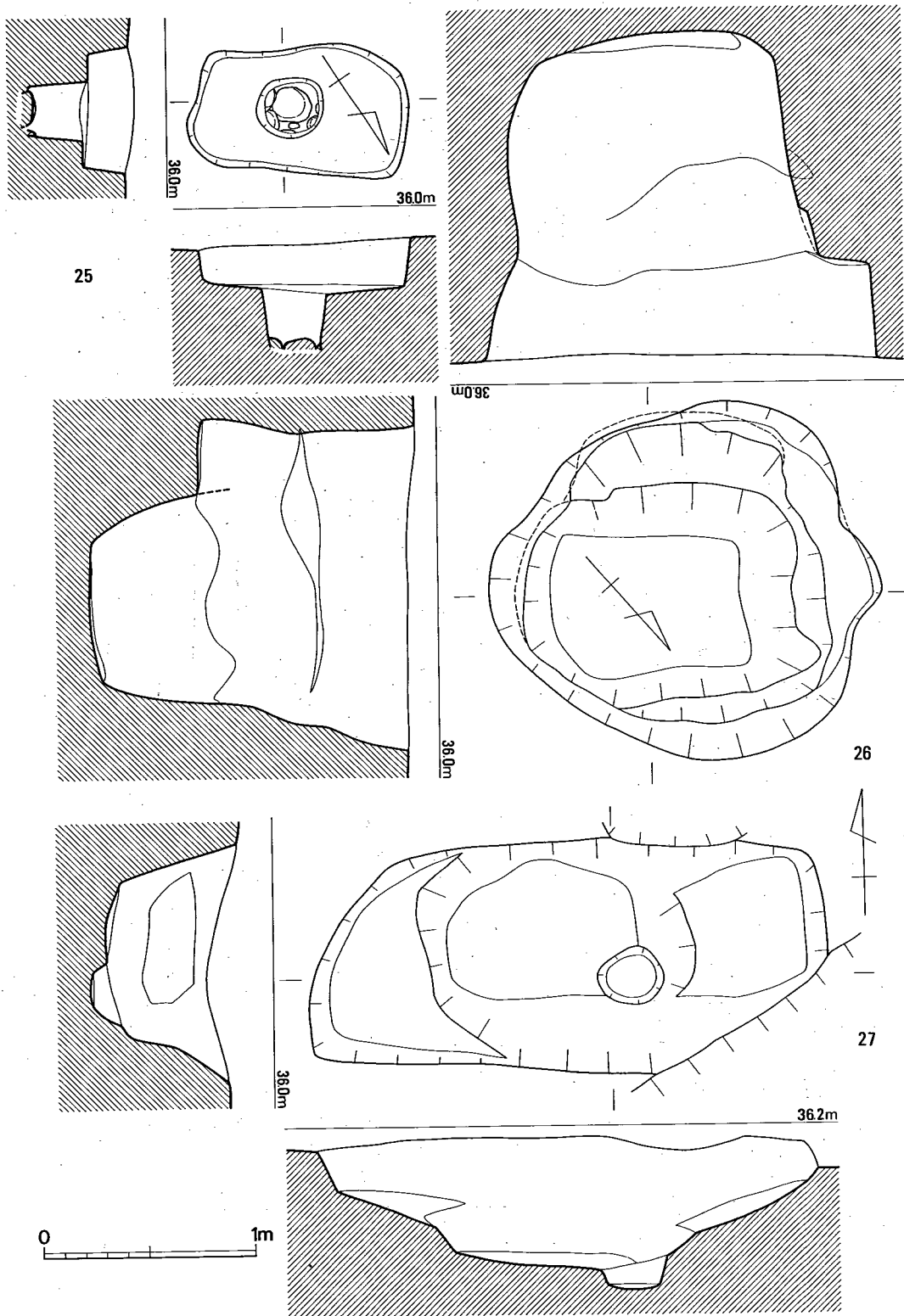
26号土壙は土壙集中部の東端で、12・15・20号土壙に取り囲まれるように位置する。上面は長軸184cm, 短軸167cmの不整円形で、底面は長軸89cm, 短軸62cmの長方形プランを呈する。上



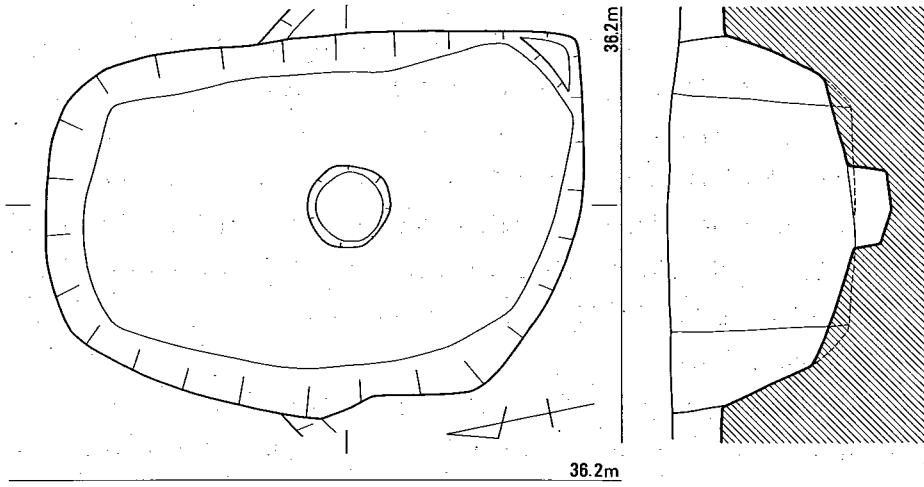
第 9 图 20~22号土坑实测图 (1/30)



第 10 图 23·24号土坑实测图 (1/30)

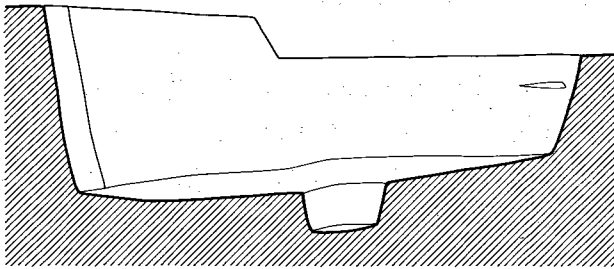


第 11 图 25~27号土壙実測図 (1/30)

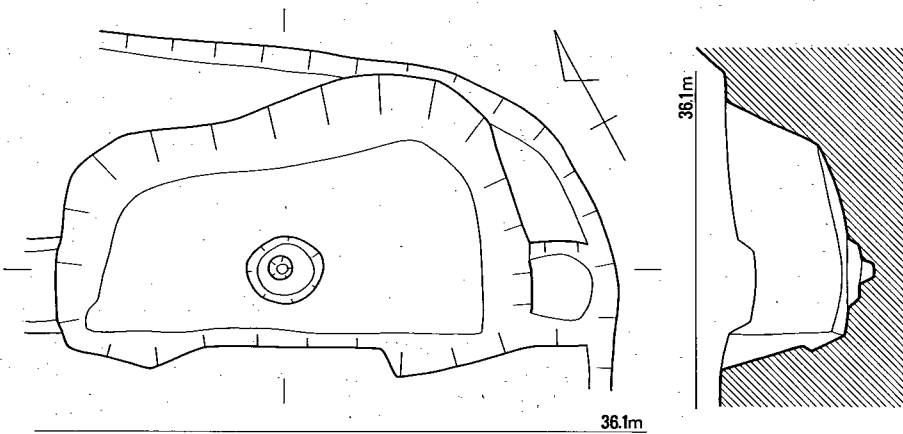


36.2m

28

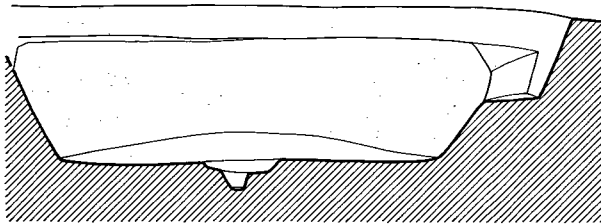


0 1m



36.1m

29



第 12 图 28・29号土壙实测图 (1/30)

面から40cm付近と100cm付近には段があり、土壙の西側に関してはそれとほぼ同じレベルに、幅20~30cm程度のテラスが作られる。上面から底面までの深さは153cmである。

27号土壙 (図版17, 第11図)

27号土壙は土壙集中部の中央やや東寄り、7号住居跡に切られる。土壙の南東部や北部は多少削平されるが、上面は長軸245cm、短軸111cmの不整楕円形、底面は長軸89cm、短軸64cmの不整形を呈する。壁は緩やかに傾斜し深さは60cmで、上面の規模の割には浅く、本遺跡では特異なタイプである。底面の西隅には径24cm、深さ15cmの浅い柱穴がある。

28号土壙 (図版17, 第12図)

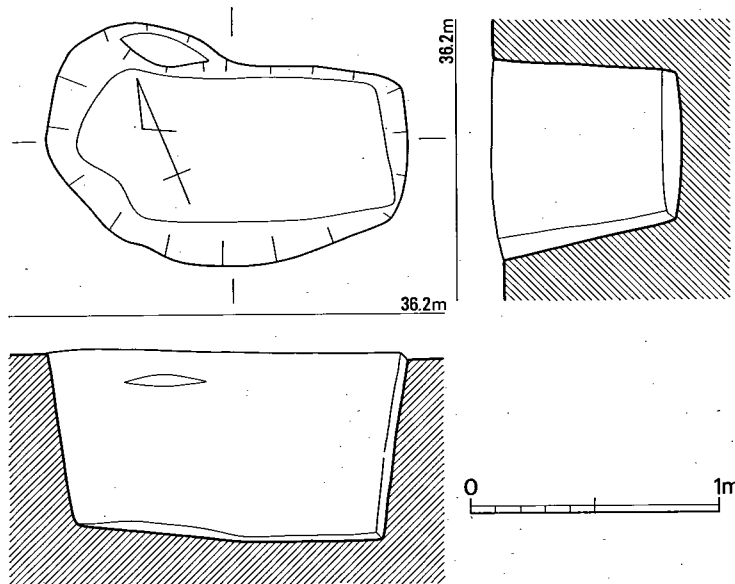
28号土壙は土壙集中部のほぼ中央に位置し、8号住居跡に切られる。上面は長軸215cm、短軸153cm、底面は長軸190cm、短軸119cmで、いずれも不整の隅丸長方形をプランとし、深さ77cmを測る。底面の中央には、径33cm、深さ20cmの浅い柱穴がある。

29号土壙 (図版18, 第12図)

29号土壙は土壙集中部の南西端に位置し、30号土壙と共に2号住居跡に切れ、同住居跡の床面下から検出された。上面の長軸214cm、短軸99cm、底面の長軸152cm、短軸70cmで、いずれも東壁に広がる不整台形のプランで、深さは48cmである。西壁には階段状のテラスを有する。底面の中央にある柱穴は2段掘りで、径は1段目が25cm、2段目が11cm、深さは最高で11cmを測る。

30号土壙 (図版18, 第13図)

30号土壙は土壙集中部の南西端に位置し、29号土壙と共に2号住居跡に切れ、同住居跡の床面下から検出された。



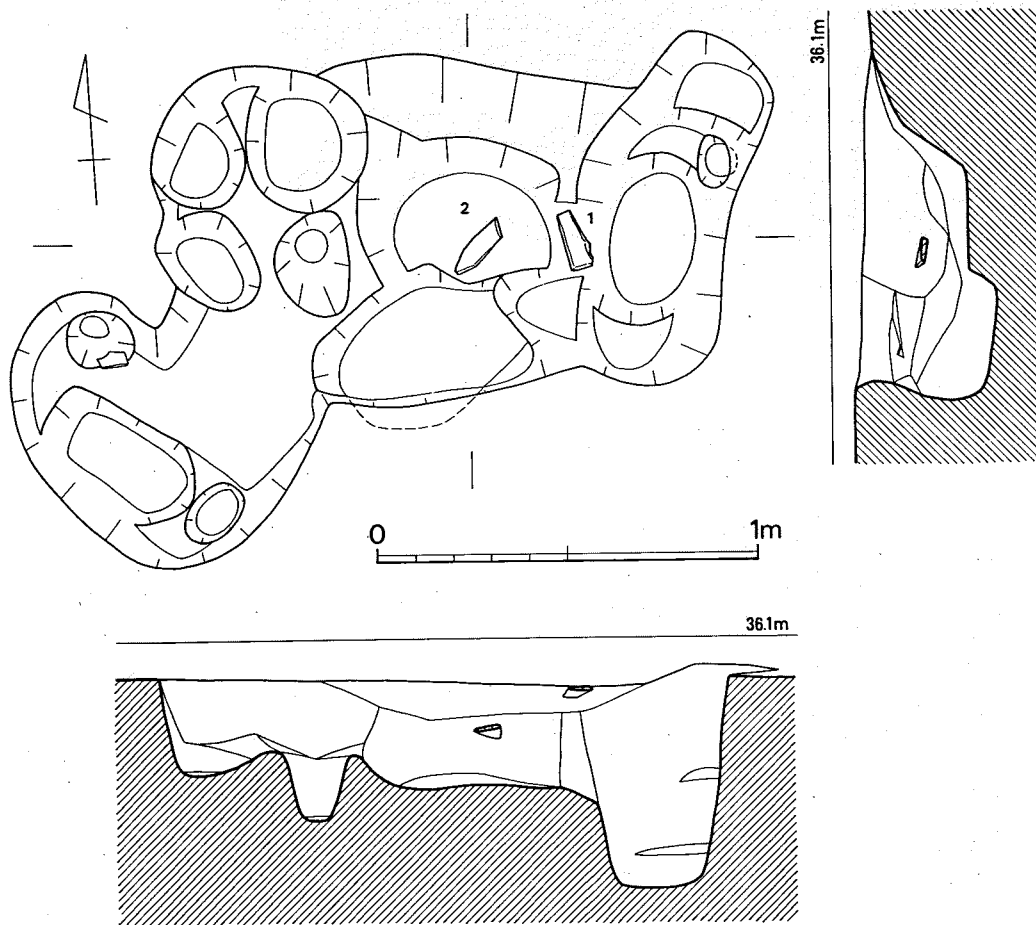
上面の長軸145cm、短軸80cm、底面の長軸122cm、短軸58cmで、いずれも北西隅に若干突出する不整隅丸長方形で、深さは75cmを測る。土壙の東側半分から判断して、本来この土壙は形の整った長方形であったと考えられるが、壁の崩落によりこのように歪んだ形になったようである。

第13図 30号土壙実測図 (1/30)

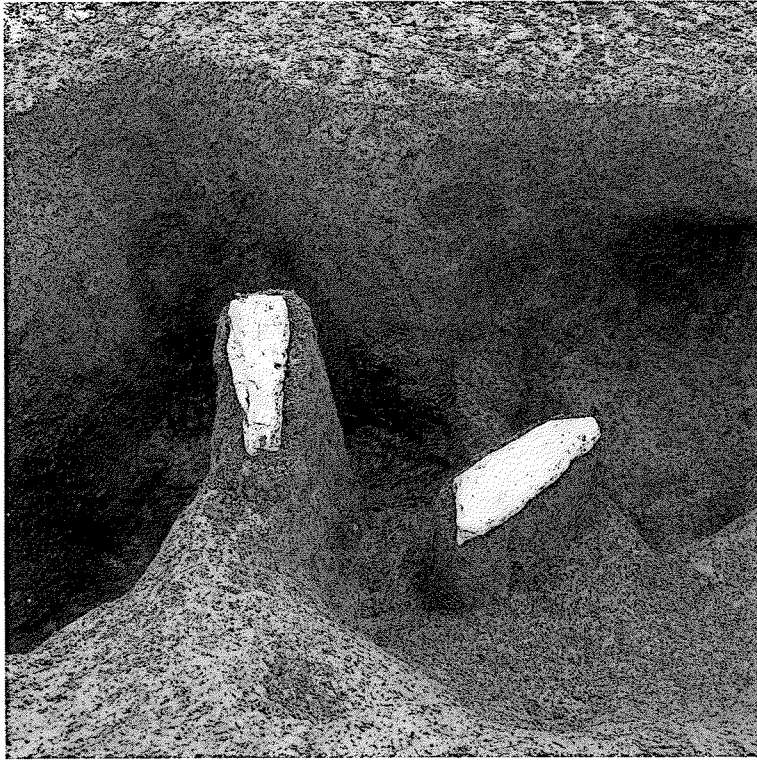
(2) P 33 (図版19, 第14・15図)

P 33は土壙集中部の北端で、24号土壙の南西約4 mに位置する。上面は長軸225cm, 短軸95cmの歪な不整形で、底面も揃わず深さ22~55cmと凹凸が激しい。埋土は褐色土で、縄文時代に属すると考えられる多くの土壙の埋土(鈍くて淡い褐色粘質土)とは異なる。上部からは、結晶片岩製のほぼ完全な形の打製石斧が2点出土した(第15図)。この他に縄文土器と考えられる小破片が出土している。

打製石斧(第16図1・2) 1は長さ16.6cm, 最大幅5.8cm, 最大厚1.9cmを測る結晶片岩製の打製石斧である。ほぼ完全な形で遺存する。刃部のみわずかに欠損するが、これは使用によるものであろう。基部は細くすぼまるが、その側縁には縄縛痕と判断できる摩滅は窺えない。2は

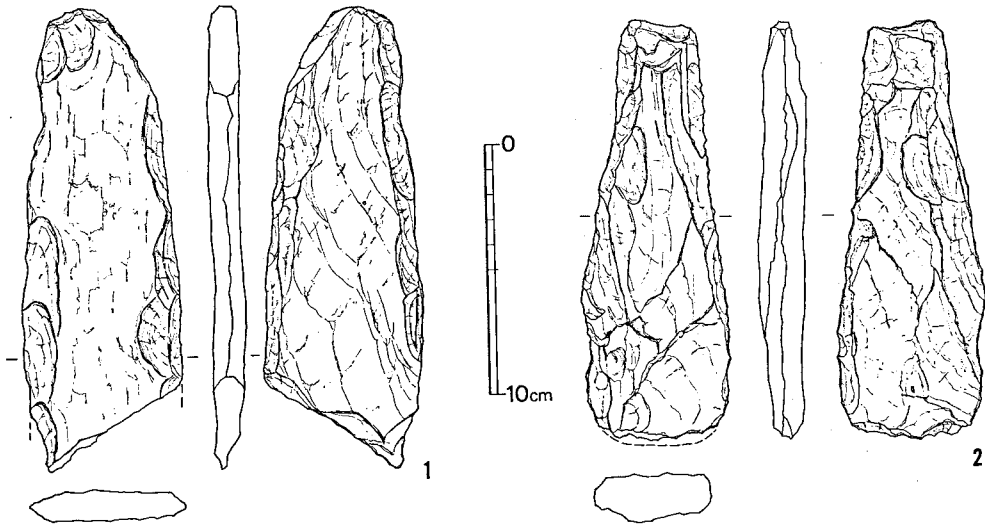


第 14 図 P 33実測図 (1/20)



残存長18.5cm，最大幅6.4cm，最大厚1.3cmを測る，やはり結晶片岩製の打製石斧である。基端部と刃部を欠損するが，刃部に関しては使用時によるものであろう。全体に摩滅が著しく剝離痕が不明瞭な部分もある。いずれも縄文時代に属するものである。（水ノ江）

第 15 図 P33打製石斧出土状況（北から）



第 16 図 P33出土石器実測図（1/3）

3. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

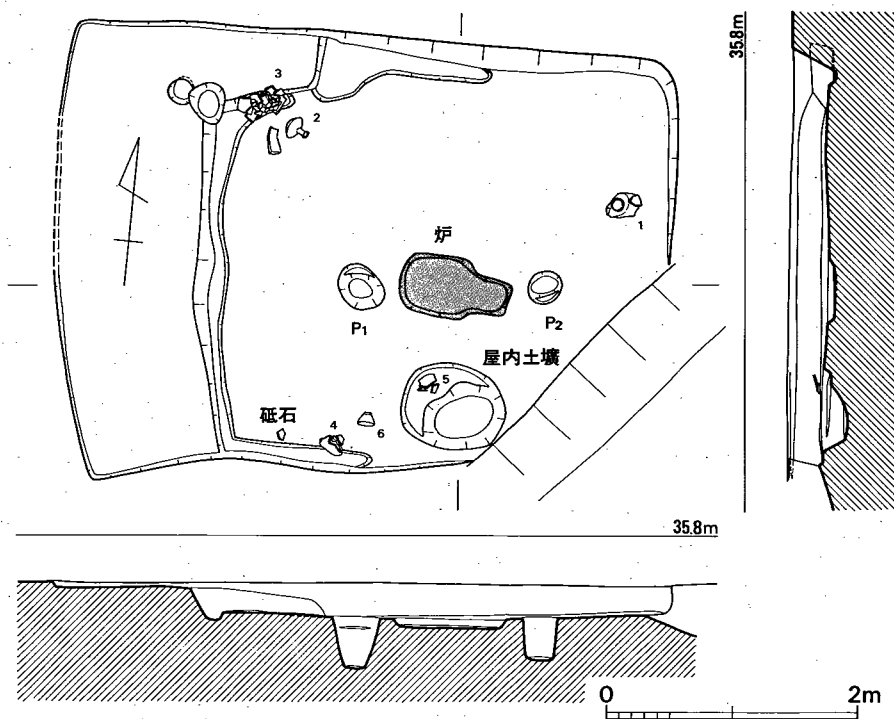
調査区の北西に単独で検出された竪穴住居跡があるのみで、包含層および柱穴等でも弥生時代の遺物は出土していない。

3号竪穴住居跡 (図版20・21, 第17図)

1号溝に南西隅を切られた方形住居跡で、東西4.9m、南北3.45m。西から北側にかけて幅1.1~0.5mほどのベット状の高まりを巡らす。20cmほど低い空間は3.5mの方形で、その中央部に長方形の炉と両側に2本の支柱穴がある。床面は良く締まり、ベット側のみに浅い溝を巡らす。炉の南壁側に径80cm、深さ23cmほどの屋内土壇もある。

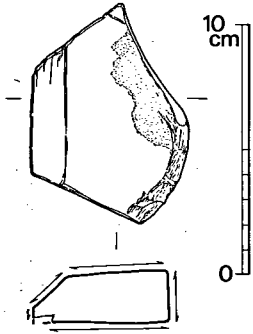
遺物の遺存は割合良好で、北西隅より長頸壺(2)・甕(3)が、南西壁付近の床面から甕(4)・鉢(6)・砥石、屋内土壇より甕(5)が出土した。

出土遺物(第19図) 1は壺の底部片と思われ、球状の胴部に凸レンズ状の底部を有す。内底部付近は指頭圧痕で他はナデ。外面二次火熱を受け黒変している。2は長頸壺の完形品で器高19.3cm。ソロバン玉に近い稜のある胴部に、やはり凸レンズ状の径6cmの底部を持つ。頸部から口

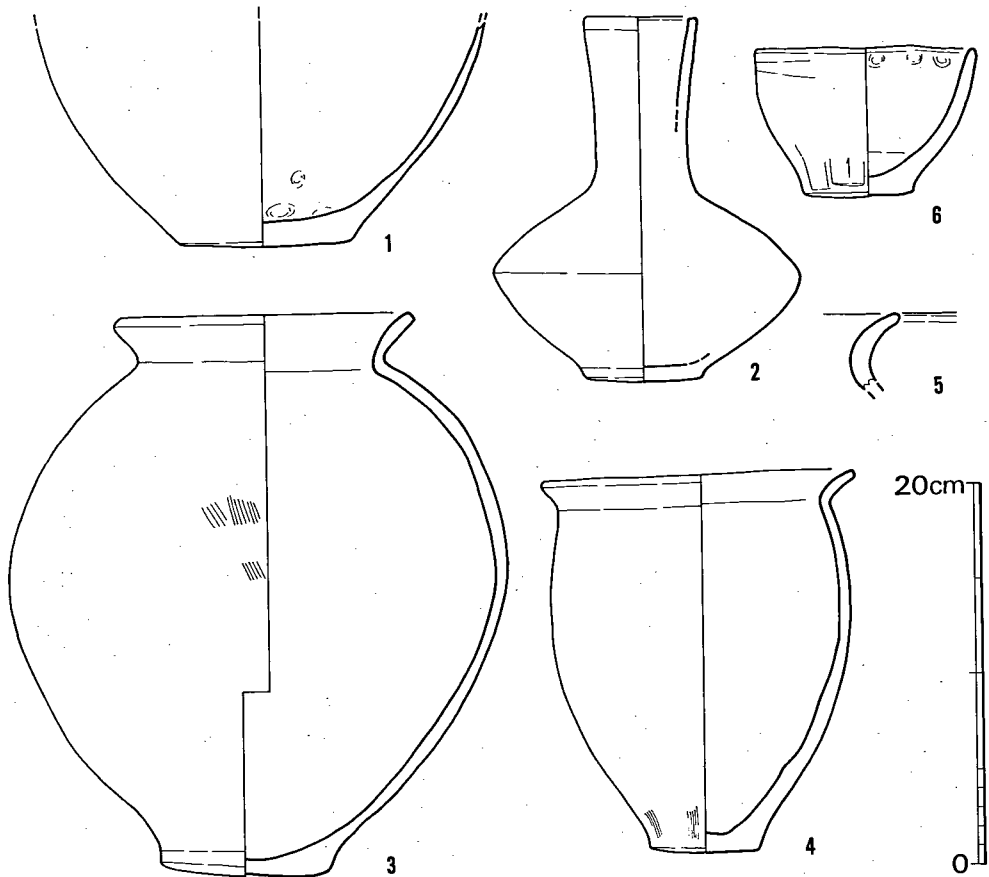


第17図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

縁部では若干外方へ広がりつつ9cmと長くのび、口唇部はわずかに凹ませるくせを持つ。器面風化し剝離が著しいので調整等は不明。器壁は7~8mm前後。3~5は甕で、3は胴部に膨らみのある器形で、締まった頸部から「く」字形で肥厚させる口縁部に移り、内面に明瞭な稜を持つ。口唇部をわずかに凹ませるくせは2の長頸壺と同じ。外面は細いハケ目調整痕が残り、胴下半には黒斑が見られる。口径16cm、器高29.8cm、底径9cm、器壁は7~12mm。4は小型の甕で、3と比べて胴部が張らず、頸部の縮まりもない。「く」字状口縁部は、内面に軽い稜がつく程度である。口縁部は肥厚されず、丸く納めている。底部はやはり凸レンズ状になる。外下底部付近にハケ目が残る。口径16.3cm、器高20cm、底径5.9cm。5は「く」字形の口縁部破片で、内面側の弯曲が強く3・4とは形態を異にする。6は小型の鉢の完形品。平底に近い底部から、内弯して立ち上がり口縁部に移

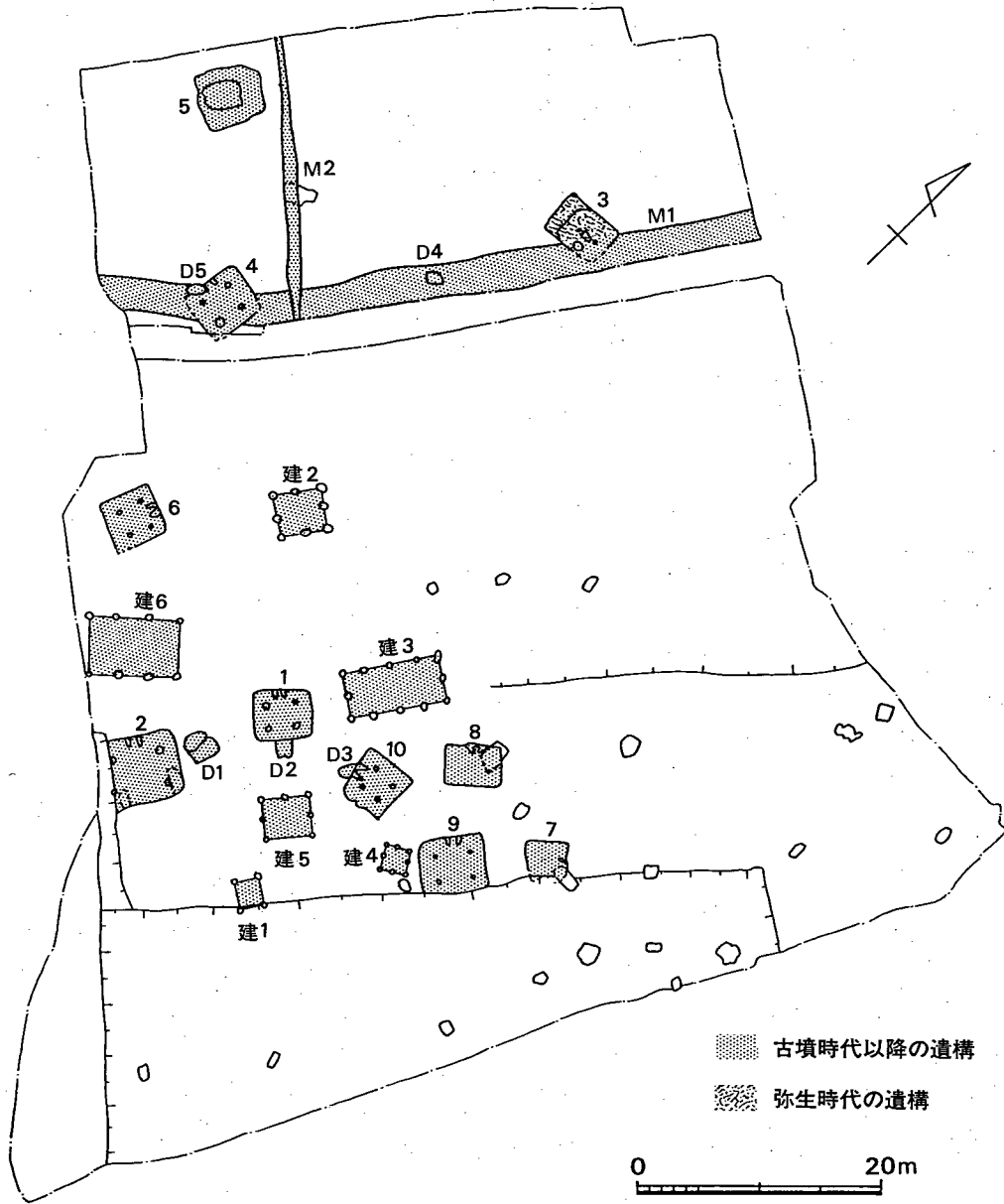


第 18 図 3号竪穴住居跡出土砥石実測図 (1/3)



第 19 図 3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

行する。胴下半部はケズリ，上半部は指圧痕の整形・調整痕が見られ，半手捏ね製品。従って器壁も9～12mmと小型品の割に分厚い。外面二次的に熱を受け赤・黒変する。口径11.6cm，器



第 20 図 弥生・古墳時代遺構配置図 (1/600)

高7.85cm, 底径5.65cm。

砥石(第18図) 板状の頁岩製仕上げ砥石で、全面に研磨痕がある。一部欠損後も破棄されることなく、使用されている。厚さ2cm。

出土遺物から当住居跡は弥生時代後期後半に位置づけられよう。

(木下)

4. 古墳時代以降の遺構と遺物

本遺跡で検出された遺構のうち古墳時代以降に属すると考えられるものには、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡6棟、土壇5基、溝2条と多数の柱穴がある。これらは調査区の南半分に偏った分布を見せる。以下では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壇、溝の順で説明を行なう。

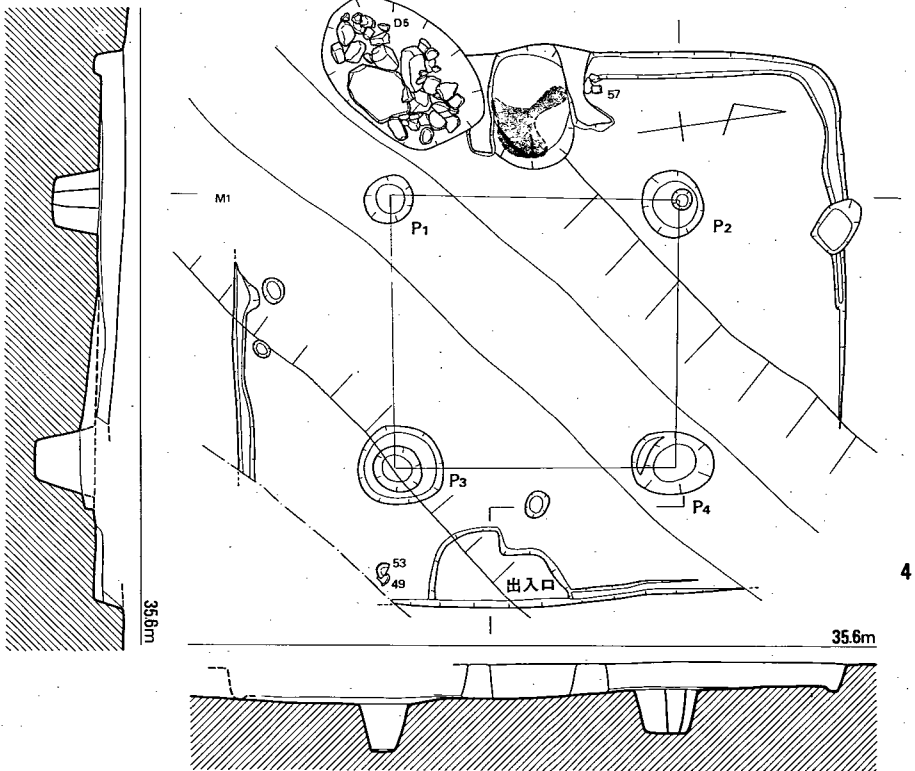
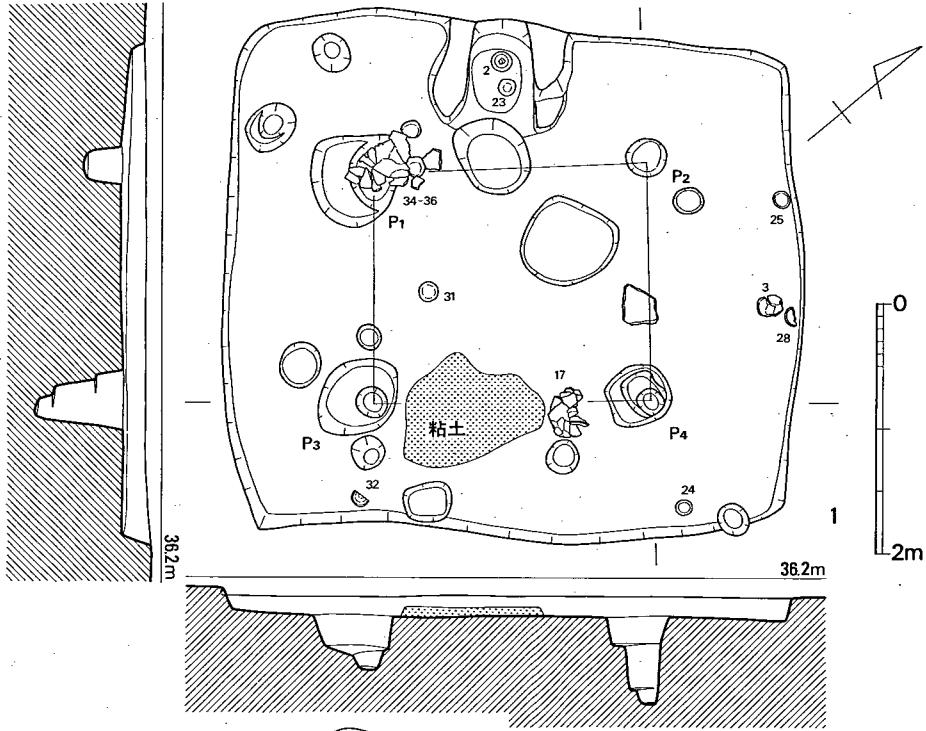
(1) 竪穴住居跡

安武・土井の内遺跡で検出された竪穴住居跡は、住居跡とは考えにくいが敢て本項で取り扱った5号住居跡を除き計8軒である。いずれも4本柱を基本とした方形プランを呈し、カマドをおよそ北側の壁に付設する。多くは調査区の南半分に集中するが、住居どうしもしくは掘立柱建物と切り合うことはない。全体的に削平が著しいが、1・5・6・10号住居跡では比較的纏まった遺物の出土をみた。

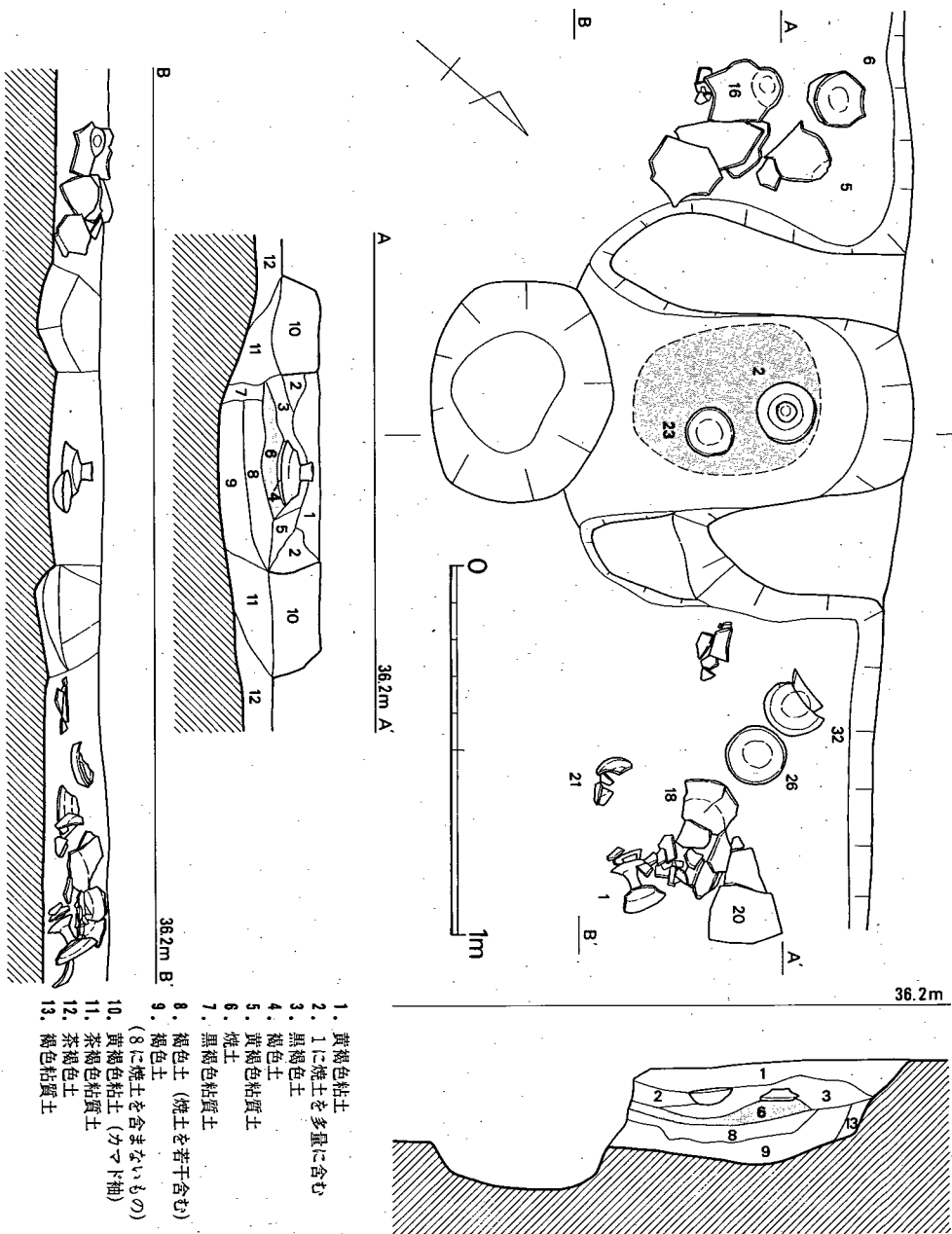
1号竪穴住居跡(図版22・23・40~42, 第21・22図)

1号竪穴住居跡は調査区の南部に位置し、4.2×4.6mの方形プランを呈する。2号土壇を切り、カマドを西壁中央に付設する。カマドの遺存状態は本遺跡においては比較的良好で、壁高は最高で0.2mを測る。カマドの反対側で主柱穴P3~4間には長軸1.2m, 短軸0.85m, 厚さ10cmの範囲で黄褐色の粘土が広がり、出入口部に設置された階段状遺構の名残と考えられる。カマド(第22図)は袖がいずれも長さ0.8mほど残存し、床面とほぼ同じレベルに50×40cmの範囲で火床面が広がる。支脚は高坏(第23図2上)を転用しており、その脚部を加工して倒置させたものである。カマドの焚き口付近にはピットが存在するが、住居を切るものでカマドとの関係は認められない。遺物の遺存状態は全体的に良好であるが、カマド周辺は特に良く完形品が多い。なお、支脚に転用された高坏の脚部に相当する破片(第23図2下)が本住居内から出土している。手捏ね土器も3点出土するが、いずれも住居埋土からの出土である。

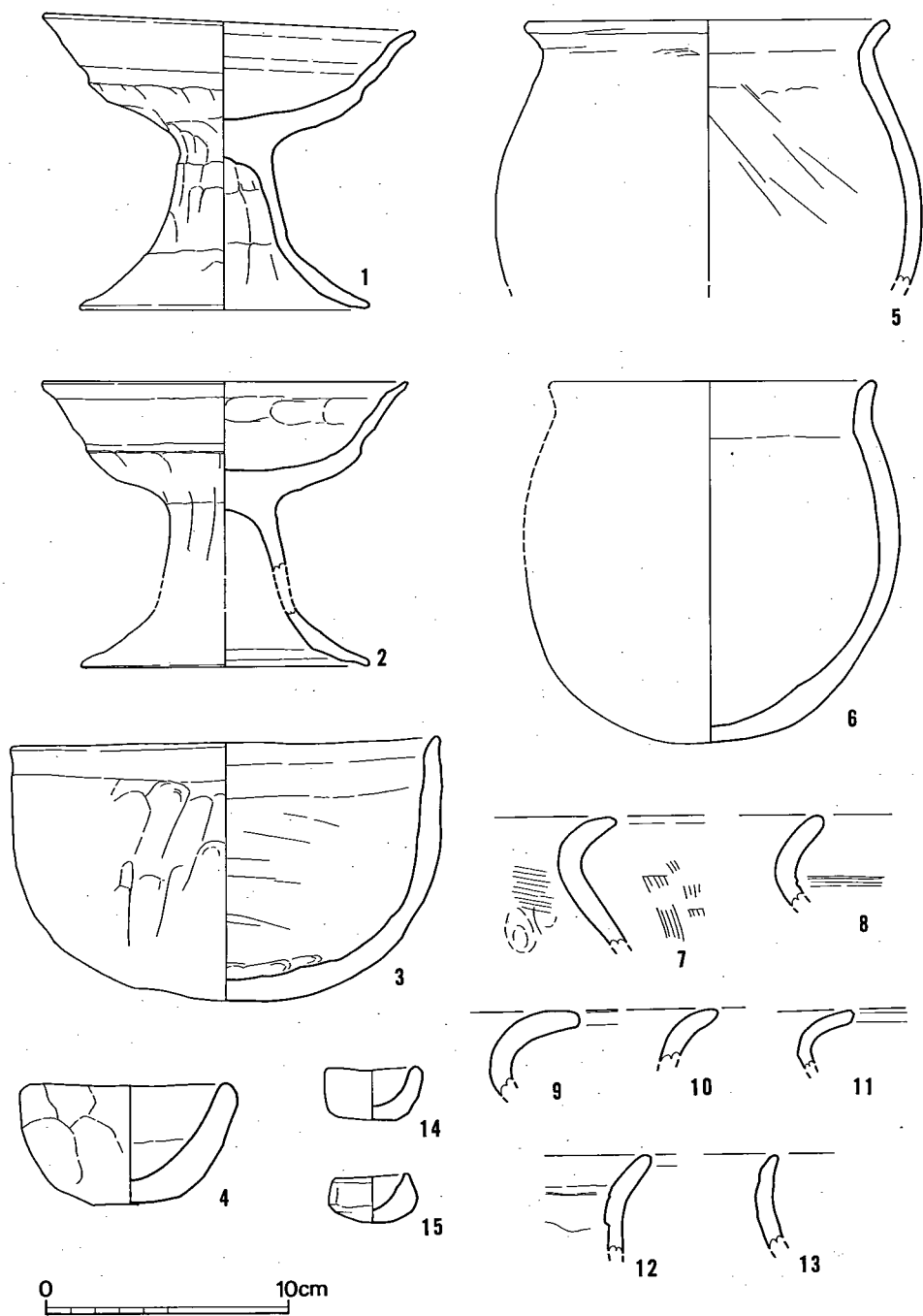
土師器(第23・24図) 高坏1・2の器面調整はナデであるが、脚部外面にはケズリの痕跡が窺える。2上は支脚に転用されたもので、二次火熱を受けており濃い赤褐色を呈する。3・6はカマド周辺での出土であるが、やはり二次火熱を受け3は全体的に6は底部付近の剥落が著しい。3・5・6の器面調整は内外面ともナデであるが、5の内面にはケズリが施される。7~13は甕もしくは甌の口縁部であるが、12や13のように強く外反することなく比較的直線的に立ち



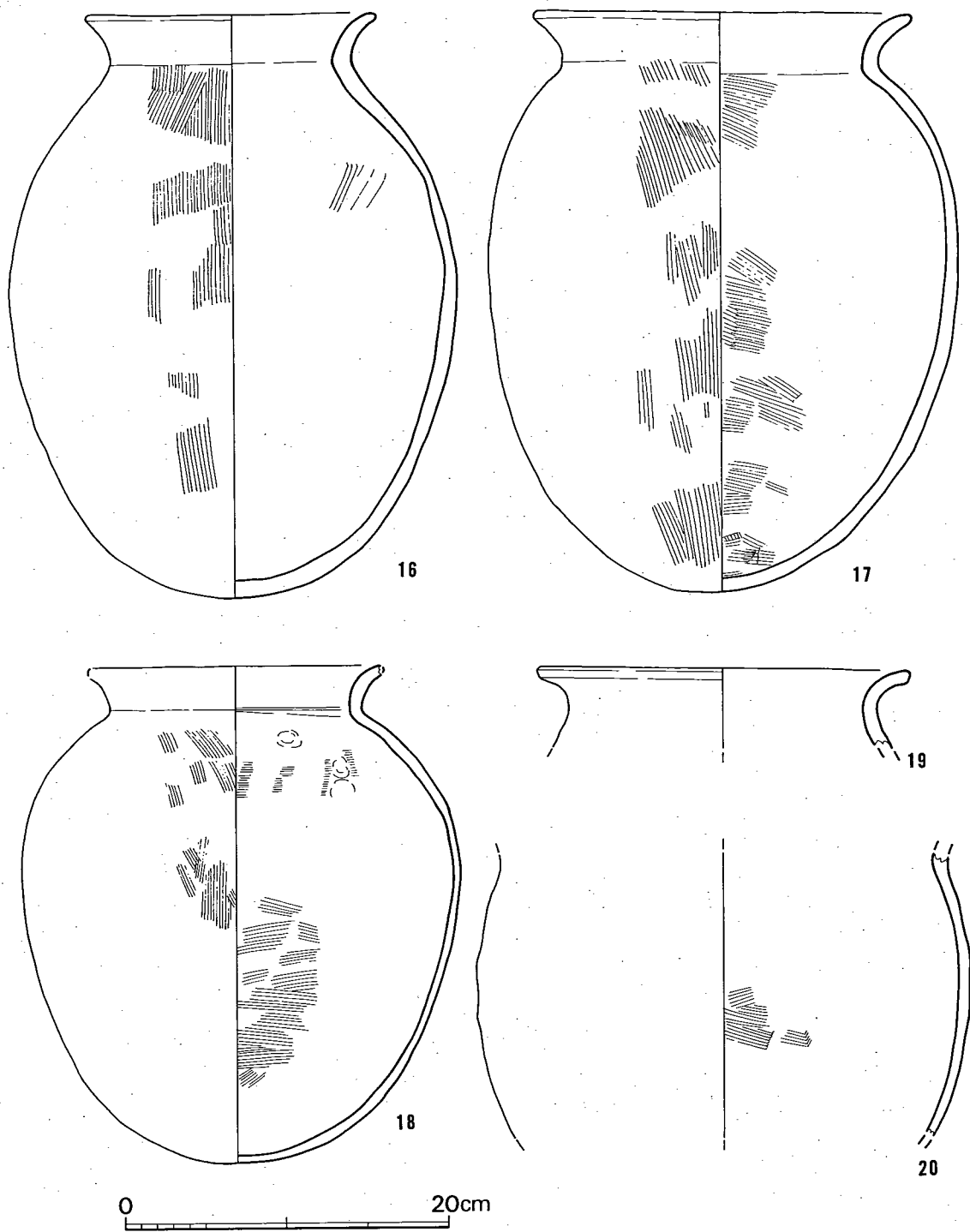
第 21 图 1·4 号竖穴住居跡实测图 (1/60)



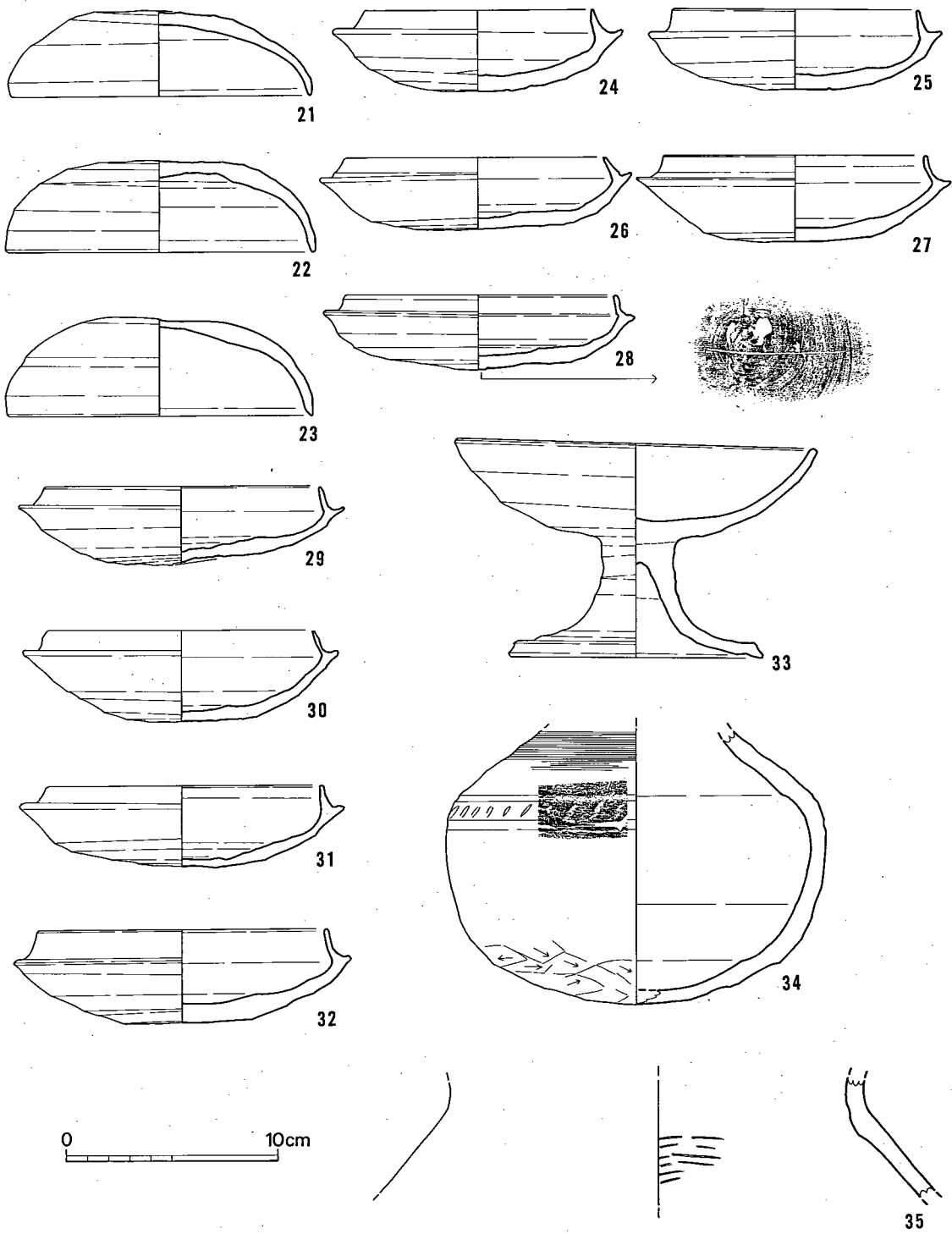
第 22 図 1号竖穴住居跡カマド実測図 (1/20)



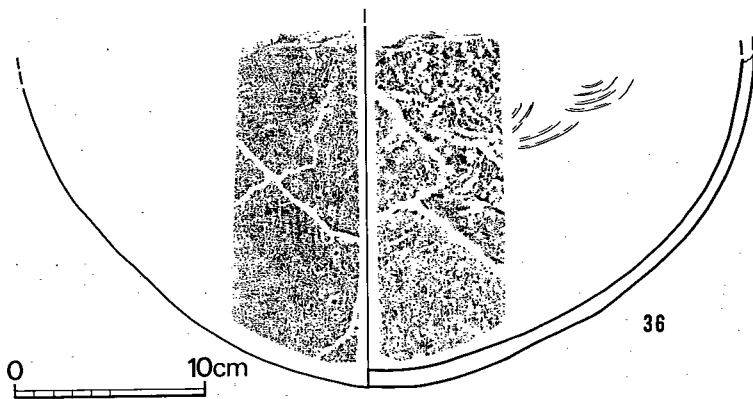
第 23 图 1 号竖穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)



第 24 图 1 号竖穴住居跡出土土器実測図 2 (1/4)



第 25 图 1 号竖穴住居跡出土土器実測図 3 (1/3)



第26図 1号竪穴住居跡出土土器実測図4 (1/4)

上がる口縁部は甑のものである可能性が高い。甕に関しては、5・6のような小型のものと、16~20のように大型のものに分かれ、16~18・20の内外面にはハケが施される。

須恵器 (第25・26図)

23はカマド内からの出土で、28の底部外面にはヘラ記号が施される。

坏蓋の天井部外面と坏身の底部外面には回転ヘラケズリが施され、口縁形態等から判断して大きな時間差はないようである。34は短頸壺で、肩部の浅い2条の沈線文間にはヘラ状工具による斜位の刺突文が施される。35と36はいずれも生焼けで淡黄灰色を呈し、内面には青海波のタタキが施され同一個体と考えられる。

2号竪穴住居跡 (図版24, 第27・28図)

2号竪穴住居跡は、今回の調査で検出された10軒の竪穴住居跡の中でも最も南に位置し、辺長5.6~約6.0mの緩やかな隅丸方形のプランを呈する。主柱穴は深さ70~80cm, 最大径60~70cmと大きい。壁高は最高でわずかに6cmで遺存状態は悪く、南西壁は削平され残らない。北東と南東の壁には、幅10~20cm, 深さ10~15cmの浅い壁溝が巡る。カマド (第28図) は北西壁の中央部にわずかに住居内側へ張り出すかのように付設されるが、遺存状態は悪い。両方の袖の下には、それに沿うように深さ10~15cmの溝状の遺構が掘られている。袖の基礎となるものであろうか。なお、本住居は29・30号土壙を切っている。

土師器 (第29図37) 図示できるのは37の甕の口縁部で、内外面ともハケ調整を施す。

須恵器 (第29図38~44) 40の器面調整はナデ、41は壁溝から出土した坏蓋で天井部外面には回転ヘラケズリが施され、42の内面には青海波のタタキが残る。

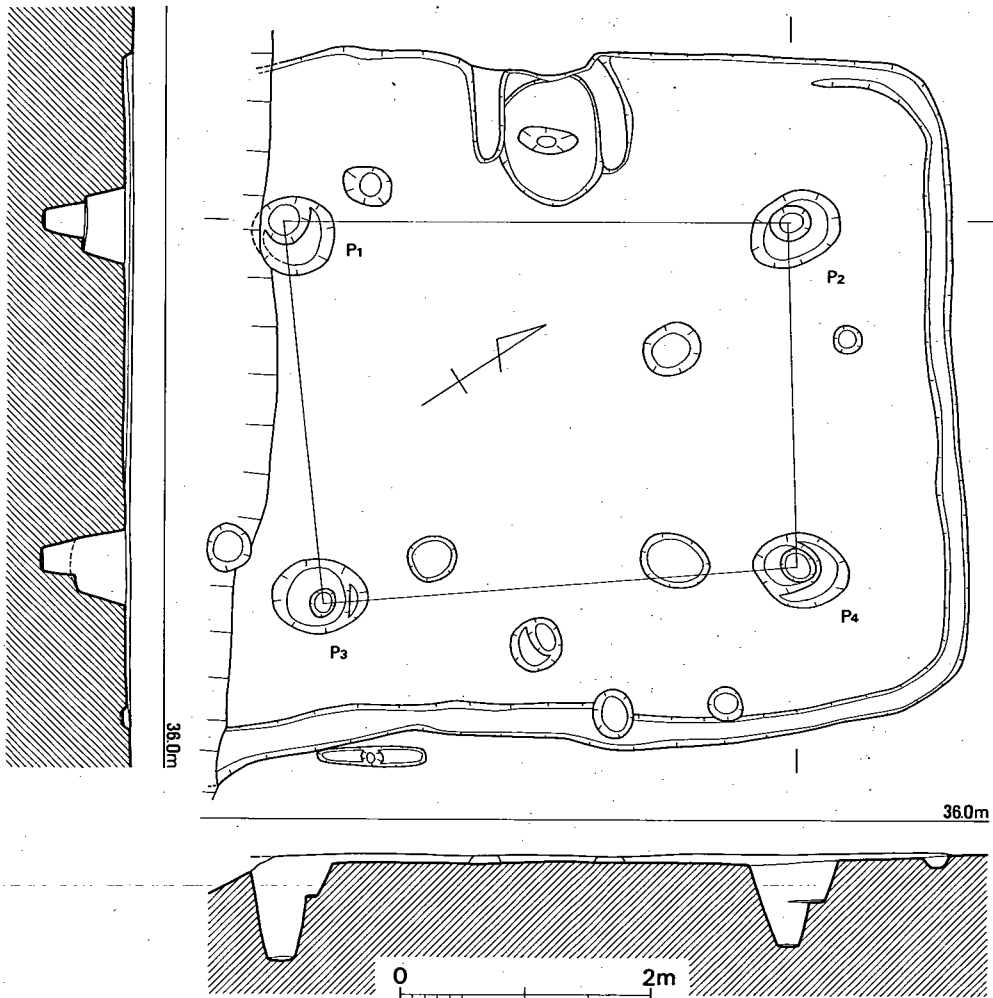
4号竪穴住居跡 (図版25・42, 第21・28図)

4号竪穴住居跡は調査区の西部に位置するが、住居中央部を1号溝に、カマドを5号土壙にそれぞれ切られ、さらに住居南東端を現代の水路に削平され部分的にしか原形を留めていない。辺長4.5~4.8mで、方形プランを呈する。幅10~20cm, 深さ5cm程度の極めて浅い溝が、壁に沿ってほぼ全周する。カマドと対峙する場所には、厚さ10cm, 1.1×0.6mの範囲で黄褐色粘土が床面に貼り付くように広がるが、これはカマドとの位置関係から出入口としての機能を果た

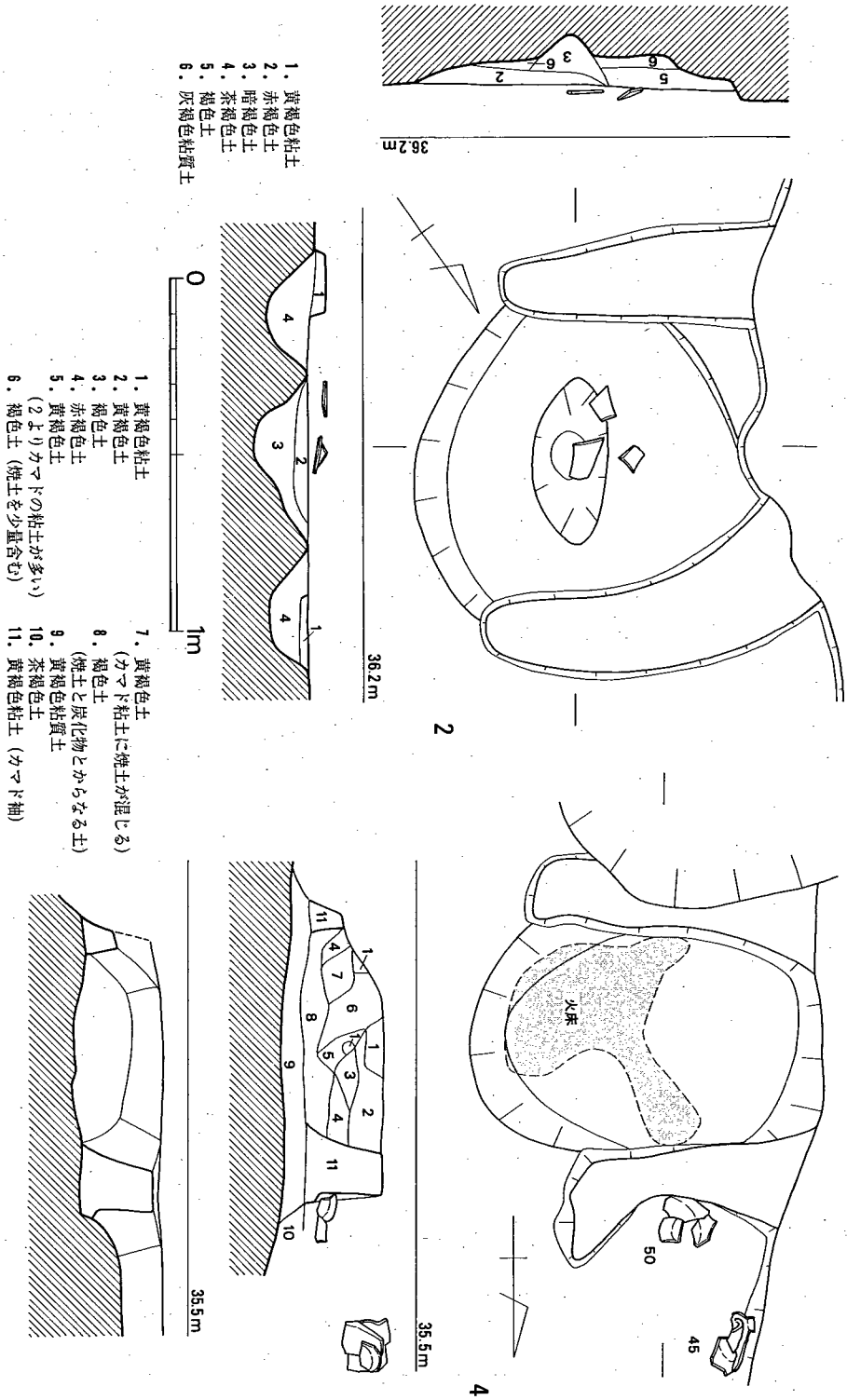
したと考えられる。支柱穴P2では、幅15cm、深さ35cmの柱痕を確認できた。カマド（第28図右）は5号土壌に南側の袖を切られながらも、比較的良好な遺存状況を示した。焼土は焚き口側に拡がり、カマドの下にはカマドの土台にしたと考えられる黄褐色粘土が敷かれている。

土師器（第29図45・46） 45は外面にハケ、内面にケズリが施される平底の土器で、灰褐色から淡い黄褐色を呈し、底部付近には黒斑を有する。弥生土器に似た特徴を持つが、カマドの北0.3mの壁に貼り付くような状態で出土しており、とりあえず本住居に所属するものとして扱った。46はタコ壺であろうか。

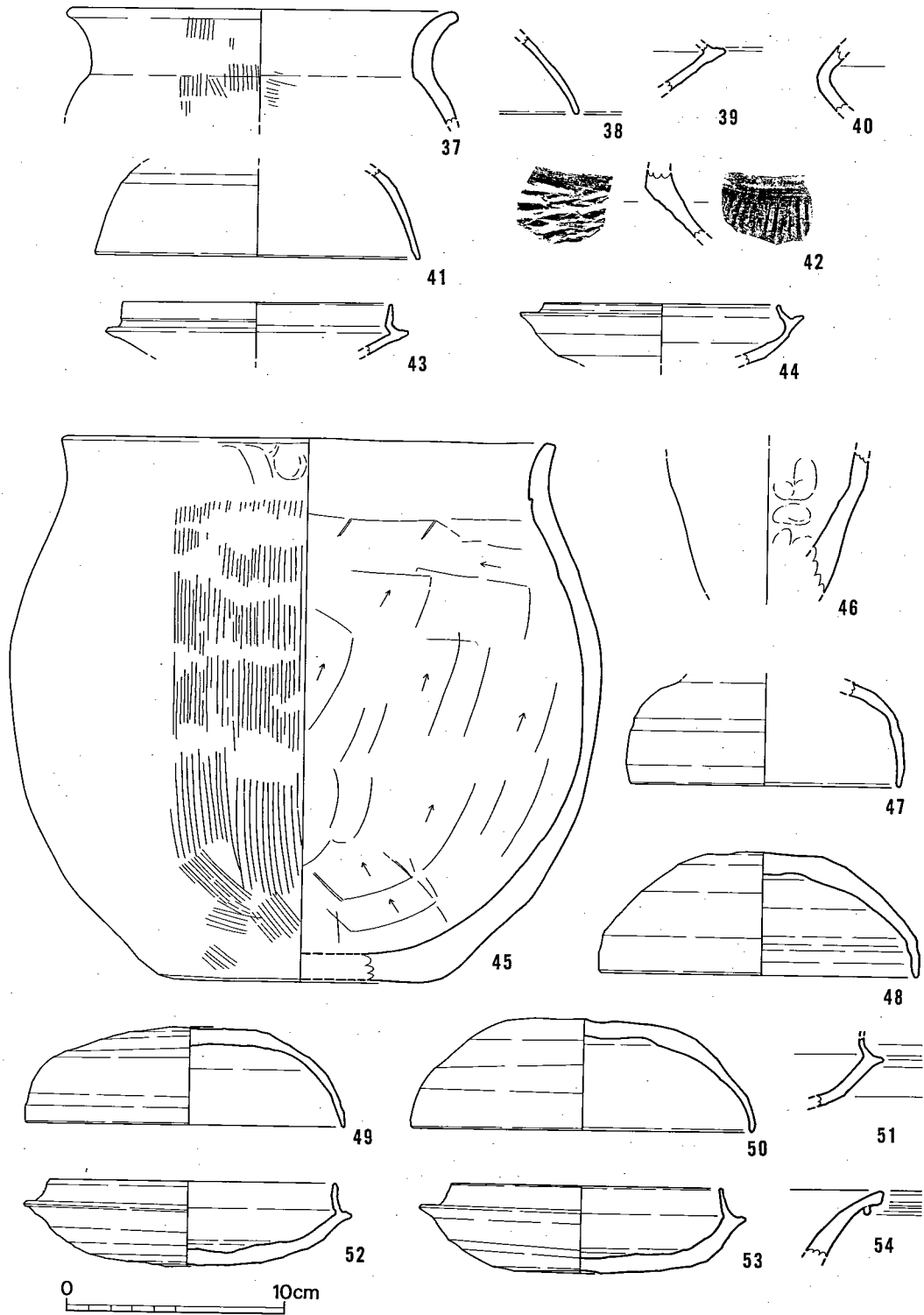
須恵器（第29図47～54） 環蓋47～50の天井部外面、および環身51～53の底部外面に回転ヘラケズリが施される。54は甕の口縁部で、器面調整はナデである。



第 27 図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)



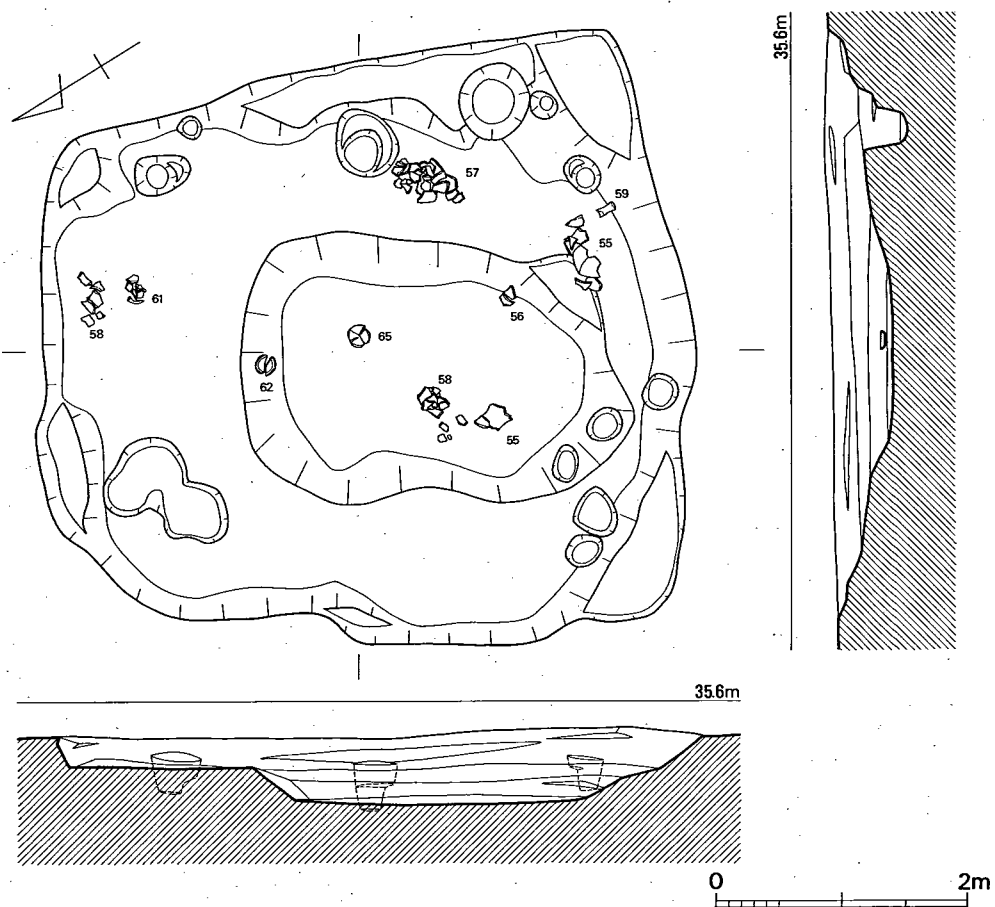
第 28 図 2・4 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)



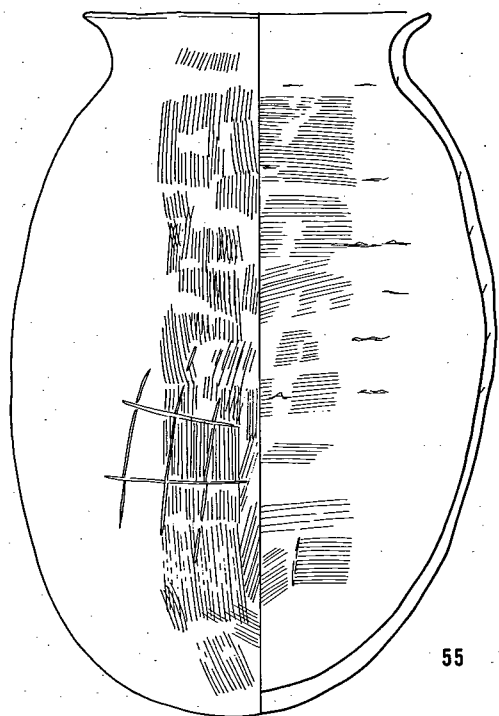
第 29 图 2·4 号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

5号竪穴住居跡 (図版26・42, 第30図)

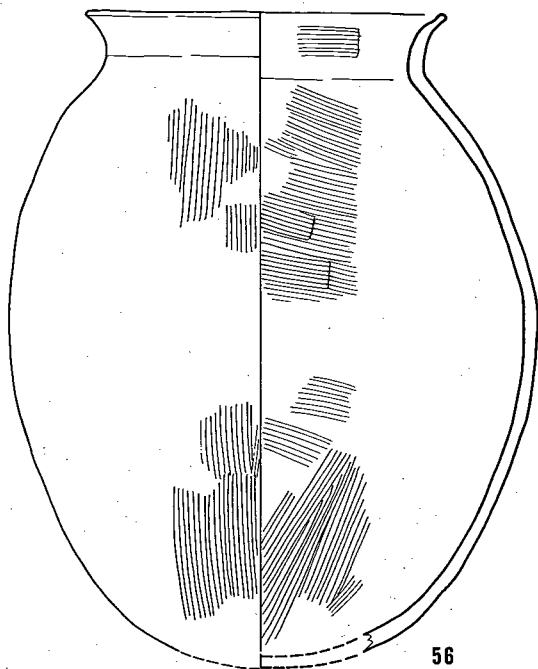
調査区の北西端に位置し、最大幅5.2m、最小幅4.0mの隅の丸い台形状の平面プランを呈するのが5号竪穴住居跡である。一応住居として扱ってはいるが、主柱穴が確認できないこと、床面が水平にならず中央部に向かって掘り鉢状に緩やかに窪むこと(ただし四隅は平坦)、カマド等の付帯施設が伴わないといったことから、一般的な住居とは異なった性質を持つ遺構と考えられる。しかし、出土する遺物の内容に関しては他の住居と大差なく、比較的良好な状態で出土した。土師器(第31図, 第32図59) 55・56・58は甕, 57は甑である。甕の器面調整は内外面ともハケであるが、甑には外面にハケ, 内面にケズリが施される。55の胴部のやや下位には格子模様のヘラ記号が施される。59は高坏の脚部で、内面にしぼり痕が見られる。



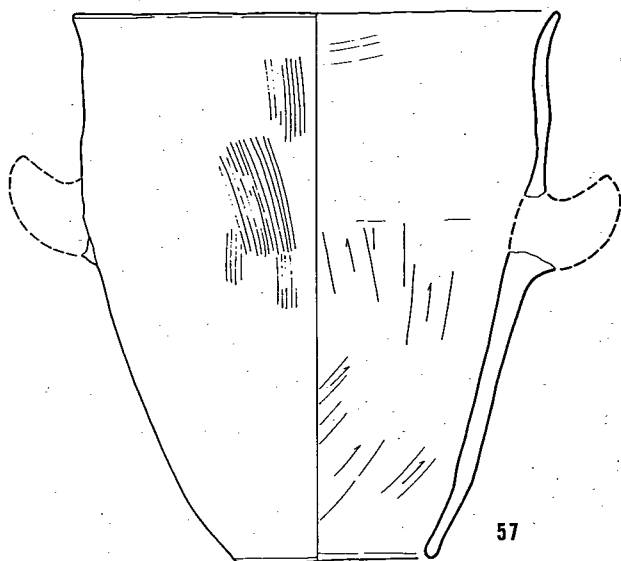
第30図 5号竪穴住居跡実測図 (1/60)



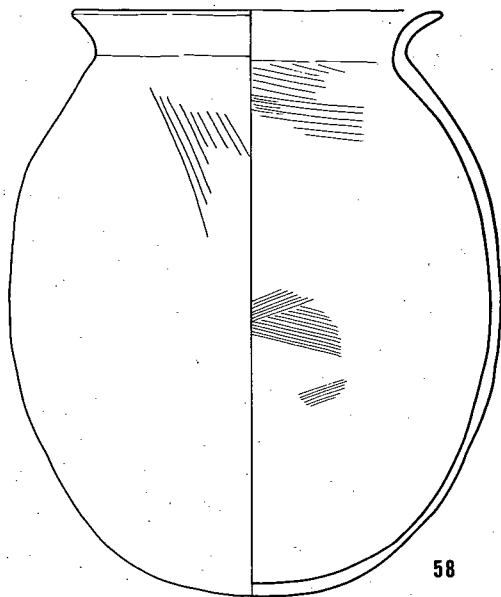
55



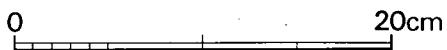
56



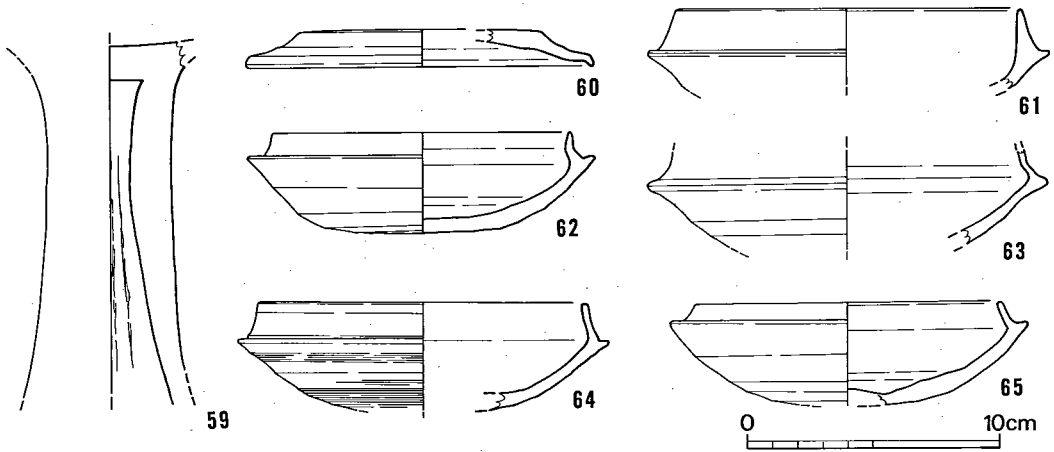
57



58



第 31 图 5 号竖穴住居跡出土土器实测图 1 (1/4)

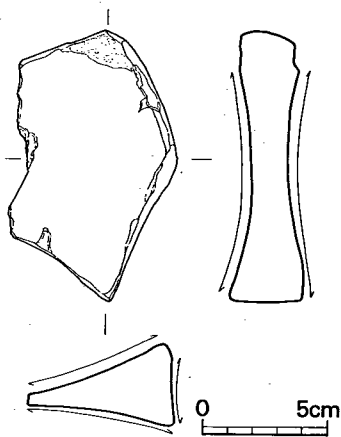


第 32 図 5号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

須恵器(第32図60~65) 60は撮の付く蓋で器面調整はナデ, 61~65の底部外面には回転ヘラケズリが施される。65はいわゆる赤焼き土器である。

6号竪穴住居跡(図版27・28・43, 第34・35図)

6号竪穴住居跡は, 調査区の南側に集中する住居群の中でも最も西端で検出され, 辺長4.3×4.3mのほぼ正方形に近いプランを呈する。現代の溝により住居の南東隅から中央部にかけて大きく削平されるが, 遺存状態はかなり良好で, 壁高は最高で25cmを測る。カマドの両側50~70cmを除いてほぼ全周に亘り, 幅10~25cm, 深さ5cm程度の浅い壁溝が巡る。4本の支柱穴では, いずれも径15cm, 深さ35cmの柱痕が確認された。遺物の遺存状態も良く, ほとんど床面からの出土である。住居中央部のやや南寄りの地点からは砥石(第33図)も出土した。カマド(第35図)の中央よりやや奥には, 上半分が赤褐色に焼けた自然石の支脚が立ったままの状態

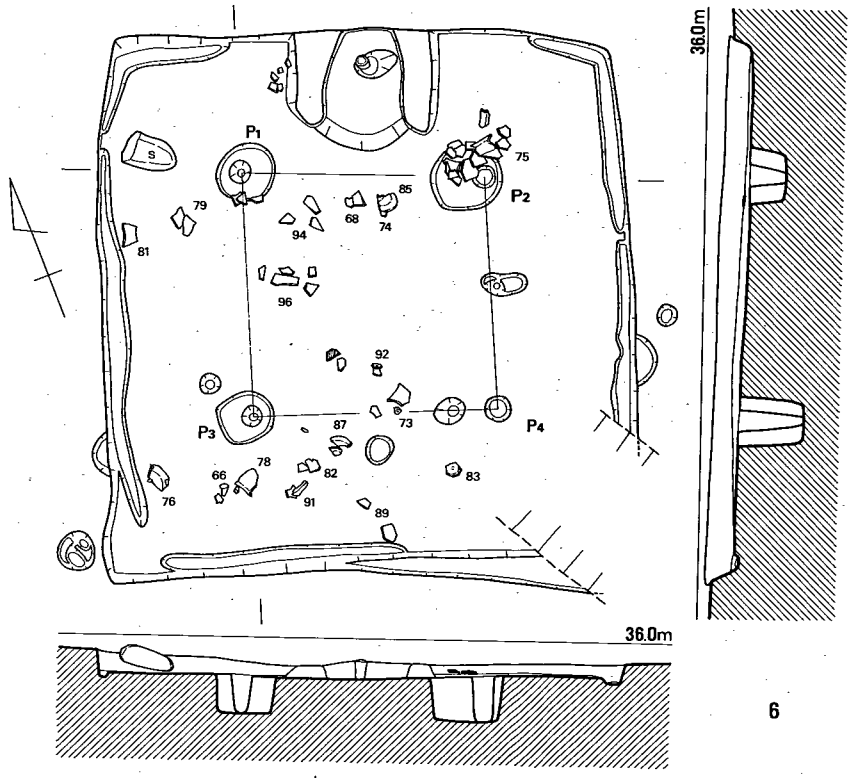


第 33 図 6号竪穴住居跡出土砥石
実測図(1/3)

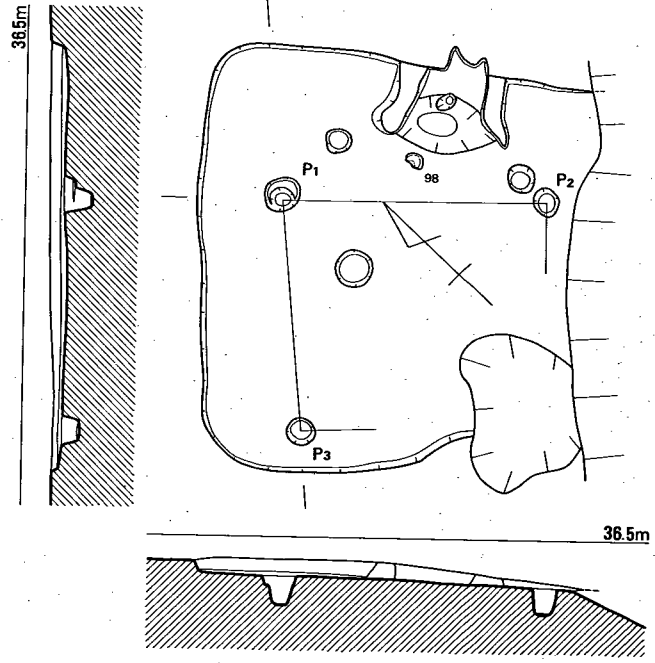
された。この支脚は, 15cmほど掘られた穴に立てられたものである。火床面は支脚の中央付近で, 住居の貼り床とはほぼ同じレベルにあたる。80・88はカマド内からの出土である。

土師器(第36・37図) 66・67は高坏の脚部で内外面ともにケズリが施される。69~73はタコ壺である。タコ壺にはヘラ状工具の接触痕が窺えるが, 基本的な調整はナデで器面全体に多くの指頭圧痕が残る。71・72に見られる穿孔は, 焼成以前のものである。74~78は甕, 79~81は甑と考えられ, 内面調整にケズリが見られるのは74・75・79の3点で, 他は内外面ともハケによる器面調整である。

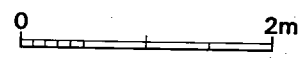
須恵器(第38図) 82の天井部内面, 89の底部外面には「×」



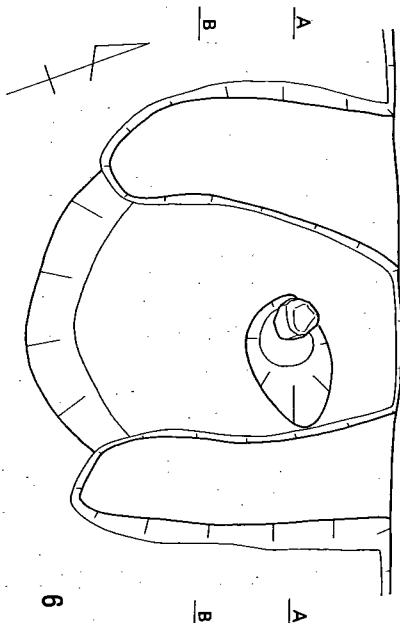
6



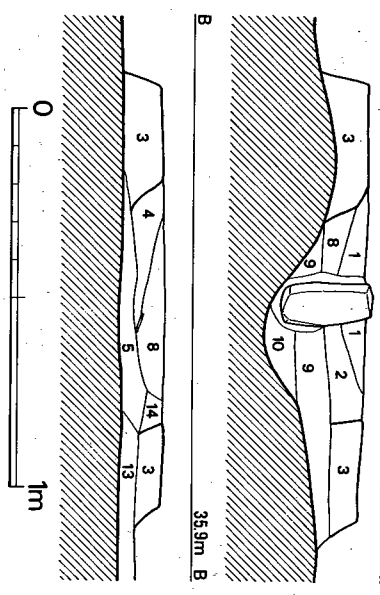
7



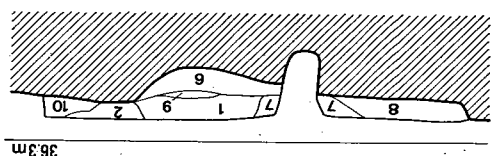
第 34 图 6·7 号竖穴住居跡実測图 (1/60)



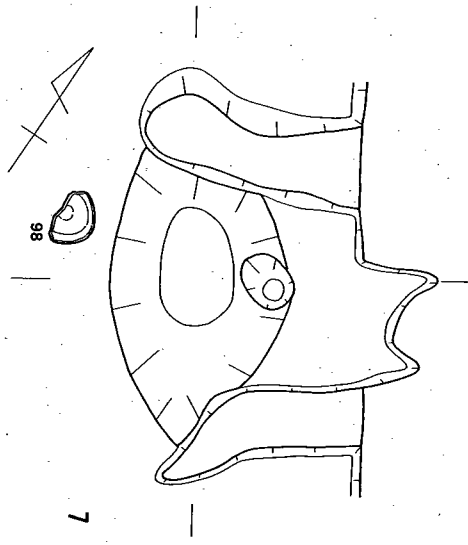
35.9m A
35.9m B



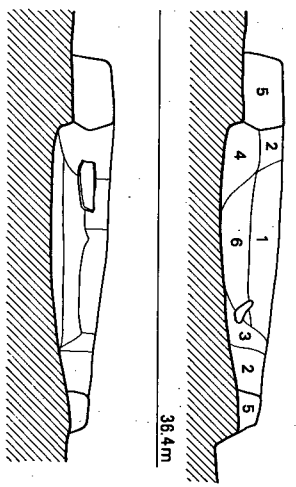
- 1. 黄褐色土 (焼土を多量に含む)
- 2. 灰褐色粘土
- 3. 黄褐色粘土
- 4. 褐色土 (焼土を少量含む)
- 5. 灰褐色土
- 6. 茶褐色土
- 7. 茶褐色土
- 8. 黄褐色粘土 (焼土と炭化物を少量に含む)
- 9. 褐色土
- 10. 灰褐色粘土 (炭化物を少量含む)
- 11. 灰褐色土
- 12. 灰褐色粘土
- 13. 茶褐色土
- 14. 褐色土 (焼土を少量含む)



36.3m

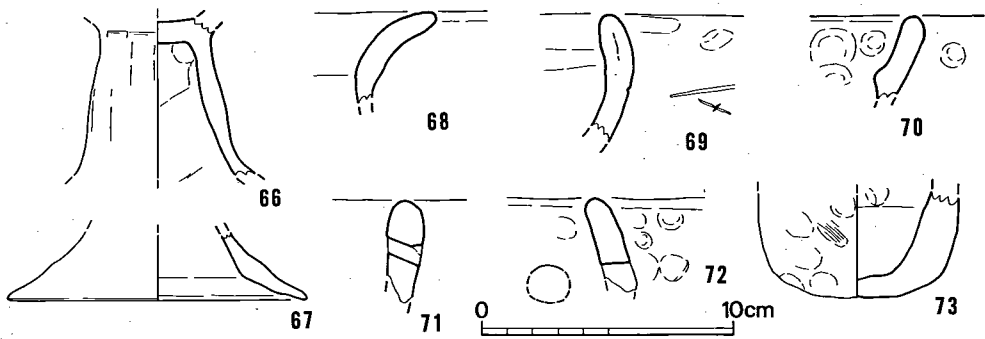


36.4m



- 1. 黄褐色土 (焼土を若干含む、サラサラした土)
- 2. 褐色土
- 3. 淡褐色粘土 (カマド袖粘土が少量)
- 4. 黄褐色粘土
- 5. 茶褐色粘土
- 6. 淡褐色土 (焼土炭化物を少量含む)
- 7. 淡褐色土
- 8. 粘砂土
- 9. 褐色土 (貼り床)
- 10. 褐色土

第 35 図 6・7号竪穴住居跡カマド実測図 (1/20)



第 36 図 6号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)

のヘラ記号が施される。坏蓋82~88の天井部外面、および坏身89~91の底部外面には回転ヘラケズリが施される。92・93の器面調整はナデである。94~96は大きな甕の破片で、同一個体と考えられる。94の2条の沈線文間に施された文様は、粗い波状文である。

砥石(第33図) 凝灰岩製のかなり使い込まれた砥石で、両面だけでなく各側面とも使用されている。

7号竪穴住居跡(図版29, 第34・35図)

7号竪穴住居跡は、調査区の南側に集中する住居群の東端で検出され、辺長3.4×約3.2mの方形プランを呈する。住居の南東側半分は削平が著しく、南東壁は残らない。本遺跡の他の住居跡とは異なり、支柱穴の配置が整然としておらず、また柱穴自体も浅い。遺物は量的に少なく、カマドの周辺でわずかに検出された。カマド(第35図)は本遺跡の住居群の中で唯一北東壁の中央部に付設され、火床面は住居の床面より低く、支脚が据えられていたと考えられる小ピットがカマドの中央で検出された。カマドの奥で15cmほど不定形に張り出しているのは、煙道の痕跡であろうか。なお、本住居跡は27号土壙を切っている。

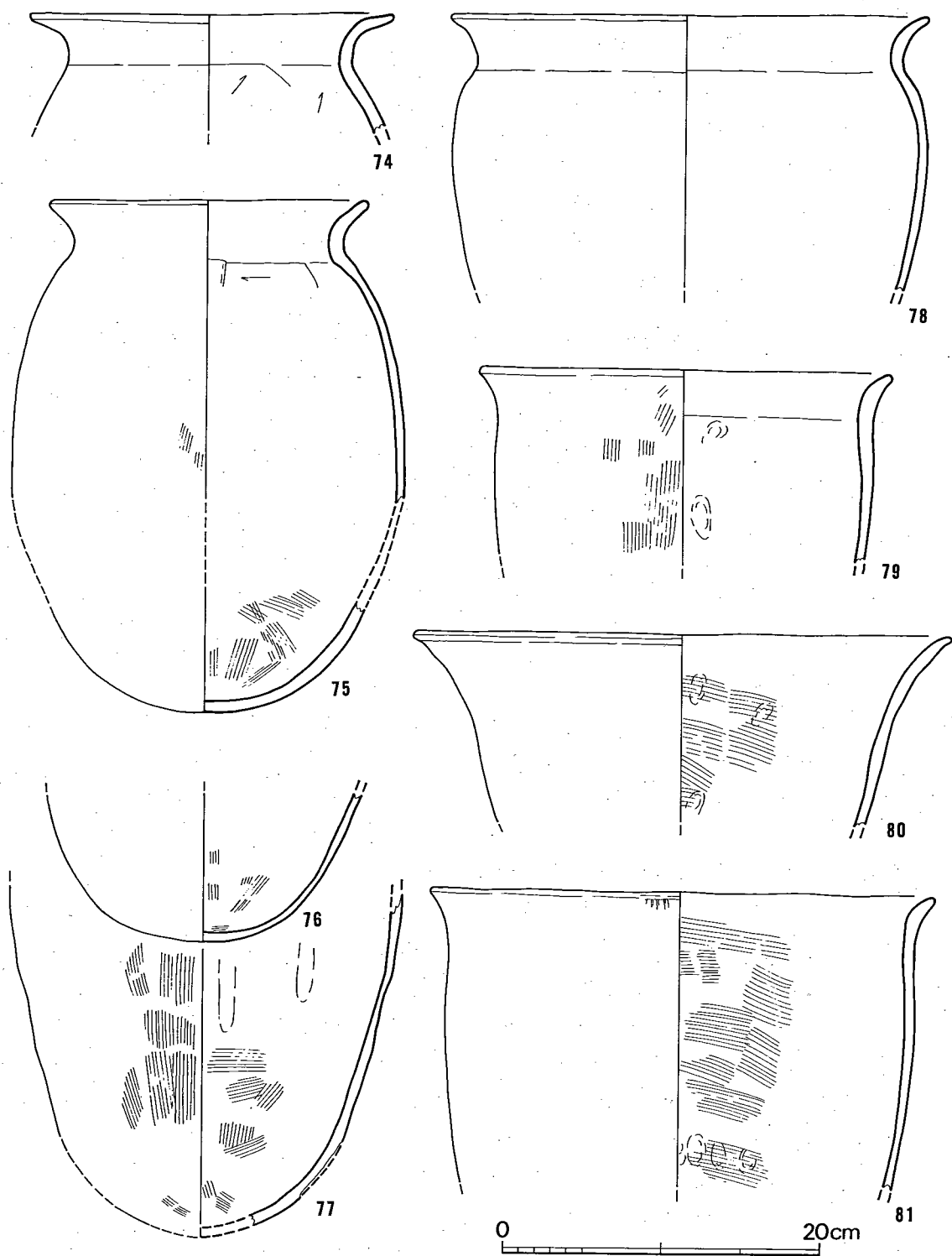
土師器(第41図97) 97は甕の把手でナデ調整が施される。

須恵器(第41図98) 98は撮の付いた須恵器の蓋で、天井部外面には回転ヘラケズリが施される。

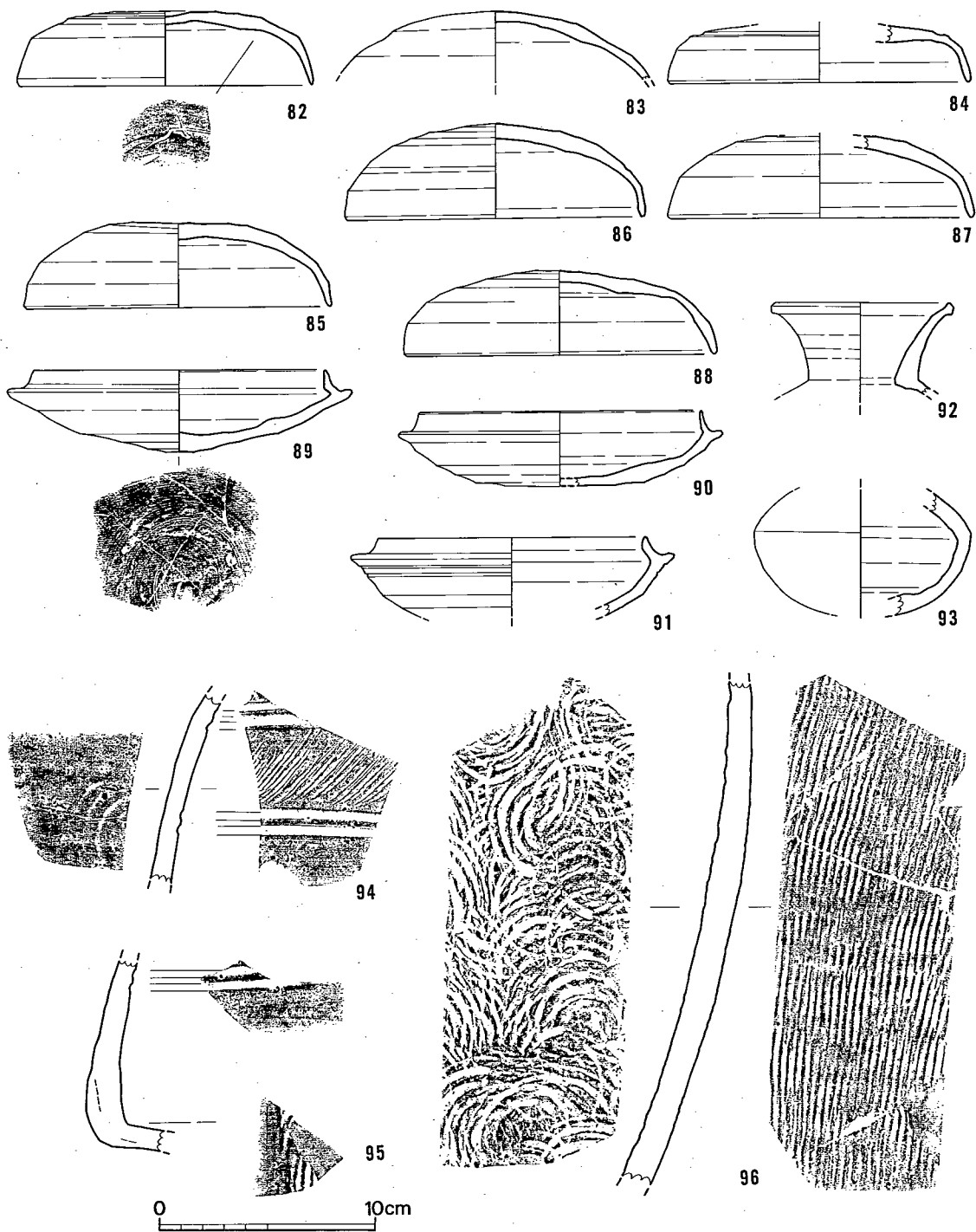
8号竪穴住居跡(図版30, 第39・40図)

8号竪穴住居跡は、住居跡の集中する調査区南部の中でもやや北寄りに位置し、28号土壙を切る。辺長3.4×4.4mの整然とした長方形プランで、北西壁に付設されたカマドは住居の外側へわずかに突出する。支柱穴の配置も整っているが、壁高は最高で15cmと浅く、遺物はカマド内とその周辺からのみ検出された。先述したように、カマド(第40図)は北西側へ15cmほど緩やかに突出しており、火床面は住居の床面より0.1mほど下がる。カマド内からは、二次火熱を受け赤褐色に変色した甕(100)が出土した。

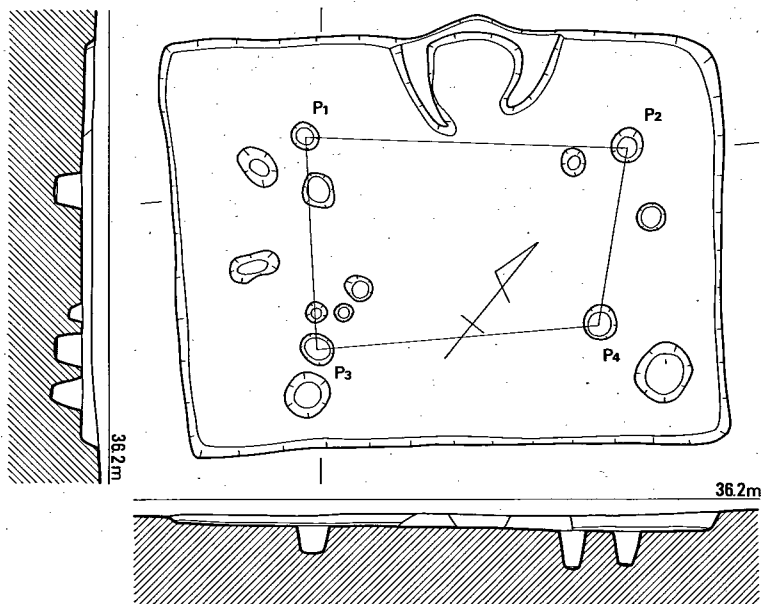
土師器(第41図100・101) 100はカマド内より出土した甕で、内面には器面を掻き上げるよう



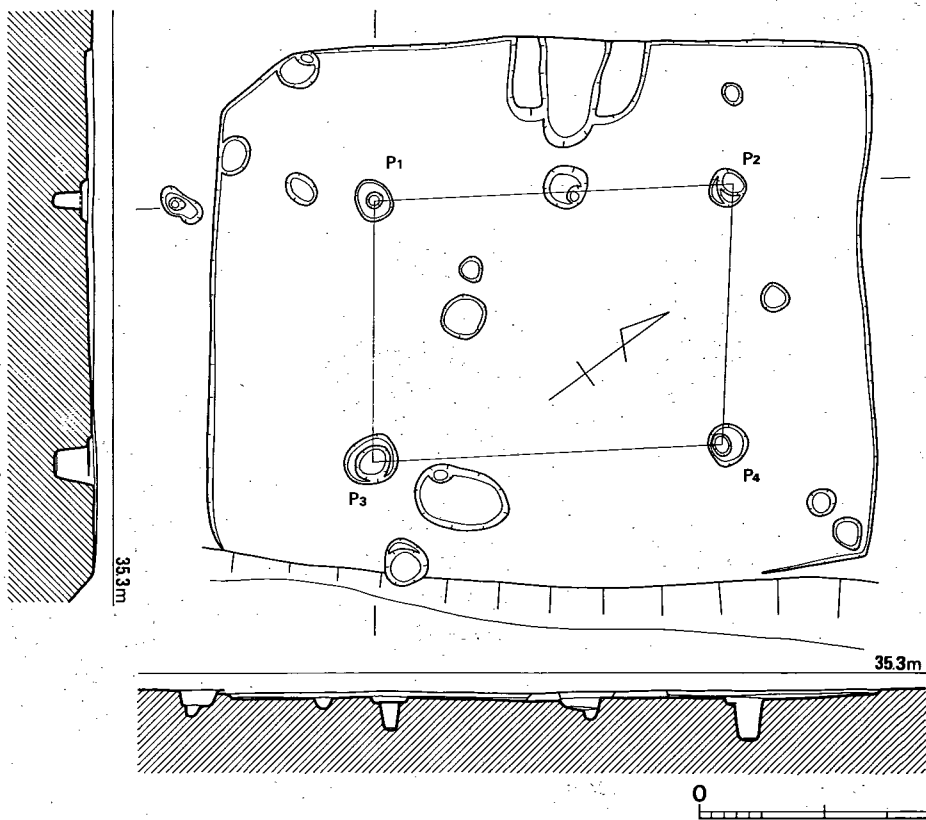
第 37 图 6 号竖穴住居跡出土土器实测图 2 (1/4)



第 38 图 6 号竖穴住居迹出土土器实测图 3 (1/3)

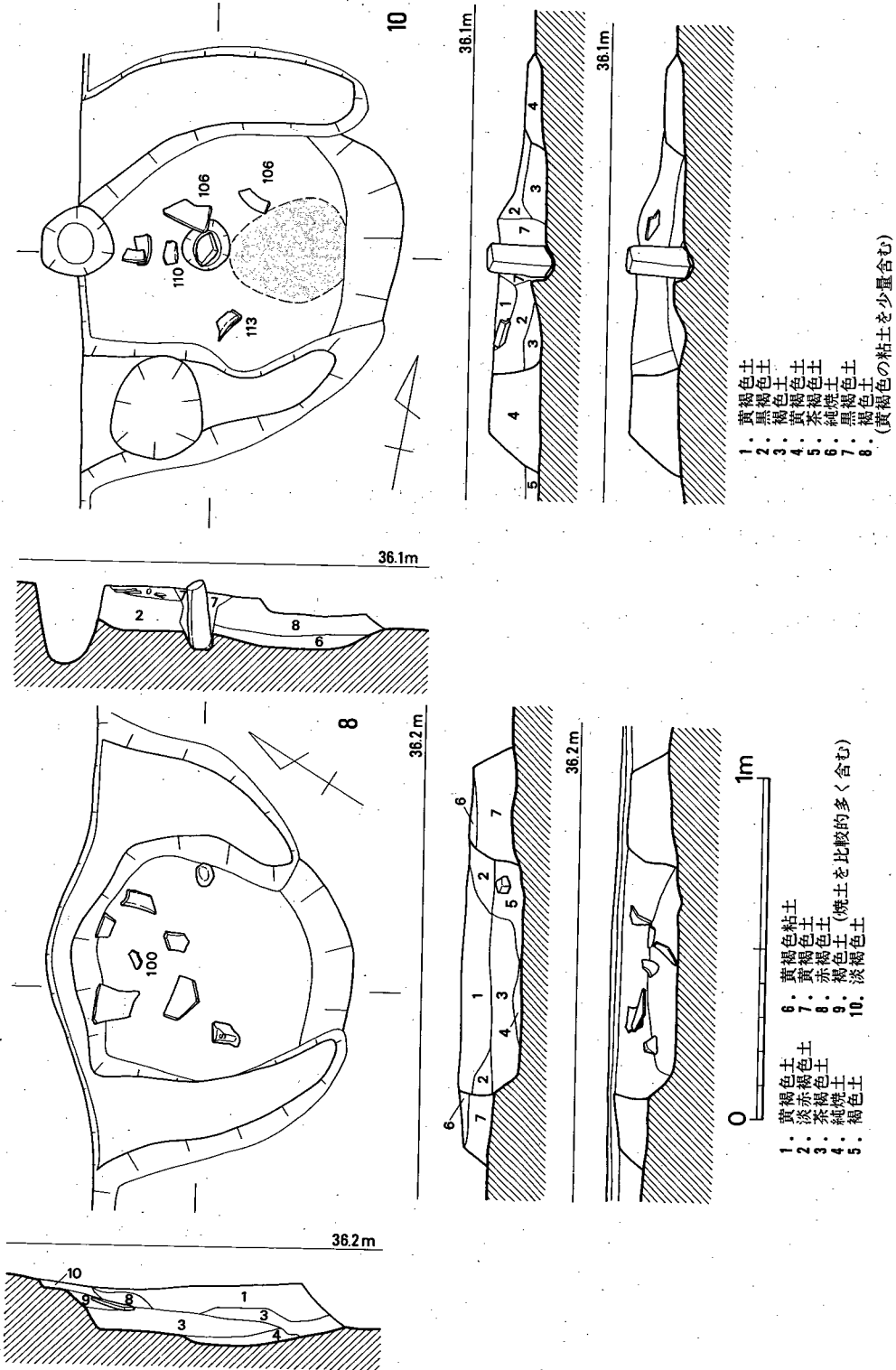


8



9

第 39 图 8·9 号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第 40 図 8・10号竖穴住居跡カマド実測図 (1/20)

な強いナデ（指頭圧痕）が下から上へ施されている。なお、二次火熱は土器の内外面はもちろん割れ口までも受けており、土器の破損後によるものである。101にはナデが施される。

須恵器（第41図99・102） 99の頸部破片にはナデ調整だけで、タタキの痕跡は窺えない。102の底部外面には回転ヘラケズリが施される。

9号竪穴住居跡（図版31，第39図）

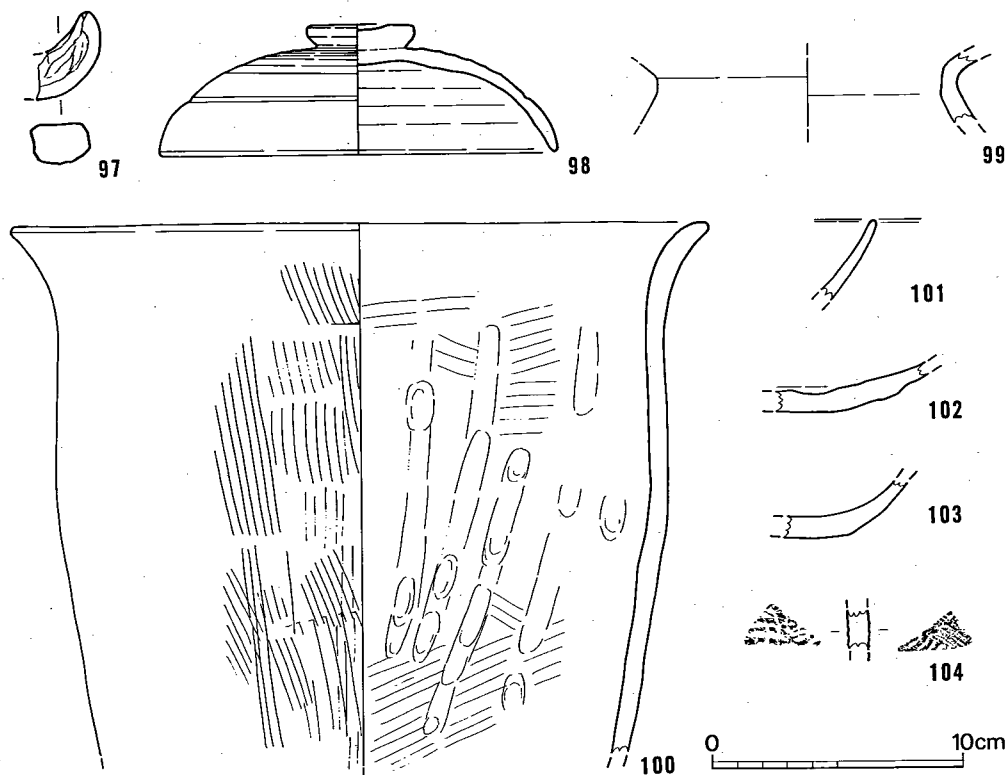
9号竪穴住居跡は、調査区の南部に集中する住居群の中でもやや東寄りに位置し、辺長5.2×約4.4mの長方形プランを呈する。壁高は最高でわずかに5cm，その上南東壁の大部分は残らず、削平が著しい。支柱穴の配置は整然とし、カマドは北西壁の中央に付設される。カマドも袖になる黄褐色の粘土とカマド内の焼土が痕跡的に残るだけで、遺存状態は極めて悪い。遺物も少なく、図示できたのは103・104の2点である。

土師器（第41図103） 甕の底部で外面に煤が付着する。

須恵器（第41図104） 外面には平行タタキが、内面には青海波のタタキが施される。

10号竪穴住居跡（図版32・33・44，第40・42図）

10号竪穴住居跡は、集中する住居群のほぼ中央部で、1号住居跡と9号住居跡の間に位置し、3号土壙を切る。辺長は4.3~4.5×3.8~4.4mで北壁の長い不整台形を呈し、南西隅は南側へ



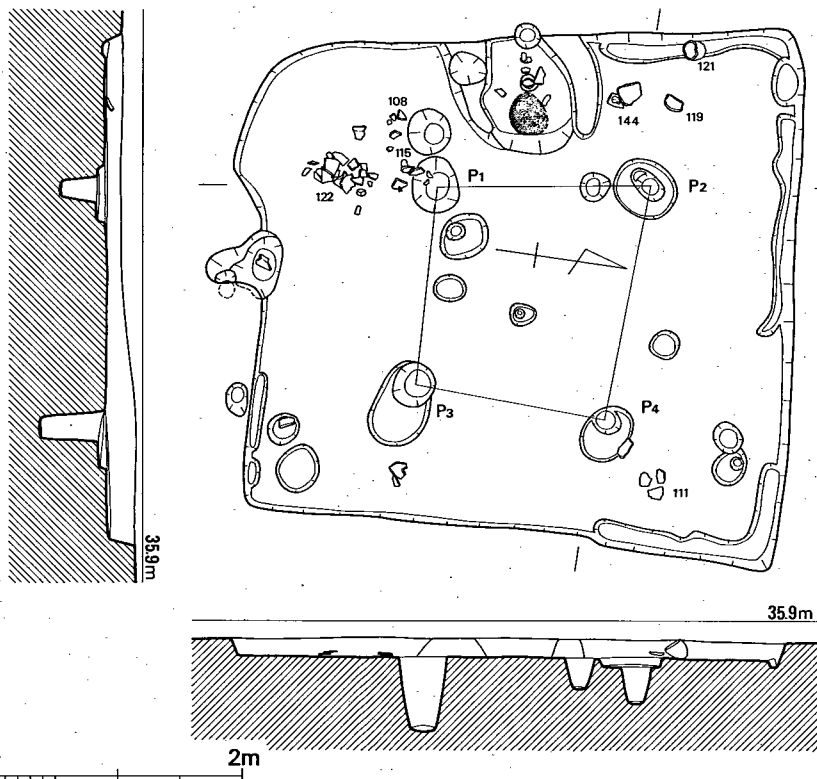
第41図 7~9号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

約30cmほど突出する。支柱穴の配置も住居の平面プランに合わせたように、北側2つの間の距離が南側の2つより30cmほど長い。壁高は最高で20cmを測り、北側半分と南東隅の壁には、幅10~20cm、深さ10cm程度の溝が断続的に沿う。遺物の遺存状態も良く、多くの遺物が床面から出土した。カマド（第40図）は西壁の中央部に付設され、両袖が若干削平されているが全体的に残りは良い。自然石を利用した支脚がカマドの中央部に据え立てられ、その前面には住居の床面より5cmほど低くなった火床面がある。遺物の残りも良く、105~107・109・110・112・113等がカマド内より出土した。なお、カマドの奥にある柱穴はこのカマドを切るもので、カマドに関係するものではない。

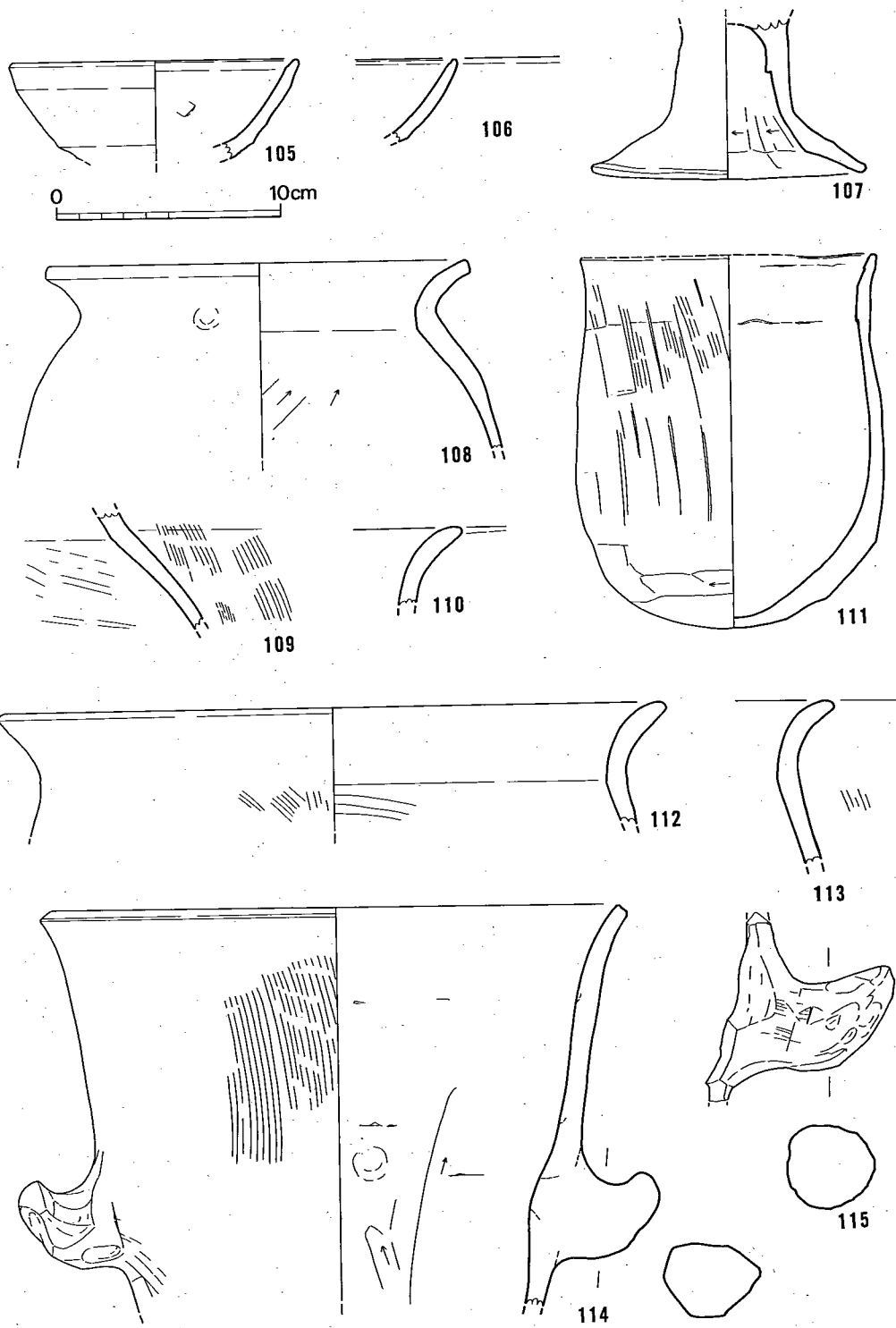
土師器（第43図） 105・106とも高坏の坏部片で、105は口径12.8cm。摩滅が著しく、器面調整は不明。高坏脚部107の器面調整は内外面ともケズリで、全面に二次火熱を受ける。108の甕内面にはケズリが、109の内外面にはハケが施される。小型甕111の外面には底部付近のナデを除き口縁端部近くまでハケが、内面にはナデが施され、全面に二次火熱を受けるが、特に111の底部外面は火熱による器面の剥落が著しい。112の甕の内外面にはハケが、114の甕の内面にはケズリが外面にはハケが施され、口縁端部に面を作る。

須恵器（第44図） 119の底部外面には一条の沈線によるヘラ記号が施される。坏蓋116の天井部外面、坏身117~120の底部外面には回転ヘラケズリが施される。120はいわゆる赤焼き土器である。

121はカキ目の施

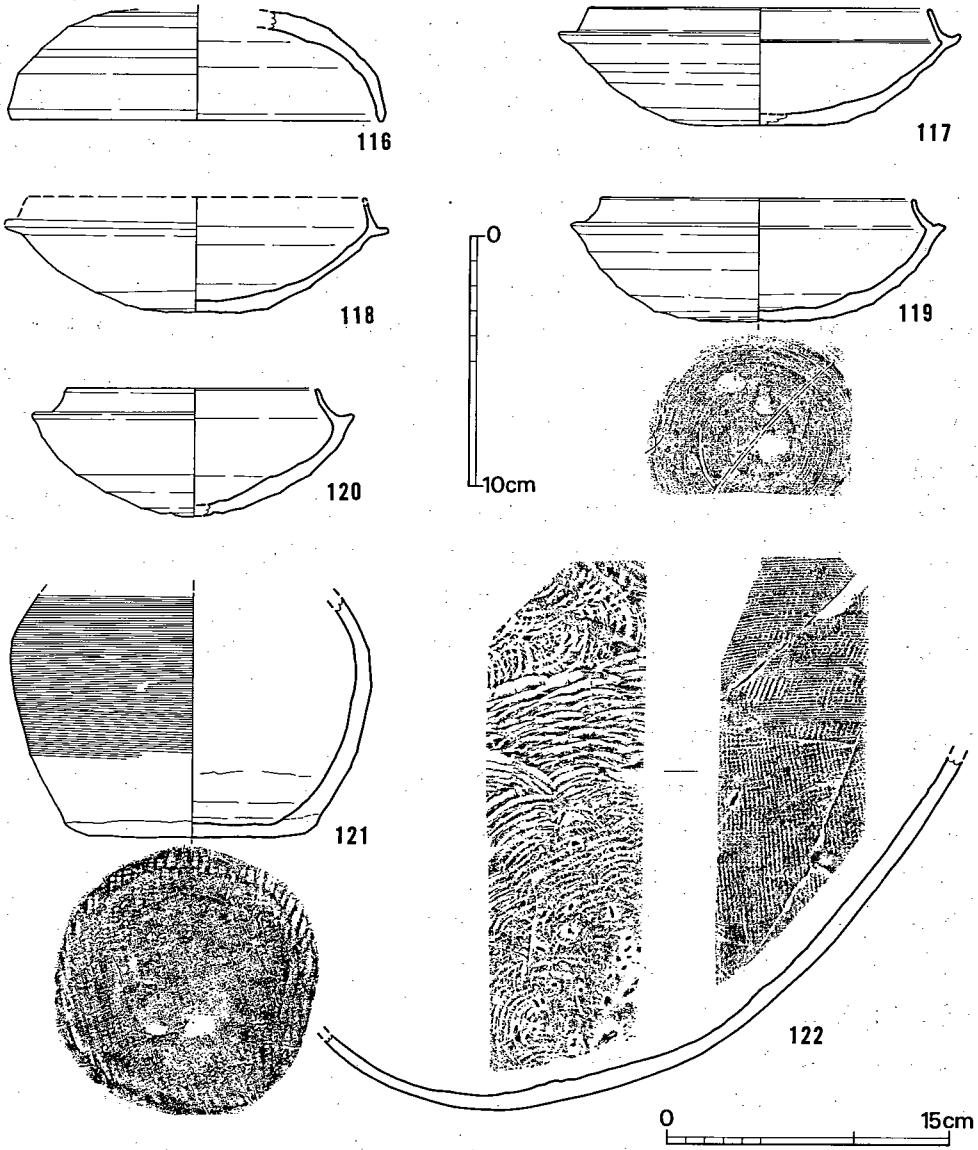


第 42 図 10号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第 43 图 10号竖穴住居跡出土土器実測图 1 (1/3)

された長頸壺の胴下半部で、底部の中央はナデ消されているが、その周辺には平行タタキの痕跡が残る。122は甕の底部で、外面には焼成時に坏等と重ね焼きされたと考えられる円形で淡灰色に変色した痕跡が4箇所確認できる。



第 44 図 10号竪穴住居跡出土土器実測図 2 (1/3, 122は1/4)

(2) 掘立柱建物跡

本遺跡からは6棟の掘立柱建物跡が検出されたが、いずれも調査区の南半に、竪穴住居跡や他の掘立柱建物跡等と切り合うことなく集中する。方位は概ね揃っており、梁を北西～南東に、桁を北東～南西に向ける。遺物の出土は少なくまた小破片で、図示できるのは2号建物跡の2点と6号建物跡の1点だけである。

1号掘立柱建物跡 (第45図)

1号掘立柱建物跡は、調査区の中でも最も南寄り、5号掘立柱建物跡の約3.5m南東に位置する。1×1間の建物で、梁行2.00×桁行2.35mを測る。東側の2本の柱穴は大きく削平され残りは良くないが、西側の2本の柱穴の規模はおおよそ径30cm、深さ30cmである。遺物の出土はなかった。

2号掘立柱建物跡 (図版34, 第45図)

2号掘立柱建物跡は、調査区南部の住居集中域の中で最も北に位置し、2×2間の整然と配置された9本の柱によって構成され、梁行3.50×桁行3.95mの規模を有する。柱痕部はP3を除いた8つの柱穴で確認され、径15～20cm、深さ50～60cmを測る。出土した遺物は少なく小破片で図示できるものはないが、須恵器が含まれる。

3号掘立柱建物跡 (図版34, 第46図)

3号掘立柱建物跡は、調査区のほぼ中央部で1・8・10号住居跡にそれぞれ3～4mと近接した位置関係にあり、2×4間の12本の柱によって構成される。柱の配置は整然とし、梁行3.75×桁行7.75mの規模を有する。P1・8・12では柱痕が確認され、径0.15m、深さ0.50～0.55mを測る。出土遺物はいずれも小破片で図示できるものはないが、土師器の他に須恵器もみられる。

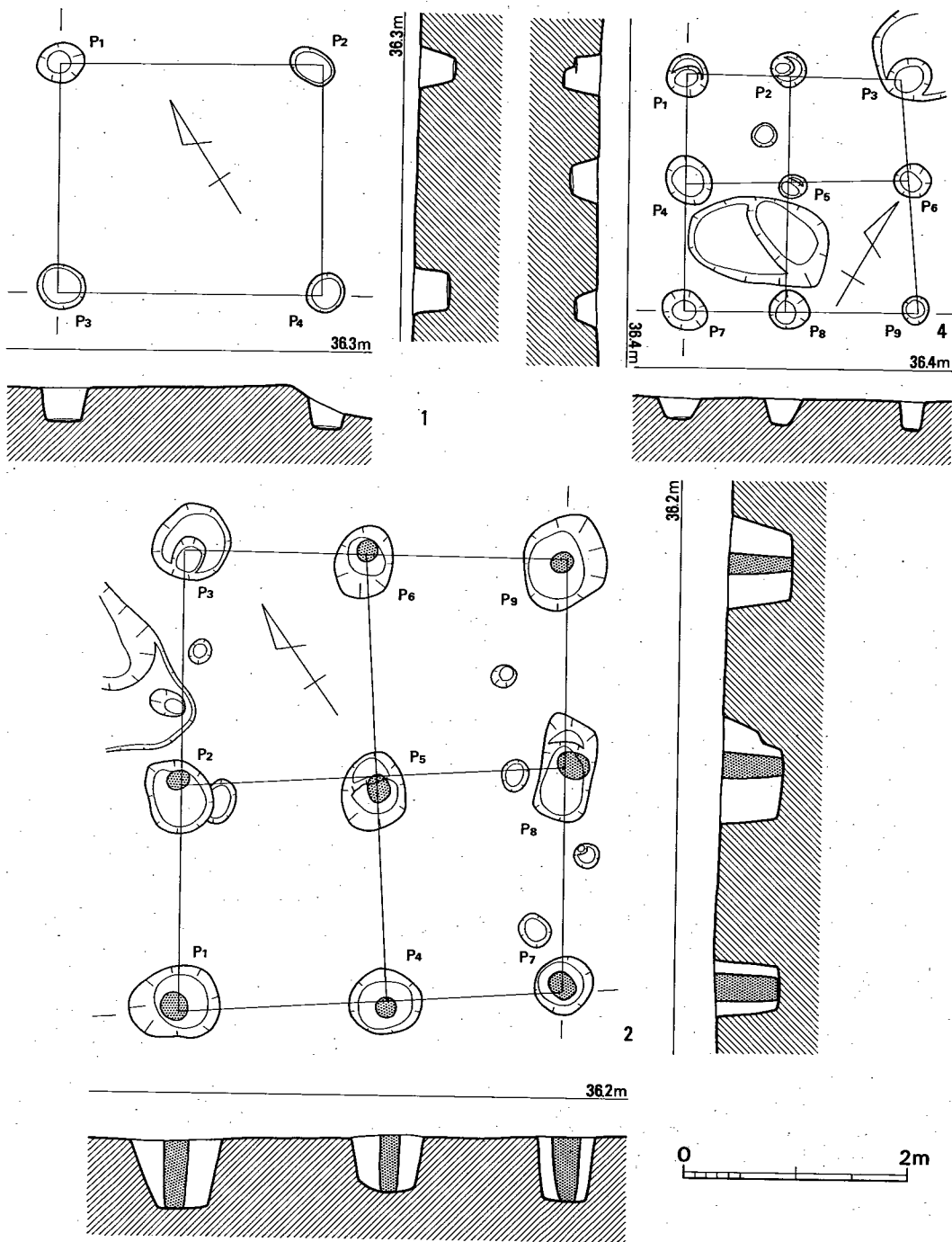
4号掘立柱建物跡 (図版35, 第45図)

4号掘立柱建物跡は、住居集中域のほぼ真ん中で、9号と10号住居跡との中間よりやや南側に位置し、2×2間で9本の柱によって構成される。規模は平均で梁行2.05×桁行2.15mを測り、南側に若干開く台形状プランを呈する。

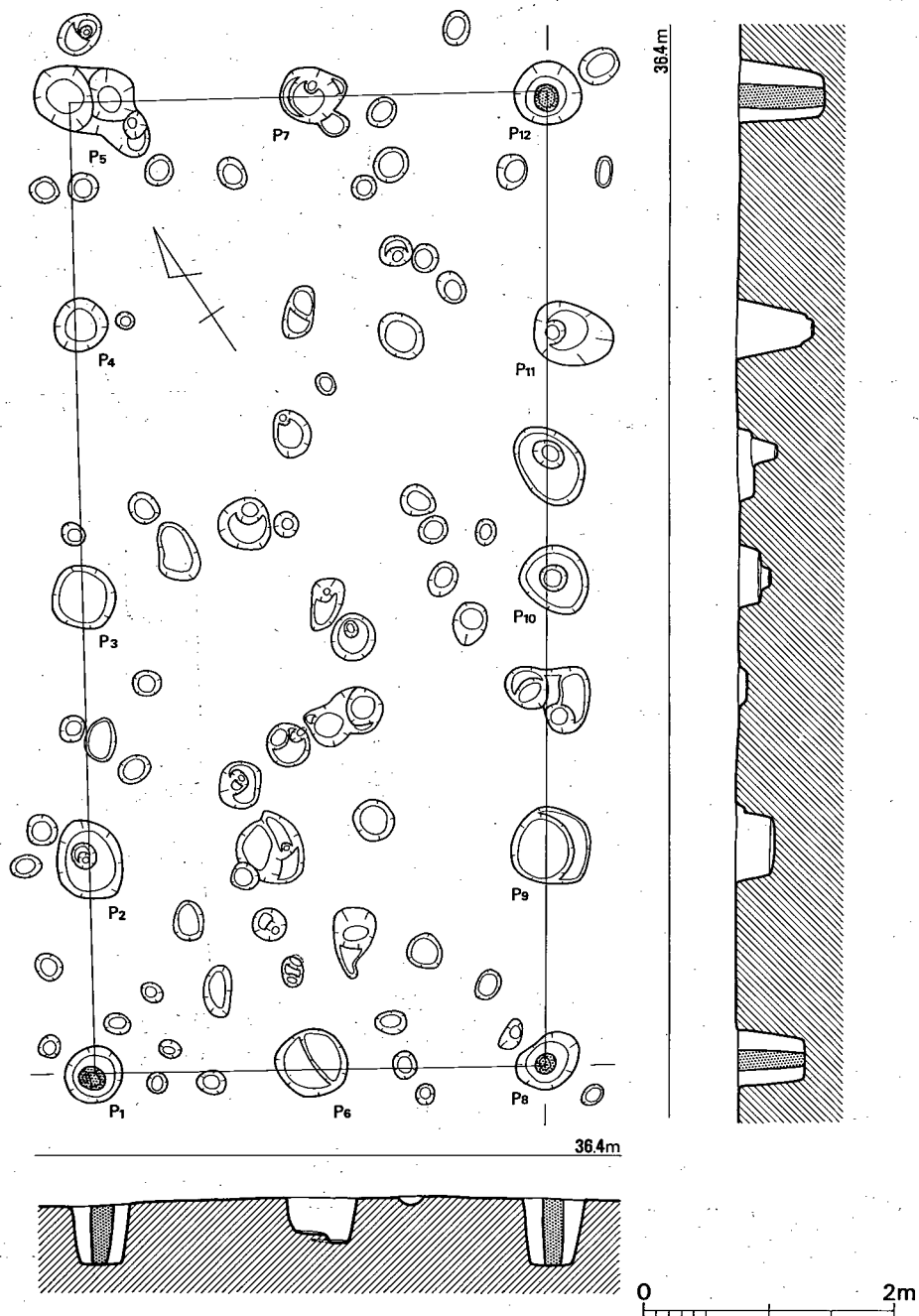
須恵器 (第48図1・2) 1はP2からの出土だが摩滅が著しく、器面調整は不明。2はP4からの出土で、器面調整はナデである。

5号掘立柱建物跡 (第47図)

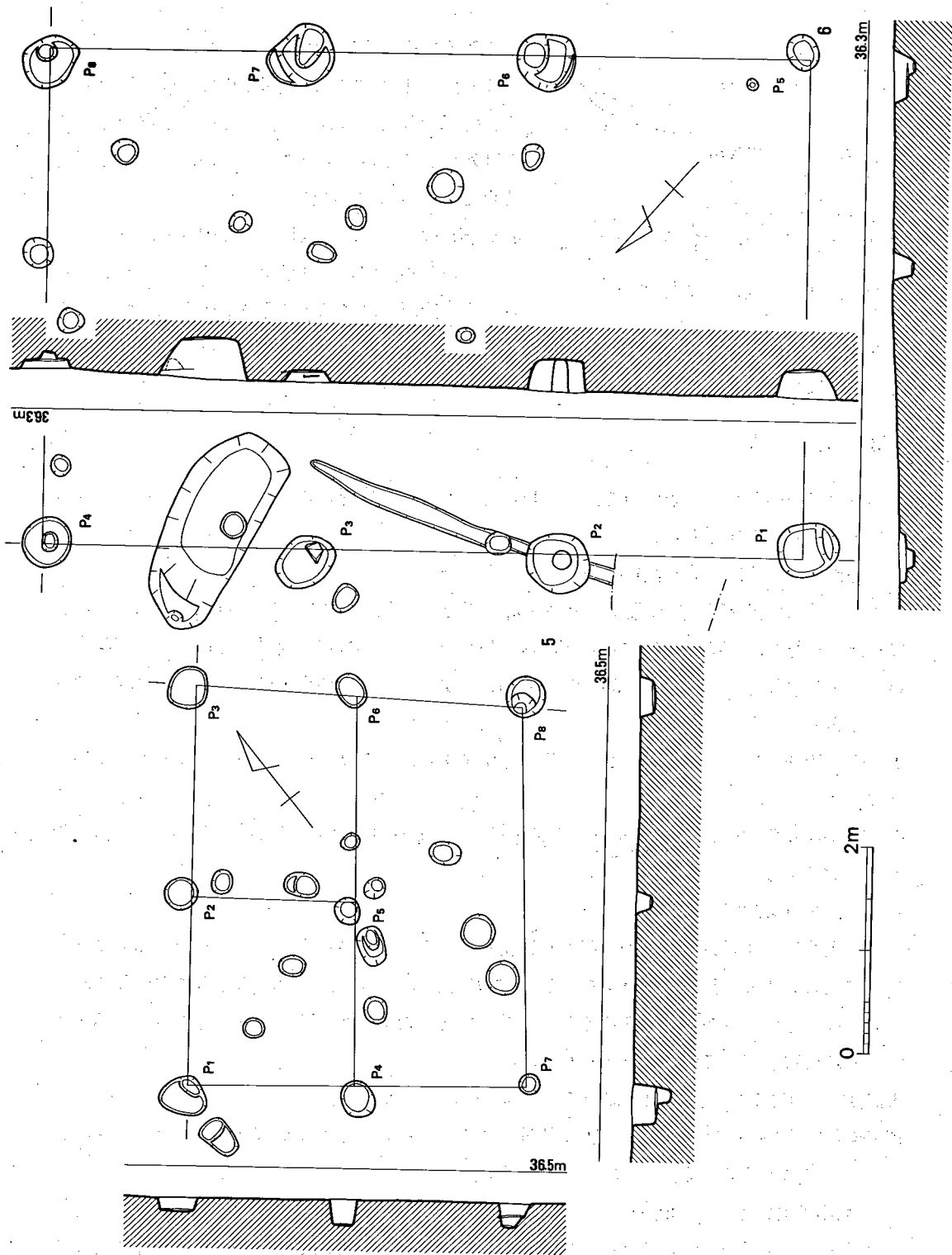
5号掘立柱建物跡は、調査区のほぼ中央部で1・2・10号住居跡と1号掘立柱建物跡に取り囲まれるような位置関係にある。2×2間のおよそ整然と配された8本柱で構成され、梁行3.3×桁行3.8mを測る。削平が著しいのか、残りの最も良好な柱穴で深さは35cmしかない。なお、遺物の出土はなかった。



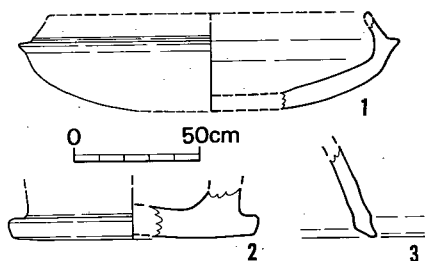
第 45 图 1·2·4 号掘立柱建物跡实测图 (1/60)



第 46 图 3 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第 47 图 5·6号掘立柱建物跡实测图 (1/60)



第 48 図 2・6号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)

は少なく小破片で、図示できたのはP2から出土した第48図3の脚と考えられる須恵器のみで、器面調整はナデである。

(3) 土 壙

本遺跡で検出された土壙の中で、古墳時代もしくはそれ以降の時代に所属すると考えられるのは1～5号の5基である。

1号土壙 (図版36, 第49図)

1号土壙は、調査区南半に集中する住居群の西で、2号住居跡の北東約1.0mに位置する。長径3.05×短径2.35×深さ0.1mの不整形の平面プランを呈するが、西側半分には楕円形状の浅い落ち込み(長径1.95×短径1.30×深さ0.15m)がある。遺物の出土は、主に東側の浅い部分からである。

土師器(第50図1・2) 甕1・2とも著しく摩滅するが、1には器面調整としてのナデが内外面に窺える。

須恵器(第50図3～6) 4・5の天井部外面には回転ヘラケズリが施される。3・6の器面調整はナデである。

2号土壙 (第52図)

2号土壙は、住居集中部のやや西寄りに位置し、1号住居跡の南東壁と切り合い関係にある。1.3×1.2×0.15mの長方形プランを呈し、南隅に径25cm、深さ25cmの柱穴を有する。調査時には1号住居跡が本土壙を切るという認識であったが、出土遺物から判断すると、本土壙が1号住居跡を切っていたと考えられる。

土師器(第51図7) 甕の把手部分で、内面調整はハケである。

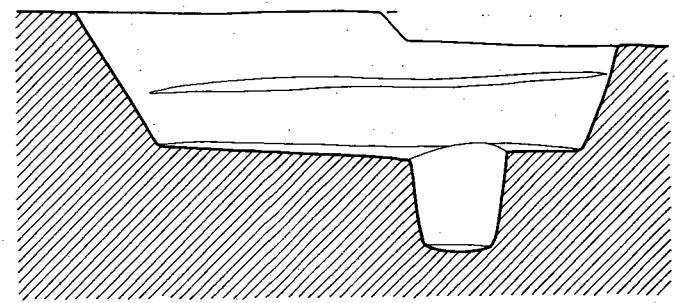
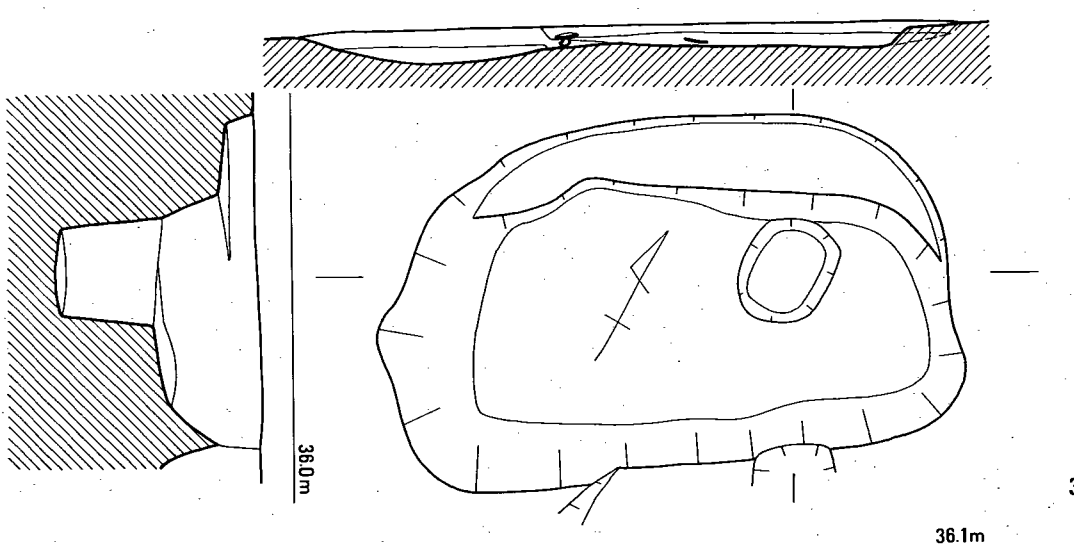
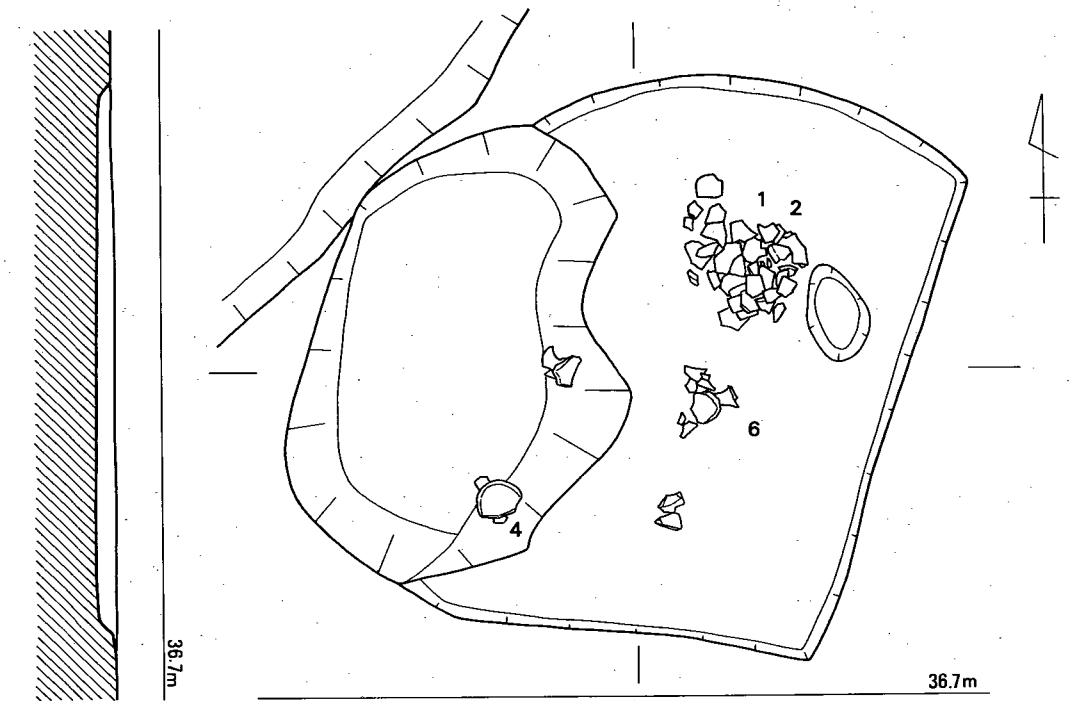
須恵器(第51図8～11) 坏蓋8の天井部外面にのみ、粗い回転ヘラケズリが施される。9～11の器面調整はナデである。

3号土壙 (図版36, 第49図)

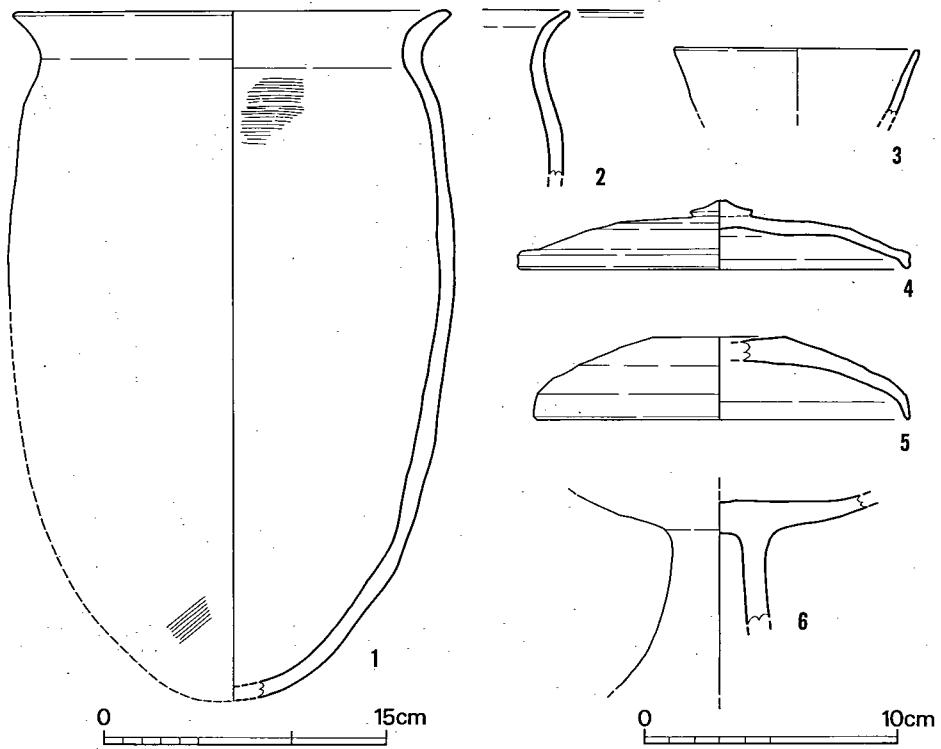
3号土壙は住居集中部のほぼ中央に位置し、その東側半分を深さ15cmに亘り10号住居跡に切

6号掘立柱建物跡 (図版35, 第47図)

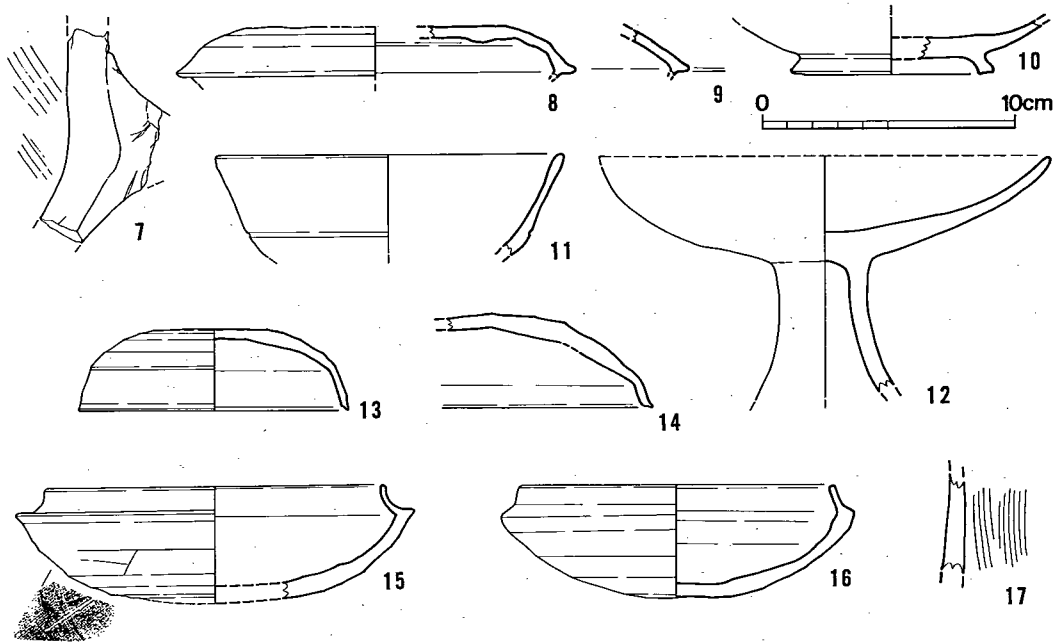
6号掘立柱建物跡は、住居集中域の西端に位置する。確認できたのは8本の柱穴だけでまだ西方の調査区外へ延びている可能性もあるが、とりあえず現時点では1×3間の建物ということになる。梁行4.8×桁行7.8mで、柱穴は整然と配置される。削平が著しいため柱穴の残りは全体に悪いが、P2でのみ柱痕が確認され径15cm、深さ30cmを測った。遺物



第 49 图 1・3号土坑实测图 (1/30)



第 50 图 1号土坑出土土器实测图 (1/3, 1 (±1/4))



第 51 图 2·3号土坑出土土器实测图 (1/3)

られる。長径2.30m、短径1.45m、深さ0.55mの隅丸方形プランを呈し、北側に幅0.25m、長さ1.90mのテラスを、底面の中央よりやや東寄りに径30×40cm、深さ40cmの柱穴を持つ。遺物は主に本土壙の上部から出土した。

土師器(第51図17) 甕もしくは甑の胴部破片で、外面にはハケ、内面にはナデが施される。須恵器(第51図13~16) 坏蓋13・14の天井部外面と坏身15・16の底部外面には、回転ヘラケズリが施される。15の外面にはヘラ記号が見られる。

4号土壙(図版37, 第53図)

4号土壙は、調査区北部で北東—南西方向に延びる1号溝内の北側斜面で検出された。2.55×1.85×0.70mの長方形プランを呈し、拳大から人頭大までの自然礫が多量に包含されるが、礫自体には加工や火熱を受けた痕跡はない。なお、本土壙は1号溝に切られており、遺物は出土していない。

5号土壙(図版38, 第53図)

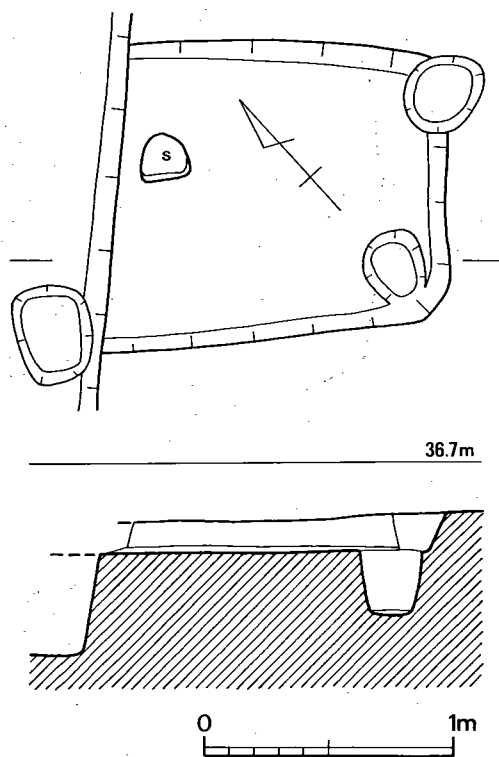
4号土壙と同じく1号溝の北側斜面で検出された遺構で、4号住居跡のカマドを切る。規模は2.85×1.85×0.98mで、4号土壙と同じく加工や火熱を受けた痕跡のない自然礫を包含するが、楕円形の平面プランと中央が掘り鉢状に窪む底面プランに4号土壙との違いをみせる。やはり遺物は出土しておらず本土壙の所属時期は明確でない。

(4) 溝

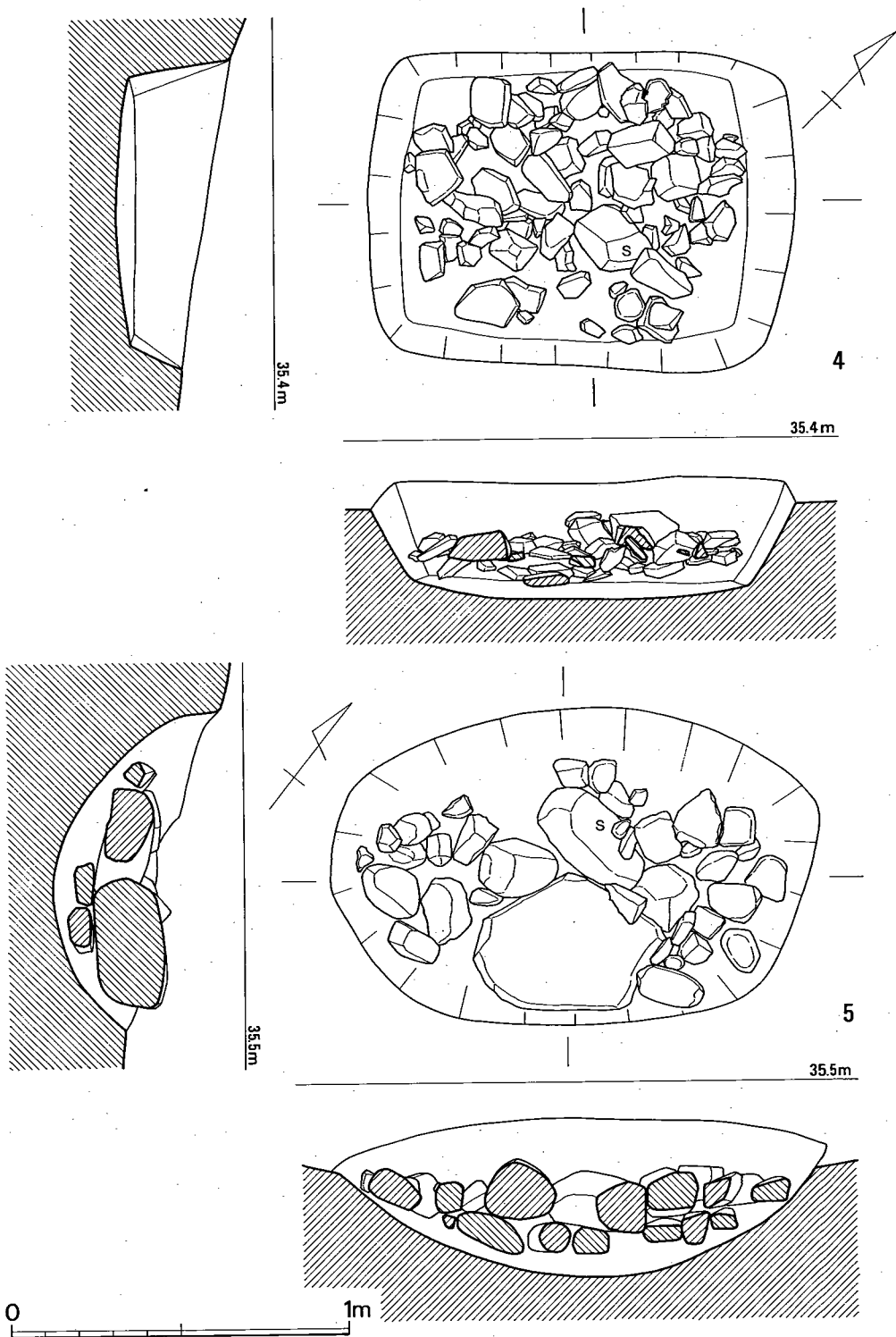
1号溝(図版5・39, 第54図)

調査区の北西部で検出された1号溝は、南西から北東方向へ現代の水路とはほぼ平行して流れるが、溝の南側肩の大部分はこの水路によって切られる。規模は幅2.8m、深さ0.5mを測り、幅約1.2mの底面は平坦である。斜面については部分的に段(平坦面)が作られるが、全体的には緩やかに傾斜する。本溝は、3・4号竪穴住居跡および4・5号土壙を切る。

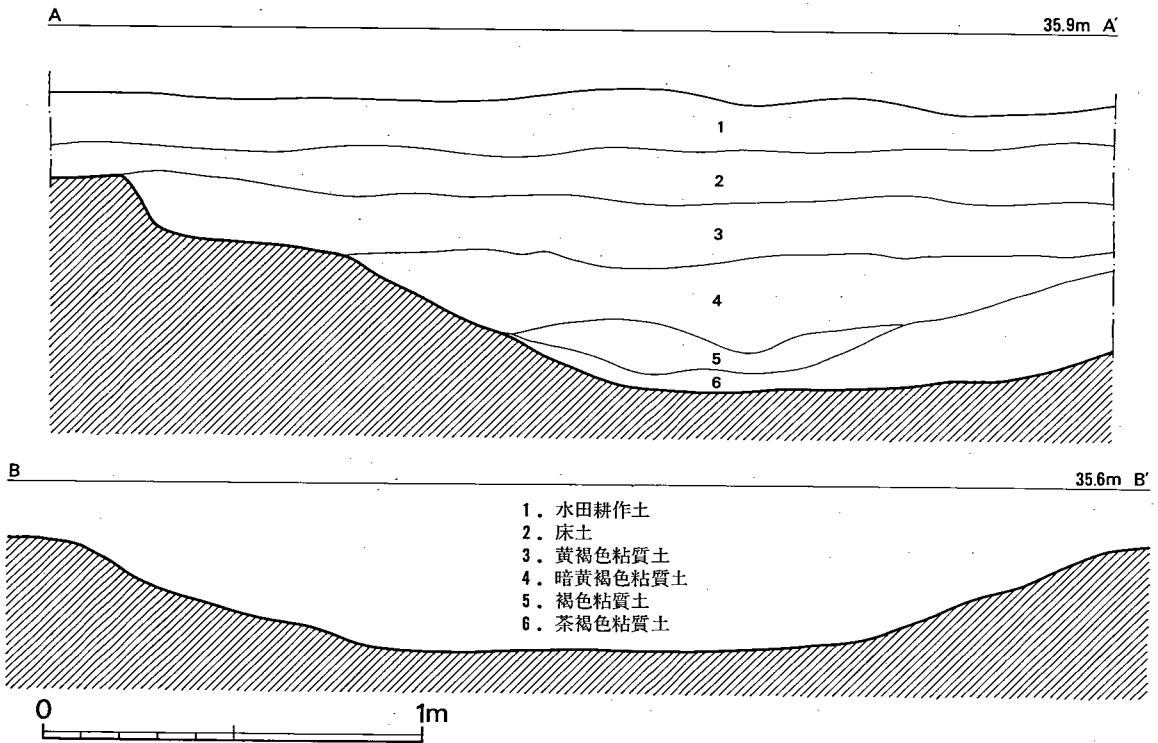
陶器(第56図1~3) 1は鉢の底部で乳白色を呈する。内外面に重ね焼きの跡が残り、全面に藁灰釉がかかる。2は皿の底部で、内面および外面の一部に透明釉がかかり、胎土に砂粒は



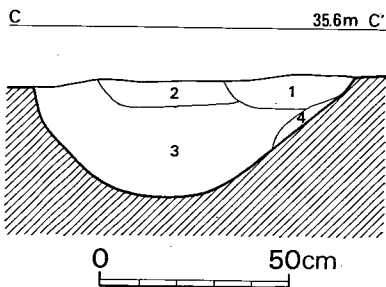
第52図 2号土壙実測図(1/30)



第 53 图 4·5 号土壤实测图 (1/20)



第 54 図 1号溝土層図 (1/20)



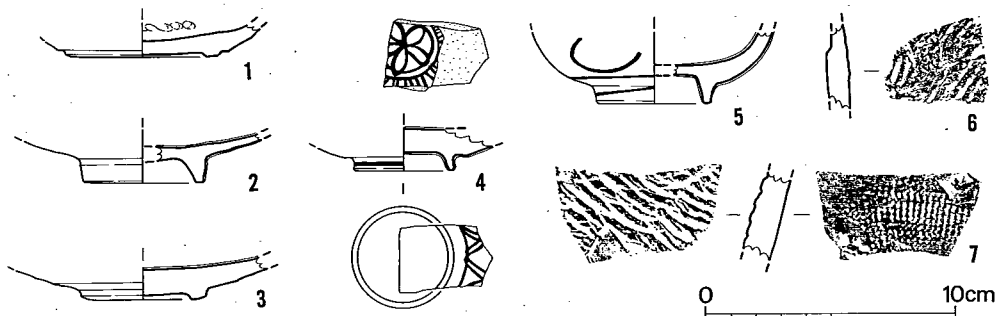
第 55 図 2号溝土層図 (1/20)

ほとんど含まない。3は削り出された皿の高台で、茶褐色を呈した器面には藁灰釉がかかりナマコ色に発色する。

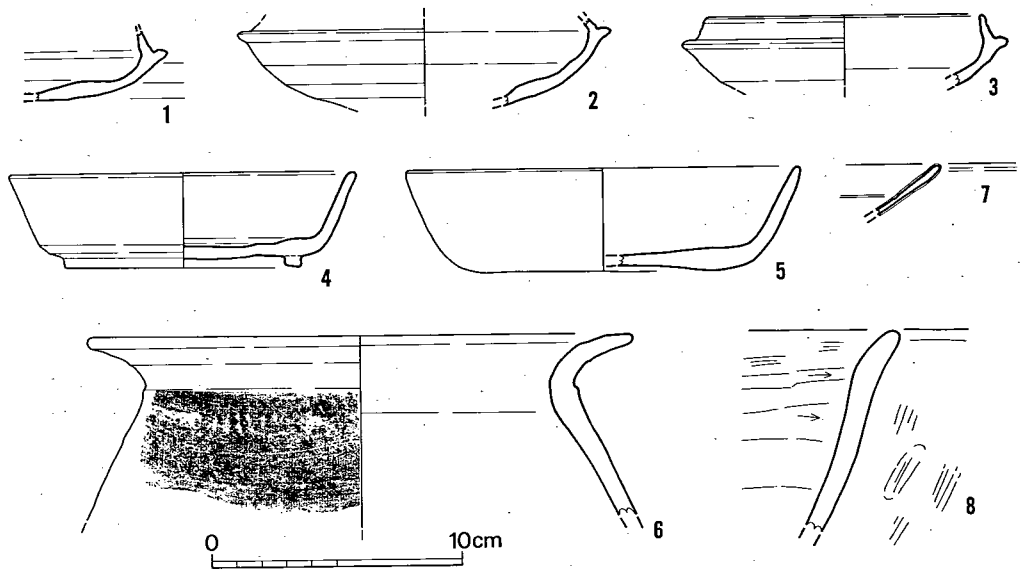
2号溝 (図版5・39, 第55図)

調査区北西部で検出された2号溝は、1号溝と6号土壙を切る。北西から南東方向に延び、断面形態は緩やかに開くU字形で幅85cm、深さ30cmを測る。土層名は(1)灰黄色シルト、(2)灰黄色粘質土、(3)灰褐色粘質土、(4)地山の土の混った灰褐色粘質土である。

須恵器 (第56図6・7) 6の外面上には平行のタタキが、



第 56 図 1・2号溝出土土器実測図 (1/3)



第 57 図 柱穴 (1～6)・包含層出土土器実測図 (1/3)

内面にはナデが施される。7の外面には格子目のタタキが、内面には青海波のタタキが施される。

磁器(第56図4・5) 4は磁器碗の底部で、呉須で花文が施される。露胎は乳白色を呈し、淡青味白の釉がかかる。5は半磁器の染め付けで、草文が施される。露胎は灰色を呈し、明るい緑味灰の釉がかかる。

(5) その他の遺構と遺物

ここでは、柱穴と包含層から出土した遺物についての説明を行なう。柱穴は大部分の遺構が集中する調査区の南東側半分や調査区西隅に密集するが、これは竪穴住居跡や掘立柱建物跡といった生活遺構に関連しているためであろう。

土師器(第57図8) 8は現代の攪乱から採集された甕もしくは甑の口縁部で、外面と口縁端部内面にはハケが、内面の大部分には横方向のケズリが施される。

須恵器(第57図1～6) 1はP2, 2はP3, 3はP24, 4・5はP32, 6はP58から出土した。1・2の底部外面には回転ヘラケズリが、3～5の全面にはナデが器面調整として施されている。6は著しく摩滅するが、外面には平行のタタキ、内面には青海波のタタキがかすかに見られる。

磁器(第57図7) 7は現代の攪乱から採集された磁器碗の口縁部で、全体に淡灰色の釉がかかり、内面には浅い沈線が施される。

5. おわりに

(1) 縄文時代について

安武・土井の内遺跡で縄文時代と考えられる遺構には、23基の陥し穴状土壌と不定形で性格不明な土壌1基（P33）とがある。P33からは2本の結晶片岩製打製石斧が出土しており、これらは九州では少なくとも縄文後期以降に見られるもので、したがってこの遺構の所属時期もそれに相当するものと考えられる。しかし遺構自体は全くの単独で、その性格付けは難しい。23基の土壌については陥し穴としたが、豊前地域の陥し穴については大分県中津市の黒水遺跡（註1）で24基が確認されたただけである。今回の国道10号線椎田バイパス関連の事前調査により同じ築城町内の広末・安永遺跡（註2）や豊津町の徳永・川の上遺跡（註3）でも若干数確認されており、ここでは豊前地域の中でも福岡県側（京築地域）に限って遺跡としての陥し穴の性格付けを行なってみたい。

そもそも縄文時代の陥し穴に対する認識は新しく、1965年の長野県城之平遺跡（註4）での検出に始まる。その後、否定的な意見も出される中、陥し穴であることの証明と所属時期の決定にその研究の大部分が費やされることとなるが、1980年前後の今村啓爾の一連の研究等（註5～7）により、陥し穴として一応の決着に至る。そして1989年、佐藤宏之は調査面積4,230,000㎡におよぶ広大な多摩ニュータウンの中で単に陥し穴の消長を追うだけではなく、海外の北方狩猟民やアイヌの民族例についての分析と比較・検討により、陥し穴研究を「遺構論」の域から脱却させ縄文時代の「生業システム」解明や「社会論」にまで発展させている（註8）。なお、陥し穴に対する否定的な意見も根強く残るようであるが、今村のいうようにそれでは陥し穴以外にどのような機能がより妥当で蓋然性の高いものか十分に語られていないのが実情である。

九州で最初に陥し穴という認識が導入されたのは、1983年の福岡県下原遺跡（註9）である。その後福岡県を中心に報告例が増えるが、その現状について纏めたのは1989年の富永直樹である。富永は近年九州でも認識が高まり報告例が急激に増加する陥し穴を、東日本の状況を考慮に入れつつ分布・立地・形態・配置・年代といった様々な面から分析し、九州における陥し穴の特徴を的確かつ総合的に纏めている（註10）。安武・土井の内遺跡の陥し穴を考える場合にも、富永の功績に負うところが大きい。中でも富永のいう「九州型おとし穴」は、陥し穴における九州的（西日本的）特徴を見事に抽出したもので、またそれらの所属時期が東日本（主に関東）とほぼ同じ縄文時代早期～前期であるということと合わせて、今後東日本との対比はもちろん、日本列島全体の中での議論をも可能にする注目すべき指摘といえよう。

さて、話を安武・土井の内遺跡に戻そう。安武・土井の内遺跡のある豊前地域は従来縄文時代の遺跡が希薄な地域と考えられていたが、国道10号線のバイパス建設をはじめ各種の開発に

よりその認識は大きく覆され、多くの縄文時代遺跡が確認された。それらは主に集落遺跡と考えられ、福岡県側については京都郡豊津町の節丸西遺跡（註11）、築上郡築城町の松丸遺跡（註12）、同権田町山崎遺跡（註13）・石町遺跡（註14）、同大平村の原井三ツ江遺跡（註15）や土佐井遺跡（註16）、新吉富村の垂水遺跡（註17）、豊前市の吉木遺跡（註18）や中村・石丸遺跡（註19）等が上げられる。これらは縄文後期（鐘崎式～三万田式）の遺跡が大半で、縄文早期の遺物を出土する遺跡は吉木・土佐井・松丸の3遺跡に限られ、中でもある程度の纏まった遺物の出土は吉木遺跡だけと極めて少ない。遺跡の立地を見ると、この築城町・豊津町から大平村にかけては沖積平野が少なく、英彦山方面から派生する舌状の丘陵が八手状に伸び、それらの丘陵の間に流れる川に沿って細長い谷が発達する地域で、縄文後期の遺跡の多くはこの谷川の近くに立地する。ところが縄文早期の吉木遺跡だけは比較的開けた平野部の中でも標高12mとやや低いところに位置し、縄文後期の遺跡と異なった立地を見せる。さて陥し穴が検出された各遺跡の立地をみると、安武・土井の内遺跡や徳永・川の上遺跡はいずれも河岸段丘上に、広末・安永遺跡は低丘陵上に立地し、他の縄文時代遺跡とは立地が異なる傾向にある。縄文後期遺跡はともかくとして、おそらくこれら陥し穴の所属時期に相当する縄文早期の遺跡はこの周辺で未だ確認されていない。つまり、少なくともこの地域の河岸段丘上や低丘陵上には縄文時代を通じて集落等が築かれる生活の場ではなく、特に縄文早期に関しては集落とは隔絶した狩猟の場であったと考えられる。それでは縄文早期の集落はどこに立地していたのであろうか。この地域の谷川沿いには縄文後期の集落ばかりで、早期遺跡はほとんど見られない。すると吉木遺跡のように比較的開けた平野部に立地する可能性が考えられ、今後そういった平野部での縄文早期遺跡の確認が予想されるのである。いずれにせよ冒頭でも述べたように、陥し穴研究は現在遺構論から生業論や社会論の段階に進みつつあり、集落との関係を追及しなければ意味のない状況にある。それ故京築地域においても、今後縄文早期集落の存在を想定しつつ、その中で陥し穴を位置づけていかなければならないであろう。

さてここで、今一度「陥し穴」について考えてみたい。全国的に見た場合、陥し穴は縄文草創期から晩期まで連綿と続くが、関東では縄文早期後半から前期に、東北・北海道では縄文中期から後期にそれぞれタイプの異なった陥し穴が盛行し、陥し穴を利用した狩猟の流行の差がみられるだけでなく、狩猟方法自体に違いがあるという。富永は九州の陥し穴は縄文早期が主体で前期まで若干残るとする。形態的にも「九州型おとし穴」という「底面の長さが約1m前後、幅が60～65cm、深さ70～80cm」が約8割を占め、九州で最も特徴的なタイプという。関東や東北・北海道と比較した場合、「九州型おとし穴」には狩猟方法においてそれらと何らかの違いが存在するのであろうか。ところで縄文前期という時代は、日本列島全体はもちろん九州においても激動の時代である。アカホヤ火山灰降下以降、西日本一帯に広域な分布と交流を示す轟B式土器文化が盛行するが、それもやがて曾畑式期は朝鮮半島との交流が急激に盛んにな

り新種の石器や骨角器が出現する一方で、今のところ近畿・瀬戸内地域との交流がもう一つはつきりとしないう時期でもある。この曾畑式期頃に九州では陥し穴の一つの流行が終焉していくが、このことから前期を迎えるに当たって狩猟方法に大きな変化が起きたと考えるのが妥当であろう。貝塚や新種漁撈具の出現と増加により、生業全体の中で漁撈の占めるウェートが大きくなったのも、陥し穴の激減に関係するものかもしれない。しかし、長崎県の伊木力遺跡では曾畑式期のシカやイノシシ等の獣骨が多量に検出されており(註20)、この時期においても狩猟は確実にこなわれていたことを示している。つまり九州縄文前期の陥し穴の激減には、やはり狩猟方法の変化が関係していたようである。もっともこの変化が何に起因するものか現時点では明確ではないが、気候変動による植性や狩猟圧による動物生態系の変化等も当然関係していたと考えられよう。

縄文時代の研究において、陥し穴の持つ意義は大きい。形態の違いは狩猟方法の違いにある程度関連するもので、狩猟方法の違いは地理的環境や対象物の違い等に起因するものである。陥し穴を利用した狩猟自体は一年中行なわれるものではなく、最もそれが効率的でしかも他の生業活動とのバランスがうまくとれる季節に行なわれるのである。そして立地については、周辺地域の地理的環境を考慮に入れることはもちろん、人間が居住する集落、植物質食物のアク抜きや貯蔵を行なう作業場としての低湿地、ゴミ捨て場の貝塚、死者を埋葬する墓地等との位置関係を明確にすることで、特定の集落が持つ生活領域の線引きを可能にするだけでなく、生活システム全般が次第に明確になっていくのである。このように陥し穴の持つ意義を十分に理解しながら、今後さらなる認識を持って注意を払わなければならない。

(2) 弥生・古墳時代について

本遺跡において弥生時代の遺構は2本柱の3号竪穴住居跡だけで、他には柱穴すら確認されていない。遺存状態が極めて良好な弥生後期後半の住居跡であるが、安武・深田遺跡でもこの時期の遺構や遺物は確認されていない。

古墳時代の竪穴住居跡は住居跡らしくない5号竪穴住居跡を含めて9軒確認されたが、いずれも方形プランで6世紀後半代に属し、大きな時期差は窺えず、また竪穴住居跡どうしが切り合うこともない。やや大きい2号とやや小さい7号竪穴住居跡以外は、一辺4.5m程度で面積20㎡前後の規模を有する。カマドは概ね北西方向の壁中央部に付設され、出入口と考えられる施設(カマド対面の粘土)は1・4号竪穴住居跡に見られる。

掘立柱建物跡は6棟検出されたが間数はまちまちで、したがってその規模も4.1㎡から29.5㎡と幅が広い。桁行方位は北東か北西で、建物自体は全体的にほぼ同じ方向を向いている。4・6号掘立柱建物跡から出土した数少ない遺物と竪穴住居跡とは切り合わないという事実から考えて、これからの掘立柱建物跡は6世紀後半代に所属するものと考えられる。

表 1 古墳時代竪穴住居跡一覧表

No.	プラン	支柱穴	辺 長	面積(m ²)	カマド	出入口施設	出 土 遺 物	時 期	切り合い関係
1	正方形	4	4.6×4.2	18.1	北西	粘土	手捏ね	6世紀中葉～後半	住1→土壌2
2	方形	4	5.6×(6.0)	(32.8)	北西	*	*	6世紀中葉～後半	土壌29・30→住2
4	正方形	4	4.8×4.5	(21.2)	西	*	タコ壺	6世紀中葉～後半	住4→土壌5・溝1
5	台形	*	5.2×4.0	22	*	*	*	6世紀中葉～後半	*
6	正方形	4	4.3×4.3	(18.5)	北北東	*	砥石	6世紀中葉～後半	*
7	方形	*	3.4×(3.2)	(11.6)	北東	*	*	6世紀中葉～後半	土壌27→住7
8	長方形	4	4.4×3.4	14.6	北北西	*	*	6世紀中葉～後半	土壌28→住8
9	長方形	4	5.2×(4.4)	(22.1)	北西	*	*	6世紀中葉～後半	*
10	台形	4	4.5×4.3	17.2	西	*	*	6世紀中葉～後半	土壌3→住10

表 2 掘立柱建物跡一覧表

No.	間数	梁行×桁行	面積(m ²)	桁行方位	時 期	切り合い関係
1	1×1間	2.00×2.35	4.1	N-33°-E	古墳時代後期以降	*
2	2×2間	3.50×3.95	13.6	N-35°-E	6世紀中葉～後半	*
3	2×4間	3.75×7.75	29.5	N-32°-E	古墳時代後期以降	*
4	2×2間	2.05×2.15	4.2	N-35°-W	古墳時代後期以降	*
5	2×2間	3.30×3.80	12.3	N-39°-E	古墳時代後期以降	*
6	1×3間	4.80×7.80	35.7	N-42°-W	古墳時代後期以降	*

土壌は1・3号が6世紀後半代で、2号が7世紀代とやや新しいが、性格的にはいずれも不明である。4・5号土壌については時期・性格とも不明であるが、構造的な類似から同時期の所産であろう。この他に溝が2条検出されているが、いずれも近世以降のものである。

(水ノ江)

- 註1 「黒水遺跡」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 1』 大分県教育委員会 1989
- 註2 小田和利編「広末・安永遺跡」『一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告 5』 福岡県教育委員会 1991
- 註3 福岡県教育委員会にて現在整理作業中
- 註4 宮坂英之・宮坂虎次編「蓼科一城之平竪穴群遺構遺跡」『尖石考古博物館研究報告書 2』 1966
- 註5 今村啓爾「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化27』 1976
- 註6 今村啓爾「陥穴」『縄文文化の研究2』 雄山閣 1983
- 註7 今村啓爾「土坑性格論」『論争・学説日本の考古学2』 雄山閣 1988
- 註8 佐藤宏之「陥し穴猟と縄文時代の狩猟社会—考古学と民族誌」『渡辺仁先生古稀記念論文集』 1989
- 註9 佐々木隆彦編「下原遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 2』 福岡県教育委員会 1983
- 註10 富永直樹「第3節 九州のおとし穴遺構について」『安武地区遺跡群II』 久留米市教育委員会 1989
- 註11 末永弥義編「豊前国府および節丸西遺跡」 豊津町教育委員会 1990
- 註12 現在築城町教育委員会にて整理作業中
- 註13 現在福岡県教育委員会にて整理作業中
- 註14 高橋 章編「石町遺跡」椎田町教育委員会 1988
- 註15 小池史哲編「原井三ツ江遺跡」大平村教育委員会 1989
- 註16 高橋 章編「土佐井地区遺跡」大平村教育委員会 1990
- 註17 渡辺正気「福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告」『古文化談叢11』 1983
- 註18 高橋 章編「吉木遺跡」福岡県教育委員会 1989
- 註19 現在福岡県教育委員会にて整理作業中
- 註20 松藤和人編「伊木力遺跡」多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室 1990

V 第5地点の調査

1. 調査の概要 (第1図)

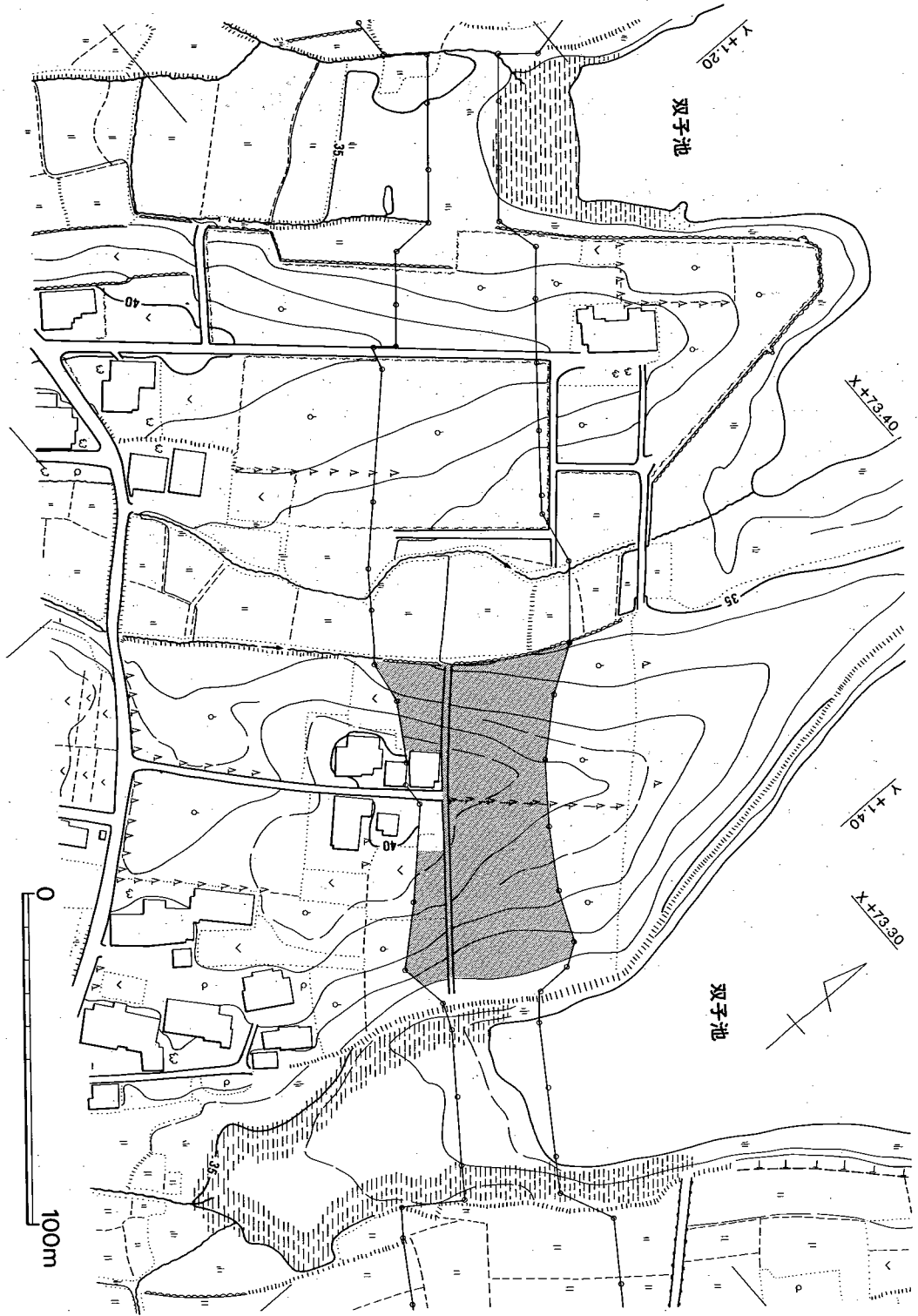
遺跡は築上郡築城町大字安武1287-7~10に所在する。農業用ため池である双子池に舌状に突き出した洪積台地上に立地する東側についてのみ調査した。双子池の西北端には築城海洋センターが開設され、ヨット・カヌー等の練習風景が見られる。この施設建設にあたっては文化財サイドとの連絡不足のため弥生時代を主体とする遺跡が調査されずに消滅している。また、同台地の西側でもバイパス工事中に住居跡・貯蔵穴が確認されており、残された箇所にも弥生時代の遺構の存在が予想された。

遺跡は幅100mほどの狭い台地の北端にあたり、中央部の標高は40m。東西へはそれぞれ緩く傾斜し、双子池へと達する。重機にて表土を除去したところ、すぐに赤褐色の風化土が全面に拡がり、台地が大きく削平されている事が判明した。遺構は予想に反してほとんど存在せず、中央部から西側に時期不詳の土壙と柱穴が検出されたのみで、1ヶ月ほどの短期間で調査を終了した。

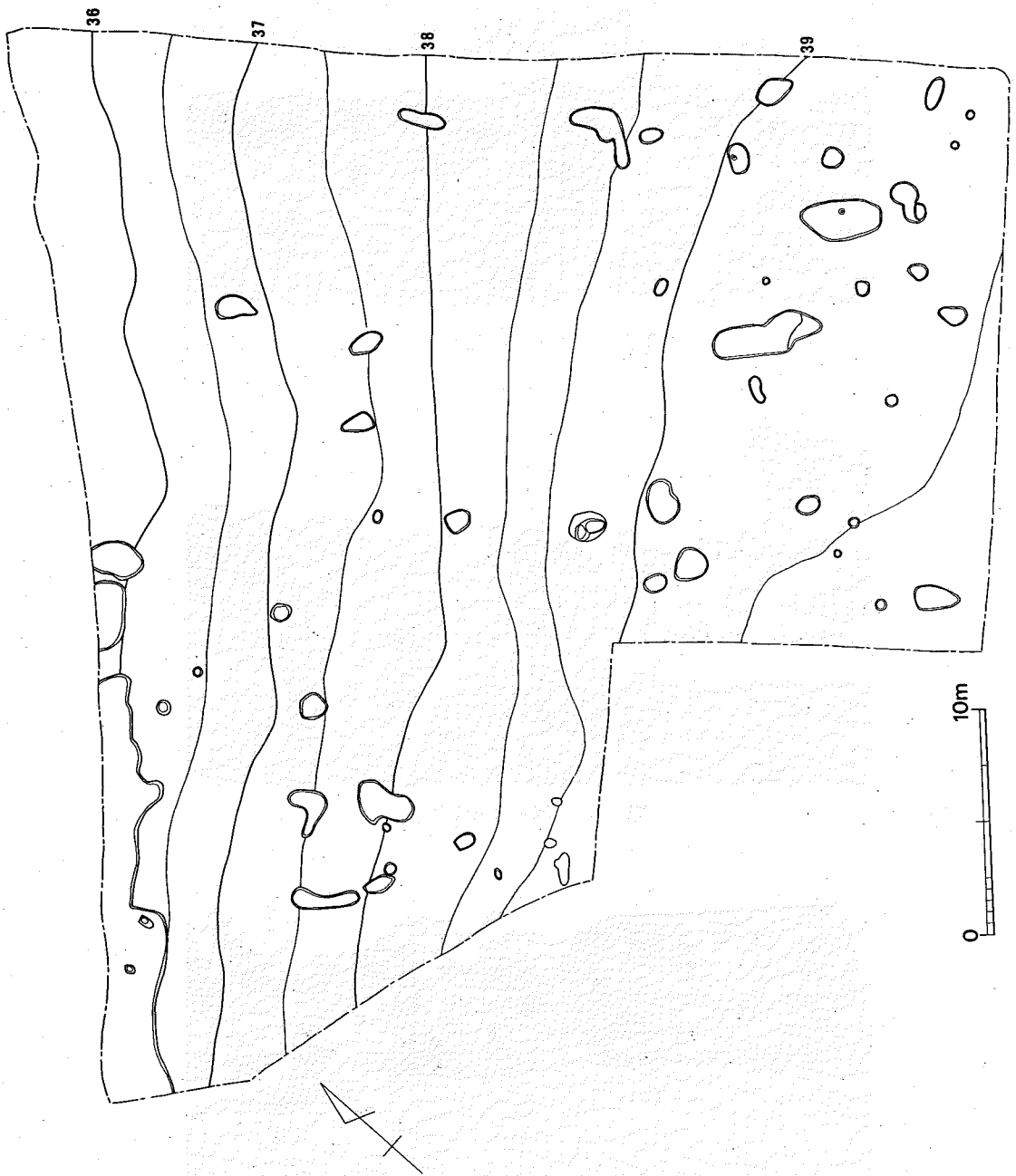
2. 遺構と遺物 (第2図)

検出した遺構は、土壙・柱穴である。土壙としたものは1~3mの長円形を呈し、浅いU字状の掘り込みで、両者とも赤褐色風化土壌の地山内に灰褐色のフワフワした覆土を持つ。遺物は皆無で時期は不詳。調査した感触ではそう古い時期のものではないと考えられる。

予想に反して、住居跡等の遺構はまったく存在しなかったが、当台地上が大きく削平を受けている事が予想され、その段階で消滅したのであろう。



第 1 图 遗址附近地形图 (1/2,000)



第 2 図 遺構全体図 (1/300)



第 3 図 双子池から遺跡をのぞむ



第 4 図 調査区東側全景



第 5 図 調査区西側全景

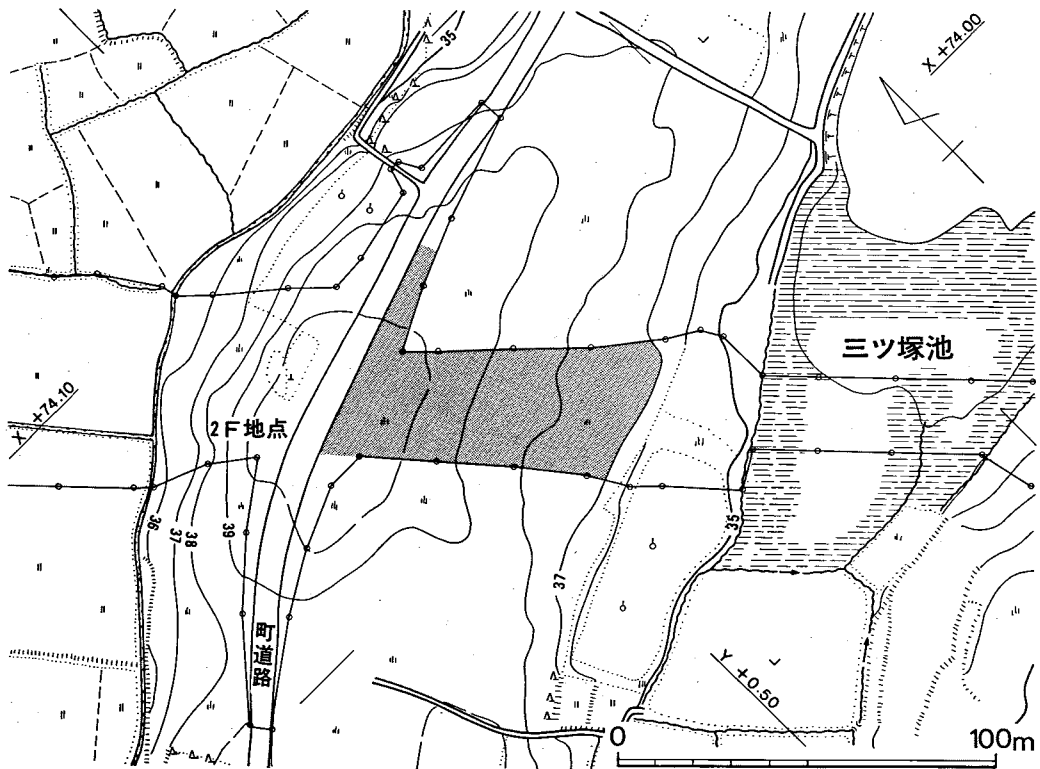
VI 第3地点の調査

1. 調査の概要 (第1図)

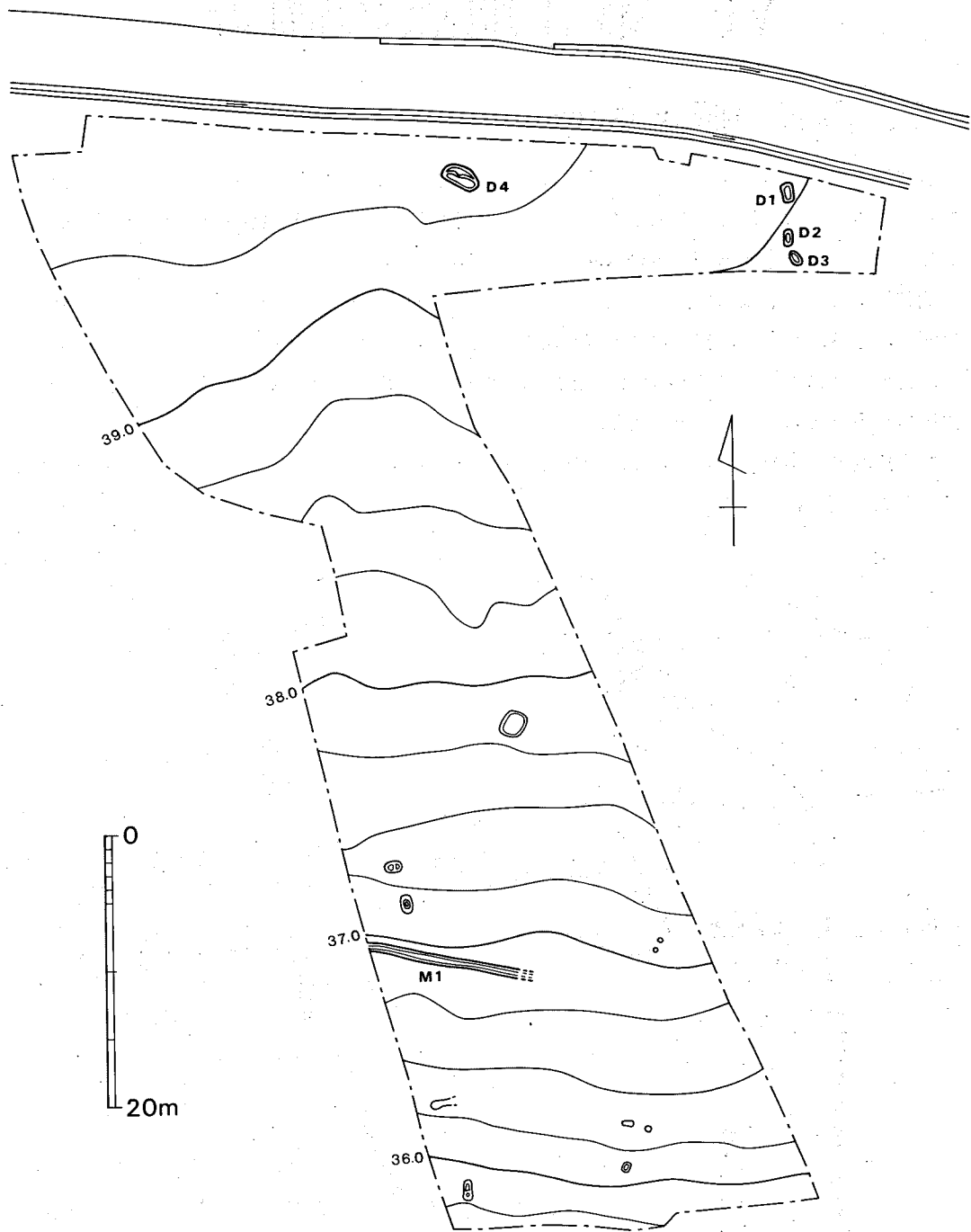
遺跡は豊津町と町道を挟んで接する築城町大字船迫^{みなさこ}371-2番地に所在する。地目は原野となっているが、牧草地として活用されている。豊津町側は第2-F地点(カワラケ田遺跡)として、第3集に報告するが、本来は同じ台地上の遺跡である。

遺跡は築城町の北東に位置し、英彦山^{ひこ}から周防灘に向って延びる山地の末端にあたる。周辺は開析が進み、小さく、狭い台地と谷が南西~北東の方向で延びている。その一つに立地するが、台地の幅はわずかに100mほどに過ぎず、東側では湿地帯となっている。標高は約39.5m、西側の水田面との比高は5mを測る。

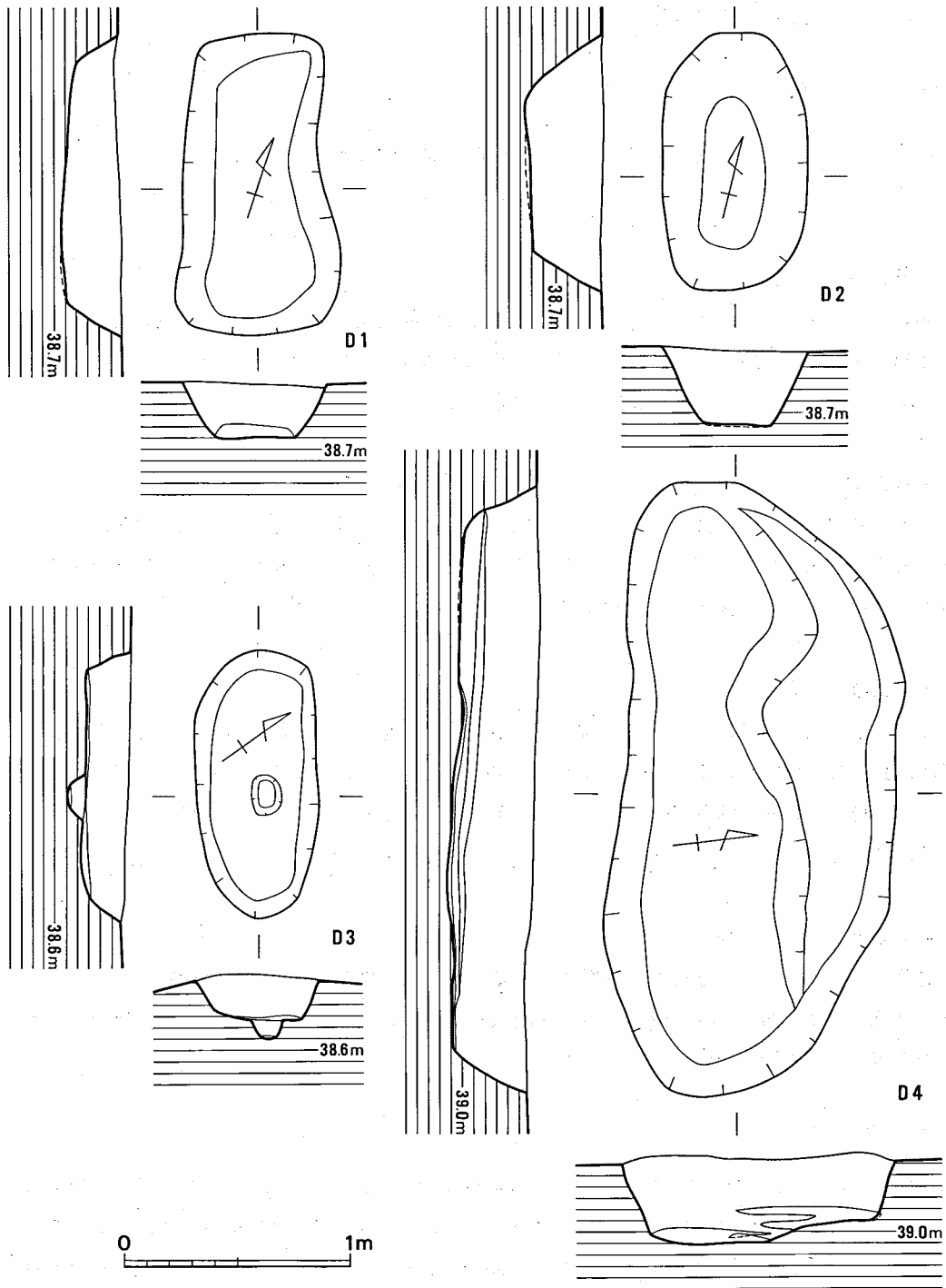
町道拡幅部と本線部分について調査を実施したが、わずかに土壌4・溝1・柱穴を検出したのみで短期間で終了した。



第1図 遺跡付近地形図 (1/2,000)



第 2 図 遺構配置図 (1/500)



第 3 图 1~4 号土坑实测图 (1/30)

2. 遺構と遺物

(1) 土 壙

調査区の最高所に近い北東部に1～3号土壙が南北方向に並び、北側中央部に4号土壙が位置する。

1号土壙 (第3図)

調査区の北東端に位置する。主軸をほぼ南北に持つ隅丸長方形のプランで、長軸1.32m、中央部幅0.6m、最大幅0.75m、深さ20～25cmと南にやや深い素掘りの土壙である。底面はほぼ平坦で幅35～45cmとこれも南側に広い。遺物は出土していない。

2号土壙 (第3図)

1・3号間に位置する長円形プランの小振りの土壙で、主軸を1号土壙と同様にほぼ南北方向にとる。長軸1.15m、短軸0.65m、深さ35cmを測り、底面は東にやや深くなるがほぼ平坦。覆土は淡褐色土で固く締まる。遺物は出土していない。

3号土壙 (第3図)

3基のうち最も南側に位置し、主軸を1・2号土壙に比べて西に偏らせる。2号土壙に比べて幅が狭い長円形プランで、長軸1.17m、短軸0.53m、深さ18cmを測る。底面はほぼ平坦で、中央部に径17×13cm、深さ10cm弱の浅い円形掘り込みがある。覆土は2号土壙と同様に淡褐色土であり、遺物も出土していない。

4号土壙 (第3・4図)

北側に膨らみ、テラスを持つ2段掘りの土壙で、長円形プランを呈す。長軸2.7m、短軸1.2m、テラスの深さ25～30cmと西に浅い。底面はわずかにU字形をなすが、東西方向はほぼ平坦。この土壙も出土遺物がない。

(2) 溝

遺跡の南緩斜面、遺構検出面の37.00mの等高線に沿って、東西方向に11mほど延び、以東は攪乱され不明。断面U字形で、深さ8～19cmと東へ深くなる。覆土は黒褐色土で、内より7世紀後半代の須恵器坏蓋(浅い返りをもつ口縁部小破片)が1点のみ出土したが、現在その所在が不明で図示できない。

(3) 柱 穴

南斜面に10数ヶ所の柱穴および不定形の落ち込みが存在するが、建物として纏まるものではない。出土遺物も皆無である。

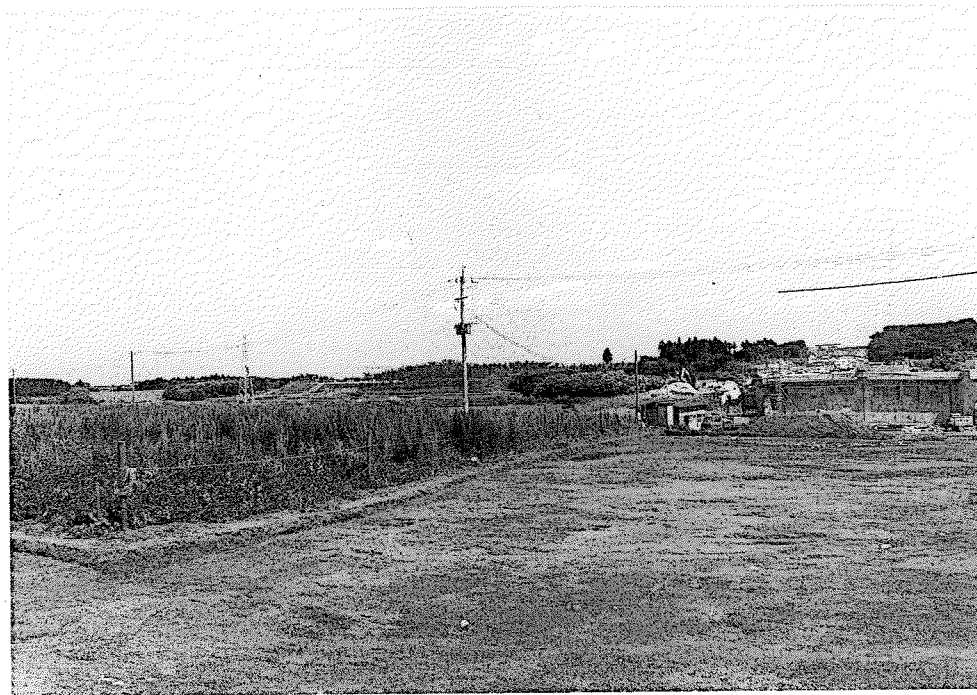
3. おわりに

第3地点の調査では辛じて1点のみ出土した須恵器から溝の時期が7世紀後半頃と判断できるのみで、土壙・柱穴等については不明である。そのうち1～3号土壙については、形態・底面がほぼ平坦をなし、3基が南北方向に並列する事を鑑みて、墓（土壙墓）の可能性はある。時期については出土遺物が無い現状ではまったく推定の域を出ないが、古墳時代終末期頃と考えておきたい。

(木下)



第 4 図 4号土塙と調査区北半全景



第 5 図 調査区南半全景

VII 自然科学系の調査

1. 安武・深田遺跡出土弥生・古墳期の 鉄片・鉄製品の金属学的調査

新日本製鉄 大澤正己

概要

弥生時代の中期末から古墳時代後期に属する安武・深田遺跡出土の鉄片・鉄製品8点を調査して次の事が判明した。

(1) 弥生時代中期末に比定される50号竪穴住居跡鍛冶炉内出土鉄片は、低炭素鋼と共にねずみ鑄鉄 (Gray Cast Iron) 片が存在する。該品は、脱炭により鍛鉄としたのか、滲炭剤としての素材に用いたのか興味深い鉄片である。この鉄片の製鉄原料は磁鉄鉱の可能性をもつ。

(2) 同じく50号住居跡出土であるが、上層の49号古墳時代住居跡からの混入品と考えられる刀子片は、含銅磁鉄鉱を示唆する成分系であった。鉄素材の産地が注目される。

1. いきさつ

安武・深田遺跡は、福岡県築上郡築城町大字安武に所在する。一般国道10号線椎田バイパスの建設に伴う文化財の事前調査の遺跡である。主なる遺構は竪穴住居跡 (弥生時代9軒、古墳時代71軒)、掘立柱建物跡32棟、土墳墓4基、甕棺墓1基等である。

当遺構のうち、弥生時代中期末に属する50号住居跡は、鍛冶炉を伴うもので、炉内付属ピット及び周辺から1mm角針状半製品から5~7mm板状品ら多数出土した。

鍛冶工房としては、列島内でも最古級である。同時期のものは他に、春日市所在の赤井手遺跡 (註1)、熊本県上益城郡所在双子塚遺跡 (註2) がある。

安武・深田遺跡出土の土器の多くは、西部瀬戸内地域との交流を示すもので周防灘に面した遺跡立地の特徴をよく表わすといわれている (註3)。

今回、弥生時代の鉄器生産の実態を把握する事を目的として、出土遺物の科学的調査を福岡県教育委員会より依頼された。

1990年4月に、50号竪穴住居跡鍛冶炉内出土鉄片6点の調査を行なったが、各供試材とも錆化が進行しており、鍛冶技術を十分に解明するまでの情報を得ることが出来なかった (註4)。

今回はその再トライである。

表 1 供試材の履歴と調査項目

符 号	試 料	出 土 位 置	推定年代	計 測 値		調 査 項 目	
				サイズ (mm)	重量(g)	顕微鏡組織	CMA調査
FK25	鉄 片	50号住居跡鍛冶炉内	弥生中期末	17×16×3	1.4	○	○
26	鉄 片	50号住居跡床面	"	16×27×2.5	3.3	○	○
				15×17×2.0	1.1		
				5×17×2.0	0.3		
27	刀子?	50号住居跡(混入品と考えられる)	古墳後期	15×14×3	2.5	○	○
28	鈍 片	52号住居跡	弥生中期末	7×10×2	0.2	○	○
29	不明鉄器	44号住居跡	弥生後期	9×28×3	2.4	○	○
30	鉄 鏃	13号住居跡	古墳後期	11×16×2	1.0	○	○

2. 調査方法

2-1 供試材

表1に示す。弥生時代の鉄片6点、古墳時代の鉄片2点の計8点の供試材である。

2-2 調査項目

(1) 肉眼観察

(2) 顕微鏡組織

各鉄片はベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150, #240, #320, #600, #1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの 3μ と 1μ で仕上げ、光学顕微鏡で観察した。

(3) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査

分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し、定性的な測定結果を得た後、標準試料とX線強度との対比から元素定量値を得ることができるコンピュータ内蔵の新鋭器機である。

旧式装置は、EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) と同、X線マイクロアナライザーとも呼んでいる。

3. 調査結果と考察

3-1 50号竪穴住居跡鍛冶炉内出土品

(1) FK25 鉄片

① 肉眼観察

表裏共に赤錆に覆われた三角形に近い不定形品。磁性は弱く有している。

② 顕微鏡組織

図版1に示す。①はねずみ鑄鉄 (Gray Cast Iron) である。金属鉄は酸化を受けているが、自然腐食 (Etching) を受けて片状の黒鉛 (Graphite) の析出した状態が観察された。

鑄鉄には、白鉄とねずみ鑄鉄とがある。白鉄には炭素がセメントイト (Cementite: Fe_3C) として存在し、ねずみ鑄鉄には黒鉛として認められる。その差の生ずる主な因子は、冷却速度と成分 (Si) である。冷却速度が早いときはセメントイトが多く、遅いと黒鉛を析出する。材質は白鉄は硬く、ねずみ鑄鉄は軟かい。

鉄鉄は、炭素 (C) を2%以上含有し、そのままでは硬くて鍛造は出来ない。鍛冶炉内で加熱し酸素の供給により炭素をCOガスとして除く脱炭作用により鍛鉄となる。FK25鉄片は、脱炭により鍛鉄とする素材だったのか、逆に、低炭素鋼に焼入効果を上げる滲炭剤としての素材だったのか興味を呼ぶところである。

顕微鏡の視野をかえると②③に示す組織となる。酸化鉄のゲーサイト (Goethite: $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$) 組織である。

③ CMA 調査

片状黒鉛析出部：図版3のSE (2次電子像) に示した片状黒鉛析出部を高速定性分析した (表2)。検出元素は、基地の鉄 (Fe) が5,489とCountされ、他に珪素 (Si) 860, カルシウム (Ca) 92である。該品は全体が酸化を受けて土壌からの汚染があり、珪素 (Si) もその影響を受けた可能性をもつが、黒鉛化のために少量添加されたものと考えられる。しかし、鉄中の不純物は少なく、純度の高い材質であった。

図版3の特性X線像は、高速定性分析結果を視覚化したものである。分析元素の存在は、白色輝点の集中で読みとる。炭素 (C) は、片状黒鉛に白色輝点が集中し、基地の鉄 (Fe) には認められない。逆に鉄 (Fe) では、基地全体に白色輝点は集中するが、片状黒鉛部は黒く抜けた状態となっている。鉄は酸化を受けているので、酸素 (O) は鉄基地全体から検出される。

素地鉄部：図版4のSE (2次電子像) の個所を分析した (表3)。SE写真中央に紡錘状の異物がある。非金属介在物 (鉄の製錬過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混じり物) と想定したが、単なる鉄の酸化模様であった。高速定性分析結果を表3に示す。検出元素は、素地鉄 (Fe) のCountが最も強く6,970を呈し、他は随伴微量元素で、チタン (Ti), マンガン (Mn) の含有から、鉄素材の製鉄原料は磁鉄鉱系が考えられる。

図版4の特性X線像では、鉄 (Fe) と酸素 (O) に白色輝点が集中して、他は微量である。SE (2次電子像) の紡錘状のところは鉄濃度が上って、酸素濃度は低い。SEの紡錘状個所は単なる鉄素地の腐食濃淡模様であった。

表 2 安武・深田遺跡出土鉄片 (FK-25) のねずみ鋳鉄部のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

POS. No. 3
 COMMENT : FK25-1
 ACCEL. VOLT. (KV): 15
 PROBE CURRENT: 5.010E-08 (A)
 STAGE POS.: X 40000 Y 40000 Z 11000
 16-FEB-91

CH (1) TAP		CH (2) PET		CH (3) LIF	
EL	WL COUNT INTENSITY (LOG)	EL	WL COUNT INTENSITY (LOG)	EL	WL COUNT INTENSITY (LOG)
Y -1	6.45 166 *****	TJ-k	2.75 94 *****	BI-1	1.14 57 *****+
RE-m	6.73 151 *****	BA-1	2.78 85 *****	PB-1	1.18 60 *****
SR-1	6.86 131 *****	CS-1	2.89 80 *****	TL-1	1.21 50 *****
W -m	6.98 133 *****	SC-k	3.03 70 *****	HG-1	1.24 50 *****
○SI-k	7.13 860 *****+++++	I -1	3.15 65 *****	AU-1	1.28 55 *****
TA-m	7.25 113 *****	TE-1	3.29 44 *****	PT-1	1.31 45 *****
RB-1	7.32 100 *****	○CA-k	3.36 92 *****+	IR-1	1.35 45 *****
HF-m	7.54 99 *****	SB-1	3.44 50 *****	OS-1	1.39 47 *****
LU-m	7.84 80 *****	SN-1	3.60 34 *****	ZN-k	1.44 43 *****+
YB-m	8.15 65 *****	K -k	3.74 46 *****	CU-k	1.54 35 *****
AL-k	8.34 64 *****	IN-1	3.77 34 *****	NI-k	1.66 24 *****
BR-1	8.37 56 *****	U -m	3.91 30 *****	TM-1	1.73 23 *****
ER-m	8.82 47 *****	CD-1	3.96 27 *****	CO-k	1.79 34 *****
SE-1	8.99 41 *****	TH-m	4.14 21 *****	○FE-k	1.94 5489 *****+++++
HO-m	9.20 35 *****	AG-1	4.15 23 *****	GD-1	2.05 12 *****
DY-m	9.59 29 *****	PD-1	4.37 18 *****	MN-k	2.10 17 *****
AS-1	9.67 36 *****+	RH-1	4.60 17 *****	EU-1	2.12 11 *****
MG-k	9.89 32 *****	CL-k	4.73 19 *****	SM-1	2.20 9 *****
TB-m	10.00 30 *****	RU-1	4.85 15 *****	CR-k	2.29 8 *****
GE-1	10.44 20 *****	S -k	5.37 12 *****	ND-1	2.37 9 *****
GA-1	11.29 18 *****+	MO-1	5.41 7 *****	PR-1	2.46 7 *****
NA-k	11.91 15 *****	NB-1	5.72 8 *****	V -k	2.50 8 *****+
**	14.72 7 *****	ZR-1	6.07 6 *****	CE-1	2.56 6 *****
F -k	18.32 4 *****	P -k	6.16 30 *****+	LA-1	2.67 4 *****

RESULTS:
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 SI CA FE ← 検出元素
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
 図版3のSE (2次電子像) に示す片状黒鉛析出部の分析である。検出元素は素地の鉄 (Fe) で強度 (Count) は5489を有し、他に珪素 (Si) 860, カルシウム (Ca) 92の順となる。不純物の少ない純度の高い鉄である。珪素 (Si) は鋳鉄の軟化をはかるため添加された可能性もあるが、酸化された鉄は土壌からの汚染もありうる。カルシウム (Ca) も汚染から濃化する。該品は珪素 (Si) を添加されているとみてよからう。

表 3 安武・深田遺跡出土鉄片 (FK25-2) 鉄素地のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果

EL	TAP		CH (1)		CH (2)		CH (3)		LIF	
	WL COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL COUNT	EL	WL COUNT	EL	WL COUNT		
Y -1	6.45	186	OTI-k	2.75	109	*****	OTI-k	2.75	109	*****
RE-m	6.73	150	BA-1	2.78	86	*****	BA-1	2.78	86	*****
SR-1	6.86	141	CS-1	2.89	83	*****+	CS-1	2.89	83	*****+
W -m	6.98	142	SC-k	3.03	76	*****	SC-k	3.03	76	*****
OSI-k	7.13	522	I -1	3.15	56	*****	I -1	3.15	56	*****
TA-m	7.25	114	TE-1	3.29	56	*****	TE-1	3.29	56	*****
RB-1	7.32	113	CA-k	3.36	75	*****	CA-k	3.36	75	*****
HF-m	7.54	99	SB-1	3.44	50	*****	SB-1	3.44	50	*****
LU-m	7.84	82	SN-1	3.60	45	*****	SN-1	3.60	45	*****
YB-m	8.15	66	K -k	3.74	45	*****	K -k	3.74	45	*****
oAL-k	8.34	126	IN-1	3.77	44	*****	IN-1	3.77	44	*****
BR-1	8.37	63	U -m	3.91	28	*****	U -m	3.91	28	*****
ER-m	8.82	54	CD-1	3.96	38	*****	CD-1	3.96	38	*****
SE-1	8.99	43	TH-m	4.14	26	*****	TH-m	4.14	26	*****
HO-m	9.20	44	AG-1	4.15	29	*****	AG-1	4.15	29	*****
DY-m	9.59	37	PD-1	4.37	20	*****	PD-1	4.37	20	*****
AS-1	9.67	35	RH-1	4.60	22	*****	RH-1	4.60	22	*****
oMG-k	9.89	100	CL-k	4.73	18	*****	CL-k	4.73	18	*****
TB-m	10.00	27	RU-1	4.85	11	*****	RU-1	4.85	11	*****
GE-1	10.44	24	S -k	5.37	19	*****	S -k	5.37	19	*****
GA-1	11.29	18	MO-1	5.41	9	*****	MO-1	5.41	9	*****
NA-k	11.91	13	NB-1	5.72	9	*****	NB-1	5.72	9	*****
**	14.72	9	ZR-1	6.07	7	*****	ZR-1	6.07	7	*****
F -k	18.32	7	P -k	6.16	11	*****	P -k	6.16	11	*****

RESULTS:
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 MG AL SI TI MN FE ← 検出元素
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
 S K CA

図版 4 の SE (2 次電子像) に示す素地鉄の分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。鉄 (Fe) 6970, 珪素 (Si) 522, アルミ (Al) 126, チタン (Ti) 109, マグネシウム (Mg) 100, マンガン (Mn) 27 となる。随伴微量元素として、微量のガラス質成分の珪素 (Si), アルミ (Al), マグネシウム (Mg) と共にチタン (Ti), マンガン (Mn) が存在する。磁鉄鉱を原料とする鉄素材と考えられる。

表 4 安武・深田遺跡出土刀子片 (FK27) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

POS. No. 4
 COMMENT : FK27-1
 ACCEL. VOLT. (KV): 15
 PROBE CURRENT : 4.998E-08 (A)
 STAGE POS : X 4000 Y 4000 Z .11000
 18-FEB-91

CH (1) TAP		CH (2) PET		CH (3) LIP	
EL	WL COUNT	EL	WL COUNT	EL	WL COUNT
Y -1	6.45 216	TJ-k	2.75 110	B1-1	1.14 63
RE-m	6.73 167	BA-1	2.78 93	PB-1	1.18 70
SR-1	6.86 149	CS-1	2.89 94	TL-1	1.21 67
W -m	6.98 153	SC-k	3.03 76	HG-1	1.24 64
OSI-k	7.13 324	I -1	3.15 69	AU-1	1.28 62
TA-m	7.25 130	TE-1	3.29 61	PT-1	1.31 65
RB-1	7.32 120	CA-k	3.36 60	IR-1	1.35 60
HF-m	7.54 99	SB-1	3.44 56	OS-1	1.39 66
LU-m	7.84 90	SN-1	3.60 50	ZN-k	1.44 49
YB-m	8.15 68	K -k	3.74 47	OCU-k	1.54 64
AL-k	8.34 107	IN-1	3.77 39	NI-k	1.66 32
BR-1	8.37 72	U -m	3.91 35	TM-1	1.73 31
ER-m	8.82 43	CD-1	3.96 34	CO-k	1.79 35
SE-1	8.99 51	TH-m	4.14 32	FE-k	1.94 7373
HO-m	9.20 46	AG-1	4.15 30	GD-1	2.05 15
DY-m	9.59 38	PD-1	4.37 23	MN-k	2.10 16
AS-1	9.67 39	RH-1	4.60 23	EU-1	2.12 17
MG-k	9.89 34	CL-k	4.73 26	SM-1	2.20 13
TB-m	10.00 29	RU-1	4.85 15	CR-k	2.29 11
GE-1	10.44 21	RS -k	5.37 22	ND-1	2.37 10
GA-1	11.29 18	MO-1	5.41 10	PR-1	2.46 8
NA-k	11.91 15	NB-1	5.72 8	V -k	2.50 3
**	14.72 8	ZR-1	6.07 7	CE-1	2.56 6
F -k	18.32 8	AP -k	6.16 12	LA-1	2.67 5

RESULTS:
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 AL SI PE CU ← 検出元素
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
 P S
 図版5のSE(2次電子像)に示した鉄素地部の分析結果である。検出元素を強度(Count)順に並べると次の様になる。鉄(Fe)7373, 珪素(Si)324, アルミ(Al)107, 銅(Cu)64, 硫黄(S)15, 燐(P)12となる。鉄中に銅(Cu)を含有するところから製鉄原料は含銅磁鉄鉱が想定できる。

表 5 安武・深田遺跡出土鉄鏝中 (FK30) 非金屬介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果

POS. No. 12		COMMENT : FK30-2		ACCEL. VOLT. (KV): 15		PROBE CURRENT: 5.000E-08 (A)		STAGE POS.: X 40000 Y 40000 Z 11000		19-FEB-91	
CH (1) TAP		CH (2) PET		CH (3) LIF							
EL	WL COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL COUNT	INTENSITY (LOG)
Y -1	6.45	175	○ TI -k	2.75	161	BI -1	1.14	53	BI -1	1.14	53
RE-m	6.73	186	BA -1	2.78	92	PB -1	1.18	51	PB -1	1.18	51
SR -1	6.86	151	CS -1	2.89	86	TL -1	1.21	59	TL -1	1.21	59
W -m	6.98	154	SC -k	3.03	68	HG -1	1.24	47	HG -1	1.24	47
○ S1 -k	7.13	4992	I -1	3.15	56	AU -1	1.28	52	AU -1	1.28	52
TA-m	7.25	143	TE -1	3.29	52	PT -1	1.31	45	PT -1	1.31	45
RB -1	7.32	124	○ CA -k	3.36	389	IR -1	1.35	52	IR -1	1.35	52
HF-m	7.54	93	SB -1	3.44	60	OS -1	1.39	52	OS -1	1.39	52
LU-m	7.84	93	SN -1	3.60	39	ZN -k	1.44	48	ZN -k	1.44	48
YB-m	8.15	79	○ K -k	3.74	103	△ CU -k	1.54	52	△ CU -k	1.54	52
○ AL -k	8.34	1985	IN -1	3.77	36	△ NI -k	1.66	41	△ NI -k	1.66	41
BR -1	8.37	273	U -m	3.91	32	TM -1	1.73	25	TM -1	1.73	25
ER-m	8.82	50	CD -1	3.96	30	CO -k	1.79	29	CO -k	1.79	29
SE -1	8.99	40	TH -m	4.14	34	○ FE -k	1.94	5725	○ FE -k	1.94	5725
HO-m	9.20	44	AG -1	4.15	23	GD -1	2.05	19	GD -1	2.05	19
DY-m	9.59	31	PD -1	4.37	18	OMN -k	2.10	25	OMN -k	2.10	25
AS -1	9.67	38	RH -1	4.60	23	EU -1	2.12	18	EU -1	2.12	18
○ MG -k	9.89	259	CL -k	4.73	18	SM -1	2.20	11	SM -1	2.20	11
TB-m	10.00	26	RU -1	4.85	16	CR -k	2.29	9	CR -k	2.29	9
GE -1	10.44	24	S -k	5.37	13	ND -1	2.37	9	ND -1	2.37	9
GA -1	11.29	18	MO -1	5.41	9	PR -1	2.46	5	PR -1	2.46	5
NA -k	11.91	18	NB -1	5.72	7	V -k	2.50	9	V -k	2.50	9
**	14.72	9	ZR -1	6.07	4	CE -1	2.56	4	CE -1	2.56	4
F -k	18.32	5	○ P -k	6.16	83	LA -1	2.67	6	LA -1	2.67	6

RESULTS:
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
 MG AL SI P K CA TI MN FE ← 検出元素
 NI CU SM EU
 THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT

図版 6 の SE (2 次電子像) の非金屬介在物の分析結果である。検出元素を強度 (Count) 順に並べると次の様になる。鉄 (Fe) 5725, 珪素 (Si) 4992, アルミ (Al) 1985, カルシウム (Ca) 389, マグネシウム (Mg) 259, チタン (Ti) 161, カリウム (K) 103, 燐 (P) 83, マンガン (Mn) 25 となる。又, 強度は 1 ランク落ちるが ニッケル (Ni), 銅 (Cu) の存在も認められた。製鉄原料は磁鉄鉱系が想定できた。

3-2 50号竪穴住居跡床面出土品

(1) FK26A, B, C 鉄片

① 肉眼観察

3片ともに赤褐色錆に覆われた不定形鉄片である。わずかに磁性をもつ。

② 顕微鏡組織

図版1の④⑤⑥に示す。いずれも組織は金属鉄の酸化したゲーサイト (Goethite: α -FeO·OH) である。鍛造での加工模様が認められるので鍛鉄に分類できる。

③ CMA調査

FK26A, FK26B, FK26Cの3試料は、高速定性分析結果は、鉄 (Fe) が主要元素で、他に珪素 (Si), アルミ (Al), カルシウム (Ca), マグネシウム (Mg) らである。素地鉄のみ情報であるのでデータは割愛した。

3-3 50号竪穴住居跡出土品 (但し49号古墳時代住居跡からの混入品)

(1) FK27 刀子?

① 肉眼観察

刀子の関部分の破片の可能性が有る。赤錆に覆われた酸化物。磁性は残す。

② 顕微鏡組織

図版2の①に示す。該品も鍛練模様を残す鉄酸化物に化している。組織はゲーサイト (Goethite: α -FeO·OH) となる。

③ CMA調査

図版5のSE (2次電子像) に示す鉄素地の分析結果である (表4)。検出元素は、鉄 (Fe), 珪素 (Si), アルミ (Al), 銅 (Cu), 硫黄 (S), 燐 (P) となる。通常の砂鉄系や磁鉄鉱系原料の鉄素材からは銅 (Cu) は検出されない。含銅磁鉄鉱特有の成分系の可能性が強い。

図版5には特性X線像を示す。銅 (Cu) は鉄素地全体に固溶している。鉄素材の産地は大陸側の可能性が考えられる。

3-4 52号竪穴住居跡出土品

(1) FK-28 鉈片

① 肉眼観察

鉈の破片である。酸化が激しく赤褐色錆に覆われている。磁性は有する。

② 顕微鏡組織

図版2の②に示す。これも酸化鉄のゲーサイト (Goethite: α -FeO·OH) となっている。鍛造品。

③ CMA調査

検出元素は鉄 (Fe) と珪素 (Si) である。詳細データは割愛した。

3-5 44号竪穴住居跡出土品

(1) FK-29 不明鉄器

① 肉眼観察

棒状を呈する不明鉄器である。これも酸化が激しく、芯部は空洞化している。

② 顕微鏡組織

図版2の③に示す。組織は、金属鉄の酸化したゲーサイト (Goethite: $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$) である。鍛造品。

③ CMA調査

高速定性分析では、鉄 (Fe)、珪素 (Si)、アルミ (Al) らの検出である。データは割愛する。

3-6 13号竪穴住居跡出土品

(1) FK-30 鉄鏃

① 肉眼観察

茎を欠損した鏃身部である。赤褐色の錆に覆われる。磁性は有する。

② 顕微鏡組織

図版2の④⑤⑥に示す。一見白色部は金属鉄の残留部と思われる個所が存在したので腐食液 (ピクルル及びナイトル) でエッチングしたが変化はなかった。金属鉄はなくなって酸化物である。時々遭遇する現象である。該品も鍛造品であった。

③ CMA調査

図版6のSE (2次電子像) に示す非金属介在物の分析結果である。表5に高速定性分析結果を示す。検出元素は強度 (Count) 順に並べると次の様になる。

鉄 (Fe)、珪素 (Si)、アルミ (Al)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg)、チタン (Ti)、カリウム (K)、燐 (P)、マンガン (Mn) となる。なお、強度としては1ランク落ちるが銅 (Cu) も検出されている。FK27の刀子でみられた含銅磁鉄鉱の可能性をもつ鉄素材と一脈通じるものがある。古墳時代の鉄素材の産地同定も重要研究課題の一つとなる。

図版6には、高速定性分析結果にもとづいて、特性X線像を示している。鉄 (Fe)、珪素 (Si)、アルミ (Al) までの強度の強いもののみ提示して、カルシウム (Ca) 以下のCountの少ない元素は割愛した。

ただし、非金属介在物は定量分析値を図版6に提示した。 $66.5\%\text{FeO}-17.8\%\text{SiO}_2-6.5\%\text{Al}_2\text{O}_3-2.1\%\text{P}_2\text{O}_5-1.9\%\text{MgO}-1.25\%\text{CaO}-0.27\%\text{TiO}_2$ の組成となる。磁鉄鉱系の成分値である。

4. ま と め

安武・深田遺跡出土の鉄片や鉄器片を調査して、次の点が明らかになった。

- (1) 50号竪穴住居跡は、弥生時代中期末の鍛冶工房跡である。鍛冶炉内とその周辺より多数の鉄片や半製品が出土した。

今回調査のFK25は、ねずみ鑄鉄片であった。磁鉄鉱を原料とする可能性をもつ。このねずみ鑄鉄の産地は、国産は否定されて大陸産と考えられる。大陸側は、韓半島より中国側に同定できそうである。

安武・深田遺跡の弥生時代中期末の住人達は、西瀬戸内系の土器を伴う集団であり、鍛冶技術の系譜も吉備方面との関連から追求する必要があると考えられる。

春日市所在の赤井手遺跡においても、弥生時代後期前半に属する5号土壙より出土した不明鉄器はねずみ鑄鉄（註5）だった。

弥生時代の鍛冶工房より出土する鑄鉄の位置づけが重要研究課題となってくる。左下げ（脱炭）で鍛鉄素材とするのか、滲炭用とするのか注目される。

- (2) 50号竪穴住居跡からは、今回の報告試料には載せていないが、1mm角の小型棒状鉄器が数多く検出されている。その用途について色々検討されているが、その可能性の一つとして管玉加工の穿孔用錐も挙げられる。

昨年の石川県埋蔵文化財保存協会調査（註6）による乾遺跡（松任市所在、弥生時代後期）玉造り工房跡より、管玉と1mm角鉄製品が共伴して検出され、鉄器調査を依頼されている。

- (3) 古墳時代の安武・深田遺跡出土鉄器は、弥生時代とは異なった成分系鉄素材が使用されている。銅（Cu）濃度の高い素材である。これも随伴微量元素のチタン（Ti）、燐（P）、硫黄（S）らを含育して磁鉄鉱の可能性をもつもので、産地同定が研究課題となってくる。
- (4) 弥生時代の鉄片や鉄器は、酸化が激しく材質や非金属介在物の解明が十分でなかった。再度調査を行なう予定である。

註1 春日市教育委員会「赤井手遺跡」『春日市文化財調査報告書 6』 1980

註2 熊本県教育委員会 島津義昭氏調査担当 報告書準備中

註3 福岡県教育委員会 椎田バイパス内遺跡資料

註4 大澤正己「九州横断自動車道・椎田バイパス内遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査」
福岡県教育委員会甘木発掘調査事務所提出資料 1990. 57

註5 大澤正己「古代鉄生産」『日本古代の鉄生産』（1987年度たたら研究会大会資料）たたら研究会 1987

註6 小嶋芳孝氏調査 SX01 E1 出土 針状鉄器と鍛冶滓共伴

2. 安武・深田遺跡出土木製遺物の樹種

琉球大学農学部 林 弘 也

安武・深田遺跡（福岡県築上郡築城町大字安武）は福岡県教育委員会により国道新設のために発掘調査された遺跡である。出土した木製遺物の年代同定、用途は、福岡県教育委員会の同定結果によると、木製遺物には時代の同定が明確でない物も含まれているが、時代が同定された遺物は弥生時代と奈良時代の遺物であった。出土した木製遺物の用途は農具が6点と最も多く、曲げ物、杓子など生活用具が4点、その他に田舟、建築用材が含まれていた。表1に木製遺物のリストを示した。用途の明らかな木製遺物13点について樹種を同定したので、結果を取りまとめた。

木材の切片は、先ず一辺が5～8mmの立方体を資料から切り出し、切り出したブロックをポリエチレングリコール#4000で包埋した。スライディングマイクロームを使用して、包埋ブロックから厚さ14～20 μ mの切片を採取し、水・グリセリン混合液で封入し、プレパラートを作製した。

木材の3断面のプレパラートを作製し、光学顕微鏡で木材組織を観察した。観察された木材の特徴に基づいて樹種を同定し、更に樹種が明らかである木材のプレパラートと対照して、樹種を決定した。

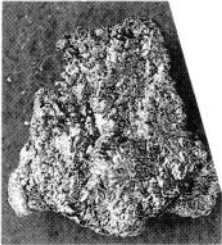


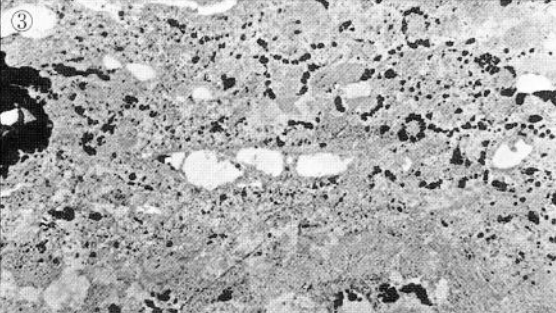
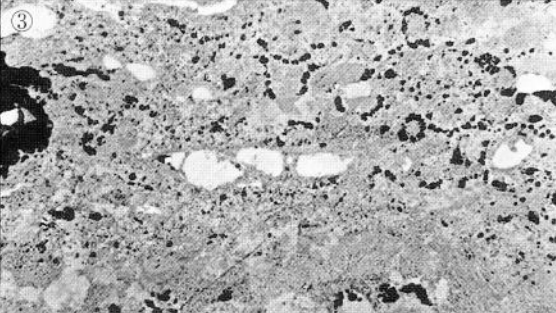



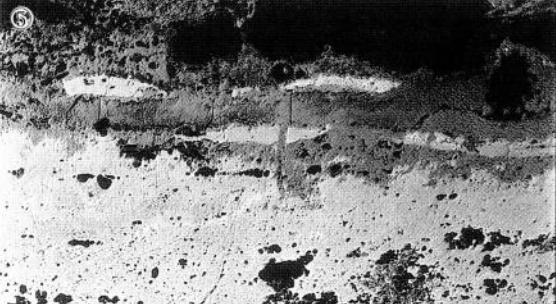
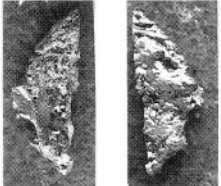
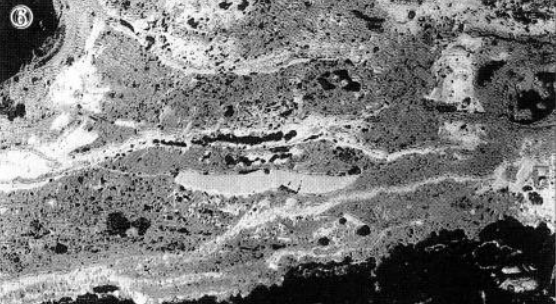
同定した樹種は、針葉樹材が1樹種2点と広葉樹材が9樹種11点であった。各資料の同定結果は表2に示し、木製遺物の光学顕微鏡によるプレパラートの写真はFig. 1～13に示した。利用された樹木は高木による樹種ばかりであり、広葉樹にはカシのように比較的硬く直径の大きい樹木が含まれており、かなり優れた加工工具が用いられたものと推定される。曲げ物に使用された材は針葉樹のヒノキ材である。ヒノキ材は比較的曲げ易い材であり、かつ耐水性が良い材として、現在でも曲げ物の材料に使用されている。奈良時代には既に適材として多用されていたことを伺わせる資料である。槌の子や杵のような物同士を打ちつける道具には広葉樹材の散孔材が使用されており、均質であり、緻密な組織構造を持つ材として利用されたのであろうと考えられる。

表 1 出土木製遺物

木器名	取り上げ番号	年 代
鍬	No.81 谷部26区	
鍬	No.83 谷部24区	
槌の子	No.5 槌の子群	奈良時代
槌の子	No.6 槌の子群	奈良時代
槌の子	No.10 槌の子群	奈良時代
曲げ物	木8 谷部	
曲げ物	No.1 11号土壙	奈良時代
板	板2 谷部	
杭	杭列 13	
杵	No.17 槌の子群	奈良時代
杓子	No.1 2号貯蔵穴	弥生時代
田舟	No.98 谷部22区	
扉	No.1 谷部36区	











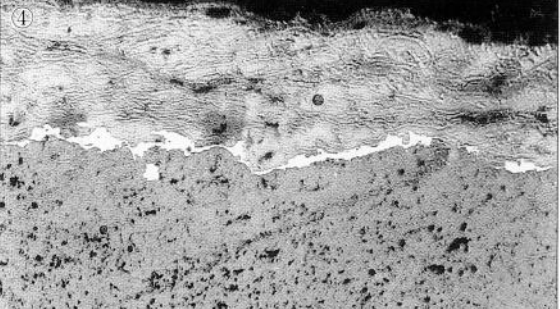


表 2 同 定 表

木器名	取り上げ番号	樹 種 名	写真番号
鍬	No.81 谷部26区	カ シ <i>Quercus</i> sp.	Fig. 1
鍬	No.83 谷部24区	カ シ <i>Quercus</i> sp.	Fig. 2
槌の子	No.5 槌の子群	ヤブツバキ <i>Camellia japonica</i>	Fig. 3
槌の子	No.6 槌の子群	リョウブ <i>Clethra barbinervis</i>	Fig. 4
槌の子	No.10 槌の子群	ツ ツ シ <i>Rhododendron</i> sp.	Fig. 5
曲げ物	木8 谷部	ヒ ノ キ <i>Chamaecyparis obtusa</i>	Fig. 6
曲げ物	No.1 11号土壙	ヒ ノ キ <i>Chamaecyparis obtusa</i>	Fig. 7
板	板2 谷部	チャンチンモドキ <i>Pouprtia fordii</i>	Fig. 8
杭	杭列 13	ユズリハ <i>Daphniphyllum</i> sp.	Fig. 9
杵	No.17 槌の子群	カ ツ ラ <i>Cercidiphyllum japonicum</i>	Fig. 10
杓子	No.1 2号貯蔵穴	クスノキ <i>Cinnamomum camphora</i>	Fig. 11
田舟	No.98 谷部22区	カ シ <i>Quercus</i> sp.	Fig. 12
扉	No.1 谷部36区	クスノキ <i>Cinnamomum camphora</i>	Fig. 13

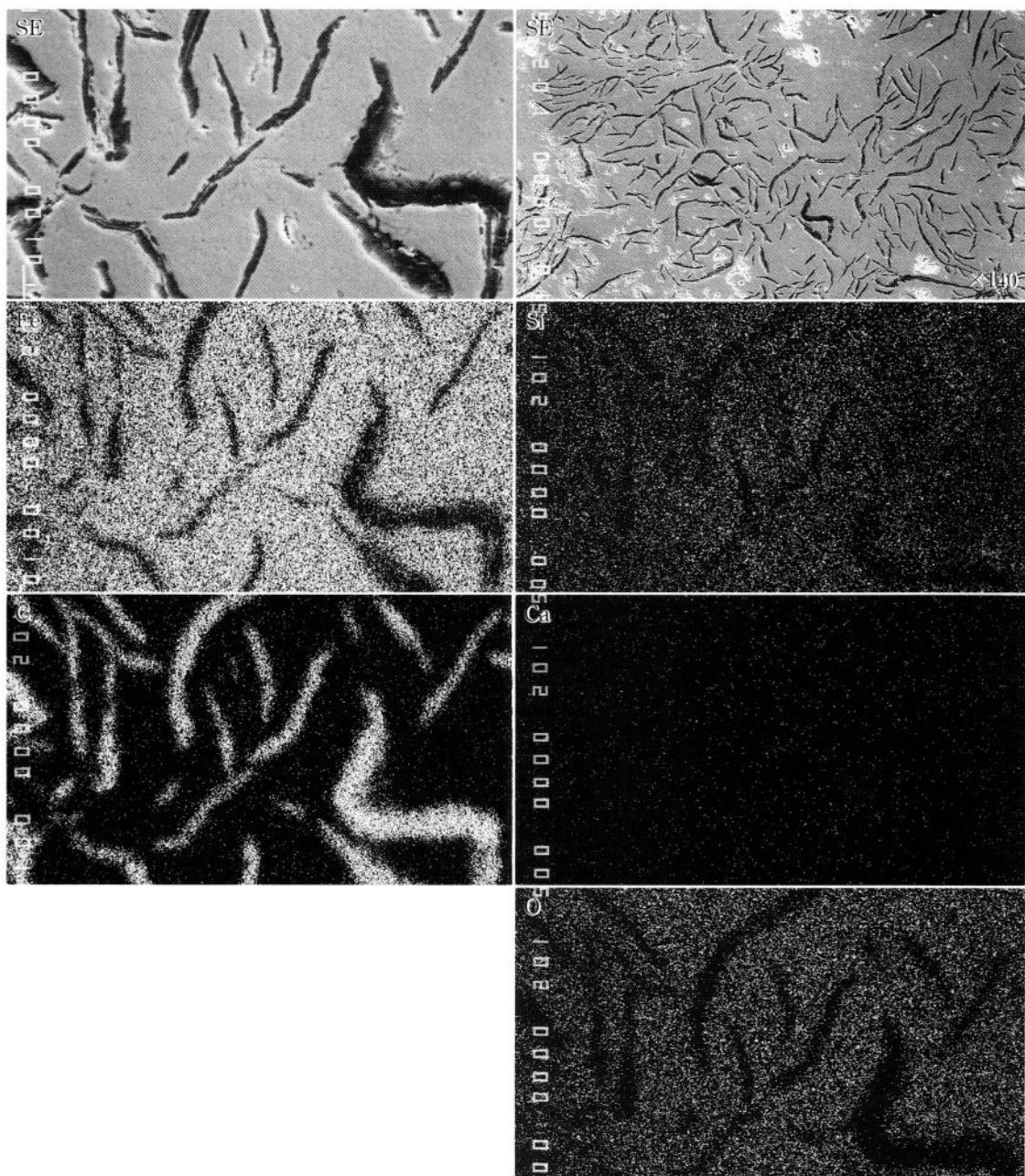
<p>(1) FK25 安武・深田遺跡 (50号住居跡製鉄址内出土) 鉄片 (酸化物)</p> <p>①ねずみ鉄 ×400</p> <p>② ×100</p> <p>③ ×400</p>	 <p>外観写真×1.7</p>	
		
<p>(2) FK26A 安武・深田遺跡 (50号住居跡床面出土) 鉄片 (酸化物) ×100 外観写真×1.7</p>		
<p>FK26B 同上</p>		
<p>FK26C 同上</p>		

鉄片の顕微鏡組織

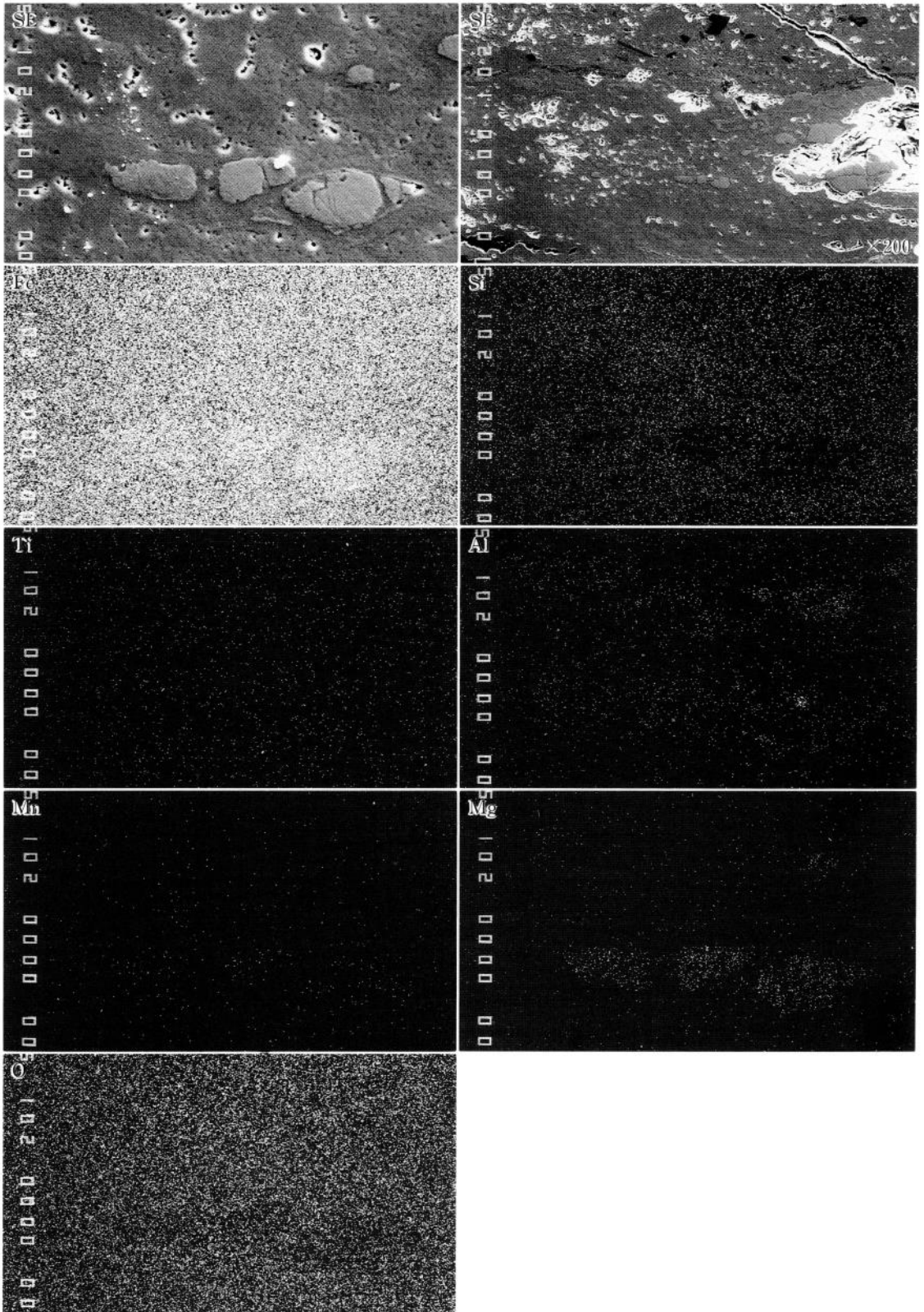
図版 2

<p>(3) FK27 安武・深田遺跡 (50号住居跡古墳 時代の混入品) 刀子片 ×100 外観写真×1.7</p>		
<p>(4) FK28 安武・深田遺跡 (52号住居跡出土) 鈍片 (酸化物) ×100 外観写真×1.7</p>	  <p>表側 裏側</p>	
<p>(5) FK29 安武・深田遺跡 (44号住居跡出土) 不明鉄器 ×100 外観写真×1.7</p>	 	
<p>(6) FK30 安武・深田遺跡 (13号住居跡出土) 鉄鏃 (酸化物)</p>	  <p>表側 裏側</p>	
<p>⑤ ×100</p>	<p>④ ×100</p> <p>⑥ ×400</p> <p>外観写真×1.7</p>	 

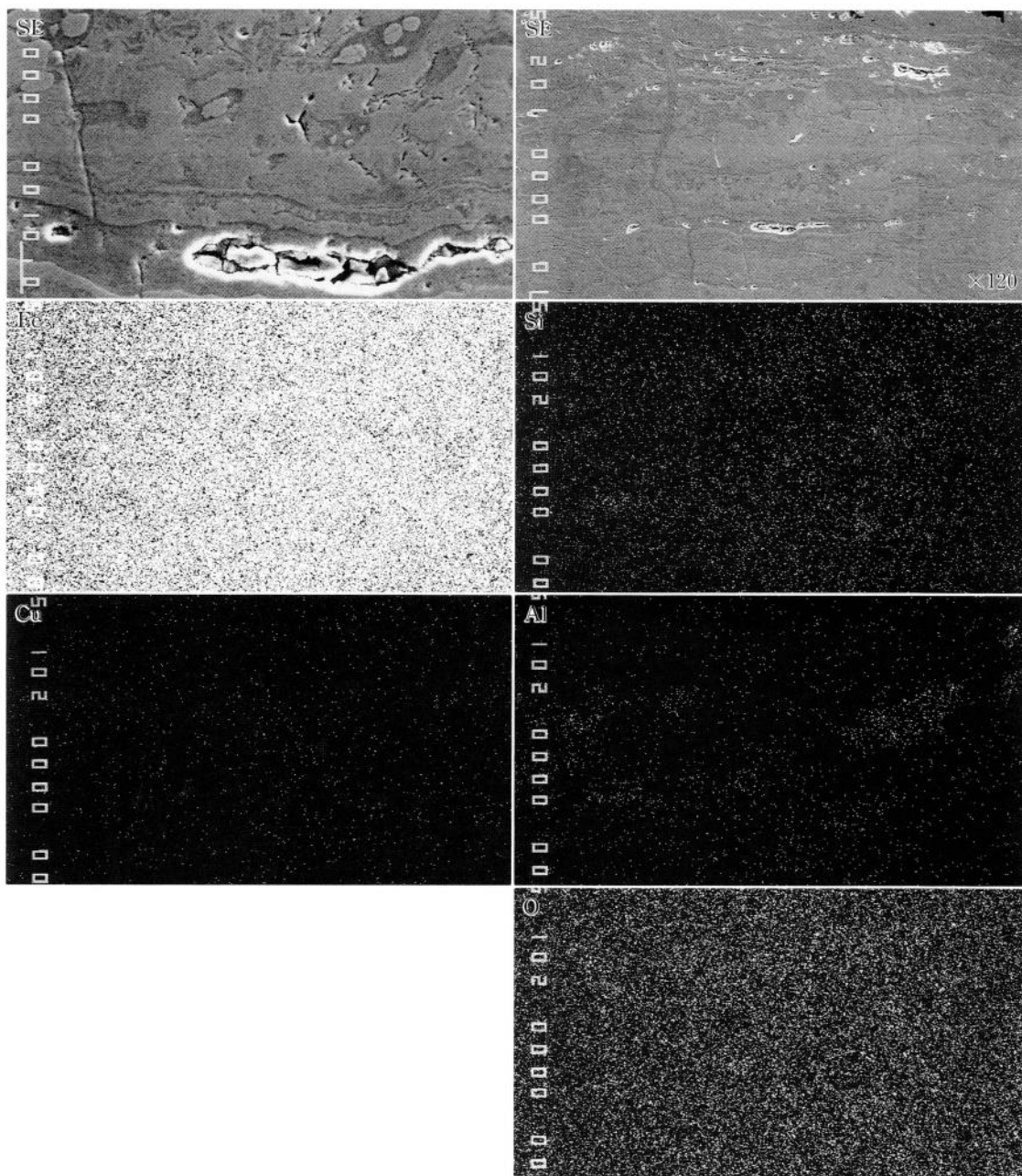
鉄器片の顕微鏡組織



安武・深田遺跡出土鉄片 (F K25) 片状黒鉛析出部の特性X線像 ($\times 1,000$)

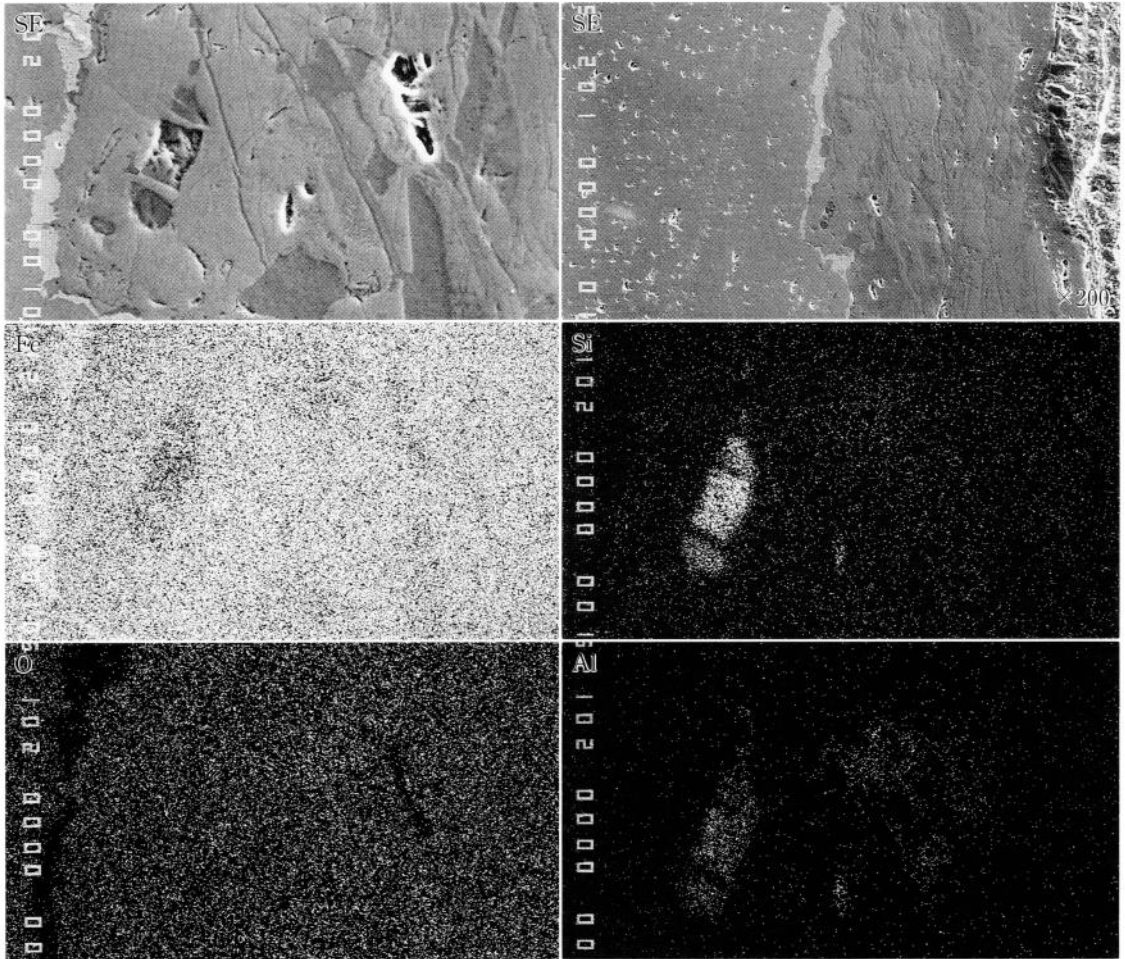


安武・深田遺跡出土鉄片 (F K25-2) の特性X線像 (×1,000)



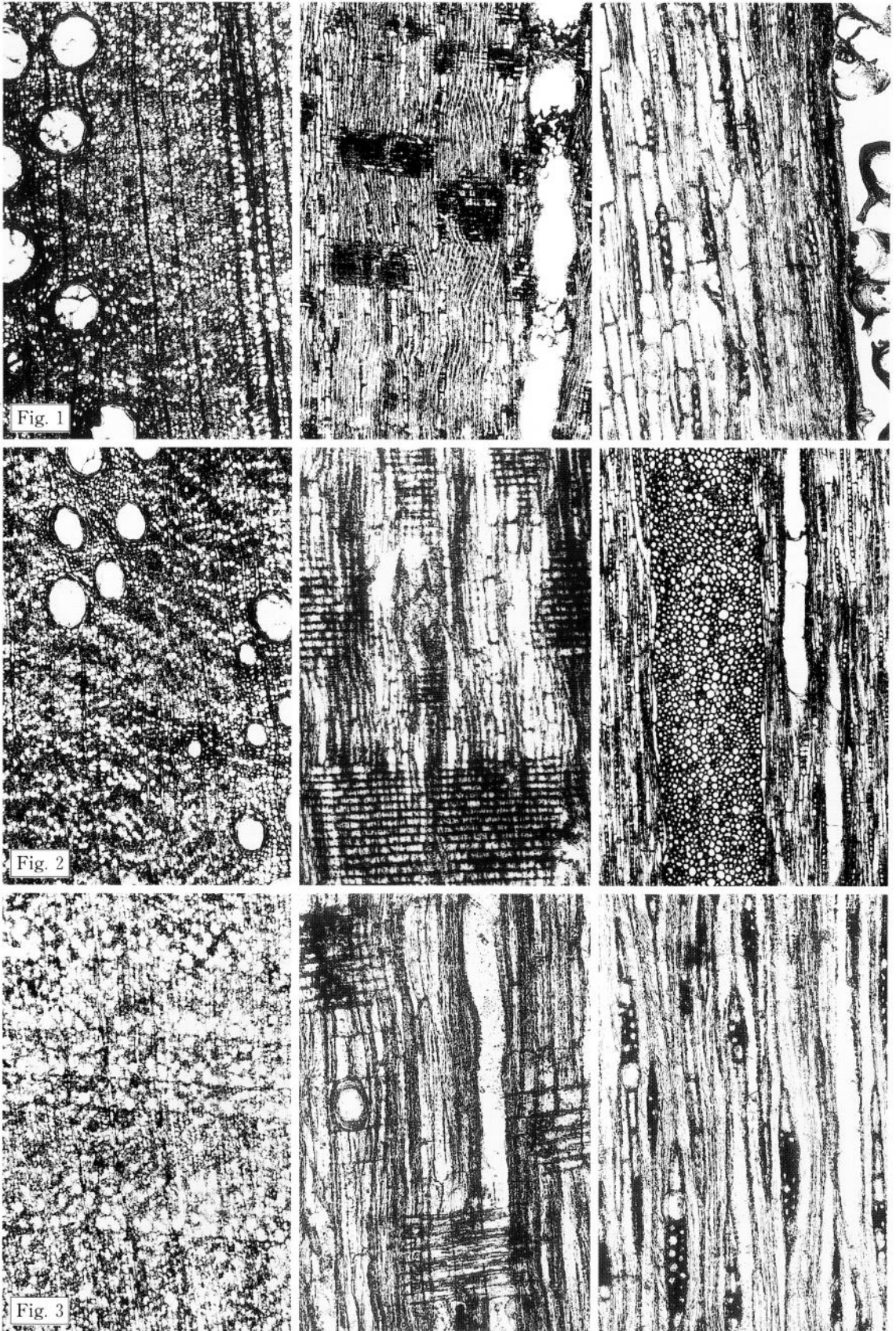
安武・深田遺跡出土刀子（FK27）の特性X線像（×1,000）

図版 6

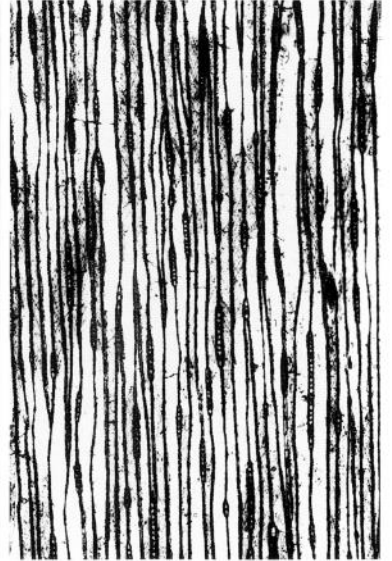
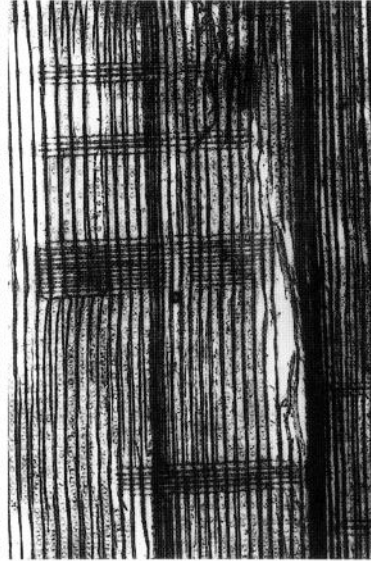
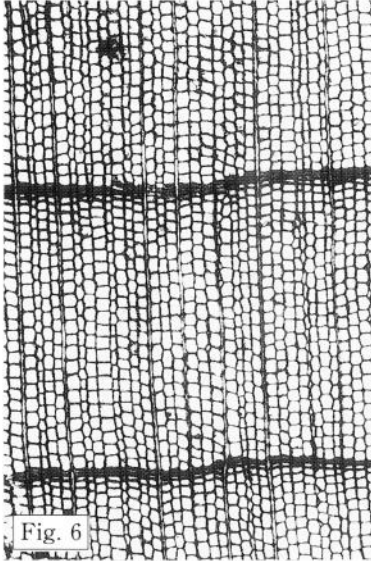
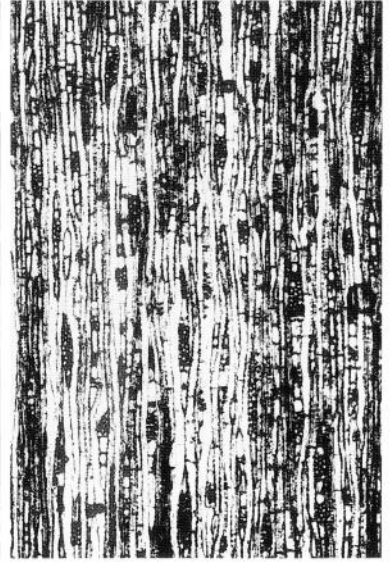
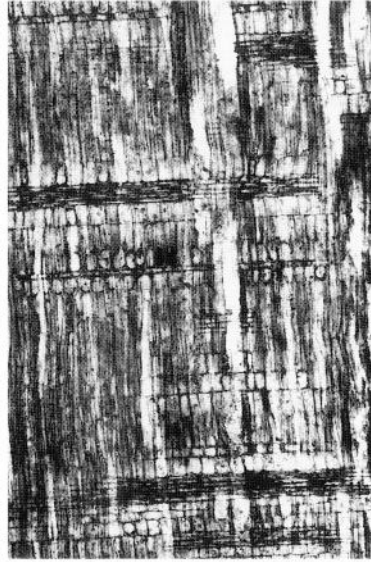
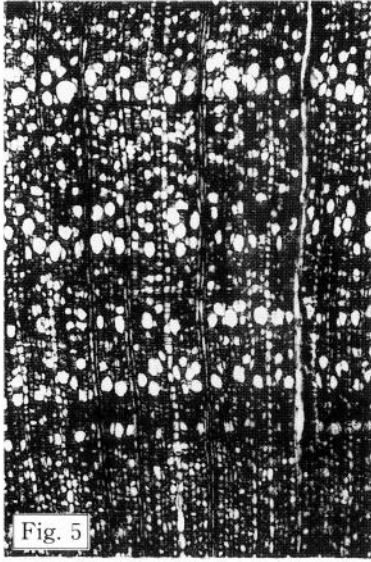
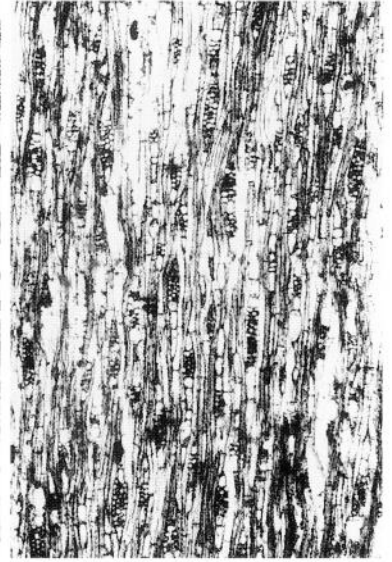
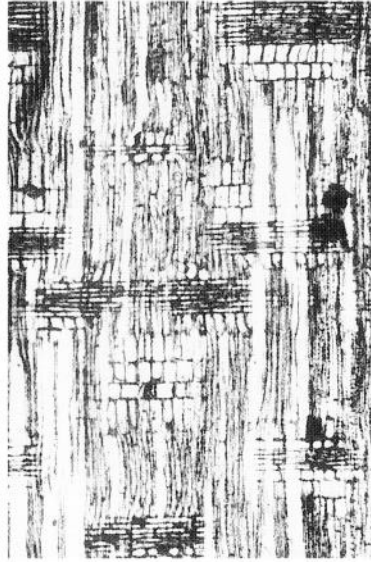
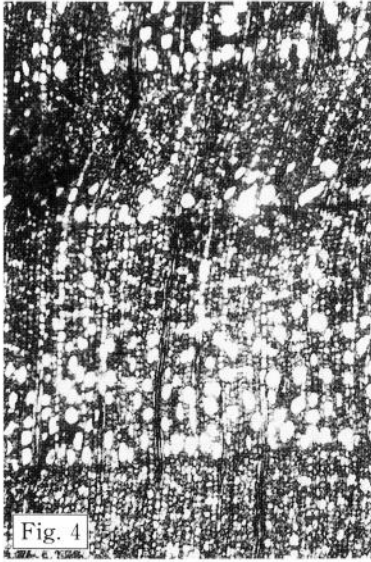


	SiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	S	Al ₂ O ₃	FeO	CaO	MgO	Na ₂ O	F	ZrO ₂	TiO ₂	K ₂ O	Cr ₂ O ₃	Total
1	17.752	0.060	2.122	0.000	6.538	66.516	1.250	1.848	0.000	0.000	0.000	0.267	0.287	0.000	96.639

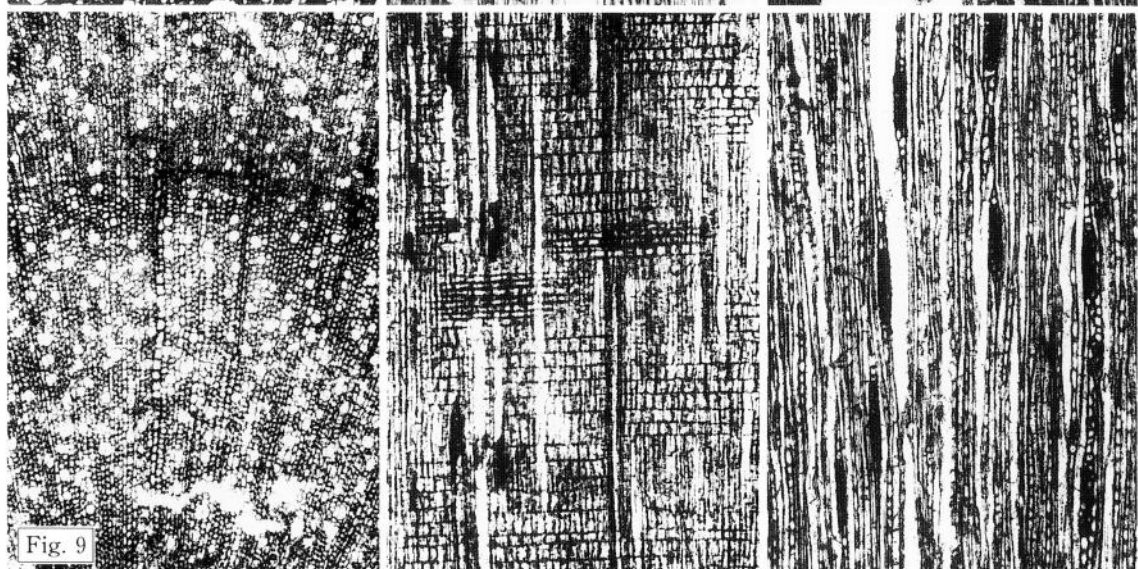
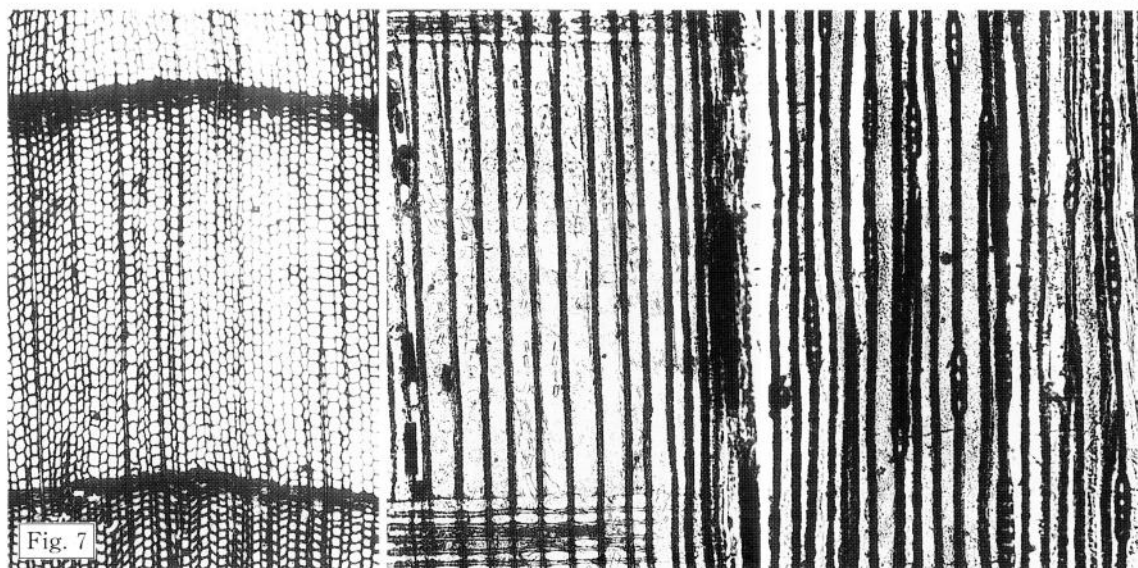
安武・深田遺跡出土鉄鏝（F K30）中非金属介在物の特性X線像（×1,000）



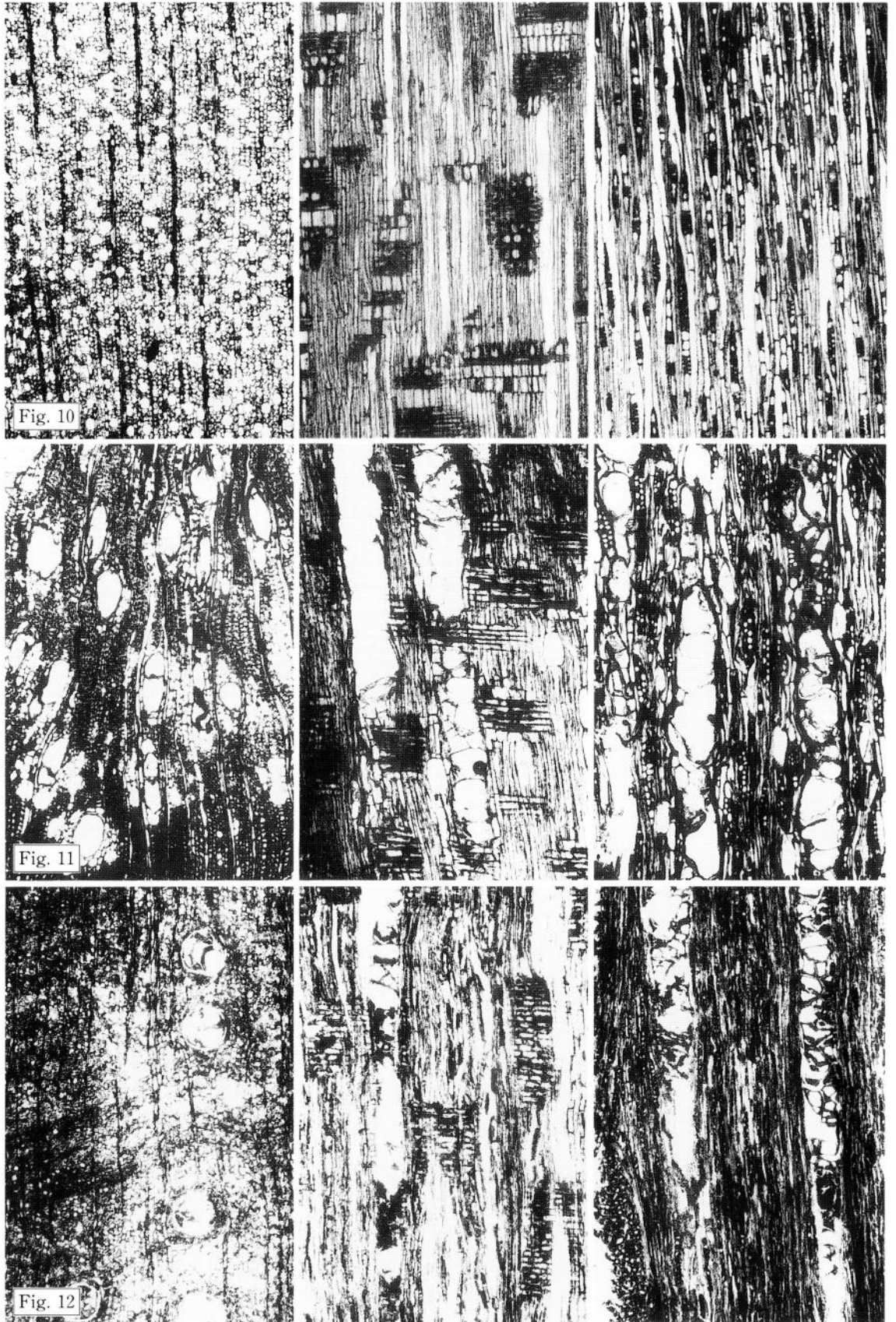
木材顕微鏡写真 1 ① 欽 ② 欽 ③ 槌の子



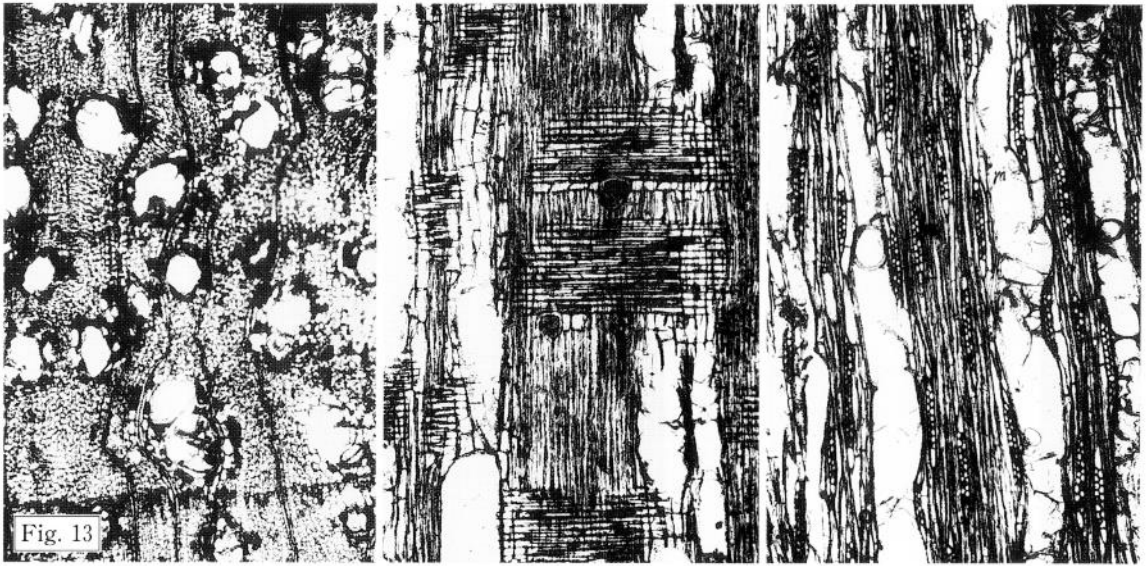
木材顕微鏡写真 2 ④槌の子 ⑤槌の子 ⑥曲げ物



木材顕微鏡写真 3 ⑦曲げ物 ⑧板 ⑨杭



木材顕微鏡写真 4 ⑩杵 ①杓子 ②田舟



木材顕微鏡写真 5 ⑬扉

顕微鏡写真について

1. 顕微鏡写真は、各図とも左から横断面・接線断面・放射断面の順に配列した。
2. 写真の拡大率は、各図とも

横断面	44倍
接線断面・放射断面	111倍

 とした。

福岡県行政資料

分類番号 JH.	所属コード 2133051
登録年度 2	登録番号 2

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告—4—

中 巻

平成 3 年 3 月 31 日

発 行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印 刷 (株)キューエツ九州工場

福岡市博多区東比恵2丁目9-1